

蟲の王

ふくふくろう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一般には知られていないが、平安の昔に陰陽師などと呼ばれていた者達は、この現代にも存在する。

ある者は式神を使役し、またある者は地や水や火や風を操って戦う。

そんな現代では『能力者』と呼ばれる1人の少年が上京し、物語は始まる。

注意

物語の展開上、未成年者の喫煙や飲酒。性行為の描写や暴力表現、差別的な発言を含みます。苦手な方は閲覧をお避け下さい。

目次

上京1	1
上京2	11
上京3	20
閑話・百里棗	30
上京4	38
上京5	47
上京6	56
上京7	66
上京8	74
上京9	83
上京10	93
上京11	101
上京12	110
上京13	118
上京14	126
上京15	134
上京16	142
上京17	149
上京18	157
上京19	165
上京20 (終)	173
閑話・水面に揺れる華1	181
閑話・水面に揺れる華2 (終)	189
能磨学園1	203

能磨学園	2	6
能磨学園	2	5
能磨学園	2	4
能磨学園	2	3
能磨学園	2	2
能磨学園	2	1
能磨学園	2	0
能磨学園	1	9
能磨学園	1	8
能磨学園	1	7
能磨学園	1	6
能磨学園	1	5
能磨学園	1	4
能磨学園	1	3
能磨学園	1	2
能磨学園	1	1
能磨学園	1	0
能磨学園	9	
能磨学園	8	
能磨学園	7	
能磨学園	6	
能磨学園	5	
能磨学園	4	
能磨学園	3	
能磨学園	2	

能磨学園27(終)

閑話・光なき夜空

ゴールデンウィーク1

ゴールデンウィーク2

ゴールデンウィーク3

ゴールデンウィーク4

ゴールデンウィーク5

ゴールデンウィーク6

ゴールデンウィーク7

ゴールデンウィーク8

ゴールデンウィーク9

ゴールデンウィーク10

ゴールデンウィーク11

上京1

この東京という場所は、どこもかしこも似たような道に、同じような建物ばかり。

人里離れた山奥で何年も過ごしていた僕は、地図を眺めながらだといふのに、どうにか迷わないよう歩みを進めるだけで精一杯だ。

特にこの、新宿という街は酷い。

「えーっと、こつから駅を出てー。この、花園神社つてのはさつき通り過ぎたよね。んでこの道を渡って、現在地はこの通りのはず。……あ、1階に牛丼チェーン店。2階がDVDやゲームのリサイクルショップ。3階が、ニコニコローン？ うん。じゃあ、たぶんここかな」

4階建ての古い雑居ビル。

この街なら、ありふれていると言つていいのだろう。

爪楊枝を啜えたお客さんが出てきた拍子にいい匂いが漂ってきた牛丼屋さんの自動ドアではなく、そこから少し離れた場所にあるガラスのドアを押す。

錆びの目立つ集合ポストの横に、枯れかけた観葉植物の鉢植え。

その緑に茶色がだいぶ混ざった大きな葉っぱをなんとなく見ながら、所々に錆の浮いたエレベーターの呼び出しボタンを押した。

チーンツ。

そんな間抜けな音と共に、エレベーターのドアが開く。

中に入って4階のボタンを押すとドアが閉まり、昨日から何度乗っても慣れない、エレベーター独特の浮遊感が僕を包む。

自慢じゃないけれど僕は、エレベーターなんて年に1度くらいしか乗らないような生活をずうっと続けていたんだ。

こんなのに、そう簡単に慣れてしまえるはずがない。

「やっぱ、エレベーターつて気持ち悪い。見えない大きな手に持ち上げられる感じで、吐き気がする。と、ここか。着いちちゃったや……」

エレベーターが開く。

4階には、僕の目的地である事務所しかないらしい。

その目的地、『藤村探偵事務所』のドアを恐る恐る押した。

「お、おじゃましまーす」

いかにも事務所といった風情の室内に人影はない。

ただ、気配だけは感じ取れた。

それと微かではあるけれどたしかに匂う、嗅ぎ慣れた香りも鼻に届く。

思わず緩んでしまいそうな表情筋を引き締めながら、その他に何か気になるものはないかザツと確認。

……うん、特に脅威になるような気配はなさそうだ。

「ヒロキ？」

だだっ広い部屋の左奥にある大きなデスク。

そのパソコンモニター向こうから、小さな頭がにゆうつと現れてそう問う。

「は、はい。僕がヒロキです。あなたが桃さん、ですか？」

「うん」

「これからお世話になります、…あ、まだそうじゃないや。できたらお世話になりたいと思ってます」

「ん。そこ座って」

「あ、はい」

大きなデスクと、古臭いソファースセット。

そのデスクの周りにだけ、空のペットボトルやお菓子の空き袋が散乱している。

だだっ広いフロアにはその他にも冷蔵庫や、ガラスの並んだ棚、他の部屋へと続くドアなんかもあった。

そしてフロアの3分の1ほどはカーテンで仕切られて、向こう側は覗けない。

僕が年代物らしい黒い革張りのソファアーに腰を下ろしても桃さんは何も言わないので、かなり手持無沙汰だ。

「……少しだけ待ってて。この情報を分析したら、テストの内容を説

明する」

「了解です」

テスト。

それは僕が高校在学中、この探偵事務所でアルバイトをさせてもらえるかどうかを決める、とんでもなく重要な雇用試験の事だろう。

テストに合格すれば僕の雇い主になる桃さんは、大きなデスクの上にある、これまた大きなパソコンの、4つほど並んでいるモニター画面を睨みつつ、物凄い速さでキーボードを打っている。

小豆色のジャージ。

華奢な肩にかかるか、ギリギリかからないかくらいの、ボサボサで荒れ放題な黒髪。

マンガでしかお目にかかれなような、分厚いレンズの黒縁メガネ。

15歳の僕よりずっと小柄な桃さんは、実際に会うのは初めてだけれど、師匠達から聞いていた通りの人らしい。

曰く、残念を極めた女。

たしかに、服と髪とメガネの取り合わせは残念な感じだ。

元々の顔立ちがこれほどかわいらしく整っていなかったら、僕は3年間もここでアルバイトをする事に絶望していたかもしれない。

「……ん。終わった」

「お疲れさまです」

「じゃ、テスト」

「わかりました。内容は」

「簡単。そのカーテンの向こうに、依頼主がいる。方法は任せるから、祓って」

「……えっと、説明とかは？」

「いいから早く。嫌なら出て行って、どうぞ」

「や、やりますやります。ここでバイトさせてもらえなかったら、3年間ずっと新宿支店で下働きですもん」

「なら早くする。報酬は10万。税金と手数料になる2割を引いて、8万がヒロキの取り分」

「おおっ。すぐに取り掛かりますっ！」

上京2日目。

桃さんの初顔合わせから数分で、いきなりの祓い仕事。

室内での祓い仕事ならバイトの内容は想像していたよりマイルドな感じだけれど、この調子で日に何度も仕事を振られたりすると、それはそれで大変そうだ。

でも財布の中の全財産、その10倍もの報酬が出るなら、やらないという選択肢なんてあるはずがないだろう。

立ち上がる。

カーテンで仕切られて個室のようになっている方へ僕が足を向け、桃さんは何も言わない。

それどころかまた軽快な音を立てて、キーボードを打ち始めた。

「分厚い生地だけどカーテンじゃノックはできないか。えーっと、失礼していいですか？」

「え、ええ」

聞こえたのは女の人の声。

桃さんよりだいたい年上な感じの、落ち着いた声だ。まあ、今聞こえたそれはだいたいぶ上擦っていたけれど。

シャツと音を立ててカーテンを引く。

「……わあを」

わかっていたというのに、そんな間抜けな声が出てしまう。

「キミが、そうなのね」

「ええっと」

「あたしを治療してくれるんでしょう？」

「治療と言えば治療なんでしょうね。その症状は、いつからですか？」
女の人が哀しそうに微笑む。

「止まらなくなったのは、今朝ね」

「なるほど。間違いないだろうとは思いますが、一応は症状を診させてもらいますね」

「え、ええ。……見て。初めて会うキミみたいな若い男の子の前でも、オナニーを止められないあたしを。んっ、隅から隅まで。あんっ！」

「ここまで症状が進んでたら、仕方ないですって。ああ、オナニーは続けていいですよ。せめて自分で弄ってないと、気が狂ってしまいそうでしょうから」

「あはあつ。そ、そうよ。こうして指でオマンコをズボズボしてないと、おかしくなつちやいそうなのっ！ ああつ、お話が終わるまでガマンしてたから指が止められないわっ！」

「でしょうねえ……」

キングサイズと言うのかな。

大きなベッドの上に全裸で横たわっているのは、30歳になるかならないかくらいのも、バッチリ化粧をした美人さんだ。

おっぱいもお尻も大きいけれど、なにより魅力的なのはその上品そうな顔立ち。

もしこんな症状が出ていなかったら、この人がオナニーをしているところなんて想像もできない、清楚な感じの美人さん。

そんな人が豊満な肢体を惜しげもなく晒し、身を振らせ股間から絶えず淫らな水音を立てながら情欲に濡れ切った瞳で僕を見上げているんだから、正直たまんない。

今すぐベッドにダイブしちゃいたいくらいだ。

「ねえ。治せるのよね？ ん、うっ……」

「大丈夫ですよ。えっと、桃さーん。祓いに時間をかけても平気なんですかー？」

「依頼主は家庭持ち。即祓いを希望。日帰りコースで」

「……マジですか。せめて明日まで時間をもらえたら、指も触れずに祓えるんだけどなあ」

「しかも夕方までには家に帰りたいらしい。だから早く祓って」

「それはいいんですけど、祓い方の説明は」

「してある。依頼主も納得済み」

「……なるほど」

夕方までにコレを何とかしようと思ったら、方法は1つしかない。

この奥さんも納得してるって言うし、ならまあいいか。

「それじゃあ」

「ま、待って！」

ここでアルバイトをするのなら制服の代わりだと言われて和歌山で買った、細身の真つ黒いスーツのストラックス。それを固定しているベルトに手を伸ばした僕に、制止の声がかけられる。

これは、あれかな。

やっぱり待って、私には愛する夫が！

とかそういう。

被い方が被い方だけに、時間をかけてくれと言うなら否はない。

昨日の夜はこれから3年間暮らすマンションの板張りの床で大の字になって寝たから射精していなくて、ちよつとだけ惜しい気はするけれど。

「はい。やっぱり時間をかけますか？」

「そうじゃないわ。そうじゃないの」

「と言いますと？」

「ごつちに来て。あたしが、この手で脱がせたいのよ。服は汚さないから、お願い」

「……なるほどです。でも服とか汚れるのは気にしなくていいですよ」

「そうなの？」

「ええ。こういった被いは、対象の欲望をなるべく叶えながら良いんで。さあ、お好きにどうぞ」

「うれし、んっ。お、男の子のニオイがするわ。それも若くつて、とびつきり青臭い男の子のニオイが……」

僕がベッドの横に立つと、オナニーをしながら奥さんが器用に身を寄せてくる。

そうしながらもアソコを指で掻き混ぜていやらしい音を立てているのだから、やっぱりこの『淫気詰まり』は普通の術者なら被いに数日かかるほど進行しているみたいだ。

人の全身に血が流れているように、普通の人の目には見えない『気』という物も流れている。

普通ならそれが多少詰まったところで問題はないのだけれど、その

『詰まり』の原因が『淫』の『氣』で、その『詰まり』がここまで酷くなると、こういった症状が現れてしまう事もあるんだ。

才能のある人間ならば、なおさら。

この奥さんはきつと、能力者の家系の血でも引いているのだろう。過去の大戦で何の罪もない人間達が、何千何万、何十万と、本当なら国際条約で禁止されている一般市民への無差別攻撃の爆撃で焼かれ、苦しみ抜きながら死んでいった日本。

ただでさえ国土が狭く、都市となるのに適している土地は昔から多く人が死んでいたのに。

なのに、この国の都市部が幽霊で溢れているだなんて言う霊能力者はいない。

お盆にはご先祖様が帰ってくるというけれど、狭い敷地の古い家から霊が溢れていたなんて話も。

その理由は死んだ人間が幽霊や怨霊になるにも、ある種の才能が必要だからだ。その才能をこの上品そうな奥さんは、ほぼ間違いなく持って生まれている。

まあ、淫気詰まりでこうまで淫らになってしまう体質を才能と呼んでいいのかは疑問だけれど。

「この様子じゃ、だいぶ淫夢にも悩まされたでしょうね」

「そ、そうよ。毎晩毎晩、キミみたいな男の子の股間に顔を埋める夢を観るの。ああつ、ズボンの上からなのに、とっても素敵なニオイ。オマンコをズボズボする指が止まらないわ……」

「好きなだけ嗅いでください。ガマンが出来なくなったら舐め回して、啜え込んで。その後はコレで直接、子宮にこびりついた淫気を内側から落としていきますんで」

「こ、こんなのを受け入れたら……」

「大丈夫ですよ。何も心配しないでください。妊娠もしませんし、祓いの記憶なんて今夜には薄れてしまいます。明日の朝になれば、あれは夢だったんだと思えば僕らの顔も思い出せなくなりますから」

股間に顔を寄せて鼻を鳴らすだけだった奥さんが、生唾を飲み込ん

で喉を鳴らす。

でも、そこからの動きは速かった。

フアスナーを下ろす音が事務所に響く。

たった一晩射精してないだけなのにオナニーを見せつけられながらアソコの臭いを嗅がれ、僕が勃起しかけてしまっているのを察知したからだろう。

「軽く撫でただけでわかるわ。すっごい大きき。それに、太さも。こんなの、初めて……」

「コレが欲しかったんでしよう、奥さん？」

「……そうよ。ああ、もうガマン出来ないわ。3年ぶりの生チンポを、お口で感じたい」

「どうぞ。僕は丈夫なんで、どれだけ激しくしてもいいですよ。奥さんのお好きなように」

カチャカチャと音を立て、ベルトが外されてゆく。

少し悩んだけれど、ジャケツトと長袖の白いYシャツは脱がないでおく事にした。

ネクタイは最初からしていないので脱げと言われればすぐ全裸になれるし、相手がこれだけ美人な奥さんでも、残念ながら心ゆくまでセックスを愉しむほどの時間はない。

それにこれはあくまでも祓い仕事なのだから、汗なんて掻きはしないだろう。

挿入したらカリで子宮口を擦り上げる事を繰り返して淫気を散らし、最後の仕上げに奥さんの最も大きな絶頂に合わせてザーメンを注ぎ込めばいい。

射精のタイミングなんて、今じゃ息をするのと同じくらい簡単に調節が可能だ。

「凄いわ。脱がせるとニオイが濃くなって本当に素敵」

「味もたしかめてくださいよ、奥さん」

「え、ええ。もちろんよ。……んっ」

アソコの表面を舐められながら、足首に引っかかっている状態のボクサーパンツとストラップス、それに履き慣れない革靴を足で蹴るよう

にして自分で脱ぐ。

「……わあ。奥さん、上手ですね」

「そ、そう?」

「はい。こんなに上手なフェラ、初めてですよ。奥まで啜えながら、舌が踊ってましたもん。これはたまらないです」

これはお世辞じゃなく、本音だ。

フル勃起はしていないから奥まで啜え込みやすいとはいえ、この大きさをあそこまで迎え入れながら見事な舌技を披露するなんて。

「んふ、うれし。じゃあ、もつと悦ばせてあげなくっちゃね」

仰向けでオナニーをしながら僕のアソコを口に含んでいた奥さんが動く。

オナニーを中止して、四つん這いに。

「ああ、ねつとりした玉舐めも上手なんですね。しかもそうされながら、こんな美人さんに見上げられてるなんて。見てるだけで射精しちゃいそうです」

「お上手ね。生チンポのゴツゴツ、おばさんのベロがオマンコになつたみたいと感じちゃう。これだけでイッちやいそうよ。……ん、タマタマの裏も素敵な味」

(ととさま〜っ)

いかにも愉しそうな、幼い声。

(はいはい。どしたの、セイ?)

(このおばさん、結婚前はかなり遊んでたのっ。だから祓いも楽しそうなのっ♪)

(ふうん。にしても、東京に出て来て最初の仕事が色事系。それも、こんな簡単な淫気祓いかあ……)

いいのか悪いのか。

師匠達は桃さんに実力を認めさせれば、それなりに難易度の高い仕事も回してもらえるはずだと言っていた。

だから回された仕事は最初っから手を抜かず、僕の秘密もなるべく早いうちに見せておけと。

なら、こういうのはサクッと終わらせた方がいいか。

そう思いながら、軽く腰を突き出す。

「んぶうっ!？」

「しゃぶりながらおっぱいを捏ね回して欲しかったら、限界まで啜えてください。そうしないと僕の手が届きませんよ?」

「……ん、んんっ」

「そうそう。さすが、人妻さんですね。喉奥の使い方も上手です」

上京2

グポグポジュールジュールと淫靡な音を絶え間なく立てながら、常人であれば恐怖を感じてしまうほどの熱心さで続けられていたフェラチオ。

それが不意に途切れる。

「ね、ねえ。お願いよ。もう、限界なの……」

勃起し切った僕の肉棒の向こうで、奥さんが切なそうに眉根を寄せた。

でもそうしながら大きく舌を出して裏スジを舐め上げるのだから、さすがと言うかなんと言うか。

「いいですよ。シックスナインでも挿入でも」

「お願いだから、もう挿れて」

「わかりました。お好みの体位でいいですよ」

「……なら、横になって。あたしがキミを犯すみたいにして、オマンコで啜え込みたいわ」

「了解です」

乱暴にしながら快楽を与えるSMプレイのようなセックスも好きだけど、受け身セックスも大好物。

大きなベッドに上がって仰向けになり、少し垂れ気味の巨乳を揺らしながら奥さんが僕に跨るのを見守る。

「おつきいから、だいぶ上に行かないとダメなのね」

「ですね。僕はおっぱいが近くにきて嬉しいですけど」

「あんっ！ 乳首いきなり吸っちゃ、はあんっ！」

おっぱいだけじゃなく、乳首もかなり大きい。

それをまるでフェラでもするように舐めると、奥さんは跳ねるように体をくねらせた。

「美味しいですよ、奥さんのいやらしい乳首」

「やあっ。子供を2人も母乳で育てたから、肥大しちゃってるのよ。」

恥ずかしいわ」

「すつごいエッチな感じがして興奮しますよ?」

「んんっ。極太生チンポ、あてがっただけでイキそうっ……」

「濡れ方も凄いですね」

「だって3年ぶりだもの。ああっ、広げられてくわ……」

結婚前はそれなりに遊んでいたのに、子供を2人産んだら3年もほったらかし。

能力は発現していないにしても、若い時から修行をしていれば能力者になれたかもしれないこの奥さんなら、こうまで酷い淫気詰まりを起こしてしまうのも当たり前。

しつかり淫気を散らしておこう。

(おいおい。このオマンコ、入り口に引つ掛かりがまったくねえぞ。東京のヤリマンってのは、こんなオマンコをしてんのか。こりやあたまんねーだろ、とーちゃん?)

セイとは違う幼い声。

僕の次女であるフウカだ。

(だねえ。痛みがまったくなくまま、亀頭が飲み込まれちゃいそ。こんなにすんなりこの大きさを受け入れちゃうアソコは初めてだねえ)(すぐにオレもこんなオマンコになってやるから、今日こそマンションに帰ったらハメまくろーぜ?)

(そういうセリフはせめて中学生くらいの見た目になってから言おうね、フウカ)

僕はロリコンじゃない。

幼稚園児にしか見えないフウカとセックスなんて、出来るはずがないじゃないか。

(ちえーっ。お、さすがヤリマンおぼはん。とーちゃんのをズッポリ啜え込みやがった)

「……あ、——ッ!」

膣肉が蠢く。

奥さんの叫び声は、その後に聞こえた気がした。

(んー。まだ入り口なのに、こんな簡単にイッちゃうのかあ)

(このおばさんセックスひさしぶりだし、ととさまの極上チンポだから仕方ないのっ)

(子宮口をゴリゴリ擦んなきや祓えねえのになあ)

「まだ半分も挿れてませんよ、奥さん？」

「……ま、待って。こんな凶悪なのっ、初めてだからっ」

「そもいきませんって。早く家に帰りたくいで、しよっ！」

腰を突き上げながら、大きなお尻を掴んで力任せに引く。

「んあ——っ!？」

ゴリツとした感触。

それを亀頭で感じると、奥さんの腰の辺りから黒い靄が散るのが見えた。

淫気。

これが子宮を通る気道にこびりついて、気の流れを悪くしている。

それだけでなく詰まっているのが『淫』の気なので、この奥さんの性欲は限界まで肥大し、普段なら嫌悪感を感じる変態的な行為で興奮してしまったりもするのだ。

異常性欲が原因とされる犯罪者が逮捕されると、警視庁で働く能力者を取り調べをしたりするそうだけれど、そういった犯罪者の何割かにはこの淫気詰まりの症状が見られるらしい。

「さあ、もつと擦りますね」

「あはあっ—」

ベッドが軋む。

そのたびに上がる生肉のブロックで生肉を殴るような音と、かなり湿った水音。

それに奥さんの獣のような喘ぎ声が重なるまでに、子宮口を亀頭で片手の指の数すら擦らなかつた。

「凄いですね。カリで掻き分けたアソコの肉が、すぐにカリ裏までネットリ絡みついて。いやらしいアソコだなあ」

「あ、っ！んっ、あっあっあっ。おほっっ♡」

「……聞いてないか。まあ、言葉での愛撫が要らないなら楽でいいけど」

奥さんはもう、夢中で自分から腰を振り始めている。

膣の行き止まりや子宮口を痛めそうなほどだ。

ここまで自分で腰を振りまくってくれるなら、僕の方は膣壁や行き止まりを万が一にも痛めたりしないよう、深さや角度を微調整してあげればそれでいい。

(でもまだちょっと怖いかなあ。セイ、悪いけど……)

(へーきななのっ。フェラ直前に、ととさまのチンポはおばさんマンコに最適化してあるのっ)

(通常時とほとんど変わんない大きさだから確認してみたんだけど、やっぱこれでも最適化済みなのかあ。ありがとね)

(えへへ〜♪)

奥さんが腰を振るたびに大きな喘ぎ声が上がって、巨乳やお腹の肉が波打つ。それだけでなくその肉は、揺れながら汗を撒き散らしているみたいだ。

今は、3月の下旬。

それなのになぜか事務所にはクーラーの冷気が満ちているから、普通なら寒さを感じるくらいのはずなのに。

「い、いいわっ。最高よコレえっ♡」

「それは良かった。さっきからキュウキュウ締めつけて、簡単には抜けそうにないですもんね。そろそろなんじゃないですか?」

「そうよっ。あたし、またイキかけてるのっ。こんな若い子の生チンポを啜え込んで、はしたなくっ♡ あんっ♡」

奥さんの淫気は、ほぼ散りかけている。

あとは膣内射精の、子宮口に尿道を押しつけた状態での射精、その勢いで祓い切れるはず。

「いいですよ。イッてください。僕も一緒にイキますから」

「本当につ? こんなおばさんのオマンコに中出ししてくれるのっ!?!」

「奥さんのアソコは絶品ですからね。たっぷりと吐き出しますよ」

「うれし、んうっ♡」

「あはは。中出しを想像してイキかけるとか。かわいいなあ、もう」

僕は、年上の女の人としかセックスの経験がない。

でも清楚な見た目の美人さんにも、出産経験のある女の人にも慣れているけれど、ここまでアソコを使い込んだ人とは初体験。

さっきのフェラも極上だったし、遊んでいる年上の女の人とのセックスが癖になりそうだななんて事を考えながら、子宮口を目がけて腰を突き上げた。

そのまま、対面座位に体位を変える。

「あゝはあっ♡」

「今度は僕が腰を振るから、一緒にイキましよう。奥さん」

「せーし!? せーし出しちゃうのっ!? キミみたいな美少年が、おばさんマンコにつ!? ちょうだいっ、早くうっ♡」

「美少年は言い過ぎですって。ん、いい締め具合」

「ああ、夢みたい。あっ、イクっ。こんな若い子に下からガン突きされてイツちやうのっ♡」

セックス相手の年齢が若いと、大人はそれだけで興奮したりするのかな。

僕は少し変わった能力者だから色事系の祓い仕事はこれからも回されるだろうし、東京に出たらいろんな女の人達とセックスをしろと師匠達には言われている。

それも大切な修行らしい。

だから、いつか同い年や、僕より若い女の子とだってセックスをする機会はあるだろう。

ふと浮かんだ疑問の答えは、その時までおあずけかな。

(もし若いうちにとーちゃんのチンポの味を覚えちゃったら、将来はとんでもない淫乱女になるんだろうなあ)

(また人の思考を読んで……ま、大丈夫でしょ。フェロモンも媚薬効果も、射精のタイミングだつてもうセイに頼らなくても制御できるようになったし。あいかかわらず、大ききの調節だけはセイに頼むしかないけど)

(任せてなのっ♪)

(そんじゃ派手に中出し決めなよ、とーちゃん。あっちでオナニーし

たいのを必死でガマンしてる桃ってムツツリスケベ女に、とーちゃん
の能力を見せてやらなくっちゃな)

(桃さんは雇い主だから目の前で見せなきゃいけないだろうって言わ
れてたけど、まさか初日、しかも顔を合わせてすぐにこうなるとは
……)

(その方が、とどきまらしくっていいのっ♪)

(へへっ、まったくだぜ)

やれやれ。

そんな気分で、また奥さんの大きなお尻に手を伸ばす。

対面座位なので汗まみれになった、むっちりしたお尻の肉が僕の手
で形を変えるのを眺められないのは残念だけれど、準備は万端。

射精なんて、いつでもいくらでも可能なのが僕という能力者だ。

「出しますよ、奥さん?」

「来てっ♡ おばさんのオマンコに、せーしをビュービュー吐き出し
てっ♡」

「もちろん」

指がどこまでも沈んでゆきそうな、柔らかなお尻。

その肉を強く掴みながら、思いつきり腰を突き上げた。

「あゝあゝっ♡」

喘ぎ声を発するために開いた口から、ヨダレが盛大に飛び散る。

それと腰を突き上げるたびにブルンブルンと揺れている巨乳から
も汗が散って。

エロいなあ……

「欲しがってますね。子宮が下りて来てますよ?」

「んゝーっ♡ ……イ、イクうっ。イツちやううっ♡」

「ええ。一緒にイキましょう」

「ひうゝっ♡」

本人が絶対に意識して出したとは思えない不思議な声と同時に、僕
の陰毛の密集地に熱さを感じた。

陰毛を肌へばりつかせていた汗を、その液体が洗ってお尻の方に
落ちてゆく。

「ここにきて潮吹きですか。奥さんはいやらしいなあ」

「な、なにこれえっ!? イッてる、イッてるのに、またっ♡ つくう、……あはあ♡ あっっ、んっあっあっあっ♡ イクの止まんないッ!」

うねり、蠢きながら、痛いほど締めつけて離さない。

奥さんの意思とは関係なく、身を振るように動き続けている完熟オマンコ肉はそんな状態。

淫気詰まりはそれが祓われる瞬間、快感が頂点に達するらしい。

「そろそろですねえ」

「待って、あゝんっ♡ こ、これダメえっ。絶対、絶対にオシッコ出ちゃうー! お漏らししちゃうからっ!」

「いいんですよ。そんなのには慣れてます。なんなら、大きい方もどうぞ?」

「ダメ、あゝあああゝっ♡」

こんな状態でも、まだ話せるなんて。

師匠達ができるだけ多くの女の人とセックスをするようにと言っていたのは、こういう女の人もいるのだという事を身をもって知っておけという意味だったのかもしれない。

これで身体能力が上がる能力や特性を持った能力者でも、異能を得るために特別な修行を長きに行つて術者になつたのでもない、ただの一般人だというのだから驚きだ。

「……も、もうだめえっ。イ、イクっ♡」

腰を突き上げるスピードを上げる。

勃起から射精まで自由自在の制御できる能力を抜きにしても、射精感も充分。

あとは、タイミングを合わせるだけ。

「やゝ、あっ、っは。んっあっあっあっ、あゝっ! ……イ、イグウツ♡」

剛力系の能力でも発現したんじゃないかというほどの力が、僕の背中に回された腕にかかる。

「僕も出ます」

「……んあぁ、あぁ——っ♡」

獣のような叫びが上がり、同時に、とんでもない締めつけ。まるで軟体生物が死を悟ってそれへと誘う激痛に抗って暴れているかのように、奥さんの膣がうねった。

(ははっ。宣言通り、お漏らししながらの中イキだなあ)

(……あー、射精が止まんない。やっぱ、1日でもセックスしないと溜まっちゃうねえ)

(おばさん、ビュルビュル吐き出されるたびにイッてるのっ)

(どーりでアソコの中のうねりが止まんない訳だねえ)

(しっかし楽しみだなあ、とーちゃん)

(まあねえ。どんな子でも、しっかり姉として面倒を見てあげてね。

一般人なら護衛はいらないだろうから、普段は僕の影の中だ)

(任せろ。なあ、セイ)

(うんっ♪)

2人は、本当に優しい子だ。

心配なんて欠片もしていないけれど、絶頂の余韻を愉しんでいる間はヒマなので言っただけ。

しばらく身じろぎもしないでいると、僕の射精が終わってもまだ蠢いていた奥さんのアソコから不意に力が抜ける。

「もう意識を失った?」

そう声をかけてきたのは、立ち上がってベッドに歩み寄ってきた桃さん。

「あ、はい。その気で出したし、射精量も調節してないんで。でも一般人なのを考えたら、意識を失うの、かなり遅かったですよ」

「そう。抜いたら股を開かせて」

「いいですけど、観察かなにかですか?」

「撮影と保存」

「ビデオカメラなんて持ってないの?」

そう問うと桃さんは初めて見せるかすかな微笑みを浮かべ、目尻の辺りを人差し指でトントンと叩く。

「カメラはこの目。データの保存先は、脳内フォルダ。これなら、デー

タの流出はあり得ない」

「……なるほど。それが桃さんの能力の一部ですか」

「ん」

「じゃあ、抜きますね」

あれだけ射精しても勃起したままの肉棒を、ゆっくりと抜いてゆく。

そこを見つめる桃さんの頬が赤いのは、セックスに慣れていないからなのかな。

「膣口は開き切ってるのに、ほんの少ししか精液が垂れ出さない」

「それだけじゃないですよ、ほら」

「……寝ている妊婦を何か月も撮影して早送り再生でもしてるように、お腹が大きくなってる」

「ええ。もうすぐです」

上京3

桃さんが生唾を飲み下す音が事務所に響く。

「話には聞いてたけど、こんな能力は反則」

「僕だってそう思います。つと、産まれますよ」

「もう?」

「ええ」

そんな短い会話を交わす間に、奥さんの充血し切った膣口から白い塊が顔を出している。

シンとした事務所の空気を震わすのは、意識を失っているのに聞こえる奥さんの荒い息使いと、苦しそうな呻き。

この現象は奥さんの記憶には残らないし、母体が消耗したりもしない。

でもこんな能力に目覚めて5年ほどが経っても、この瞬間は申し訳なさで身が縮む思いだ。

慣れる日が来るなんて、想像もできない。

「う、……ぐうっ!」

一際大きな苦悶の呻きと共に奥さんの広がり切った膣から出て来たのは、食用の鶏卵なんかとはだいぶ感じが違う、真っ白な卵。

大きさも、かなりのものだ。

「ちようど新生児の頭部くらいの大きさの卵。これが……」

「はい。すぐに割れますよ」

ゴクリ。

また自分の喉がそう鳴って、桃さんは初めて極度の緊張を自覚したらしい。

ジャージの袖で汗を拭い、クーラーが動いているのを目で確認までしている。

パリッ。

次に聞こえたのは、そんな音。

「卵が、割れて……」

「ええ。新たな命の誕生ですね」

パリツ、ペリツ。

パキイツ。

卵の上部が、完全に割れた。

そこから、30センチくらい大きな蟲が顔を出す。

こうして生まれて来てくれた僕の末娘は、とてもかわいらしい子だった。

「これは。てんとう虫?」

「みたいですね。相手が一般人だから、かなり大きいだけで完全な蟲型。名前は、そうだなあ。……テンコ、はどう?」

てんとう虫が羽を広げて飛び上がる。

子供の頭ほどの体が僕の胸に突進してきたので、できるだけ優しく抱き止め、羽を納めたその背中を撫でた。

「これが、使役蟲。別に使役系の能力者は珍しくないけれど、ホントに使役対象を人間に産ませるなんて……」

「僕は使役系でも、かなり特殊な能力者らしいですからねえ。ついだって言ったら怒られそうだけど、セイとフウカも紹介しときますね。おいで、2人共」

「はあい♪ はじめましてなの、桃っち。よろしくなのっ♪」

「やあっと紹介かよ。どっこちらしょっと」

天上の蛍光灯に照らされてベッドの上に伸びる、僕の影。

そこから、幼稚園児にしか見えない2人の女の子が飛び出す。

白人とのハーフのような顔立ちで、ウェーブした長い金髪のかわいらしい女の子がセイ。

真つすぐな長い黒髪をポニーテールに結った生粋の日本人にしか見えない、キリツとした美人ちゃんがフウカだ。

「セイは使役蟲を束ねる存在の長女でそのための能力を持ち、母親から受け継いだ魔法が使えます。フウカは、その姉を補うように直接戦闘が得意ですね。今はまだ銀將級くらいの能力らしいですけど、そのうち飛車角くらいまでになってくれるそうです」

「使役対象が、そこまでの力を……」

「それより桃ねーちゃん」

「ん？」

「これ見ろよ。とーちゃんのチンポ、まだバツキバキだぜ？ セイが魔法でキレイにすつから、しゃぶりまくるなりオマンコで啜え込むなり好きにしなよ。このババアは、ほつときや朝までグツスリだし」

「……やめとく」

「なんでだよー？」

射精はしたけれどキスもクンニもなしで、せつかく気持ちよかったフェラも、してもらったのは本当にわずかな時間。

正直、セックスはもつとしたい。

だから少しだけ残念だなと思っってしまったけれど、桃さんにその気がないのなら仕方ないだろう。

セイが繋ぎっぱなしにしている通話魔法でフウカが、「いいからフェロモンを操って発情させてから桃ねーちゃんを押し倒せ」なんて言ってるけどシカト。

セイに魔法で奥さんの愛液や僕のザーメンを清潔にしてから肌を乾かしてもらって、手早くスーツを身に着ける。

勃起を治めるのは箸を持ち上げるより簡単なので、パンツもズボンも問題なく穿けた。

「奥さんは急いでるみたいでしたし、もう起こしてしまいます？」

「ん。お願い。依頼主が帰ったら報酬を渡す」

「了解です」

8万円。

ちようど昨日引越したばかりの、ワンルームマンションの家賃と同じ金額。

敷金礼金を含めた初期費用と1か月目の家賃、それに学費なんかは師匠達が出してくれるけれど、来月から引かれる家賃や光熱費、それに生活費のすべては、僕が高校に通いながら自分で稼ぐ事になっている。

それも修行なのだそうだ。

「そんじやセイ、影の中に戻ってから魔法で奥さんを起こして」
「はあい。とときま、今日はうちでテレビ見れる？」

「どうかなあ。帰りにお店に寄ってみて、僕の財布の中身でも買えるくらいテレビが安かったらね」

「むー」

マンションにあつた家具類は、元から付いているクーラーやカーテンだけ。

セイの大好きなテレビもない。

買ってあげたいけど、テレビっていくらくらいするんだろう。

「そんじや行くぞ、テンコ。蟲型にしちや力がありそうだから、姉ちやんが偵察や索敵を1から仕込んでやる。まずは体を小さくして、普通のとんとう虫に擬態する練習からだな」

「あんまり厳しくしないでよ、フウカ？」

「へいへい。んじや、またな。桃ねーちゃん」

「桃っち、またねなの〜っ♪」

「ん」

3人の愛娘が影に飛び込む。

同時にセイの気つけ魔法が、僕の影の中から放たれた。

「う、ううんっ……」

「気がつきましたか。お疲れさまでした」

テンコを産んだ記憶なんて欠片も残っていない奥さんは全裸のまま辺りをキョロキョロと見回すと、酷く恥ずかしそうに大きなお胸を隠しながら、ベッドの向こう側に脱ぎ捨ててあつた衣服を身に着けてゆく。

いかにも清楚そうな見た目なので、こんな恥じらう姿もいい。

「体調は？」

「……そういえば、ひさしぶりにあの気怠さから解放されているわ」

「祓いは終了。毎度」

「ええっと、報酬はこの封筒に」

「ん。今回は運が良かった」

「そうなの？」

「この子は、邪気祓いの腕なら関東で5本の指に入る」

「まあ。こんなにお若いのに」

「しかも腕がいいから、再発までに数年はかかる。御主人が定年退職すれば夜の夫婦生活も増えるだろうから、そうなればもう淫気詰まりにはならないはず」

「そうね、なんて言いながら奥さんが小さく笑う。

「まだ30ほどにしか見えないけれどかなりの年齢なのか、それとも旦那さんがだいぶ年上なだけなのか。」

「それはわからないけれど、依頼人と能力者の関係なんて祓いが終わればないも同じ。」

「このフェラが上手な奥さんに僕が会う事は、もう二度とないだろう。」

「……少しだけ、残念かな」

「なにか言った?」

「いえいえ」

「奥さんを送り出した桃さんが、封筒から2枚の札を抜いてから差し出す。」

「これ、報酬。一般人が相手だから今回は安いけど、能力者が相手なら最低でも10倍にはなる。でもその時に蟲を産ませるかは、よく考えた方がいい」

「ありがたくいただきます。……あ。考えてみたら、1人で仕事してお金を貰うのって初めてだ」

「テストは合格。バカ女達からは討伐系の依頼も回せって言われてるけど、ホントに大丈夫?」

「あ、はい。どっちかっていうと、そっちの方が気楽だったりします」

「ん。わかった。でも最初は歩級依頼で、香車桂馬と徐々にランクを上げてく。目立ち過ぎは危険」

「了解です」

「春休み中は、午前中に出社。夕方まで事務所に詰めてもらう。連絡は通話魔法か、これで」

「手渡されたのは、平べったい板のような機械。」

「もしかしてこれ、携帯電話ですか？」

「スマホだけど」

「知ってます。最新式の携帯電話でしょう。うわー、スゴイ。テレビでしか見た事ないですよ、こんな最新型」

「……そういえばバカ女達の屋敷って、パソコンすらなかった。スマホはそれぞれ持ってたけど、いつも充電切れだし」

「あ、はい。でも、テレビとDVDデッキはありましたよ」

「いろいろと理解した。セイが見たがってるのは、どんなテレビ番組？」

「アニメとか、特撮ヒーローの。それと、幼児番組ですわえ」

「ん。とりあえずアニメなら、このアプリで見られる」

「なるほど。で、アプリってなんですか？」

「……そこから説明なんて、面倒すぎ。セイ」

「はいなのっ！」

影から上半身だけ出したセイが床に置いた肘で体を支えて元氣よく返事をする、桃さんはしゃがみ込んでその小さな頭を優しく撫でる。

「今日はこれでお別れだけど、通話魔法はいつでもできていい。スマホの使い方だけじゃなく、わからない事があつたらいつでも通話魔法を飛ばして」

「ありがとうなのっ♪」

頭を撫でられて嬉しそうなセイが影の中に戻ると、桃さんはデスクに戻ってキーボードを叩き始めた。

「どうやら初日の仕事は、これで終わりらしい。」

「えっと、じゃあ今日は失礼します。明日の朝、またおじやましますね」

「ん。電車は乗れるの？」

「ちゆ、中央本線って文字だけを探して駅の中を歩き回って、運良く改札を見つけたら切符は武蔵境まで。それで帰れる、はずですよね？」

「……改札を見つけるのに運はいらぬ。普通なら」

「そうおっしやられましても。」

「いやでも、ねえ?」

「もういい。少し待ってて」

「はい?」

「本当なら明日の朝に会わせる予定だったけど、家に帰れるかも怪しいなら性悪を呼ぶ。あつちも初日だから、夕方には体が空くはず。待ってて」

「はあ」

何の事かはわからないけれど、待っていればいいだけなら簡単な話。

僕がまたソファアに腰を下ろすと、影の中からセイとフウカが飛び出し、スマホをひったくっていった。

きやいきやいとはしやぎながら、対面にあるソファアの上で2人はスマホを弄り出す。

テンコはどうしたのと聞くと、影の中でのんびりゴハン中なんだろうだ。

「冷蔵庫に缶ジュースがあるから、セイとフウカに出してあげて。コーヒーがいいなら、入り口から見て右の手前にあるキッチンでお湯を沸かせばいい」

「あ、はい。ええっと、お金とかは?」

「そんなのをいくら飲んでも、小銭を出せなんてケチな事は言わない」
「オレ、しゅわしゅわのやつっ!」

「セイはオレンジジュースがいいのっ!」

「はいはい。ちゃんと桃さんにお礼を言って、いただきますしてから飲めるなら出すよ」

2人が桃さんにお礼を言う大きな声を聞きながら、立ち上がって壁際にある大きな冷蔵庫を開ける。

コーラとオレンジジュースは、師匠達と買い物に行くといつも2人がおねだりしていたからすぐにわかった。

でもそれ以外の飲み物は、ビール以外さっぱりわからない。

「僕はコーヒーかお茶をいただきますけど、桃さんはどうします?」
「ポカリ」

「……ポカ、ポカあ？」

「ととさま。下から2番目の段、一番手前のがポカリなのっ」

「これかあ。ありがと、セイ」

キッチンはそのなりの広さがあって、ガス台や食器もかなり揃っていた。

ただグラスや食器もそれなりにあって調味料もかなり揃っているのに、シンクには薄くホコリが積もって使われている形跡がない。

そこで淹れたコーヒーは普通のインスタントだけど、湯気の上がるそれは文句なしに美味しかった。

朝、コーヒーとヤカンくらいは買っておけばよかったと後悔したばかりだからかな。でもそれだけじゃなく、東京での初仕事、それをなんの問題なく終えたという安心感もあるのかも。

キッチンでコーヒーを一口啜り、探すまでもなく見つけたゴミ袋を持って事務所に戻る。

これも僕の仕事だろうと勝手に判断させてもらって、デスクの周りに散乱しているゴミ、主にペットボトルとスナック菓子の空き箱とビニールを片付けた。

そしてぼーっとキーボードの鳴る音を聞きながら、スマホを覗き込んで笑うセイとフウカを眺めるともなく見ながらソファアーに座ってコーヒーを飲んでいると、不意にキーボードの音が止む。

なんだろうと視線を移すと立ち上がった桃さんが、デスクの上にあるいくつかの物を重ねてからそれを手にしてソファアーに歩み寄ってくる。

「ヒロキ」

「あ、はい」

「事務所に詰めてる間は、毎日これで勉強をする」

「ええっと。これってパソコンですよ、分厚い本はなんですか？」

「ん。ノートパソコンと、お年寄り向けのパソコン入門書。しかも専門的な知識じゃなくて、つべを見たりSNSを使ったりするための本」

「……意味がまったくわかんないんですけど」

「それを本で調べながら、パソコンに慣れて。とりあえずヒロキに足りないのは、現代人としての常識だから」

「はあ」

現代人としての常識。

都会人としての常識なら、欠けている自覚がある。

でも現代人という大きな括りなら、僕は充分その中に納まっているはずだけど。

「理解してないみたいだから、簡単なテスト。たとえば、……ん。見るからに田舎者でシャバ僧のヒロキ君は、帰りの電車内でスリに遭いました。そのスリの男をどうする？」

「えっと、電車が停まるまで関節を極めて拘束。駅に着いたら引きずり降ろして、セイの結界魔法を展開。鬼斬りの太刀で片腕を落として、盗まれたお金と感謝料として有り金をいただきますね。反省しているようなら傷を塞いで解放。そうじゃないなら、影の中で使役蟲のエサです」

「はい、アウト」

「ええっ!？」

そんなバカな。

犯罪者にはしっかりと報復をしないと、ソイツはまた犯罪を繰り返す。しかもその被害に遭うのは、十中八九無力な一般人。

僕のような人間が犯罪者に罰を与えないでどうするんだ。

「次。スリは逃がしてしまいました。ヒロキは一文無し。家に帰っても、ゴハンがありません。どうする？」

「公園とかに野草を摘みに行くかなあ。あと影の中は時間が止つてるんで、そこに貯蔵してあるシカやイノシシをあっちでセイに焼いてもらいますね」

「はい、ツアアウト」

「なんでですかあ……」

おかしい。

僕は間違った事なんて言っていないはず。

「最後。翌朝、お金がないのに寝過ごしてしまいました。電車に乗る

お金はなく、出社時間は間近。どうする?」

「セイに認識障害の魔法をかけてもらって、新宿まで走りますねえ。道路は危ないから、信じられないほど建ってるビルの上なんかをジャンプで移動かな」

「はい、スリーアウト。いいから黙って一般人の動画やコメントを見て、常識を学んで。じゃないと、高校でも苦労する」

「はあ……」

閑話・百里棗

「ふうっ。ようやく根回しが終わったわ。手古摺らせてくれたものね」

広い室内の大きなデスクで、女、百里棗が呟く。

京都の本社から新宿支店への転勤。

それは棗から上層部へ願い出た配置転換で、3年ほど前にはもう決定していた異動だ。

だというのにその根回しが今日、新宿支店への初出勤を明日に控えたこの夜にようやく終わったのには、いくつかの突発的な要因があったが、最大の問題はなんだったかと問われたならば答えるのは容易い。

坂東の能力者が思っていた以上に頑固で、それを京から来た棗に見せる気概があっても、それを許される実力が伴っていない事。

それに尽きる。

ゆえに棗は3年前から京の能力者の子弟のみが通う小中高一貫校で初等部の1年から机を並べて共に学んだ桃と手分けをし、口を出してきそうな家には相手の不利益になる情報をチラつかせ、殺意まではなくともちよっかいをかけてきそうな家には飛車角を交代で1枚ずつ出して脅しをかけさせた。

「それで潰しておくべき家を決めていざしようと思ったら、本社の年寄り連中に命だけはと泣きついて。あげく玉将の起請文に判を押すだけの段になっても、のらりくらりと。……まあ、いいわ。血判を押したからには、もうあの子に手は出せない。もしもフリーのゴロツキ能力者なんかは依頼をしたとしても、その場で体中の穴という穴から出血してこの世とはおさらばよ」

これ以上ないほど物騒な独白であるが、それを漏らす棗は声を上げずに笑んでいる。

だがその笑みは己などよりずっと大切な愛娘、その3人の中で唯一

東京に伴ったマモリの食事の時間が過ぎようとしているのに気がつくくと、すぐに消えた。

「マモリ、晩御飯を食べましょう。少し冷めてしまったでしょうけど、ごめんなさいね」

そう声をかけると蛍光灯に照らされて伸びている棗の影が蠢き、そこから小さな生き物が姿を見せた。

小さなとは言えど、それは人と比べたらの話である。

この日本で暮らしていれば誰もが幾度か目にする、そうであればなかなかその姿を忘れ難いであろう蜘蛛、絡新婦の体軀。

それは現実ではあり得ぬ子犬ほどの大きさであるし、その頭部があるはずの場所から生えるように存在する女の子の上半身は、外国などで目にする高級玩具の人形ほどの高さがあるのだから。

「さ、食べましょうか」

小さな、比喻ではなく本当に人形のような容姿と体長の女の子が首を縦に振る。

異形。

誰もがそうとしか表現せぬであろう愛娘に向けられた目にも、その子をそつと抱き上げる動きにも、世の母親達が子に向けるそれと同じ、もしくはそれ以上の優しさが滲み出ている。

恥ずかしがりで滅多にはしゃいだりしないマモリがテーブルに用意された好物、分家の調理担当の者に命じて作らせたお子様ランチを見てソワソワしているのに気づいた棗は、愛する我が子に手ずからそれを食べさせてやりながら、マモリが生まれてきてくれた夜を無意識に思い出す。

「終了。時間よ、ペンを置きなさい」

部屋のドアを開けるなり、棗は平坦な声でそうとだけ言った。

ホワイトボード、その前に長テーブル。

テーブルを使うための椅子は1つだけで、もう1つはホワイトボードの横に置かれている。

その簡素すぎる教室の床をカツツカツツとヒールを鳴らしながら歩き、棗はテーブルに置かれている答案用紙を取り上げてホワイトボードの横の椅子に腰を下ろす。

「可もなく不可もない、といったところかしらね」

そんな棗の言葉に生徒、まだ9歳でしかないヒロキはどう返しているのかわからず、ただ小さな体を折るようにして頭を下げた。

「謝れと言ってるんじゃないのよ」

「は、はい」

ようやくそうとだけ言ったヒロキは、とある場所から視線を外そうと必死だ。

だが、その努力は実を結ばない。

大人の、そうだからこそ醸し出せる色気を振り撒く女の豊満な肉体。

身に纏う紺色のスーツもブラウスも、なんの変哲もない既製品。

だが元から大きな乳房は2人目の子供にまだ授乳を続けているせいで張りに張っており、ついさっきイタズラ好きのサラの手でブラウスのボタンを3つも外され、惜しげもなく胸の谷間を見せつけている。

ヒロキは、そこから目を離せない。

「どうしたの？」

「なっ、なんでもありませんっ！」

ヒロキはまだ9歳でしかないが、己の視線を女のそんな場所に固定するのがとても褒められた行為でないことくらいは知っている。

申し訳なさに身が縮み、項垂れまでしたので、視線を豊かな胸の谷間から外すのには成功した。

が、視線が下がったその先にも罨にも似た誘惑がヒロキを待っている。

大きな尻のせいでタイトに見えるが、横幅も丈の長さも社会人の女

性として常識的な紺色のスカート。

その裾から伸びるむっちりとした、黒いストッキングに包まれている肉感的なふともも。

「……聞いているの？」

椅子の上でヒロキはビクリと身を震わせる。

棗が今回の小テストでもう少し注意深く回答するべきだった箇所を注意しているのに、それに気づきもせず組まれた足とそのせいで少し広がったスカートの隙間を凝視していた、その事を気づかれたのではないかと怯えたからだ。

「ご、ごめんなさい」

「だから謝れと言ってるんじゃないの。こことここ、それからここももう少し注意深く問題を読めていれば回答は違つたはずでしょうと言ってるの。そこじや見えないだろうから、こつちに來て答案用紙を見てみなさい」

「は、はい」

ヒロキがまるで膝しか関節のないロボットののような動きで立ち上がる。

そのギクシヤクとした動きで己に歩み寄る子供用の甚平を着せられた少年を見ながら、棗はどうしようもないほどに昂っていた。

つい1時間ほど前まで棗は、この屋敷のリビングで3人の女にあらん限りの大声を出して説教をしていたというのに。

一般家庭で生まれ育つた子が突如として発現した能力を謎の奇病と判断され、過酷な環境に隔離されていたのを助けるのはいい。

その子が長い軟禁生活中に精通を迎え、酷い淫気詰まりを患っていたからそれを祓ってやったのもいい。

その子の稀有な才能を見抜いて日本中に名を馳せる飛車角の最初で最後の弟子にするのも、自分達では不安だからと『観る』ついでに座学の講義を私に頼むのもいい。

だがなぜ、最初で最後の弟子を、まだたった9歳でしかない今まで筆舌に尽くしがたいほどの苦勞をしてきてやっと人間らしい暮らしを得た男の子を、どうしてあなた達は夜ごとベッドに連れ込むんだ。

恥を知りなさい、恥を！

そうまで言って罵った棗に、もう5年来の付き合いになる HALF 美女、日本でただ1人の角将級であるサラは「いいからまずこれを見てくれ」と言っている魔法を使った。

光の奔流に瞳が潰される！

そんな恐怖から強く閉じた瞼の裏に映ったのは、あまりにも衝撃的なシーン。

「ほ、本当にいいんですか？」

「ああ。そうしなきゃボウズの、オマエさんの病気は治らないんだよ。早く治したいだろう？」

「は、はい」

「なら来い。こっちの準備はできてるからさ」

そう言ってニヤリと笑ったサラは偉そうに肘枕をして横たわっている、それも全裸で。

そしてその棗より大きな乳房や、こんもりとした恥丘でクーラーの風に揺らされる髪と同じ黄金色の淡い恥毛、その下の肉感的に過ぎる大陰唇が重なった縦スジを見下ろす少年は、なんとも子供らしい白いブリーフをもどかしそうに脱ぎ捨てた瞬間に射精した。

異常なほどの射精量。

精通を迎えてどれほど経つのかは本人も覚えていないらしいが、だいぶ黄みがかかった、見るからに青臭い精子がバケツで水を撒くような勢いでサラの白い体を汚す。

その口の横に飛んだ精子をペロリと伸ばした舌で舐めたサラは、面白くて仕方がないと言った表情で上体を起こし、ヒロキの腰を抱いた。

完全に亀頭を覆い隠している皮を口で剥かれてまた射精し、初めて外気に触れたのではないかとまで思えるピンク色の亀頭にキスを落とされただけで射精しと、とにかくヒロキは信じられぬほどの回数、信じられぬほど多くの精子を吐き出し続ける。

「な、棗先生？」

その声でハッと顔を上げた棗は、己の口角が自嘲の笑みを形作ろう

と上がってゆくのを自覚したが、表情筋を止められない。

あの魔法の映像には続きがあつて、そのシーンにはご丁寧にも『淫気祓いの翌日、最後の射精から約9時間』というテロップがあつた。閉め切つた和室の隅、その暗がりでも熱に浮かされたような表情をしながら、幼い肉棒を必死で擦り上げているヒロキ。

祓いに慣れた、もしくはそういうつた祓いの依頼を受けて能力者を派遣する部署にいた事のある棗のような者ならばすぐにそうと断言できる、淫気祓いの再発。

何度、どれだけ多く射精をしてから試しても、ヒロキは8時間ほどで淫気詰まりを起こしてしまう。

だからといって、この子には射精が必要だからといって、自分達のような大人が幼い子供の体を貪つていいはずがない。

だが、棗がさつき『観た』結果、それで明らかになつたヒロキの『能力』とそれに付随されると思われる『特性』を考えると、なるべく自慰で淫気を散らすのも、射精へと導く女が劣情を隠して事務的に手淫を施すのも、ヒロキの能力者としての成長に絶対に悪影響を及ぼす。なので最初からそう考えていた淫乱女達、長い付き合いの友人2人とその使い魔のセーラー服を着た使い魔に、棗は押し切られてしまった。

「なんでもないわ。それより、どうして股間を手で隠してるのかしら？」

ヒロキは棗が持つ答案用紙を覗き込める位置に立っているが、その両手は不自然に前、股間で重ねられている。

誰がどう見ようとなにを隠そうとしているのかは明白だ。

「バ、ごめんなさい」

「謝れとは言つてないの。どうして、と聞いているのよ？」

幼い、見るからにぶにぶにとした感触の頬が真っ赤になる。

小さな手が少しでも股間を隠そうと広げられる。

だがそんな事では、股間のふくらみは隠し切れない。

そんな光景を見ながら、棗はショーツのクロツチに己の淫液が染み込んでゆくのを感じた。

「それは、その、おつきく、なつてしまった、というか……」

「なにが大きくなったの？」

「それは、その。………お、おちんちん、です」

「なるほど。どうせあの子達の事だから、これから座学のたびにちやんと勉強してたら褒めがご褒美をくれるとでも言ったんでしょよね」

「は、はい。ごめんなさい」

「謝れと言ってるんじゃないわ。欲しいの、ご褒美が？」

生唾を飲み下したヒロキが恥ずかしそうに、だがハッキリと頷く。

「13時間よ」

「えっ？」

「朝にこのストッキングを、別に新品でもないヒールを履いて13時間。運転して仕事場に行つて、立ったり座ったり歩いたり。それからまた、ここまで運転。それはそれは臭いでしょうね、今の私の足は」

「ああっ……」

無意識に身を振ると、ブリーフの生地に勃起し切った皮かぶりの肉棒が擦れる。

たったそれだけの刺激で射精しかけたヒロキは、どうして射精できなかつたんだと己を心の中で呪う。

それほどに、今のヒロキは精子を吐き出したいと願っている。

「あなたの、ヒロキくんの能力から予想される特性を考えれば、異性の体臭で酷く昂るのも仕方ないわ。その中でも、特に悪臭を好むのもね。この臭い足を嗅ぎたいの？」

「は、はい」

「それから？」

「嗅ぎながらおちんちんを触って、その、サラさんの言うオナニーがしたいです」

「変態ね」

「ご、ごめんなさい」

「謝れとは言っていないわ。嗅いでもいいけれど、オナニーは禁止。それでいいなら好きにきなさい」

「はっ、はいっ！」

ヒロキが跳びつくようにして床に膝をつき、パンプスと黒いストッキングで蒸れに蒸れた足の指の間に鼻をうずめる。

そのわずかな動きで股間、己の秘所がかすかに擦れ、『くちゅっ』という音と共に、今まで感じた覚えがないほどの興奮と快感が背筋を駆け上がるのを棗は感じた。

うるさいほどに鼻を鳴らして足の指の間を嗅いでいるヒロキは、目を細め陶然とした表情で両のふとももをモジモジさせている。

まずは服を自分で脱がせて、ストッキングを穿いた足で皮を剥いてあげようかしら。

上手におねだりができたらそのまま足で挟んでシコシコしてあげて、射精ができたらまたご褒美ね。

酷く汚れた、さつきから止まらなくなってる子持ち女の汚れたショーツを顔に押し当ててオナニーを許可したら、このかわいらしい私の生徒はどうするのかしらね。

この子供らしい細い黒髪、その下にある顔を、薄い胸板を、腹筋なんて存在しない柔らかいお腹を、無毛の股間を、それなのに勃起してしまっているおちんちんから足先まで。

そのすべてを昂りすぎているからか、トクントクンと痛いほど尖った乳首から滴って授乳パッドを濡らしている母乳まみれにしたら、この子はどんな表情をして、どんな言葉でその先を願うのかしら。

「愉しみだわ……」

足を組み、肘当てに立てた腕の拳に今にも眩みそうな目の横を預けながら、うっとりとした表情で呟く。

その数時間後、逆に髪の毛から足の先までをヒロキの精子まみれにされた棗はマモリを産んだ。

上京4

どういう理屈でパソコンが動いたり、どこにあるのかもわからない情報をどうやって僕に見せてくれているのか、なんてどう考えたってわかりはしない。

でもこの薄くて小さな箱は、まるで魔法のように働いて僕にいろいろな物を見せてくれるみたいだ。

「……ふむ、なるほど。これは勉強になりますねえ」

「初めてパソコンを使って、まず見るのがユーチューバーのパンチラ動画とか。これだから思春期の男子は」

「いやー。エッチなアニメのDVDなら見慣れてるんですけど、実物はやっぱりいいですねえ」

「15歳のくせに見慣れるなど心から言いたい」

「だってサラさん、マンガもアニメも手当たり次第ですもん」

「もう1人のバカ女は、やっぱりニュースと時代劇だけ？」

「はい。しかも僕、向こうじゃずっと和服で、髪型も総髪以外は禁止されてましたし。上京前にティファニーちゃんが高校生らしく髪を整えてくれて助かりましたよ」

頭が軽い！

髪を切ってもらってまず思ったのはそれだった。

7年ちよつともほつたらかしにすると、髪はそう感じるほど伸びるものらしい。

「哀れな……」

それでもないですよと返して、次の動画を探す。

僕がとりあえず気になった動画を流していると、桃さんはキーボードを鳴らしながら『著作権』や『違法なはずの転載で金銭を得られる仕組み』なんて問題を僕にもわかりやすく話してくれた。

「それって、規制できないんですか？ 誰かがお金をたくさん使って作った作品や映像をこんな風にして世界中の人が見られるようにで

きるなら、それを止めるのだからって簡単にできそうなものですけど」

「やってるサイトもある。でも、サイトだって商売だから」

「自主規制にばかりお金はかけていられない、と?」

「ん」

バカバカしい。

正直に言うと、そんな感想しか出て来ない。

「じゃあ違法ならダメなものはダメって言って、国がトコトン取り締まるべきだと思うんですけど」

「でもそのサイトは動画の投稿と公開を請け負ってるだけで、法律違反の動画はわざわざ人件費をかけて削除までしてる。だから企業として努力はしてるだろうって言う」

「でも削除されるまで、違法な動画が誰でも見られるんですよ?」

「なのにそのサイトが、損害を受けた分のお金を企業に払ってくれる事もない」

「ん。そうなる」

「……なーんか、いかにも外国人的なヘリクツですねえ。日本人なら『ダメなものはダメ、犯罪は犯罪!』って言われたら大多数は従いそうなのに」

「世の中はそんなもの。それにダメなものはダメなんて理屈は、この国、日本ですらもう通用しなくなりかけてる」

「戦争に負けたから、かあ。あのタイミングで門さえ開かなきゃ、能力者の戦闘力で大東亜戦争の結果も変わったんでしょうけど。日清日露みたい」

「皇紀2600年に門が開くのはわかってた事。でもまさか同時に6つも開くとは、誰も思ってたから」

「勢力を問わず集まって、日本中の能力者が30年も京都で戦いに明け暮れたんですもんねえ」

「ん。次は、皇紀2700年」

「……イヤだなあ」

30を過ぎた僕が、間違いなく参加する事になる戦い。

それを考えると、不思議な感情が湧き上がる。

僕には、自分がわからない。

心の奥底では戦いを望んでいるような気もするけれど、誰かが傷つくくらいなら大規模戦闘なんて起こらないでくれという、常識的な考えもちやんとあるからだ。

30歳を過ぎた僕はどんな気持ちで京都へ向かい、何を思いながら、そこでの戦闘に身を投じるのだろうか。

「あら、初日なのにもうお勉強？」

いきなりドアが開いて聞こえたのは、凜として優しく懐かしい声。懐かしい、は言い過ぎかな。

つい先日まで、10日に1回ほど僕はこの声で能力者のルールや、決して明文化はされない能力者独自の法律のようなもの、それから100人いたら100通りあるという能力者の系統ごとの特徴やその強さを教えられていた。

それにしても、やっぱり隠形系の能力って凄いや。

僕達に事務所のドアを潜るまで接近を気取らせもしないなんて。

「棗さん、どうしてここに……」

体のラインが浮き出る黒いスーツ。

それにトレードマークのオシャレな赤いメガネをした棗さんが微笑む。

相変わらずおかつぱに似たナントカつて髪型の似合う美人さんで、日本人離れたエロい肢体だ。

「サプライズは大成功ね。今日から西新宿にある支店に出向なのよ。単身赴任だね」

「それはまた。……娘さん達、寂しいでしょうね」

「能力者の家系に生まれたんだから、諦めてもらうしかないわ。渡す物があるから、その中途半端にいやらしい動画を止めてくれる？」

棗さんは僕の対面にあるソファの後ろに立っているんだけど、見えないはずの画面に苦笑を浮かべられても不思議とは思わない。

能力者なんてそんなものだから。

「あ、はい」

ノートパソコンの画面では、『どう考えてもわざとだろう』って感じ

でパンツを見せながら女の人が笑っている。

そのインタビューを見ながらぼんやり考えていたのだけれど、マンガやアニメではないエッチな映像を愉しむには、あまり物事を深く考えない事が大切なんじゃないだろうか。

清楚な格好をして男性経験が少ないんですなんて言っても、この女の人はお金を貰ってこういう映像に出演しているんだろうし。

それを撮影している男の人の話し方や声も、一度気にしてしまったら癪に障る感じで、なんとというか萎える。

本のページをめくって動画の止め方を確認してから動画を消すと、対面のソファーに座ってセイとフウカに抱き着かれている棗さんが、手提げバッグから大きくて分厚い封筒を出した。

「まずは追加の身分証を渡すわね」

「上京する時に持たされた、財布に入れてある保険証のとは別の名義のですね。僕の4つ目の名前、その身分証明書ですか」

「ええ。これが免許証。これの年齢は20歳になってて、大型二輪と普通自動車に乗れるわ。どこかで提示するような機会があれば、成人してるけど童顔なんだで押し通しなさい。運転の腕は落ちてないでしょうね?」

「本社の教習所で、あれだけ仕込まれましたから。こっちは?」

「パスポートよ」

「海外に行く予定なんてないんですけど」

「たまにでも支店からの仕事を受けるなら、海外でのミッションもあり得るわ。だから、一応ね」

「……嫌な予感しかないから受けたくないなあ」

それから出されたのはカード類。

なんとスマホやパソコンがあればそれで買い物ができるそうで、物にもよるけれど、早ければ注文した品がその日の夕方にはマンションに届いたりするらしい。

「これが、車とバイクのカタログ。ついでだから、こっちで使う足をここで選んでちょうだい」

「また分厚いのが何冊も。車もバイクも運転はできるけど、僕はこん

なのを買うお金なんてないですよ?」

「平気よ、支店が立て替えておくから。もちろん、無利子でいいわ」

「……後が怖いんで遠慮します」

「失礼ねえ。でも、最低でも1台は選んでちょうだい。でないと、ここでのアルバイトにも差し支えるし。それに本社の庇護下にある能力者は、いざ一斉招集となれば何を置いても駆けつける義務があるのよ。足がないから遅刻しました、なんて言い訳は通用しないわ」

「そういえば、そんなのもあったなあ……」

「とーちゃん。オレ、あれがいい。かーちゃんと買い物行く時に乗ってた、でっかくって頑丈なクルマっ!」

「ハンヴィー? あんなの目立つし、とんでもなく高いって」

「じゃあ、でっかいバイクっ! 荒野の一本道をノーヘルで爆走してそんなヤツっ!」

「でっかいのは予算的にキツイかなあ」

「お金なんて、どうにでもなるわよ。桃とは話が付いてるからヒロキくんさえよければ、いつだって支店から割の良い依頼を回すし」

「お金にもなるけど、それだけ危険な仕事なんでしょうねえ」

「そうでもないわよ。ヒロキくんは、特技が多いから」

「んー。ちなみに棗さんは、新宿支店でどんな仕事を?」

「情報室の室長ね。主な仕事は、関東に足を踏み入れた能力者の情報収集とその分析。敵味方を問わず、のね」

「……それはまた」

棗さんが、そんな危険そうな仕事を。

チラリとその影に目をやる。

「マモリ、聞こえる?」

返事はない。

僕は通話を含む魔法全般を使えないし、マモリもまだ人語を話せないからだ。

にゆうっという感じで棗さんの影から、フランスだったかのアンティーク人形ほどの大きさの上半身が現れる。

女の子。

しかも服は着ていなくて、かすかなふくらみの頂点にあるピンク色の乳首を惜しげもなく晒している。

棗さんと同じ黒髪のおかつぱ頭、でもその前髪はかわいらしくりつとした目を隠す長さで切り揃えられていて、切ろうとすると泣いて怒るんだ。

「ととさま、マモリが『会えてうれしい』だって！」

「うん、僕も嬉しいよ。棗さんもマモリも、元気そうで安心した。これからお母さんを、棗さんをお願いね。なんか大変なお仕事をしてるみたいだから。もし何かあったら、すぐに僕達を呼ぶんだよ？」

マモリが微笑みを浮かべて、コクリと頷く。

この恥ずかしがり屋の、乳首は見られていいけど目を見られるのはどうしても嫌なのを恥ずかしがりといってもいいのかは謎だけど、そんなのどうでもいいくらいかわいい女の子、僕の3人目の娘は、滅多に影から出て来ない。

でもこうして思いもよらず再会できた今くらいは、だっこしながらゆっくり愛でさせてもらおうと影に手を入れて優しく抱き上げる。

「桃、ビールもらうわよ。それからご飯やおツマミを、デリバリーサービスでいいから頼んでおいて。今日は全員、ここに泊まるから」

「足を早く選ばせろとは言ったけど、泊まってるいいとは言ってない」

「仕方ないでしょう。ヒロキ君のマンションには、お布団すらないんだから。セイとフウカがかわいいそうよ」

「む」

「それに、貴方も早いうちにヒロキ君の娘を産んでおきなさい。桃は私と同じ銀将級だから、半人半蟲のかなり強い子が生まれるわ。周りから見れば、桃はまんまと誰もが欲しがる珠玉をその手に掴んだ状態なんだから。護衛は必要よ」

「でも、ヒロキとは会ったばかり」

「何をいまさら。あの2人、上京前にお酒を飲みながらヒロキ君の前で話してたわよ。どんな風に桃の処女を奪って、東京に出てからは2人が上京してここに泊まるたびにどうやって喘がせまくってたか」

「あのバカ女達……」

言ってたなあ。

桃さんは、ちよつと強引にされるのが好きらしい。

それに特に感じるはその小さなお尻で、僕のアソコを最適化せずそのままの大きさでも受け入れて、呆れるくらい喘ぎまくるだろうとも言っていた。

よくて中学生くらいにしか見えない桃さんが本当にそうなるなら、是非ともなるべく早くそんな関係になりたいなあ。

「ヒロキ君もビールでいいわよね」

「えつと、いいんでしょうか?」

「もちろん。飲みながら今日中に足を決めて、明日の昼くらいに納車。アルバイトが終わったら寄り道せずにマンションに帰って、配達されてくる生活必需品の受け取りね。そういうのは春休み中、それもなるべく早くしておかないと」

「なるほど」

ならばと絡新婦の体に上半身とかわいらしい顔があるマモリをだっこしたまま乾杯して、たまにビールを飲みながらカタログをめくる。

桃さんはまだ仕事があるそうなので、ビールを飲んでいるのは4人だけだ。

セイもフウカも嬉しそうにグラスを口に運んで、争うようにストローでマモリにオレンジジュースを飲ませている。

僕の2つ目の戸籍は18歳。

それも元イギリス人の師匠、サラさんのお婿さんになっているので、保護者がいれば5歳から食事をしながらの飲酒はOKと決めてある。

ここは日本だし、その戸籍だって日本国籍になっているので本当は違法なのだけれど、そんな事は誰も気にしていない。

能力者という存在そのものが、法律で縛る必要がないくらいのデータラメさだし。

「あら。中古車ばかり見てるのね」

「そりゃそうですって。値段を考えると、新車はちよつと」

「それもバイクばかり。セイとフウカのためにも、車の方がいいでしょうに」

「しばらくはバイクでいいですよ。どれだけ稼げるか、まだわかんないし」

「変な所だけ堅実よねえ。はい、セイとフウカはこつちを見なさいな」
「棗ねーちゃん、これってなんだ？」

「家電、それもテレビやゲームのカタログよ。フウカ、前にゲーム機が欲しいって言ってたでしょ？ セイはテレビと、24時間アニメをやってる有料チャンネルや有料の動画サイトも選ぶといいわ。注文や手続きなんかはしてあげるから」

「げえっ!？」

「やったーなのっ♪」

「ラツキー。さすが棗ねーちゃんだぜっ!」

テレビにゲーム。

そんなの揃えたら、いったいいくらかかるんだろう。

「うふふ。ヒロキ君、最低でも春休み中に1件は支店から仕事を回せるわよ？ 報酬は100万ってところね」

「……100万円あれば、この400のバイクを買ってテレビやゲーム代も出るかな。桃さんのOKが出るようなら、是非やらせてください」

「ええ。もちろん。いいわよね、桃?」

「ん。性悪に扱き使われるのもいい経験。そつちに口出しはしない」

「生意気な子ねえ」

デリバリーサービスは出前。

出前は、電話をして頼むのが普通。

数々のマンガやアニメで、そのくらいの知識は僕も持っている。

でも桃さんは電話なんてしていないのに、続々と出前が届き始めた。不思議

「今度は中華料理がたっくさん。ピザも5枚ありますけど、こんなに食べ切れます?」

「上京祝いなんだから、ヒロキ君が食べちゃえばいいのよ」

「そんな。もったいないですよ。このくらい余裕ですけど、普通に人前食べてれば問題なく動けるんだし」

「いいからいいから。桃、仕事が終わったならそこに座りなさいな。ヒロキ君、お酌をしてあげて」

「あ、はい。どうぞ、桃さん。改めて、今日からよろしく願います」
「ん」

上京5

食事をしながらビールを飲んで、雑談代わりにこれからお互いがこの東京でどんな暮らしをするのかを話す。

桃さんは、この探偵事務所兼自宅で普段通りに。

いつもと違うのは、高校生の僕が助手として通って来る事だけ。

棗さんは京都の名家の当主でもあるので、都内にもかなり大きなお屋敷があつて、そこでお手伝いさんでもある分家の人達と暮らすらしい。

仕事は忙しいだろうけれど、京都で暮らす2人の娘さん達にはなるべく顔を見せに帰るそうだ。

そして僕は高校の近くのワンルームマンションで暮らしながら、探偵事務所のアルバイトと棗さんが回してくれる支店の仕事をして生活費を稼ぐ。

通う高校は、一般にはまったく名前が知られていない私立。

でもその実態は能力者の子弟や、その能力者達と関わる仕事に就く事が決まっている家の子弟が通う、関東で唯一の能力者養成専門学校的な高校だ。

おかげで小学校に途中までしか通っていない僕でも入学できたし、問題を起こさなければ、どれだけ成績が悪くとも卒業はさせてもらえるらしい。

「師匠達には東京での生活のすべてが修行って言われましたけど、僕はなにをどうすればいいんでしょう?」

「普通に生きてればいいのよ。そうしていれば、自然と成長するから。人としても、能力者としても」

「んー」

「そう言われてもなあ……」

「あまり考えない方がいい。ヒロキは世界を見るべき時期で、あのバカ女達はなるべく自由にそれをさせてあげただけ」

「でも最低でも1年間、2年生に上がる直前の春休みまでは帰って来るなって言われてて」

「うふふ。寂しいの?」

「……それは、まあ」

「その寂しさすらいい経験なのよ。噛み締めて暮らさない」

「はあ」

寂しさすら経験。

それはそうなのだろうけど、ならついでに世の中のすべての不幸を経験して来いとか言われそうで怖い。

あの人達なら言いかねないような気がする。

「それで支店から回す報酬が100予定のスポット依頼だけど、内容は合同で行われる討伐の査察なのよ」

「査察、ですか」

「ええ。近々、近所で銀将級4名での小規模討伐が予定されてるの」

「銀将級が4人も。実践に出るなら戦闘向きの能力者なんだろうし、かなりの大事ですね」

本社の指揮下にある能力者はその強さや有用性で、歩級から玉将級までのランク分けが成されている。

銀将級は中間以上のランクであり、そのすぐ上の金将級よりだいぶ数が多いので、本社の主戦力と言ってもいい。

それが4人も。

「そうね。だからこそしっかりと監視しながら、もし討ち漏らしがあれば即座に片付けて欲しいのよ。その場合は追加報酬も出るわ」

「おおっ」

「その依頼なら、情報は掴んである。指揮は風使いの中年男になるはず。他は四大家の分家の炎使いである若い女に、それより少し家格が下になる同年代の女が2人。全員が銀将級で火風土水の構成」

「へえ。ならみなさん、かなりの人材ですねえ」

「そうなるわね。だから、しっかりと腕と人柄を見ておきなさい。なんなら、3人とも墮としちゃっていいから」

「……分家でも四大家の人はちよつと。あと2人の家は?」

地水火風の能力。

それを持つて生まれる能力者は使役系とかよりずっと多いので、何千年もの間に普通より強力な術を使える能力者や、それを持つて生まれる者の数が多い家系がハッキリと見えた。

その頂点に立つのが四大家なんだから、関わるのを想像するだけでもんどくさい。

「どちらも武家よ。元幕臣で江戸に残った能力者の家じゃ、かなり名の知られているね」

「うん。怖いから、誰にも手は出さない方向で」

意気地がないわねえ。

そんな眩きを聞き流しながらピザを食べ、ビールでくどくなった口の中を洗う。

能力者の家は、いろいろと面倒なんだ。

家柄に拘る考え方から脱却を果たしている人なんか稀。

その家には本家と分家それぞれの思惑やらが入り組んでいて、絶えず権力闘争をするのが当たり前になっていたりする。

一時の快樂のため、そんなのに巻き込まれるなんて冗談じゃない。

「でも手駒は増やせる。ヒロキなら」

「僕が使役対象として産ませられるのは、今のところ女の子のみなんです。自分の娘が手駒だなんて思った事ありませんよ」

「……なるほど。謝る。ごめんなさい」

「いえいえ。棗さんが産んだマモリみたいに、母方の影で暮らすならいい護衛になるんですけどね。そうするにはセックスをしないとだし。そんなポコポコ産ませられませんよ」

「悪い癖よ？ ヒロキ君には、慣れてもらわないと」

使役蟲を産ませる事に、それを戦力として使う事に慣れる。

その先にあるのは100年に1度この国を訪れる災厄で、僕がある程度の役割を担う事が期待されているという事実だろう。

面倒だな。

素直にそう思う。

師匠の1人、サラさんなんかはもし気に入らなければ一緒にこの国

を出ようと笑っていたけれど、僕にそんな事が出来るのか。

「抱いたらやっぱり情は移る、ヒロキ?」

「……ですね」

セックスをする。

孕ませる気で、奥にたつぷりとザーメンを吐き出す。

そしたら相手は、人ではない存在であったとしても、自分の血と特性を引き継いだ娘を産むんだ。

情が移らないなんて人がいたら、そんなのはただのヒトデナシじゃないか。

「難しいわよね、ヒロキ君の場合は性格的に」

「開き直って、能力者の女が望めば気軽に使役蟲を産ませられるなら。当たり前のように天下だつて狙える」

「いつの時代ですか。やりませんって」

「そうじゃなくても、家の垣根を超えて配下を増やせるのは得難い能力。普段は母親の手伝いをさせて、いざ事あらばその母親と使役蟲はヒロキの指示に従う。それが可能ならヒロキが生きてる限り、少なくとも50年以上この国は平和」

「たかが能力者1人の力なんて、国って規模で考えたら」

「そこまで言って、声が詰まってしまう。」

塵に等しい。

とまで言い切れないという事は、僕みたいなバカにもわかるからだ。

ただでさえ数の少ない能力者。その男女比は、3：7とも2：8とも言われている。圧倒的に男性が少ないんだ。

その女性能力者に蟲を産ませてその子達も戦わせることが可能なら、この国の戦力が倍近くに跳ね上がるという事になりかねない。

「まあ、今はあまり深く考えるのはやめておきましょう。ほら、もつと飲みなさい。それとも、飲みながら桃にフェラでもさせる?」

「……いえいえ。そんな」

「うふふ、迷ったわね。桃は小食だし酔うのを嫌うから、もう食事もビールも充分でしょう。ヒロキ君の隣か前に移動して、丁寧にご奉仕

しなさいな」

「い、嫌だ」

「へえ。私に逆らうなんて、いつの間にか偉くなったものねえ。調教が足りなかったのかしら」

おおつ。

同じメガネ属性でも両極にあると言ってもいい、知的グラマータイプの棗さんが、素材は最上なのに地味メガネっ子なツルペタ桃さんを調教だなんて。

まるでサラさんの部屋にあった薄い本じゃないか。

「……やめて。ヒロキが見てる」

「はいはい。まあ桃は男とは初めてなんだから、こんななし崩し的なのはかわいそうよね」

「桃さん、棗さんも。今日はそういうのは考えないで飲みましょう。お酌ならいくらでもしますよ。これからお世話になるんですし」

「うふふ、ありがとう。ほら、桃も。今夜はどれだけ酔っ払ったって心配ないわよ。この3人がいるなら、能力者だけで構成された3000の兵隊に守られてるのと同じなもの」

「ん。たまになら、深酒もいい」

「そうこなくっちゃ」

棗さんは昔から大酒飲み。

それに桃さんも酔うのが嫌いなだけでお酒そのものは好きだし弱くもないそうで、すぐに冷蔵庫のビールはなくなってしまった。

買い出しなら任せてくださいと僕が言って、それは笑顔で了承されたのだけれど、初めて自分だけで稼いだお金でお酒を買うのは絶対にダメだと言われてしまう。

なので僕は5万円を預けられ、フウカと2人で探偵事務所を出た。

「楽しみだなあ、とーちゃん」

「なにが？」

「ツマミも買うし、酒は缶ビールだけじゃなくってブランデーも。だからドンキまで行くんだろ？」

「それがいいって言われたねえ。ドンキってのが何屋さんなのかすら

知らないけど」

「なんでも売ってる、でっけえ店だよ。テレビでやってた」

「ふうん」

1階。

エレベーターでそこまで下りてドアに向かうと、もうすっかり街は夜。

これじゃあ、5歳くらいの子を僕が連れて2人で歩いていたら酷く目立ってしまうだろう。

「フウカ」

「やっぱオレ、影の中かあ」

「だから留守番してていいって言ったのに。僕の見てる景色は事務所にいても見られるんだし」

「そんなんやだよ、もったいねえ。んじや、中にいるな」
「うん」

「あとドンキの帰りに、寄るトコあつから。よろしくっ」
「どこさ？」

返事は、頭の中で直接聞こえた。

（ハンバーガー買うんだっ。ずうっとテレビで見てて、食いたかったヤツっ！）

「それが目的で、着いてくって言い張ったのか。なんだかなあ……」

ビルを出たら明治通りを渡ってまっすぐ進むより、まず靖国通りという道路まで出て、それから駅方向に向かった方が道はわかりやすいと教えられた。

なので、まずは左に。

（とーちゃん。真っ直ぐ行って交差点に向かうより、その左の路地とか縫ってヤスクニドリーに出るのが近道だぞっ）

（へえ。ありがとう）

フウカは僕やセイとは違って、東京への憧れが強かった。

だから新宿駅からここまで歩くだけでも、僕達よりずっと道なんかまで注意して見ていたのかもしれない。

ありがたく助言に従おうと、細い道に足を向ける。

(あちやー。オレ、余計な事を言ったかも……)

(気にしなくていいって。あんなの、どうにでもなるから)

能力者には固有の能力があるけれど、それとセットになった特性と呼ばれる特徴があるものだ。

視力が飛び抜けて良かったり、耳や鼻が良かったり、人によっては100メートルを5秒で走ってしまう。

能力者なら誰もが持っているそれは複数あったりもして、その数と能力の強さが等級を決めるらしい。

僕の特性の1つは目が良くて、どれだけ暗くとも日中と変わらず先を見通せるというもの。

その人並み外れた視界には、路地裏を全力で走る1人の少年が映っている。

白いスーツ。

リーゼント、と言うのだろうか。家を出るまでに、とんでもなく時間がかかりそうな凝った髪型。

年の頃は僕と同じくらい。

そんな少年が息を切らし、必死の形相で狭い路地を駆けていた。

「すまねえ、兄さん。通してくれっ!」

「はいはい」

道を譲る。

「サンキュ」

擦れ違いざま、そんな声が耳に届く。

僕なんかにお礼を言ってる場合じゃないだろうに。

少年は、逃げているのだから。

追手は6人。

先頭を走る23、4の男はまるでプロレスラーのような体格で、耳障りな怒声を上げながら少年を追いかけている。

少年もなかなか鍛えて引き締まった長身だったけれど、これがヘビー級としたなら階級は2つ3つ下になるだろう。

逃げて正解だ。

「ジャマだ、小日本鬼子ッ!」

「へえ……」

ここをどこだと思ってるんだか。

もし大陸のどこかだと勘違いしているなら、しっかり教えてあげないで。

(待ってって、とーちゃん。オレに任せろ！)

僕の横を、6人の外国人が駆け抜けてゆく。

その誰もが気づきはしなかっただろう。

僕の影。

そこから飛び出した小さな生き物。

ガツシヤーンッ！

ガコンツ、ガツシヤン、ベチャツ。

そんな音に、耳障りな甲高い外国語の喚き声が次々と重なる。

でも、僕は足を緩めない。

(ただいまっ。これでカンベンしてやってくれな)

(ビールケースやゴミ箱を倒して道を塞いだんでしょ。フウカは優しいねえ)

(それなりに怪我もしてっし、どいつもこいつもくっせえ生ゴミまみれだ。そんなくれえでいいだろうって)

(甘いねえ。この平和な国から出た事もない人を小日本鬼子なんて言うくせに、自分はしれっと日本に来て暴力行為を働こうとしてるんだから、殺されたって文句は言わないと思うんだけど)

(かーちゃん達に、なるべく一般人殺しはさせんなって言われてっからさ。あのままじゃ、追っかけて全員をぶった斬ってたろ。とーちゃん?)

(わざわざフウカに鬼斬りを出してもらうのも、あんな連中に鬼斬りを使うのももったいない。殴り殺すか、壁に叩きつけて殺すだろうねえ)

(ったく。まだ上京2日目だったの。少しは抑えてくれよ)

(ヤダって。そんな生き方をするくらいなら、和歌山の山奥ですつと暮らすもん。師匠達と毎日セックスしてお酒を飲んで、お金がなくなったら棗さんに依頼を回してもらってさ。あーあ、想像したら明日

にでも帰ってそうしたくなって来たや。早く卒業してあの家に帰りたいなあ)
(……やれやれだぜ)

上京6

缶ビールを1箱と12本。

ブランドーを5本。

それと、総菜やスナック菓子や乾き物でパンパンになったビニール袋が2つ。

スマホで指示を受けながらドン・キホーテとかいう大きなお店で買い込んだ荷物を抱えて、来た時とは違う道で事務所を目指す。

商品を買った物かごからビニール袋に移す場所何人かが、その大荷物を1人で持ち帰ろうとしている僕を見て驚いたようだけれど、特に声をかけられたりはしなかったので気にせず店を出て、路地裏に入ってからフウカに荷物を影の中に入れてもらう。

帰り道の途中で寄ったハンバーガー屋さんの会計には、淫気祓いで得た報酬を使った。

師匠達と暮らしていた山奥にハンバーガー屋さんなんてあるはずがないし、月に一度だけ買い出しに出ていた麓の街にもそれはなかった。

今までテレビでしか見れなかった憧れの食べ物を手に入れ、これ以上ないほど上機嫌なフウカと話しながら事務所に戻る。

「ただいまですー」

「おか」

「おかえりなさい。セイに聞いたわよ。よく殺さずガマンしてくれたわねえ」

「ただいまだよつと。セイ、ハンバーガー食おうぜっ！」

「わあい♪」

影から飛び出したフウカが僕の手からハンバーガーの袋をひったくるように取って、セイの隣に駆けてゆく。

それを見ながらまず、12本だけ買った冷えた缶ビールとブランドーを1本テーブルに置いて、箱を冷蔵庫の隣に置いた。

「いえいえ。一般人は、なるべく殺したくないんで。残りは冷やしておきますね。ブランデーを飲むグラスもすぐに出します」

「ありがとう」

その夜は大いに飲んだ。

誰もが酔っ払って、全員が並んでも余裕のある大きなベッドで雑魚寝。

僕は今まで何度となく触れ、舐めたりしゃぶったりして、最後には最奥にたっぷりとザーメンを吐き出した棗さんの豊満な体に手を伸ばそうとする自分を押さえ込むのに一苦労だった。

棗さんは朝の7時に起きて、シャワーを浴びて身支度をしたらすぐに出社。

酔っぱらうのは10年ぶりくらいだと言っていた桃さんは、まだベッドで夢の中だ。

棗さんはクンニで起こしてやって目を開けると同時に挿入して、それから「おはようございます」と言っ腰を振りまくれと笑っていたけれど、さすがに出会ったばかりの桃さんにそれはできない。

もっとお互いを知って、1度でも肌を重ねてからなら余裕でやるけど。

「ええっと。事務所は10時からだから、そろそろ起こした方がいいのかな」

「かもなあ。もう9時になったし」

「セイが起こすのっ!」

「それじゃお願いね。僕は」

ノックの音が言葉を遮る。

「お、来た来た」

「なにが?」

「いいから出てくれよ、とーちゃん。オレとセイは、カーテン閉めて桃っちを起こしとくからさ」

「はあ」

なんなんだろうと思いつながら身支度を確認して、返事をしながらドアへ向かう。

誰がいてどんな攻撃が来ても即座に相手を無力化する心構えでドアを開けると、そこにいたのはダンボール箱を抱えた、制服らしきものを着込んだ男の人だった。

「おはようございます。お届け物に上がりました」

「へ？ ええっと」

「藤村探偵事務所様内の、斎藤正樹様宛になります」

「あ、それなら僕です」

昨日渡された、20歳の免許証とパスポートに書かれている名前。

「ではまずこれを」

「はあ」

差し出されたのは、頑張れば子供でも持てそうな大きさの箱。

「まだまだありますので、すぐに運び込みますね。次からは台車を使うので、少しだけお待ちください」

「あ、はい」

お届け物の受け取りなんて初体験。

どうすればいいのかなと悩んでいるうちに、男の人はドアを閉めてエレベーターへと向かう。

「おはよ、ヒロキ」

「あ、おはようございます。桃さん。なんか、僕の免許証の名前宛だっという荷物が来たんですけど」

「ん。午後にはバイクも納車」

「はやっ。どれがいいかわからないから、最後には棗さんにお任せでって言ったのに」

「棗だから。シャワー浴びてくるから、受け取りが済んだらセイの指示で取り付けしてて」

「取り付け？」

「ん」

その意味がわかったのは、運ばれてきて伝票にサインをするように言われ、山になったダンボール箱を開けてからだ。

テレビにゲーム機、そのテレビやゲーム機を置く専用のテーブル。ゲームのディスクもたくさんある。

「こ、これ全部でいくらするのさ……」

「シラネ。とーちゃん、2つあるテレビはどっちも壁際。ソファアに座りながら見やすい位置な」

「これだけじゃなくって、自宅にも同じのが2つ届くのっ♪」
「げえっ!?!」

いくら世の中に疎い僕でも、こんなに大きなテレビが安くないのは知っている。

ゲーム機もだ。

それを、事務所と自宅の両方に買ってしまっうなんて……

「早く繋げよーぜっ!」

「ととさま、早く早くっ♪」

でもそう言って急かす2人の嬉しそうな笑顔を見ると、何を考えているんだと怒る訳にもいかない。

頭を抱えながら通話魔法で桃さんからやり方を教えてもらっているらしいセイの指示に従って、なんとかテレビの設置と接続をやり遂げた。

「……はい、どーぞ」

「わあい♪」

「っしやあ。まずはコレから遊ぶぜっ!」

普通にソファアセットは対面型。

なので横を向いた状態で座ったセイがテ幼児番組を見て、反対のソファアに座ったフウカは最新型のゲームを始める。

どうしたものかと思いつながらコーヒーを準備してそれを啜っていると、昨日と同じ色のジャージに着替えた桃さんが、シャワールームに続くドアから髪を拭きながら顔を見せた。

「桃さんもコーヒー飲みます?」

「ポカリがいい」

「了解です。………これだっけ。はい、どうぞ」

「ん。ありがとう」

「えっと、僕はどうすれば?」

「動画でも見てて」

「もつとこう、なんて言うか。僕にもできる仕事ってないんですか？」
「ない」

「そ、そうですか……」
もしかしたら僕の主な仕事は、桃さんのボディガードなのだろうか。

棗さんが支店の仕事をスポットで回してくれたり、この探偵事務所に運よく祓い仕事舞い込んでこなければ、こうやって動画で社会勉強をしたり、掃除洗濯なんかをして、もしなにかあった時のために待機するだけみたいなの。

まあ、セイとフウカが楽しそうだからいいけど。

「来た」

桃さんがキーボードを叩く手を止めず、そう呟いたのはまだ午前中。

「何が来たんです？」

僕がそう問うと同時に、セイがテーブルに放置しているスマホが鳴った。

自慢じゃないけど、携帯電話なんて持つのは初めての経験。

電話に出る方法すら僕にはわからない。

「ええっと、棗さんって書いてあるけど。えっと」

「電話器の画像。緑の方を押す」

「こ、これですか。……押ししました」

「受話器は耳に。能力者ならスピーカー通話はなるべくしない方がいい」
「い」

「なるほど」

もしもし。

僕がそう上ずった声を出すと、見事に棗さんの声が聞こえた。

微かな笑い声。

その後でバイクが届いたから下りて来てくれと言われる。

「バイクが届いたのか、とーちゃん？」

「うん。どれがいいかわかんなかったから、棗さんの知り合いのバイク屋さんオススメのにしてもらったんだよね。どんなのが来たんだ

ろ。フウカ、バイクとか好きでしょ。一緒に行く?」

「どーちゃんの視界を見てっからいい。このゾンビ、なかなか手強
くってさあ」

「あつそ。じゃあ桃さん、行ってきますね」

「ん。駐輪場は、エレベーターを降りて左」

「了解です。ついでに、お昼ご飯の材料も買ってきますね」

「出前でいい」

「せっかくキッチンがあるんだから、自炊の方がいいんじゃない?」

「それは家ですればいい。仕事中は賄いだから、お金はいらぬ。だ
から、できるだけいろんな食べ物をセイとフウカに食べさせてあげた
い」

2人は今まで出前なんて食べた事がないから、か。

やっぱり桃さんは優しい。

口調がぶつきらぼうでも、酔っていない時はほとんど無表情でも。

そんな優しい桃さんに愛娘達がお世話になる分は、僕が恩返しをし
よう。

桃さんは、この探偵事務所は僕が守る。

それともう少し慣れたら、……ぐふふ。

「……ありがとうございます。じゃ、バイクだけ見て来ますね」
「ん」

事務所を出て、エレベーターで1階に。

言われた通り左の非常階段の横にある通路を出ると、そこには狭い
けれど駐車場と、屋根の付いた駐輪場があった。

「おはよう、ヒロキ君」

「棗さん、おはようございます。わざわざすみません」

「これも仕事なもの。これがバイクで、この方が江口さん。全国展開
してる中古車販売店の新宿支店長さん、それはもちろん本社の系列の
会社ね」

「本社って、そんな手広くやってるんですか」

「それはそうよ。どこからか予算が貰える訳じゃないし、運営資金が
寄付ばかりだと組織が歪むわ」

「なるほど。わざわざすみません、江口さん」

「いやいや。これが名刺だから、メンテが必要ならいつでも店に顔を出して。裏面に簡単な地図もある」

「ありがとうございます。これが東京での、僕の足ですか。タンクにメーカー名とかないんですね」

色は黒。

大きさはそうでもない。

250cc、もしくは400ccという種類だろう。

これなら、値段も手ごろなはずだ。

「オリジナルのままだと目立つからねえ」

「目立つ？」

「RZ350。それがこのバイクなんだけれど、かなりの年代物でね。当時からかなり人気があった。だからフルチューンついでに、ペイントも変更して目立たなくしてるって訳。ま、バイク好きなら一目で見破って、逆に感心するだろうけどね。この名車をここまでイジるかかって呆れるかもしれない」

「……は？」

能力者は18歳になって本社に所属する予定で、本社が認める保護者か後見人がいれば、だいたい15歳くらいから、表記される年齢が18歳や20歳になっている、名前すら本名と違う身分証を発行してもらえる。

でもそれが免許証となると一般人と同じように講習を受けて、普通より厳しい試験に合格しないと取得はできない。

だから僕は高校生になる前に講習や試験でバイクに乗った経験があるけれど、それは250ccと400ccと750ccのバイクだった。

「うふふ」

「なんで250でも400でもなく350ccなんだろうとか、なんでフルチューンしてるんだとか、名車ってなんだとか、いろいろと不思議なんですけど……」

「だってある程度は速いバイクじゃないと、何かあった時に困るじゃ

ない」

「そんな時は認識阻害魔法をかけて自分の足で走りますって。これ、いくらするんですか……」

「大丈夫だよ、ヒロキくん。本社の系列企業はどこも、能力者割引があるから」

「おおっ」

「だからこのサンパンは、100万ポツキリ。信じられないほどのお値打ち価格さ」

「……はい？」

100万円!?

僕の財布の中にあるのは、8万円ちよつとなんですけど!?

「そんな顔しないの。100や200なんて、その気になればすぐにも稼げるから」

「……支店から依頼を回してもらえば、ですよね？」

「ええ。もちろん」

いい笑顔。

借金をさせる気マンマンじゃないですかと文句の1つも言っておきたいけれど、それをしたら後が怖い。

なので、溜め息だけ返しておいた。

「ははっ、尻に敷かれてるなあ。ほら、これがメットだ」

江口さんが放った、やはり黒いヘルメットを受け止める。

「ありがとうございます」

「そのメットも高いからね。間違っても、タンクやシートの上に置きっぱなしにしたりしないように」

「ち、ちなみにおいくら万円ですか？」

「15万だねえ。シン普森のヴェインテージにはお安いだろ」

「うへえ……」

15万円って。

僕が買うつもりだったのは、そのくらいの値段のバイクなのに。

ヘルメットだけで15万円……

「それでは百里室長、私はこれで。彼、運転の腕はたしかなんですよね

？」

「ええ。ありがとう」

「いえいえ。では、失礼します」

「えと、ありがとうございました」

「こちらこそお買い上げありがとうございますつてね。休みの日にもブン回してみても、セッティングを変えたければ気軽に店を訪ねてくれ。それには料金は発生しないからね」

「ありがとうございます」

小さく手を振って江口さんがトラックに乗り込み、見事なハンドル捌きでバックのまま細い道へ。

それを2人で見送ると、棗さんも赤いボルボのドアへ手を伸ばした。

「あれ、もう帰るんですか？ 僕達は今からお昼ゴハンみたいですけど」

「まだ仕事だもの。そうそう。今日は、寄り道しないでマンションに帰ってね。荷物がたくさん届くから」

「……うち、めっちゃ狭いんですけど。大丈夫なんでしょうか」

「なにを言ってるの。ワンルームマンションで12畳なんて、東京じゃかなり広い方よ。じゃあ、またね」

「あ、棗さん」

「なにかしら？」

「その、今度やる100万円のスポット依頼つてのだけじゃなくって、出来るだけ依頼を回してもらったりは」

「あらあら、いいの？ 助かるわあ。支店じゃ新参者だから、信頼できる腕の良いエージェントが少なくって。ならこれからは、遠慮なく依頼を振らせてもらおうわね」

あ、これ間違いなくハメられた。

でもそれを言ったら後が怖いし、僕の耳に顔を寄せて「いつも私のここにハメまくってるのはヒロキ君でしょう？」くらいは言われそうなので黙っておく。

「は、はい。よろしくお願いします……」

「任せて。次は、土曜の夜にでも顔を出すわ。またね」
「お気をつけて」

上京7

キーが刺さったままのバイクを押して駐輪場に置き施設して、大嫌いな、とびつきり古いエレベーターに向かう。

15万円もするヘルメットを抱えてだ。

「こんなのが、15万円……」

しかも、バイクだけで次の依頼の報酬は吹っ飛んでしまう。

このヘルメットや4台分のテレビなんかの代金は、しばらく棗さんに借金だ。頭が痛い。

「……はあ。ただいまです」

事務所に戻ってそう呟いて、ソファアに腰かける。

「にしし。見てたぜ。大変だなあ、とーちゃん」

「借金の総額、考えたくもない」

もし計算なんてしてしまったら、しばらく財布を持ち歩く事さえやめてしまいそうだ。

バイクのガソリンがなくなったら走ればいいのか言って。

「ま、平気だろ。はした金だ、そんなん」

「そう言い切れたらどんなに楽か……」

「まあまあ。それより、昼メシはラーメンだつてよ。とーちゃんは大盛りプラス大盛りチャーハン、それに大盛りギョーザ定食」

「ええつ。ちよ、桃さん。僕は1人前あればいいですつて」

「ダメ。最低でも3人前は出す」

「特性のせいであらう食べても同じですから、僕は」

「でもお腹は空く。だから、最低3人前」

「……あんま気を使わないでくださいつて」

「いいから。出前が届くまで買ったバイクの動画でも見とく」

「はあ。なんかすいません、ホントに」

棗さんにもそうだけど、3年もここでアルバイトをしたら、桃さんにも頭が上がりなくなりそうだ。

そんな事を考えながら動画を検索する。

「あった。これだ」

「とーちゃん。そのバイクって2ストってやつだぞ、たしか。前にアニメで見た」

「ふうん。じゃあ、加速がいいのかな」

「たぶんそうだろう。でも長い距離を走るならクルマがいいから、それも早めに買おうぜ」

「お金と相談しながらだねえ。……って、1979年発売!? どんだけ古いバイクなのさ」

1本目の動画を見終えないうちに事務所のドアがノックされた。

「僕が岡持ちごと受け取ってテーブルに並べる間に、桃さんが支払いを済ませる。」

「わあい、ラーメンなのっ♪」

「うつまそー。ごちんになりますっ、桃っち」

「ん。たくさん食べて」

「ありがとうございます」

「ご飯を食べて午後になっても、僕には仕事なんて回ってこない。」

それどころか今日はマンションに桃さんと棗さんが見繕った生活必需品が届くからと、3時には帰れと言われてしまった。

セイとフウカには影の中に入ってもらって、バイクでマンションまで。

慣れない道のせいでだいぶ長くかかると覚悟していた予定時間の倍以上、なんと2時間もかかってやっとマンションに辿り着く。

「ふうっ、やあつと着いたあ」

（時間かかったなあ）

（セイのナビを受けながらでこれだからねえ。先が思いやられるよ）

（ととさまならすぐに慣れるのっ）

（だといいけど。バイクを駐輪場に置いたら、隣のコンビニってお店でゴハンを買って部屋で食事かな。9時までは部屋で待機してろって言われたし、出前をしてくれる店なんてわかんないから）

（へへっ。コンビニ弁当も楽しみだぜ）

(肉まんっ、セイは肉まんが いいのっ！)

(はいはい。栄養を考えたらコンビニ弁当ばかりじゃダメらしいから、たまにしか買わないからね。今日は好きな食べていいよ。もうヤケだ、お金は気にしなくていい。僕も、できるだけ安く、量が多いお酒を買っちゃおう)

そう言ってコンビニに入り、悩みに悩んで買った1000円近くするウイスキー。

無駄になったとは言わないけれど、僕が今夜のうちにそれを飲む事は、どうやらなさそうだ。

続々と部屋に届き始めた荷物の中には僕の好きな銘柄のビールや、コンビニで買ったのよりずっと上等なウイスキーが、これでもかと、ケース単位であったからだ。

それだけじゃなく大きなベッドに布団、冷蔵庫までが運び込まれて、僕の部屋はたった数時間で何不自由なく暮らせるまでになっている。

僕が注文していないのに届いた物があまりに多過ぎるのでセイに返品の方法を聞いてくれるように頼むと、それらの物は桃さんと棗さんからのプレゼントだという返事が来たらしい。

「とーちゃん、愛されてんなあ」

「……甘やかされてる、の間違いじゃない?」

「同じ事だろって。セイ、もうアニメは夜中までないだろ。ゲームしようぜ、ゲーム。2人で対戦だ」

「負けないのっ!」

「パソコンまであって、すぐに使えるようにしてってくれたし。いいのかなあ」

「いいんだって、甘えとけば」

「昨日は板張りの床に大の字になって、3人で寄り添って寝たのにねえ。ああ、借金の総額いくらなんだろ……」

考えるだけで気が減入ってしまう。

届いたばかりのノートパソコンで調べればおおよその額は出せるんだらうけど、とてもそんな気分にはなれやしない。

「ととさま」

「んー？」

「この部屋に呼べる女の人も早く見つけてほしいのっ。セイはまだいいけど、フウカは燃費が悪いし」

「あー。心力は魔力と違って、自然回復が遅いもんねえ」

「事務所であのババアの淫気をたらふく食って、影の中で2人の体液を啜ったから今のところはいいけどな」

「でもこのマンションって、僕が通う高校に近いんだよねえ。変な噂とか立たないかなあ」

「関係ねえだろって。とーちゃんにはセックスが必要なんだから、堂々と女を連れ込めばいいんだよ。なんか言われたら、高校生じゃねえ身分証を出しやいいだけだし」

「かなあ」

「当たり前なのっ」

「なら、近いうちに探そうか」

「うんっ」

「できるだけ欲求不満な、エロい女がいいなあ。常に汁だくの」
「だねえ」

魔法を使うセイの力の源は、魔力。

そうでないフウカのは心力だ。

どちらも自然に回復はするけれど、魔力に比べて心力の回復は遅い。

だからその回復手段である、異性との性行為が頻繁に必要な。一般人の目には見えない淫気はセイが操って影に吸い込まれて2人が分け合うし、セックスで出た体液や精液を舐めたりしても心力は回復する。

少しでも早く相手を見つけてあげなければ、フウカがかわいそうだろう。

「とーちゃんもやりたいだけだろって」

「だから心の中を読まないの」

「どーせなら、女優とかアイドルとかを喰っちゃまうか？」

「ヤダよ、面倒そう」

「じゃあどんなのがいいんだよ?」

「経験豊富な大人の女性かなあ」

「おぼはんのフェラ、気に入ってたもんなあ」

「巧かったよねえ」

「だなあ。たつぷり金を稼いだら、風俗とか行ってもいいな」

「高いんじゃない?」

「それ以上に稼げばいいだけだろって」

「まあねえ」

そんなどうでもいい話をしながら、セイとフウカがやっているゲームの画面と2人の笑い声をつまみにウイスキーを飲む。

そのグラスも注文した覚えなんてないのに届いた、やけに高そうな品だ。

翌日も探偵事務所に出勤こそしたけれど、特にこれといった助手としての仕事はナシ。すぐ終わるデスク周りの掃除と大きなジャグジーがあるのにシャワーしか使われないらしいバスルームの掃除を終えれば、朝から夕方までノートパソコンで動画を見たり、その動画に出てきたわからない物をインターネットで調べたりしているだけの1日。

3日目もそうだったけれど、その日は棗さんから電話が来て、例の依頼は明日だと告げられた。

そして今日、僕は藤村探偵事務所には出勤せず、棗さんが来るのを自宅のマンションの前で待っている。

動きやすい服装でと言われたから、服は着慣れている作務衣。荷物は特にない。

ピッピィ。

クラクション。

それを鳴らしたのは黒塗りのセダン。

中が覗き込めないフィルムが貼られた窓が開いて、そこから棗さんが顔を見せる。

「お待ちせ。さあ、乗って」

「おはようございます。じゃあ、失礼しますね」

「ヒロキ君は私と後部座席ね」

「はい」

いかにも高そうなセダンの後部座席に乗り込む。

たしかヨーロップ製の外車で、かなり値段の張る車だったはず。

僕がドアを閉めると、運転席に座っている中年の真面目そうな男の人はすぐにアクセルを踏んだ。

「紹介しておくわね。運転してるのが、有村。私の職場である情報室に所属する能力者よ。今日の役目は、運転手と護衛」

「はじめまして。ヒロキです。よろしくお願いします」

本社や支社で働く能力者は家名を普通に名乗るけど、師匠達のようにフリーで仕事を受ける能力者は家名どころか、名前の漢字すら人には教えないのが能力者の常識だと聞かされている。

ヒロキとだけ名乗っても、嫌な顔はされなかった。

「こちらこそ。お会いできて光栄ですよ」

「いえいえ、僕の方こそ」

「助手席にいるのが、広瀬。情報室の人間じゃなく、支店の総務課に所属してる能力者よ。美人でしょう?」

「ですねえ。纏う空気感も澄み切った感じで、神道系の能力者さんなのかな」

「ご名答よ。この東京じゃ一番と言ってもいい結界能力の使い手なの」

「それはそれは。よろしくお願い致します、広瀬さん」

「こちらこそ」

そう言いながら微笑んでくれた広瀬さんは、文句なしの美人さん。

たった1日一緒に仕事をしただけではそんなに仲良くはなれないだろうけど、仕事ついでに美人さん2人とドライブができると思えば気分がいい。

「それじゃ、道すがら依頼の詳細を説明するわね」

「あ、はい。お願いします」

目的地は箱根の某所。

そう言われても土地勘のない僕にはわからないので、曖昧に頷いておく。

討伐対象は、瘴気を吸収し過ぎた獣型の妖異。

それには問題ないし、むしろ楽そうでいい。

妖異が獣型なら、瘴気が体内に取り込まれて邪気になったそれを祓ったりはせず、その命を絶って楽にしてあげるのが平安時代以前からの習わしだからだ。

討伐を任されたのは4人の能力者。

それも全員が能力者としては上位である銀将級。

「楽そうでしょうか?」

「はい。内輪揉めがないなら、僕は1歩も動かずカタが付くでしょうし」

「そうね。でも、4人共がいわゆるプロじゃないのよ。今回は銀将級ではあるけれど、あまり実戦に出ない4人の訓練を兼ねた試験って感じなのよね」

「シロウトさんですか。……なんかありそうでヤダなあ」

「お金を稼ぐって、それだけ大変な事なのよ。ガマンなさい」

「はーい」

心の中でセイとフウカに話しかける。

戦闘なんてのは無縁な生活を送っているのなら、腕だけでなく、心構えまでが僕達とは違うはず。

いざとなれば能力の行使をためらってしまう可能性もあるし、とっさの判断や動きなんて期待してはいけないだろう。

能力者として生まれたのに、平和に暮らしている心優しい人達。

そんな人達に怪我なんてして欲しくはない。

そのために僕達で出来る事があるなら、労は惜しまないつもりだ。

「討伐対象は単独なんですよね?」

「ええ。それはたしかよ。じゃなかったら、試験相手になんて選ばないわ」

「邪気に囚われた獣は?」

「おそらくイノシシだそうよ」

「なら、どうにかなるかな」

「ヒロキ君なら、たとえ禍神級の熊型だって余裕でしょうに」

「僕一人ならいいですけどねえ」

東京に出て高校生になる事を決めた日から、口が酸っぱくなるほど言われ続けていた事がある。

同級生が自分と同じ腕を持つと思うな。

だが、決して授業では手を抜くな、格の違いを見せつけてやれ。

その上で、弱い者の気持ち、ソイツが噛み締めている悔しさを目を逸らさずに見ろ。そうすればいつか、弱い者の気持ちがヒロキにもわかるようになる。

大人にそんなのは酷すぎるだろうけど、もし喧嘩でも売られたら手加減はしないつもりだ。

セイやフウカを成駒する経験値の足しにしようと思っているなら、その場で斬って棄ててもいい。

「まあ、心配ないわよ。軽い怪我くらいなら負わせてあげた方が、後々のためになるでしょうし」

「厳しいんですね。やっぱり、能力者の家系に生まれるって大変なのかあ」

「状況が状況だもの。前回の大战で、子を成さず死んでいった能力者も多いでしょう。ただでさえ少なくなつた今の世代は、それでも次の災厄を防ぐ役割を生まれながらに背負っているのだから」

やがて小田原という街を過ぎると、法定速度で窓の外を流れる景色だけでなく、高級車を取り巻く気配そのものが変わった。

山々に生い茂る緑の木々。

その噺せ返るような香りに、人里では滅多に感じない気配が混ざっている。

「……ああ、ホントだ。人ならざるモノのニオイ、しますね」

「も、もう感じるのですか？」

驚いたようにそう言ったのは、助手席の広瀬さんだ。

中肉中背で黒髪。

パツと見はどこにでもいそうなただの美女だけれど、衣装を整えて寺社の境内なんかで舞を披露したなら、常世の国への扉でも開けてしまいかねないような、いわゆる神々が無条件で好むような無垢な類の魅力を持っている。

大昔から巫女さんなんて役目があるように、女の人は能力者としての素質に恵まれている人が多い。

この広瀬さんも、実家は神社で巫女さんだったりするんじゃないかな。

それに助手席側から漂ってくるニオイからして間違いなく、この人は20代の半ばになっても純潔を守っているはず。

……巫女服を半脱がしでとか、男の夢だよねえ。

「臭いますからね、ヤツら」

「うふふ。介入すべきかどうかの判断、するとなればそのタイミングも任せるわ」

「了解です。棗さんの小間使いかなにかのフリをしながら状況を観察して、いざとなれば迷わず動きますよ」

「それでいいわ。お願いね」

天下の陰なんて謳われるだけあって、箱根は緑に満ち満ち満ちた、

かなり山深い峠だった。

一般道路を外れても車はしばらく砂利道を走り続け、急に道がひらけた、広場のようになっている場所で止まる。

「揃ってるみたいね。行くわよ」

棗さんの前に車を降りて、そうと気づかれないように戦闘準備。

とは言っても、自然体で立って丹田に気を軽く凝縮し、棗さん以外の人間をすべて斬る心構えをただけだ。

僕達が降り立った未舗装の広場には車が3台停まっっていて、その前に4人の男女がいた。

能力者、それもこれから妖異討伐に出る4人が特に武装をしていないように見えるのは意外だけれど、地水火風の能力者なら全員、鬼斬りの太刀なんかは使わず術が主体の戦闘をするのかな。

「お疲れ様です、室長」

言ったのは1人だけいる男の人。

残りの3人の女の人は、黙って会釈だけをしている。

「皆さんもね。それで、ミーティングは終わったの？」

「ええ。2手に分かれての山狩りでいいだろうと。私と水沢さん、赤岩さんと柵さんの2班です」

「風と水、火と土の組み合わせね。いいんじゃないかしら」

「ありがとうございます。私が【囁風】で連絡役をしながらメインの索敵。赤岩さんと柵さんは気心が知れていてかなり動けるとの事なので、自由に動いてもらおうかと」

「任せるわ。もう出るの？」

「そちらがよろしければ、すぐにでも」

棗さんの授業で習った通りなら、風使いは万能型。

水は戦闘もできるけど治療なんかが得意で、火は攻撃特化、土は戦闘であれば防御寄りの能力。となると……

(セイ、風使いの男の人と水の美人さんをお願い)

(わかったのっ)

(オレは火と土のお守りか。なんかあれば魔法で山火事を消せるセイのがいいんじゃないかねえのか?)

(さすがに山林を延焼させるような炎使いなんて、棗さんが呼ぶはずはないって。火と土の2人は、体術もなかなかみただからさ。ムチャヤして接近戦とかやりそう。怪我でもしそうなら、すぐにフウカが介入して)

(なるほどね。りよーかい)

「ちよつといいかい、新室長さん」

炎の気を振り撒いている女の人が棗さんを睨む。

この人が赤岩さんだろう。

体も鍛えているようだし、立ち姿も悪くない。

腕で言えばこの中では一番上。

それに僅差で続くのは隣に立つ土使いで、唯一の男である風使いの男の人はだいぶ落ちての3番目だ。

「なにかしら?」

「その美少年なんだが、手出しはしないんだよな?」

「貴方達次第ね」

「こつちは年に一度の免許更新なんだ。こんな近場でなんて、今年はラッキーだと話してたんだよ。横取りはカンベンだ」

「なら、鮮やかに対象を屠って見せればいいでしょう。自信がないの?」

「……抜かしやがる。言われなくともやってやるさ、見事にね」

「期待してるわ、先生」

最後に短い打ち合わせをして、2組の能力者達が森の中に消える。

それを追ったセイとフウカの姿は、有村さんにも広瀬さんにも見えなかったらしい。

まあ、当然か。

認識阻害魔法をかけて体を羽虫ほどの大きさに変化させた2人を発見するなら、少なくとも金将級以上で、しかも遠見や見鬼系の能力者でなければ無理だろう。

「それじゃ、僕も始めます。それにしても広瀬さんの結界、凄いですねえ。これ、何日も前から展開しっぱなしでしょう?」

「そこまで見抜きますか。その通りです」

「これだけ見事な結界ですからね」

目を閉じる。

「こ、これは……」

「季節外れの、雪？ いいえ、違うわ。心力なの？ 雪のように舞い散るこれが、すべて……」

「この子のは心力ではなくて使役力だけど、その総量はとんでもなく規格外なもの。これくらい放出したって問題ないわ。ヒロキ君、どのくらいかかる？」

「場所がいいんで、5分はかかりませんね」

「さすがね」

「結界のおかげですよ。およそ山一つ。相手がここから出られないからこそ、簡単に発見可能なんです。……お願い、みんな。邪に囚われてしまったかわいそうな獣、僕達が楽にしてあげなくっちゃいけない妖異を探して」

ザザアツ。

今日は晴天無風。

なのでこの音は、突風が吹いて木々が戦いだ音じゃない。

無数の蟲達が僕の頼みを聞いて一斉に移動を開始した音だ。

「こ、この大きな音の元、そのすべてが虫だなんて……」

「……どれだけの力を行使すれば、こうまで」

魔力、心力、使役力。

それは能力の行使に必要な力。

昨日ロールなんとかというゲームをしながらフウカがMPというのはまんま心力で、オレもザナルなんとかに行きてーなんて言っていたのを思い出す。

僕の使役力が雪のようだとよく言われるのは、それを分け与えて力を貸してもらおう対象が、大きさまざまな虫達だからだ。

今日は範囲が決まっているし、スピードが重要になるから特に羽を持つ虫達を選んで雪のように降る使役力を分け与えた。

そうするとその『蟲』の能力は飛躍的に上がるので、すぐに討伐予定の妖異を発見してくれるはず。

僕の使役力は、虫達にしてみれば天上の甘露。それに味がいいだけじゃなく少しだけれど寿命が延びたりもするから、虫達も喜んで僕の頼みを聞いてくれる。

「これが、日本で唯一の蟲使い。こんな少年が、ここまでの術を。末恐ろしいですね」

「使役系の能力者はそれなりにいますけど、初めて訪れた場所の虫をあれだけ使役するなんて……」

蟲達とセイとフウカの視界。

そのすべてを見ようと思うと少し骨が折れるので、目は閉じたまま無数のウィンドウのすべてを視界に入れておく。

(ととさま、風と水は動きが遅いのっ)

(だろぅねえ。体を鍛えてる感じじゃなかったし、情報系の役人さんとお医者さんってトコだろぅから)

(火と土はなかなかだぜ。軽口を叩きながら森を駆け回ってらあ) やっぱりか。

纏う雰囲気や振り撒いている気もなかなかだったけれど、2人はしっかりと体も鍛えているみたいだった。

(先生って言われてたけど、なにを誰に教えてるんだろぅねえ)

(火の方は、終わったらとーちゃんナンパして3Pすっかなんて言っでんぞ)

(それは大歓迎。マジで誘ってくんないかなあ)

(どっちも23、4って年頃で、顔もカラダもいいもんな)

(だねえ)

お、いたいた。

(ととさま、蟲が見つ付けてくれたのっ。妖異は窪地でおねんね中っ) 僕とセイが同時に気づいた蟲の視界を一画面で表示。

相手は、どこにでもいそうな1頭のイノシシ。

(だね。ありがと、セイ)

(このねーちゃん達を誘導すっか、とーちゃん?)

(確認してみるけど、それはしないんじゃないかなあ。練習とか訓練とか言ってたし、討伐が試験にもなってるっぽい)

目を開ける。

それだけで棗さんは発見を察したようで、まっすぐに僕を見た。

「目標を発見。相手はオスで、推定体重220キロ。獣型の妖異にしては小物です」

「ありがとう。じゃあ、そのまま見張らせておいて」

「2組のどちらかが発見するまで待つんですね」

「そうなるわね」

「僕も移動しときます?」

「相手は獣型で小物。オスなら牙があるんでしょうけど、そこまでしなくていいわ」

「了解です」

「近いのはどっち?」

「火と土ですね。セオリー通り、清流を見つけて搜索範囲を広げてるんで。このままなら、30分あれば発見かな」

「ならのんびり待ちましょう。タバコ、いる?」

「今はいいです。この感じじゃ、追加報酬には期待できないかあ」

「うふふ。また次があるわよ」

お金の事ばかり考えていては気が滅入るだけなので、時間潰しになればと火と土の能力者さんの外見を思い出す。

茶髪のポニーテールで耳にはピアスマでした赤岩さんはCかD、黒髪ロングの柵さんは少なくともFはありそうなお胸をしていた。

赤岩さんはまだ春先なのに、惜し気もなく白いふとももを晒すホットパンツにオシヤレなTシャツ。

柵さんの方は登山に来たお嬢様って感じの長袖長ズボン。

どちらもそんな服装がそれぞれの魅力を引き立てていて、男ならお近づきになりたいと思っただけで当然だろう。

3Pは大好物。

ホントに誘ってくれないかななんて考えながら、フウカが尾行している2人が対象に接近するのを待った。

僕の予想は少し裏切られ、赤岩さんと柵さんはその半分、15分ほどでイノシシ型の妖異の縄張りに足を踏み入れている。

「赤岩さん、柵さん。討伐対象まで100メートル。相手は鼻がいいので、体臭を消せない2人はすぐにでも気取られるかと」

「お手並み拝見ね。鈴木と水沢の両名は？」

「その3キロ手前に」

「戦闘が始まってから駆けつけても間に合わないわね」

「マズインですか？」

「いいえ。これは本社から出向してる能力者の、年に1度の実戦経験でもあの2人は直接戦闘が役目じゃないから、逃げずに討伐に参加すればそれでいいのよ。赤岩と柵は戦闘が試験のようなものだから、それなりに戦ってもらわないと合格できないけれどね」

「同じ後方勤務の能力者でも、いろいろあるんですねえ」

「頑張って仕事をしているのに試験が必要とか、やっぱり社会人って大変そう。」

（見ろよ、とーちゃん。黒髪のねーちゃん、土使いのくせに索敵なんてしてら）

（河原の大きな岩に耳を付けて、遠くの音を探ってるのか。でもイノシシは起き上がったばかりで、大きな音を立ててない。これでイノシシに気がつくなら大したものだけだ）

（土以外の能力か、その特性の1つが【聴覚増幅】かなんかなのかもな。手で合図して、イノシシのいる方向を炎使いに指示してやがるぜ）

それはそれは。

なら、腕はかなりのものか。

土系の物質を操る能力に身体能力を上げる特性が付いていればそれだけで甲種か乙種の土使いだし、そうでないのなら土を操る以外にも能力がある事になって、それだけで銀将級の中では上位とされる。もしそうなら、間違いなく甲種だろう。

「柵さん、いい腕ですねえ。索敵もこなす土使いなんて、そうはいないでしょう」

「ええ。しかも努力家で、応用力もあるらしいの。教師向きよね」

「どこで誰に、っと。イノシシ、動きました。縄張りの水場に何者かがいるのを悟って、接近を開始」

清流の流れは穏やかで、河原には大小の岩が転がっている。

僕なら木々の間に誘い込んで仕留めるけど、赤岩さんの攻撃手段が炎だからか、2人は河原での迎撃を選択したようだ。

音を探っている柵さんはよほど赤岩さんを信頼しているのか、動く気配がない。

赤岩さんは赤岩さんで、身じろぎもせず柵さんに示された方向を睨んでいる。

「2人は河原での迎撃を選択。イノシシまでの距離、80メートル。【風囁】で常時連絡を取り合っていたらしい風と水が、大急ぎで援護に向かっています」

「間に合いはしないでしょうけど、いい心がけね」

「はい。イノシシ、さらに距離を詰めます」

ただでさえ鼻の利くイノシシが、邪気を取り込んで身体能力も五感も大幅に向上。

そんな相手が、たかが人間を恐れるはずもない。

ヨダレを下草の生い茂る地面に垂らしながら、巨大なイノシシは大きな吠え声を上げた。

咆哮と怒気に押し出されたかのように体内に蓄積された瘴気が漏れ出し、鬼もかくやというような禍々しいフォームを形作って身に纏われる。

瘴気が見えるモノ、つまり敵を威嚇するために。

（火のねーちゃん、妖異の咆哮を聞いて笑ってやがる。いいねえ。こんなものなら、毎晩とーちゃんを抱かせてやってもいい）

（僕が抱くんじやないんだ？）

（Sっばいからなあ、このねーちゃん）

（気の強い女の人はアナルが弱いって、サラさん言ってたなあ。ホットパンツを半分だけ下ろして、肛門を舐めまくりたいね）

（くくっ。車は3台だったから、このねーちゃん達は1台で来たはず。ホントにナンパしてくれっといういな）

そんなバカ話をする間に、イノシシは地響きを立てて駆け出している。

「イノシシ、走り出しました。河原まで距離50、40、30」

「さすがに速いわね。準備は？」

「フウカはいつでもイノシシの頭蓋を断ち割れます。セイの治療も、影移動に1秒あれば」

「ありがとう」

「イノシシ、河原に駆け込みました」

瘴気の鎧を纏ったイノシシがまた吠えた。

赤岩さんが仁王立ちのまま笑う。

桐さんは油断なく身構えながら、その懐から拳銃を取り出す。

イノシシの妖異、それも瘴気の鎧を纏った禍々しい姿のそれと睨み合っているのに、いい度胸だ。

（へえ。土や岩を槍や弾にするんじゃないやなくて、銃を使うのか）

（両方でしょ。にしても、お金持ちなんだねえ。対妖異銃弾は鬼斬りの太刀より効果が低くて使ったらなくなっちゃうのに、お値段はかなりするんだよ）

（いいトコのお嬢って言ってたもんなあ。ハメまくって貢がせようぜ、とーちゃん）

上京9

イノシシ。

その正面に赤岩さん。

柵さんは耳を当てていた大きな岩を盾にする形で、拳銃を握っている。

仕掛けたのは意外にも、岩の陰からサポートに徹するのだと思っていた柵さんだった。

戦闘の口火を切る銃声が箱根の山々ではなく、結界内のみに響く。

「柵さん、発砲」

「能力じゃなくて銃での攻撃？ 祈禱済みの銃弾だろうけど、効くのかしら」

「まさか。当たり前のように皮のだいぶ手前、瘴気の鎧で弾かれてますよ。イノシシは、銃弾なんて気にもせず突進です。つて、……へえ。

銃弾は牽制、イノシシの進路上にトゲ付きの大岩が出現」

悪くない。

銃での先制攻撃。それでイノシシの気を引き、後衛の自分に突進を仕掛けさせる。

そうなれば前衛の赤岩さんは余裕を持ってイノシシの動きを見て取り、好きなように攻撃を加えられるだろう。

それに柵さんが土を操る能力で出した岩は、イノシシの巨体の数倍はある。

敵の体重と突進力は言わずもがな。

ぶつかれば、ただでは済まないだろう。

「やるわね」

「はい。イノシシ、急激に方向転換。その横っ面へ、赤岩さんの【炎弾】が直撃」

「仕留めたの？」

「いいえ。左の眼球を焼いた程度ですわね」

柵さんがイノシシの死角に回り込もうと動く。

そんな相棒をフォロウするように炎の弾がまた放たれ、イノシシはウザったそうに身を振って顔面への直撃を避けた。

その一連の動きを報告すると、棗さんは訝し気に小さく首を傾げる。

「どうしてその程度の攻撃しかないのかしら。銀将級の炎使いなら、初撃で仕留め切れるはずだけど……」

「待ってるんでしよう。風と水を」

「こんな状況で？」

「間違いないです。あの2人、かなり戦闘慣れしてますよ。狙いは、一時的な生け捕りですね」

「なんですつて？」

棗さんが驚くのもわかる。

討伐依頼対象の妖異を、一時的にとはいえ生け捕りにするなんて、どんな能力者もやりはしないから。

「次、来ます」

イノシシがまた突っかけた。

それを見て、赤岩さんはハツキリと笑う。

やれ、アヤメ！

そう叫んだ赤岩さんの声に応えるように、地響き。

能力でそれを行ったに違いない柵さんはいい笑顔だ。

河原を駆け出したイノシシの足元に、土の能力者が音もなく落とし穴を仕掛ける。

すぐにそれをしなかったのは森に近すぎると木々の根なんかを痛めてしまうし、清流に近すぎれば落とし穴に水が流れ込んで後が面倒になるからだろう。

作戦の立て方からその実行まで、すべてが見事な手際だ。

してやったり。

笑顔にそう書かれているのが見えるような2人は、とつくに成人しているのに、かわいらしきを感じさせる澆漉とした仕草でハイタッチを交わす。

まったく。

美人でエッチな体をしてるだけじゃなく、愛嬌もあるなんて反則じゃないか。

「あはは。決着が付きましよ。川から充分に距離を取って、落とし穴。たぶんだけど2人は成駒を果たしてて、風と水の2人はまだなんでしょう。一太刀でも浴びさせてからトドメにして、成駒経験値の足しにつて筋書ですな」

「……たしかに成駒はしてるはず。でも、実戦でそんな真似を。さすがと言うべきかしらね」

「ええ。大したものですよ」

いくらイノシシが妖異化して身体能力が上がっていったって、土を掘って地中を逃げられるはずも、2、30メートルもある落とし穴の底から跳んで逃げられるはずもない。

こうなってしまうばもう、まな板の上の鯉だ。

思った通り、鈴村さんと水沢さんが河原に到着すると事情を説明して、落とし穴の中で暴れるイノシシを風と水の刃で滅多斬り。

「……ふうっ。終わりました。妖異絶命、能力者に怪我人はなし」

「甘く見てたわねえ、坂東の能力者を」

「というか、あの2人の腕が良すぎるだけなんじゃ？　どんな部署に所属してるのか知りませんが、どちらも銀将級では稀に見る手練れですよ」

「かもね」

左だけ閉じている僕の瞼の向こうで、落とし穴の底が音もなくせり上がり、イノシシに4人が取り付く。

かなり傷だらけだけど、妖異化して変性したイノシシの皮を剥ぐらしい。

妖異化した獣の皮は貴重品、それを服の裏張りに使うだけで前衛能力者の生存率は飛躍的に上がる。

「ありや。皮は平気だったけど、風の刃も水の刃も立派な牙には弾かれてるみたいですねえ」

「そうみたい。なんとかならないかって、鈴村が連絡を寄こしたわ。

頼める、ヒロキ君?」

「もちろん。ちよつと行ってきますけど、折ります? 斬ります?」

「出来れば切断面は平らにして欲しいわ。根元をね」

「了解。じゃあ、斬ってきます」

「お願いね」

(セイ、こつちに影移動して棗さんの護衛を)

(はあい)

たった5センチ。

そこまで姿を小さくしたセイは、妖精と呼ぶしかないほど愛らしい姿をしている。

小さな羽で僕の影から飛び立ったセイが肩に腰かけると、認識阻害魔法で姿は見えていないはずなのに、棗さんはそちらに顔を向けて小さく微笑んだ。

いってきますと言って駆け出す。

あの4人とフウカがいる河原までは、約5キロメートル。

僕なら急げば1、2分で走り切れる。

(とーちゃんとーちゃん)

(んー?)

(火と土、マジで誘ってきそうだぞ)

(やあつた。喜んで着いてくしかないね)

(だなー。ひさしぶりの実戦だから、男でも啜え込まなきや滾った血が収まりそうにねえってよ)

(ラッキー)

(ととさまっ)

(はいはい。どしたの、セイ?)

(姿を消したまま通話魔法したら棗先生、ここで解散でいいって。報酬もいくらかは現金でくれるのっ)

(うーん、それは借金返済に充ててって言うといて)

(はあい)

明日は上京して初めての休日。

赤岩さんと柵さんが本当に誘ってくれなくても、6、7万円は財布

に入っているから、今夜の相手を探すくらいはできるはず。

どちらにしても楽しみだ。

もし相手を探す必要があるようなら、うんと年上の女の人に声をかけてみるのもいいかも。

「……ああ、やっぱり山はいいなあ。こうして走ってるだけで気が晴れる」

息が詰まるとまでは言わないけれど、僕は都会で暮らすのに向いていないんだろう。

自然の中を駆け回っているのが性に合っているんだ。

(羽もねえのにはえーなあ。さすがとーちゃん)

到着する直前にセイと同じく姿を小さく変化させたフウカが合流して、僕の影に飛び込む。

すぐにその影からにゅうつと出て来たのは、妖異を斬るためだけに鍛えられた一振りの日本刀。

(ありがと、フウカ)

(かーちゃんのお下がりがりじゃねえ鬼斬り、どれほどの切れ味が楽しんだなっ)

(そういえばこれ、僕が初めて自分のって言える新品の鬼斬りの太刀だったね。ちよつと緊張するや)

素材からその加工に使う道具、それぞれどこか水や燃料にまで位の高い神職の能力者が祈祷を施し、それを鍛冶系の能力者が鍛え上げた日本刀。

これを能力者へ安定的に供給するのが可能だからこそ、この現代ではただ本社と呼ばれる陰陽寮という組織は、この時代になっても本州のすべてを支配下に置いていられるのだそうだ。

「お待たせですー」

イノシシの骸を見下ろしていた4人が一斉に僕の方を向く。

唯一の男性と赤岩さんは啞えタバコ。どちらも、ちゃんと携帯灰皿を持ってている。

「君が来て、その手に鬼斬りがあるという事は……」

「はい。すぐに牙を落とすんで。骨も売りますよね、肉はどうします

「？」

「あたしが焼き尽くすさ」

「了解です。新鮮な腸を清流で洗ってバター焼きとか、最高なんですけどね」

「よ、妖異を食うのか……」

そう言いながら剥いだ皮を風使いの男の人、鈴村さんだったかが移動させて、4人がイノシシから距離を取る。

その代わりに歩み寄った僕が鯉口を切って抜いた鬼斬りの太刀を無造作に振り下ろし、そのまま振り上げると、「ほう」という声が2つ重なった。

鈴村さんと水沢さんだ。

まだ啞えタバコの赤岩さんは苦笑いで、柵さんは何事かを考えている素振り。

「いい腕だねえ、ボウヤのくせに」

「まったく、あの牙をこうも見事に切り落とすとはね。それもたった一振りで。まだ若いのに、これほどの剣の使い手とは。新室長が連れて来たのも頷ける」

「いえいえ」

「それじゃ、肉を焼くよ」

「はい。牙と骨は僕が運びますね」

「いいさ。依頼を受けたのはあたし達なんだから」

「あー、了解です」

たしかにこれ以上の手伝いをして、山分けするお金が目的だと思われるとめんどくさい。

黙って赤岩さんが肉だけを炭にするのを待って、換金部位を手分けして運び出した4人の背を追った。

「なあ、ボウヤ」

「はい？」

「今日のこれからの予定は？ 新宿支社に戻るのかい？」

「いえいえ。僕は支社の社員じゃないんで。関東は不案内だから、家に帰って手酌で一杯ですかねえ。今日これが終わってからと、それに

明日はお休みだし。昼から飲んでもいいかなって」

「へえ。なら見事に牙を落としてくれた礼に、一杯奢らせてくれないか？ そのデカパイ、柵も一緒だ。1台の車でここまで来たんでね」

「それはもう喜んで」

「ふふっ。よーしよし、今から楽しみだ」

こちらこそ。

心の中でそう呟き、みなさんの歩く速度に合わせて棗さん達の元へ向かう。

先を歩くホットパンツ姿の赤岩さんは、形の良い丸いお尻を揺らし、上機嫌。

柵さんはまだ考え事をしているようだけど僕と一緒にお酒を飲むのを否定はしないので、どうやら期待してもよさそうだ。

時間はまだ昼前。

どこでお酒を飲むのかは知らないけど、セックスがなしという可能性は低いように感じる。

(いやあ、楽しみだねえ)

(だな。ついでにどっちも孕ませよーぜ、とーちゃん)

(3Pだどどっちかにバレるって)

(同時に孕ませりやいいだけだろう)

(……やめとくよ。成駒してるんなら能力もその特性も銀将級とは思えないくらいに増えてるだろうから、それでも僕的能力を見破られたら面倒だもん)

(チツ、もったいねーの)

相手が銀将級の女の人なら半人半蟲のそれなりに強力な使役蟲を産んでもらえるけれど、僕の間人を孕ませて使役蟲を産ませるという能力は、滅多な事では他人に漏らせない。

さつき使った使役力を回復するついでに、美人さんと3Pセックスが出来るだけで満足しておくのがいいだろう。

欲張り過ぎは身を亡ぼす。

それも師匠達が教えてくれた事だ。

……まあ、教え方がいちいちあれだから素直に感謝はしづらいけど。

「全員無事のようなね、お疲れ様」

「不合格者は、室長さん？」

「なしよ。換金部位はこちらのトランクに。査定が終わったら、それぞれの口座に振り込むわ。頭割りでいいのよね？」

「はい。結界、それとこちらの少年の助力に感謝します」

「このボウヤにはあたしと櫛が一杯奢る。いいよな？」

「もちろん。彼はこちらに知り合いも少ないから、仲良くしてあげてちょうだい」

「任された。よし、行くぞ」

「あ、はい。じゃあ棗さん、僕はここで」

「ええ。お疲れ様」

見惚れるような微笑。

それを棗さんが浮かべたので、思わず「まーたなんか企んでるでしょ？」と声を上げそうになる。

けれどここには他の人、それも棗さんの部下だという人もいるので、開きかけた口は閉じたままにしておく。

赤岩さんに仕草で乗るように促されたのは、僕でも知っている大きな車。

ランドクルーザーとかいう、悪路に強い車両だ。

運転席に赤岩さんが、助手席に櫛さんが座ったので、後部座席に上がってドアを閉める。

「さあて、どこで飲む？」

「都内に戻ったら適当な店に入ればいいじゃない」

「ボウヤは明日、仕事が休みなんだってよ。だったら温泉に泊まるのもアリだろ。せっかく箱根まで来たんだし」

「温泉はいいけど、こんな若い子と同室に泊まる気じゃないでしょうね」

「ダメなのか？」

「当たり前でしょ。下手したら淫行罪よ」

「でも、ボウヤはその気マンマンだよなあ？　あたしのケツとアヤメのおっぱいばっか見てたし」

「そりゃあ見ちゃいますって。それと年齢なら、20歳の身分証もあるんで平気ですよ」

身分証、あつてよかつたあ。

「へへっ、だとき」

「……男の能力者なんだから、女なんて掃いて捨てるほど寄って来るでしょうに。私やホムラを抱きたがるだなんて、物好きねえ」

「えっと、男の能力者ってモテるんですか？」

「それはそうよ。能力者は女の方が多いもの。それに能力者は常人よりいろんな能力が高いから、その性欲を満たそうとすると相手が限られるのよ。複数の一般人を囲う能力者もいるらしいけど、それをするとは正体が露見した時に面倒だし、強力や頑強系の特性を持つてる女は人前でセックスをさせられる試験にパスしなきゃ一般人とは寝ちゃダメなの。私もホムラもそうだから、そんな試験なんて受ける気はないわ」

「そうなんですか……」

初耳だ。

女の人のカラダは10ちよつと知っているけれど、半分くらいは修行の一環だと言われて祓い仕事で肌を重ねた人達。

純粹に僕を気に入って抱き合ってくれたと言いつけるのは、たった4人。

ヒロキには、とにかく経験が足りない。

だから世間を見て来い。

女も抱けるだけ抱け。

そしてせいぜい、痛い目も見ろ。

笑いながらそう言われて送り出された朝を思い出す。

「温泉もいいが、やりまくるのが目的ならラブホでもいいなあ」

「はいはい。キミはどっちがいいの？」

「温泉は1回だけ泊まった事ありますが、ラブホテルはないですね」
「なら決まりだ。関連企業のラブホを検索しろよ、アヤメ」

「こんな山奥で調べる意味なんてないでしょ。小田厚で厚木インターまで行って。近くになったら、詳しい場所をナビするわよ」

「あいよ。へへっ、楽しみだなあ。男なんて初めて食うのに、それがとびきり腕のいい美少年能力者だってんだからよ」

暗い。

汚い。

狭苦しい。

ドロドロとした男女の、欲望の残滓が臭う場所。

それがマンガやアニメ、小説なんかで見聞きしたラブホテルのイメージだったけれど、どうやらそれは大きな間違いだったらしい。

初めて足を踏み入れたラブホテルの部屋は明るくて清潔で、まるでテレビで見た高級ホテルの一室のようだ。

「ほえー……」

「どしたよ、ヒロキ？」

「驚いてるんでしょ。ヒロキくん、ラブホテルは初めてって言ってたし。最近のラブホってムダにオシャレだから」

ここまでの道中で、自己紹介は済ませてある。

赤岩ホムラさんは僕をヒロキと、柵アヤメさんはヒロキくんと呼ぶ事にしたらしい。

僕からの呼び方はなんのひねりもなく、ホムラさんアヤメさんだ。

「ええ。あんまりにもイメージと違ったんで」

「イマドキこんなもんだって。さ、座れ座れ。すぐに酒とツマミを頼むから」

「最初の一杯は冷蔵庫のビールでいいわよね」
「だな」

アヤメさんが壁に据え付けられた棚に埋め込まれた冷蔵庫を開ける。

大きなベッドに音を立てて豪快に座ったホムラさんは、テーブルから持ち上げたリモコンで、これまた大きなテレビの画面を操作しているようだ。

「それは？　なんか画面に、高級そうな料理のお皿が映りましたけど」

「これで酒やツマミを注文するんだよ。玄関の横には専用の食器口があつて、従業員と顔を合わさずに受け取れるって寸法さ」

「へえー。ハイテクですねぇ」

「ハイテクなんて言葉、ずいぶんとひさしぶりに聞いたな。酒はアヤメがシャンパンとワイン、あたしはバーボンとビール。ヒロキは、その中で好きなのを飲めばいい。ツマミのメインは、オードブル盛り合わせの大でいいか。キャビアなんかも付いてやがる」

「うええっ、それって高いんじゃない？ 僕、お金はあんまり……」

「サラダもちやんと頼んでよ？ ホムラつたらほっとくと肉とお米しか食べないんだから」

「へいへい。心配すんなって、ヒロキ。この払いはぜんぶ、あたし達の奢りだよ。あたしもアヤメも一昨年までは討伐依頼なんかで荒稼ぎしてたから、遠慮しなくていい」

「はあ。なんかすいません」

テーブルにグラスが3つ並べられ、それにビンのビールが満たされてゆく。

最後になぜかキンキンに冷えているミックスナッツのお皿が真ん中に置かれると、ホムラさんとアヤメさんがソファアークに座った。

向かい合つて座るのではなく3人が並ぶ形で座ったのは、そういう事だろう。

僕が真ん中だ。

両手に花。

悪くない、というか、楽しみで仕方ない。

気を抜いたら飲んでるうちに勃起してしまうかも。

「そんじゃ、乾杯だ」

「はいはい」

「いただきます。乾杯」

3つのグラスを振れ合わせてからビールを呷る。

昔の僕なら力加減を間違えて割ってしまいそうな薄いグラスが空になると、すぐにアヤメさんがビールを注いでくれた。

「しっかしい腕だな、ヒロキは。どうして今まで無名だったんだか」

「つい先日まで和歌山の山奥で修行をしてましたから。たまに京都や大阪に出て、討伐や祓い仕事の実地訓練はしてましたけど」

「なるほど。でも、そんなヒロキくんがどうして東京に？」

「ええっと」

思わず言葉に詰まってしまふ。

でも2人は僕と同じ能力者で、もしかしたら長い付き合いになるのかもしれない。

なら使役蟲を産ませる能力とセイとフウカの存在以外は話しておいた方がいいだろうと口を開きかけると、アヤメさんが僕の手を優しく押さえた。

白くて長い指。

スベスベで柔らかい手を、思わず凝視してしまふ。

「いいのよ。無理に聞き出そうなんて思っていないから」

「そうだぞ。ほら、飲め。なんなら、アヤメのおっぱいでも揉みながらな」

「別に隠す気はないんですけど、アヤメさんの巨乳には触ってみたいですね」

「だろ？　ほら、デカパイを堪能するといい」

「できれば、こうですね」

2人を同時に抱き寄せる。

もちろん、腋からそのお胸に手を回しながら。

「おやおや、がつつくねえ」

「んっ」

「いやあ。どっちも美人さんで、素敵なお胸ですから」

「なにこれっ。胸を撫で上げられてるだけなのに、なんでこんなっ

……」

「あ。そういえば僕、特性のせいでセックスだけは得意なんです」

「純戦闘職でも稀な剣の腕をしてるのか？　そりやあとんでもないねえ」

「あはは。それに今は抑えていますけどフェロモン体質で、体液には媚薬効果があつたり」

「……やれやれ。色事系の依頼が捗りそうな話だ」

「やつぱり多いんですか、色事系の依頼は？」

「そりゃあるさ。能力者って存在を一般に隠蔽するだけじゃなく、それが歴史上で暗躍し続けるためには、そんな汚れ仕事もどうしたって必要だろう」

「なるほど。関東でも祓つたり戦うだけじゃないんですねえ、能力者って」

「まあね。で、どうだい？ アヤメのおっぱいは？」

「たまらないですね。もちろん、ホムラさんのも」

「ふふっ。アヤメは、ドが付くくらいMだからな。好きにしているぞ。そうされると、この淫乱女はどこまでも悦ぶ」

「へえ……」

性癖を暴露されたアヤメさんが抗議の声を上げるけど、ホムラさんは気にもしていない。

僕もそうだ。

唇の端が無意識に持ち上がってゆくのを感じながら、まるでスイカのようなふくらみを隠す、アヤメさんが着ている厚手のシャツを脱がしてゆく。

「ヒロキくん、待ちなさい」

「ヤです」

「こ、こらっ」

どうやらアヤメさんはなかなかに用心深い性格のようで、チエツク柄の長袖シャツの下に、戦闘職の能力者向けに支店が売っている防刃シャツまで着込んでいた。

「本社謹製の防刃シャツは白いから、ブラジャーが透けて見えますね」

「でっけえだろ、アヤメの淫乱おっぱいは」

「はい。感触もそうですけど、見た目もエロいですねえ」

「くくっ。だとき、アヤメ？」

「あ、あんまり見ないで。男の人に肌着を晒すなんて、そんな自分がまだ信じられないんだから……」

「じゃあ、目で愉しむ前にこうかな」

チエツクのシャツは脱がし終わって、対面の空いているソファーに放つてある。

なのでブラジャーが透けて見える、白い長袖シャツに包まれている腕をまず持ち上げた。

「えっ」

「うははっ、そう来るかあ」

「はい」

「どうだよ、アヤメの脇のニオイは？」

「たまらないですね。嗅いでるだけで勃起しそうです」

「なら、そっちはあたしが面倒を見てやるか」

ラツキー。

そう思いながら春にしては厚着をしていたせいで、それはそれはたつぷりと汗が滲み、さらにそれがムンムンに蒸れていたらしい腋の下のニオイを嗅ぐ。

「やあっ。お、お願いだからそんなに嗅がないで。山を走り回って汗を掻いてるから、その、臭いでしょう？」

「それがいいんですよ。フェロモン体質のせいか、僕は女の人のニオイで物凄く興奮するんで」

「みたいだなあ。ちよつと作務衣の上から撫でただけで膨らませてやる。……にしてもチンコって、こんなデケエのが普通なのか？」

「人よりは大きいらしいですけど、能力で相手のアソコに最適化が出来るんで平気ですよ。ついでに言うと、性病や妊娠の心配もありません」

「どんな能力をしてんだっての、まったく」

「あはは」

「んじやさっそく脱がせて、遠慮なく生で味わうとしようか」

「やった」

作務衣が脱がされる。

そうされながら僕はアヤメさんの腋の匂いを堪能して、柔らかく大きなお胸を揉み上げた。

「やっ、ああっ……」

「敏感なんですね、アヤメさん」

「ヒロキもな。脱がせただけでビンビンじゃねえか」

「いやあ。ひさしぶりのセックスで、相手が美人さん2人。3Pは大好物だし、レズプレイに交ぜてもらうのも大好きなんで」

「あははっ、そうかい。なら良かった。それじゃあ舐めるよ?」

「お願いします。アヤメさんも脱ぎましようね」

濡れた感触。

でも僕のアソコを舐めるホムラさんの舌は、どう動くべきか迷っているらしい。

ぎこちない愛撫の、少しだけでもどかしい快感に身を委ねながら、白い防刃シャツを脱がした。

「わあっ、やっぱりおっつきいですねえ」

「あ、あんまり見ないでっつてば」

「じゃあこうですね。……ああ、直に嗅ぐとさらにいいニオイです」

「ま、また腋の下を、んああっ!」

「味も最高ですよ」

「やあ。そ、そんな。汚れてるのに……」

腋の下の匂いで興奮するとか、ましてやそこを舌で清めるのが好きだとか、そんなのが普通じゃない事は知っている。

それでも能力者が持つ『特性』で、性病どころかお腹すら下さない僕なら何の問題もない。

ホムラさんが僕の肉棒を、僕がアヤメさんの腋を舐め続け、ついに白いブラジャーのホックを外すと、ピンポーンと控え目な音がラブホテルの部屋に響いた。

「酒とツمامミが届いたか。あたしが運ぶから、アヤメにしゃぶらせとくといい」

「手伝いますよ」

「いいって。デカパイを乱暴に揉みながら、強制フェラでもさせてやれ」

ホムラさんが立ち上がって玄関に向かう。

外してしまった白いブラジャーを完全に脱がせるとアヤメさんは、

ようやく眼前で聳え立つ僕の肉棒に視線を向けた。

にしても、やっぱり大きい。

サラさんと同じくらいじゃないだろうか、このお胸は。

そして見た目だけでずっしりとした重量感を伝えてくるだけじゃなく、お山の頂にある突起、色素沈着の少ない大きめの乳首がピンピンに勃起し切っているんだからたまらない。

「ウ、ウソでしょ。なによ、この大きさ。前にDVDで見たのは何だったのよ……」

「そう言ってたし、フェラの感じからしてホムラさんは男性経験がないみたいですけど、アヤメさんもやっぱり？」

「当たり前でしょう。家が厳しかったし、機密保持のために一般人男性との交際はいろいろと面倒なのよ。男性の能力者は数が少ないから、かなりの若さで家格の高い家の女の子にあてがわれるし」

「だから女の人同士で、つてのが多いんですねえ。それより、いいですか？」

「え、ええ。舐めて啜えればいいのよね？」

「はい。好きなようにしていいですから」

「わかったわ。……大きい、それに硬い。いきなり啜えるのは怖いから、まず舐めるわね。……んっ」

ピチャツという音が鳴ると、アヤメさんが甘い呻きのような声を漏らす。

僕の肉棒はホムラさんの唾液で濡れているけれど、そこに舌を這わせる事に嫌悪感はないみたいだ。

いつもしているレズプレイの相手なんだから当たり前か。

そんな事を考えながら、少し屈んだだけなのに僕のふとももの上で『むにゅっ』と潰れて形を変えている大きなお胸に手を伸ばす。

「ああ、いい手触りですねえ。指が、どこまでも沈んじやいそう。まるで、搗き立てのお餅じゃないですか」

「んんっ。な、なんなのこれ。舌が、ジンジンして熱いわ」

それはそうだ。

相手が一般人ならセイに頼んでそうならない魔法をかけてもらう

けど、アヤメさんは能力者だし、どうせなら乱れに乱れてほしいのでその魔法はかけていない。

「ガマン汁を舐めたんですね。フェロモンはほぼ完全に抑えられるんですけど、媚薬効果を抑えるのはこれが限界なんです。少しでも舐めたら、もっと舐めたくなるでしょう?」

「え、ええ。……ダメ、舐めるのを止められないわ」

「そうなった状態で啜えるのも気持ちいいらしいですよ」

「してもいいの?」

「もちろん。僕からお願いたいくらいです」

「わかったわ。なら、こうね」

「おおっ」

アヤメさんが動く。

見事な巨乳を揺らしながら、僕の正面へ。

そのまま床に座り込んだのでパイズリを期待したけれど、どうやらそこまでするといふ発想はないらしい。

男の人とは初めてなんだから仕方ないかと心の中で溜息を吐く。

「こんなにゴツゴツしてるのね。男の人のって。そしてとてつもなく硬いの、ちゃんと柔らかさも持ち合わせてる。不思議だね。……んっ。やっぱり、美味しい」

白い手を添えて勃起し切った肉棒のてっぺんを舐めるアヤメさんは、もう表情が蕩けてしまっている。

(これじゃもうオマンコもドロドロだろうなあ、とーちゃん)

(だね。でも今日のご褒美はもう少し待って。終わったらセイに下着からベッドからキレイにしてもらうから、その汗や精液で心力を回復するといい)

(やあつた。自然回復を待つかとーちゃんがセックスで散らした淫気を食えば心力は戻るけど、やっぱ精液を啜って回復しねえとなあ。とーちゃんの使役力は強すぎっから、緊急時以外は食うなってかーちゃん達に言われてっし)

(楽しみなのっ♪)

2人とも、嬉しそうだなにより。

やっぱり仕事の後は、セックスが必要か。

なるべく早く、自宅に呼べる相手を探さないと。

「っは。チンコを啜えただけでアへってるのかあ。さすがアヤメだ」

「ホムラさんは上まで舐めなかったけど、アヤメさんは上から舐めましたからね。先走りに含まれる媚薬効果のせいで、もう夢中で尿道を舐めて吸ってます」

「とんでもない特性だ。酒とツマミを運び終えても、しばらくは順番

待ちだね」

「キスもしたいし、体中のニオイを嗅いでから舐めまくりたいです。そうしながら待ってればすぐですよ」

「アヤメに啜えさせたり、挿入して腰を振らせながらか。鬼畜だねえ」
「あはは」

でもアヤメさんが本当にドMなら、そんなのもつと興奮してくれるはず。

お酒やおツマミをテーブルに運び終えたホムラさんは、ニヤニヤと笑みを浮かべながら僕とアヤメさんのフェラ顔をしばらく眺めていた。

「んー」

「どうしたんです、ホムラさん？」

「いやなに、アヤメとあたしは幼馴染でな。幼稚園から大学まで、通う学校どころか教室まで同じだった。親のあてがう男がどうにも気に入らなくて、初めて女同士でキスをしてお互いのカラダをまさぐり合ったのが17の時。そのアヤメがこうまで嬉しそうにチンコを啜えてると、なんだか妙な感じだな」

なら2人はその気になればいつでも男の人とセックスができたのに、それでもお互いを恋人にする事を選んだのか。

それなら、その気持ちはなんとなくだけ想像できる。

「寝取られ感、ですかあ」

「ああ、まさにそれかもな」

「なら見せつけて、アヤメさんにも同じ気分になってもらいましょう」
「ははっ。そりゃあいい。じゃあ脱いじまうか」

ホムラさんはTシャツに手をかけてニヤリと笑ったかと思うと、かなりタイトなそれを勢い良くめくり上げて脱ぎ捨てた。

レースの黒いブラジャーに包まれたお胸が揺れる。

「えっろ……」

「ふふっ。今日は下も黒だ」

「いいですねえ」

ホットパンツも脱ぎ捨てられるのを見ると、半分だけ脱がせて肛門

を舐めまくる予定なんてどうでもよくなってしまう。

露わになったパンティーも黒のレースで、エロいとしか言いようがない半裸のホムラさんが妖艶に微笑んだから。

「下着はどうする?」

「えっと、下だけは僕が脱がせたいです」

「OK OK。いやあ。若い男の前で裸になるってのは、思ったよりずうっと昂るモンだねえ」

「僕なんかむしやぶりつくようにフェラされながらそれを見てるんで、射精しちやいそうですよ」

「吐き出せばいいじゃないか」

「んー、まだもったいないかなって」

「能力者なんて、歩級でも一般人からしたら絶倫なんだ。明日は休みだってんだから、好きだけやれるさ。色事系の特性持ちなら、どうせ精力上昇系の特性もあるんだろ?」

「ありますね。……わ、キレイな乳首。色もピンクじゃないですか」

「ふふつ、気に入ってくれたようで何よりだよ。これを、ヒロキはどうしたいんだい?」

「揉みしだいて、舐めて、しゃぶって。でも先に、キスがしたいです。

あ、ホムラさんが嫌じゃなかったらですけど」

「嫌なもんか。それじゃあ、ねっとり舌を絡ませ合おうじゃないか」

「はい」

キス。

僕の肉棒を啜えて、浅くだけ顔を下させ始めているアヤメさんと同じく、ホムラさんの口の中は熱く濡れている。

ピチャピチャと音を立てながら舌を絡め合い、その合間に唾液を飲み下すと、ホムラさんはいきなり僕の頭を掻き抱くようにして激しく舌を絡ませてきた。

「んーっ」

「ど、どうしたんです? いきなり」

「……いやあ。こんな美少年が、うっとりした表情であたしのツバを飲み込んでるからさ。それ見てるだけでイキかけた」

「あははっ。美少年は言い過ぎですって」

ソファアに膝を付いて僕の後頭部を掴んでいるホムラさんと笑い合う。

「ねえ、ヒロキくん……」

「あ、はい」

「私にも、その……」

「キスですか？ もちろんいいですよ」

身を屈めようとした僕より先に、アヤメさんが膝立ちになって伸び上がる。

「うれし、……んっ、唾液までこんなに美味しいの？ やっぱり反則だわ」

「体質ですからね。こればかりは」

「おいこら、あたしも交ぜろって」

「んふ。妬いちやって、ホムラったらかわいい」

「そんなんじやねえっての。んっ。ほら、もっと舌を突き出せよ。ヒロキ」

「ふあい。っちゅ、ちゅぷっ」

僕の両足の間で膝立ちになっているアヤメさんと、右に座っているホムラさん。

吐息を漏らしながら、3人で伸ばした舌を絡め合う。

そうしながら右手でホムラさんの張りのあるお胸と、どこまでも柔らかいアヤメさんのお胸に手を伸ばした。

「ああもう、なんだこれ。癖になりそうってレベルじゃねえぞ……」

「虜にされちゃうって、こういうの言うんでしょうね。ヒロキくと夜を過ごすためになら、教職だって放り投げてしまえばそれで怖いわ」

「そういえば、お2人は先生って呼ばれてましたよね。どこで何を教えてるんですか？」

「高校の教師だよ。武蔵野って街にある、能力者のガキだけを集めた私立のな」

「……………はい？」

武蔵野。

能力者の子だけが通う私立。

それはつまり……

(やったな、とーちゃん。通う学校のセンコーなら家も近いだろうし、好きな時に好きなだけやりまくれるじゃんかっ)

(そういう問題じゃないでしょって。……どうしょ。高校入学前にその先生2人と3Pしちやってるや)

(へーきなっ。相手が誰でも、ととさまのオチンポの味を知ったら離れられるはずがないのっ♪)

だーかーらー、そういう問題じゃないでしょ。

そう心の中で言うより先に、ホムラさんに手を引いて立たされる。

どうやら、前戯の時間は終わりらしい。

「アヤメ、先でいいぞ」

「いいの?」

「ああ。でもベッドに手を付いて、そのデカイケツを突き出して啜え込め。動くのも自分でするんだぞ? あたしはもつとキスしたり、ヒロキの乳首を舐めたりもしたいからな」

「わ、わかったわ」

いつの間にズボンを脱いだのか、やっぱり白のパンティーをアヤメさんが脱ぎ捨てた。

「おおっ」

「デカケツもなかなかだろ」

「はい。でもそれより、陰毛が1本もないなんて」

「もしかして、パイパンは趣味じゃないのか?」

とんでもない。

「大好物ですっ!」

「ははっ、そりやあ気が合いそうだ。ほらアヤメ、さつさとケツを突き出してオマンコをあてがえよ。生チンコを淫乱マンコで啜え込んで、あたしに見られながら腰を振りまくるんだ」

「わ、わかったわよ。でも、こんなのが本当に……」

「大きさは特性で調節できるとかって言ってたよな、ヒロキ?」

「はい。小さな変化なんで気づきにくいですけど、もうアヤメさんの最適化してありますよ」

「だとき。バイブで遊び過ぎてガバマンになった淫乱M女ちゃん？」

「使ってるのは同じ物でしょう。でも、あれより大きな、こんなのが本当……」

「嫌ならいいぞ、あたしが先にいただくから」

「ダメよ。こう、かしら。……んっ」

「見ろよ、ヒロキ。この淫乱女はオマンコを自分で広げただけで、マン汁が糸を引きながら床に垂れてくぞ。くくっ」

白く細い指で広げられたアソコが近づけられ、尿道の辺りが熱さに包まれる。

濡れ切ったそこが容易く僕の亀頭を啜え込みかけたかと思うと、大きなお尻がブルリと震えた。

「あ、んうっ!？」

「凄い。たった数センチ僕の亀頭が沈んで、カリ首が入り口に引っかかっただけでイツてる」

「とんでもない淫乱女だろう、うちのペットは？」

「ええ。たまらないですねえ。まだ入り口しか味わってないけど、アソコの狭さと肉の感触もいい感じですよ」

「好きだけ使うといいさ。ほら、あたしはこのかわいらしい乳首を舐めてやろうな」

「んっく」

「ははっ。かわいい声で喘ぐじゃないか。濡れるねえ」

張りのある大きなお尻と、柔らかいもつと大きなお尻。

その2つを優しく撫でながら、僕の勃起した肉棒が大きい方のお尻の真ん中に飲み込まれていくのを眺める。

前衛も出来るそれなりの腕の能力者だからか、アヤメさんは1回イツたくらいじゃ回復を待つ必要もないらしい。

僕達能力者は相手の能力や特性に屈服させられる事を『守りが破られた』とか『レジストに失敗した』なんてよく言うけれど、今のアヤメさんは僕の特性でとんでもなく発情して普段よりずっと気持ちよ

くなつてはいても、まだ守りを破られてはいない状態。

でも強力な媚薬である僕のガマン汁を直接、トロトロと膣奥に流し込まれていたら、すぐにでもその守りは破られて大きくイッて、しばらくは意識を失ってしまうだろう。

「っあ……」

「ああ。アヤメさんのアソコ、最高ですよ。熱くて狭くって、でもヒダヒダが伸び切らない。伸び切るかと思えば音もなく戻って、いやらしく僕のカリ裏にまで絡みつく」

「ダメ、これダメ。す、すぐイッちゃ、うんっ！」

「子宮口でも感じてくれるんですね。嬉しいなあ」

「ゴリッて音が、頭蓋骨にまで響いたわ。これがそうなのね」

「ええ」

「う、動いてもいい？　すぐに達してしまうだろうけど」

「もちろん。好きに動いてください」

「ありが、ああっ。限界まで広げられてるのに、動くとまだっ！」

ホムラさんの苦笑いが耳をくすぐる。

乳首から顔を離れたホムラさんは僕の髪の毛の臭いを嗅ぎながら、耳を舐めていたからだ。

ベッドが軋む。

恋人の指示通り、アヤメさんは自分で腰を使い出したから。

アヤメさんが徐々に動きを大きくしてゆくと、それだけ喘ぎ声も大きくなった。

僕はそれを耳で愉しみながらホムラさんの湿り気を帯びた割れ目をパンティーの上から撫でて、その感触を指先で愉しむ。

「くうっ、たまには焦らされる方に回るのも悪くないねえ」

「ホムラさんもベッドに手を付いてお尻を突き出してくれたら、交互にズボズボしますよ？　指とアソコで」

「それも悪かないけど、もうアヤメは限界だろうからね。派手にイッたらヒロキに跨って腰を振りまくるよ」

「さつきから自分で腰を打ち付けて、大きく背中を仰け反らせる時にイッてますもんね、アヤメさん。じゃあ、まだ射精はしないでおこら

かな」

「もしかして、射精も？」

「はい。コントロール可能ですよ」

「……呆れたボウヤだねえ」

ホムラさんの予言通り、喘ぎ声に乗る切迫感が増す。

だいぶりズムが早くなって、その響きはまるで唸り声であるかのよう
に低い。

どうやら、アヤメさんは本当に限界みたいだ。

なのでサービスをしようとホムラさんのアソコから手を離して、僕の股間に『ぱちゅんぱちゅん』と打ちつけられるたびに波打つ、とんでもなくエッチな見た目の大きなお尻を両手で強く掴む。

「あゝ あっ！」

「イクなら僕が動きますね。今までより、ずうっと激しく」

「ま、待ってっ！」

「ヤです」

腰を突き出す。

「あゝ はあっ!？」

真っ白な砂浜に寄せては返す波のように上へと向かったお尻の肉が戻る前に腰を引いて、また突き出した。

「ははっ、こりやスゲエ……」

「まだまだですよ。これを、繰り返すんです。こう、やってっ。アヤメさんが僕のアソコじやなきや満足できなくなるまで。ほら、イッてくださいいっ」

パンパンと音が響く。

一般人ではする方も、される方もケガ、打撲くらいしかねないほどのリズム。

それを追うのはもちろん、獣じみてきたアヤメさんの喘ぎ声。

「んアゝ あーッ！」

「そろそろかな」

「らめ、イグッ。イグのおっ！」

「イッてくださいいって言ってるんですよ。」

「んあッ、あはあつ。イ、イグウツ！ あんっ、ああつ、やあつ、ん
んーっ。らめ、……イ、イグ——ウツ！」

上京12

とんでもない締めつけ。

それを感じると同時に、足の甲に飛沫がかかった。

熱い。

まるでお湯のような液体。

その飛沫が止まらないうちに、アンモニアがツンと臭う。

「うっは、シヨンベン漏らしながらイッてやがる。こうまで乱れるかよ、さすがアヤメ」

「……あー、気持ちよかった。僕も思わずザーメンを漏らしかけましたよ」

「気にせず出せばいいのに」

「それは、ホムラさんのアソコも愉しんでからじゃないと」

「言いやがる。つと、あぶね。失神までしてんのか」

「ですね。媚薬効果をレジストし切れなくなって、その状態であれだけ大きくイッたんだから仕方ないです。ベッドは広いから、とりあえず寝かせましょう」

「ああ。しっかし、このシヨンベンをどうすつかだなあ」

(ととさま?)

セイの言いたい事は明白。

2人がかりでベッドにアヤメさんを横たえながら、どうしようかと考える。

もしもホムラさんとアヤメさんが僕の通う予定の高校で教師をしているのなら、セイとフウカ存在は隠す必要がないだろう。

僕の能力は使役系の『蟲使い』。

その高校では週に何度も戦闘の授業まで行われていて、僕はその授業では手を抜かず成績トップを3年間維持しろと言われているので、セイとフウカはその時に人前へ出て姿を見せる事になっている。

2人がそこで教師をしているのは確かみたいだから、今ここで紹介

しても問題はないはず。

(ここでセイとフウカを紹介するのに反対の人―?)

返事はない。

なのでベッドに上がってから胡坐を搔いて、ホムラさんを抱き寄せた。

2人を呼び出した僕が戦闘で銀将級に負けるとは思えないけれど、驚いていきなり攻撃されたりしても困る。

「ホムラさん」

「ん?」

「実は僕、使役系の能力者なんですよ」

「……それはまた。あの剣の腕で使役系とは。驚くしかないな」

「なので使役対象を呼び出して、オシッコや愛液をキレイにしたいなって。いいですか?」

「へえ。是非とも拝見させてもらおうじゃないか」

「セイ、フウカ」

影から小さな人影が2つ飛び出す。

「はあい。セイなの、よろしくなのっ♪」

「フウカだ。なあ、センサー。オマンコ舐めていいか? どうせもうグチヨグチヨだろう?」

セイはまだいい。

なんで魔法で服を幼稚園児が着るあのナントカ服に変え、ミニスカートを持ち上げながら挨拶して、ロリ好きなら鼻血ものの天然パイパンの幼い縦スジを見せるんだ? とか疑問は多いけれど。

でも、フウカは完全にアウト。

どんな第一声ですか。

パパは悲しいぞ。

「……これは。使役系の能力者がよく使う、式神なんかの気配じゃないな。まるで別物だ」

「まったく。こらフウカ、いきなりそれはないでしょって」

「へへっ。レズ女の相手は得意なんだって、オレ」

「幼稚園児の見た目で胸を張られてもねえ。悪いけどセイ」

「わかってるのっ」

「ありがと」

アヤメさんの漏らしたオシッコが瞬時に分解されて、ニオイすら残さず消える。

床や布団だけじゃなく、僕の股間も一瞬で乾いた。

セイの魔法でだ。

「んじや続きをしよーぜ、とーちゃん」

「フウカ達は影の中に戻るに決まってるでしょって」

「えー」

「影の中？」

「あ、はい。この子達、普段は僕の影の中にいるんで」

「そうなのか。フウカとセイ、でいいんだよな。飲み食いはい？」

「できるのっ！」

「つか酒も飲んでーし、そこにある高そうなツマミも食いてえー！」

「そうかそうか。なら好きに飲んで食うといい。見た目が幼くとも使役系の能力者の配下なら、酒なんて屁でもないだろう。なくなったら追加で頼むから、好きなだけ飲んで食え」

「やたっ」

「せんせー優しいのっ♪」

2人がテーブルに突進する。

その小さな背中に視線をやっているホムラさんは笑顔だ。

口調は男っぽいけれど、子供好きなのかもしれない。

「いいんですか？」

「ああ。こっちはこっちで愉しむしな。ほら、パンツを自分の手で脱がせたいなら早くしろって」

「はあ」

射精がまだなのでセックスが続けられるのはありがたいけれど、セイとフウカの前でするのに抵抗感がないらしいのには驚きだ。

もしかしたらホムラさんは使役系の能力者を見慣れているから、子供にしか見えない2人の内面がその外見とは違うのを、僕なんかよりずっと理解しているのかもしれない。

ならば遠慮はいらないかと、ホムラさんの体を押しして四つん這いの体勢になつてもらおう。

「こんなカッコで脱がされて、今までで一番つてくらいグチヨグチヨになつてるオマンコを見られるのか」

「ホムラさん、言動はSっぽいけどMですよね」

「そ、そんな事はないぞ。昔っからアヤメを調教してるし」

「はいはい。それじゃ、脱がせますね」

パンティーの後ろ、お尻を隠す部分を下げる。

それも半分だけだ。

「わあ、キレイなアナル。こっちもピンクじゃないですか」

「な、なんで半分だけ脱がせるんだっての!」

「好きなんですよ、この見た目が。パンティーのゴムが、まーるいお尻の肉に食い込んでるのが。あと、アナルも丸見えだし。この感じじゃ、ホムラさんもパイパンですね」

「あ、ああ」

「さあて、いただきますか」

「お、おい。まさかつ!」

なにが『まさか』なんだろう。

日本じゃアナルセックスこそあまり浸透してないらしいけど、アナル舐めはほぼ当たり前前の行為のはず。

「ん、いいニオイ」

「待つ、……はんっ!」

ホムラさんが大きく仰け反る。

その拍子に揺れるお尻も素敵だけど、肛門のシワに滲んでいる汗や愛液の味も最高だ。

「ホムラさんのアナル、美味しいです」

「ウソ、だろ。戦闘後で風呂にも入ってないのに……」

「だからいいんですよ。ニオイも、味も。僕は特性のおかげでお腹なんて下さないし、フェロモンに敏感なせいとか、女の人の汚れで興奮するんで。なんなら、ナカまで舐めましょうか?」

「や、やめろって。怖いから」

そうですかと返して、また黒ずみのない肛門を舐め上げる。

でも僕が『ナカまで舐めましょうか?』と言った時、ホムラさんがお尻の肉を震わせながら、肛門をキュウツと締めたのは見逃さなかった。

それだけじゃなく、そう言った時まだパンティーで隠されている割れ目から、女の人が男を欲した時のフェロモンが噴き出すように匂ったのにも気づいている。

(次があれば、コツチも許してもらえそうかな)

(ととさまの唾液と舌技なら、どんなお固い女の人だつてアナルにぶち込んでくださいっておねだりしちゃうのっ!)

(とーちゃん、アナルとかスカトロとか好きだよなあ)

(蟲系の特性がいつぱいあるからなんだろうねえ)

(ただの変態だらつて)

(うっさいよ)

肛門の汗や愛液はすぐに舐め終わつて、それと同時に二オイも味もほぼなくなつてしまう。

それでも僕はアソコから漂うフェロモンと、徐々に強くなっている淫液の二オイを嗅ぎながら、ホムラさんの肛門を舐め続けた。

「っは、あ、んう……」

「だいぶほぐれてきましたね。アナルが欲しがってます」

「そ、んな訳、あるかあ」

「ホントですつて。だから奥まで舐めていいですか?」

「……………ダメに決まつてるだろ。それより前をどうにかしろつて。おあづけされたまんまじゃ、さすがにヤバイんだ」

迷ったなあ。

「残念。じゃあこのエロいパンティーを脱がせて、パイパンにしてるアソコを舐めまくりますね」

そう言いながらパンティーを脱がす。

乳首やアナルと同じく黒ずみのないピンク色の膣口から糸を引いて垂れていた淫液。それが、膝までパンティーを下ろしても膣口からクロツチまで切れずに糸を引いている。

足首から完全にそれが抜けると、ホムラさんはまるで戦闘時のような機敏な動きを見せた。

「つと、危ない。いきなりそんな動きをするから、手が動きかけましたよ。間違つて殴つちやったりしたらどうするんですか」

「倍返しをするだけさ。……くうっ」

肉棒の中ほど、裏スジにとてつもなく熱いヌメリが押し当てられる。

「馬乗りになつてスマタがしたいなら、そう言つてくれればいいのに」「ガマンが出来なかつたんだつて。許せ。……ああ、こうしてるだけでたまないねえ」

「スマタつて気持ちいいですよね」

「だな。んっ……」

クチュっとな音が鳴る。

その度にホムラさんは体を小さく震わせて、僕の顔や頭にキスを落とすとした。

騎乗位もスマタも悪くない。

けどやっぱり。

そう思っていると、僕を見下ろしているホムラさんがクスクスと笑う。

「どうしたんです？」

「いや、いいから早くオマンコで啜え込めよつて書いてあるような顔してるからさ。おかしくつてな」

「あはは。バレバレですね」

「それじゃあ、ご期待に応えようか」

「ありがとうございます。……わ。ホムラさんのアソコ、柔らかい」

「そうか？」

「はい。飲み込まれてく感じが抜群ですね。普通は入り口を亀頭が通る時、引っかかりみたいなのがあるんですけど」

「こっちは広げられ過ぎてそれどころじゃ、んんっ。こ、これは凄いね」

キツさならアヤメさんで、柔らかさならホムラさんのアソコ。

見た目と逆な感じだけれど、そのギャップがが悪くない。というか最高だ。

「おっぱい、触ってもいいですか？」

「あ、ああ。好きにしていよいよ」

「ありがとうございます。ああ、やっぱりいいですね。張りのある手触りのおっぱいと、柔らかいアソコの肉。どっちも素敵です」

「ヒロキのチンコも凄いぞ。バイブなんかの比じゃない。っあ、し、子宮が潰されそうだっ」

「キスもお願いします、ホムラさん」

「わか、……あんっ！」

「あは。かわいい声」

「う、うるさいよ。上半身を倒したら急に挟られ方が変わったんだから、仕方ないだろうって。ほら、キスだ。どうせ、ツバも飲ませろって言うんだろ？」

「当然ですよ。なんなら上から垂らしてもらって、それを飲みたいくらいです」

「この変態美少年が」

褒めてるんだか貶してるんだか。

でも僕なんかを美少年と呼ぶのはお世辞だろうから、なにも言わずに舌を絡め合う。

ホムラさんのアソコは、奥の具合も最高だ。

ゴリツと僕のを擦る、子宮の入口の感触までもが柔らかい気がする。

「こういうセックスもいいですね。優しい感じ」

「あたしに余裕がないだけさ。くうっ」

「セイとフウカが見えますよ」

「……あ、煽るなバカ」

「やっぱり。だと思いましたがよ。ホムラさん、見られると興奮するんですね？」

うるさいとでも言うように、キスで口が塞がれた。

お返しとばかりに腰を軽く突き上げる。

「んうっ！」

荒い鼻息を至近距離で受けながら舌を絡め合い、唾液を大げさな音を立てて飲み下す。

腰を揺るように動かしながら。

すると柔らかなアソコの、膣の肉が、僕の根元までを締めつける。そろそろ最初の頂かな。

思うと同時にホムラさんはイキながら、下になっている僕の体にしがみついた。

「——ッ！」

震えながら声を抑えているのはかわいらしいけど、僕の髪を思いつきり掴みながらイクのはどうなんだろう。

これじゃまるで、僕の方が犯されているみたいだ。

「……つく、ぷはあっ」

顔が離れる。

つうつと唇と唇から糸を引いた唾液が、天井の蛍光灯に照らされてキラリと光った。

「うふふ。まるで愛し合う恋人同士の本気セックスね。妬けちやうわ」

「アヤメさん。もう気がついたんですか」

「ええ。ぼんやりとだけど、あの子達が出て来るのも見てたわよ。これでも前衛能力者だし」

「タフですねえ。回復が早い」

「女ですもの。ね、私にもキスしてくれる？」

「喜んで」

「んふ。ありがとう」

アヤメさんの唇が寄せられて、熱い舌が僕の唇を割る。

「ん、アヤメさんののも美味しい。あとホムラさんのイツた時に締まったアソコが、ゆっくり戻ってく感触もいいですね」

「あんっ。他の人に挿入したまま、私にキスしながら違う女のオマンコの感想を言うなんて。いけない子ねえ」

初めての休み明けの出勤。

とは言っても祓い仕事すらくつて、ほんのちよつとの家事を終えるともうする事がない。

幼児向けのテレビ番組を見ながら踊ったりするセイと、朝に寄ったコンビニで買ったチュッパチャプスを舐めながら飽きもせずゲームをしているフウカを眺めたり、ユウチューブとかいうのを見たり、影の中に仕舞ってある本を読んだりして1日が終わる。

そして帰宅。

この数日ですっかり気に入って、もう愛車と呼べるほどになったRZ350を駐輪場に置いた。

(とーちゃん、今日の晩メシはなんだっ?)

(今から商店街で買い物。安売りの肉か魚がメインになるから、まだメニューはわからないねえ)

(じゃあさー!)

(カツカレーなら金曜日にしか作らないよ?)

(……ぶー)

(ととさまっ♪)

(言つとくけど、フィッシュ・アンド・チップスも土曜日だけだから)(むーっ)

どんなにむくれられても、毎日毎日揚げ物ばかりでは栄養が偏ってしまう。

使役蟲という存在は僕が能力に目覚めて初めて世に現れたので、まだまだわからない事だらけ。

お酒を飲んだり、セックスに交ざったりするのが平気だというのは本社の解析系能力者さんに太鼓判を押されたけれど、さすがに食べ物の事は何も言っていなかった。

15万円のヘルメットを担ぐようにして、商店街へ向かおうと振り

返る。

するとそこには、見覚えのある車があった。

小豆色のランドクルーザー。

箱根からの帰り、後部座席に乗せてもらったあの車だ。

クラクション。

ピツとそれが鳴らされて運転席と助手席から降りてきたのは、これ

また見覚えのある顔。

それも、当たり前のように2つ。

「こんばんは。約24時間ぶりですね。ホムラさん、アヤメさん」

「あたしらは今日の朝、会議中に書類でその澄まし顔を見たんだが？」

そして2人で冷や汗を垂らしながら、たつぷり1分は固まってたん

だが？」

「まだ春休み中なのに、そんな会議なんてしてるんですね。教師って

大変そう。そして、やっぱり同じ学校でしたか」

いつか僕がなにをどうしてか、まかり間違って普通の仕事をする時

が来ても、教師だけは絶対にやめておこう。

なんなの、春休みに会議って。

会議するなら休みじゃないじゃん。

「そうなるねえ。しかも、住んでるマンションまで同じと来てる。駐

車場と駐輪場も、真ん前だ」

「……それはまた。偶然って怖いですね」

「うふふ。ところで時間はある、ヒロキくん。もとい、六堂くん？」

「えーっと、出来れば晩ゴハンの買い物しておきたいかなって」

「ご飯ならうちで食べればいいわ。学校が始まる前に、ちよつと話し

合いがしておきたいのよ」

「担任と副担任と新入生って立場でな」

「……うっあー、よりによって担任と副担任ですか。わかりました」

まさかまさかの偶然。

でも棗さんの事だから、こうなるのを知ってたんじゃないかな。

現地で解散するのを簡単に認めて、別れ際には微笑んでたし。イタ

ズラ好きだから、あの人。

「それじゃ行くか」

「はい。あつ、アヤメさん。買い物袋を持ちますよ」

「あら、紳士なのね。ありがとう」

「英国紳士、ねえ。角将にはそんな事まで仕込まれてるのか」

「そして剣の腕は飛車仕込み。なら、あの吉喰流の使い手なんでしょう？ 強いはずよねえ」

「学校って、そんな事まで知ってるんですか。ヤダなあ……」

2人に案内されたのは、部屋と部屋のドアの間隔が僕の所より広い最上階だった。

「どうぞ」

「おじやまします。……あれ、玄関が広い。それに、僕の部屋にはない廊下もありますね」

「このマンションは上から見たら、ひらがなの『く』の字みたいになってるだろ。横に長い方が2LDKで、そうじゃない方はワンルームタイプなんだ」

「はあ」

2LDKってなんだらう。

それを訊ねる前に清潔な、几帳面に整頓されたキッチンに案内される。

どうやらホムラさんとアヤメさんは師匠達と違って、掃除や整理整頓なんかがちゃんとできる能力者みたいだ。

「アヤメが料理をするから、そのダイニングテーブルでまずビールでもやろう」

「独立した台所、いいなあ」

「本社に特例で認められて学校に通いながら依頼を受けて稼ぐなら、もっといい部屋にだって住めるわよ」

「だな。だが、その特例で支社の依頼を受けているってのは学校じゃ秘密にしておけよ？」

「なるほど。了解です」

危なかった。

棗さんは依頼を秘密にしろなんて言ってなかったし。

「素直でよろしい。あ、荷物はテーブルに置いてちゃって」

「わかりました。ヘルメットは床に置かせてくださいね」

「ああ。それよりセイ、フウカ。いるんだろ？ ビールで乾杯するぞ」
「はい♪」

「さすががセンス。話がわかるなあ」

待ってましたとばかりに、僕の影から2人が飛び出す。

「ははっ。椅子が2つしかないから、1人ずつヒロキとあたしがだっ
こだけどな」

「セイはせんせーの膝がいいのっ！」

「そうかそうか。んじゃ、ビールを出すから待っどけ」

「はい♪」

冷蔵庫から、全員分の缶ビールがテーブルに出されてゆく。

アヤメさんも料理をしながら飲むようで、笑顔でプルタブを引いて
いる。

「そんじゃ、予期せぬ再会に。乾杯」

「カンパーイ」

「乾杯なのっ♪」

缶ビールは僕の好きなキリン・ラガー。

よく冷えているので、当たり前前に美味しい。

「んでヒロキ、あたしらとはどうする？」

「……どうって言われても。ホムラさんとアヤメさん次第ですよ」

「へえ。隠れてこの部屋に通って、その度に相手をしろって言われた
らどうすんだよっ！」

「ラツキーって言いながらズボンを脱いで、2人一緒に押し倒します
ねえ」

ホントは今すぐでもそうしたい。

それが本音だ。

「好きだなあ、オマエも」

「まあ否定はしません」

「ほんじゃ、ヒロキの卒業まではこのまんまでいいか」

「それはいいんですけど、お2人の方は？」

「なにがだよ?」

「あれほどの腕を持つ2人が、高校の教師なんてしてる意味」

立ったまま缶ビールを手に行っているアヤマさんの瞳が細められる。

対照的に椅子に座ってセイをだっこしているホムラさんは、僕の日を見ながらニヤツと笑った。

「とぼけるのは得策じゃなさそうね」

「だろうなあ。でもまあ、一応は聞いておこうか。まずヒロキの考えを話してみろ」

「はい。……反乱、は言い過ぎかな。学生の暴動や、計画的ではないにしてもあり得る能力者の暴走に備えての配置なんですよね? 学校に通うのは関東中の能力者、それも成長の途次にある若者で、バカもそれなりにいるでしょうし」

そうなったら、僕も加勢しないと。

「まあな。でも、それだけじゃない」

「と言うと?」

「本州は本社が握ってる。だが北海道には旧幕軍の家系が流れて、独自の能力者組織を運営しているんだ」

「なるほど。そういえばそうでした。それに四国は、あまり本社と仲のよろしくない八十八家が押さえてる。沖縄の有名な家は沖縄返還時に本社に願い出て帰属したんでしたっけ?」

「ああ。だから沖縄は、九州を守る征西府の管轄だ。言っとくけど、あそこも油断はできないよ」

「征西府は本社の下部組織なんじゃ?」

棗さんの授業でそう聞いた気がする。

なんか大昔にそれを率いてた人がけっこうな能力者で、九州の人はその名前に誇りを持っているとか。

「建前上はな。だが、九州は大陸に近い」

「革命だの内戦だので国そのものがなくなったり新しくなったりすると、能力者として生まれる人間の数はメチャクチャ減るんでしょう?」

新興国だらけの大陸のなにが怖いんです?」

「どれだけ減っても、0にはならないさ」

なるほど。

僕はてつきり能力者の若者が暴走したりした時、それを鎮圧なりなんなりするために、ホムラさんとアヤメさんが先生なんてしてるんだと思ってた。

でも将来の戦力である能力者の若者が集まって学ぶ、いかにも守りの薄そうな学校という場所を、外敵の襲撃から守る事も2人の役目なのか。

「理解しました。なら万が一のその時、僕が手を貸すのは可能ですか？」

「……どんなに家格の高い家の子でも、高校在学中に本社や支店から依頼を回してもらうなんてのは不可能なんだ。本来ならね」

「みたいですねえ。さつき学校じゃ口外するなって言われるまで知りませんでしたけど」

「だろうね。だからそんなルールまで曲げて依頼を回し、その支店の情報室長が連れ歩くヒロキなら、もし襲撃を跳ね返すのに助力したって誰も文句は言わないさ」

それだけ聞ければ安心。

「ならよかったです。もしなにかあっても黙って見てろって言われたら、どうしていいかわからなかったし」

「男の子ねえ。じゃ、話し合いはお終い。食事の準備をするわね」

「アヤメのクリームシチューは絶品だからなあ」

「ほとんど既製品のルーで作るんだから、誰が料理しても一緒よ。リビングに移動して飲んでて」

「あいよ」

アヤメさんを残して4人で移動したりリビングは、僕の住んでいる部屋と同じ広さだった。

ただし家具なんかのなんとというか、統一感のようなものが天と地ほど違う。

同じのは部屋の広さと、テレビの大きさくらいだろう。

「いい部屋ですねえ。ソファアがすんごく低いのは、どうしてなんですか？」

「もうアヤメに片付けられたけど、これならコタツに入れるからな」
「なるほど。胡坐も楽に掻けるし。いいですね、これ」

「だろ。さ、座って飲んでろ」

「あ、はい。ホムラさんはアヤメさんのお手伝いですか?」

「まさか。こんなご馳走が目の前にあるんだから、まずはそれを味わうに決まってるだろうって」

「えーっと、アヤメさんがゴハンを作ってくれてるのにですか?」

「こんなのは早い者勝ちなのさ。ほら、腰を上げろって」

「いいのかなあ……」

それでもフェラがしてもらえるなら、僕にホムラさんを止めるという選択肢なんてあるはずがない。

黒いストラックスを脱がされると、すぐにボクサーパンツ越しの吐息を感じた。

深く長く、ホムラさんが鼻で息をする。

「ああ、蒸れてるなあ。昨日とはまるで違う、エロいニオイをさせてやる」

「お風呂は昨日の夜に入ったつきりですからね。セイ、ホムラさんに性病予防の魔法をお願い」

「はあ〜」

ボクサーパンツの生地の上から、アソコが舐められた。

そうしているホムラさんの肩まである茶色がかった髪を耳にかけて、顔がよく見えるようにする。

「しゃぶってる顔が見たいってか?」

「はい。僕のアソコを舐めてるホムラさんは、戦闘の時と同じくらいキレイですから」

「お世辞が上手いじゃないか」

「本心ですって」

イノシシの妖異を倒した帰り、僕達は3人でラブホテルに入った。その夜はもちろん泊りで、翌日も夕方まで滞在。

アソコが乾くヒマもないくらいセックスをして、僕は夕暮れの武蔵境駅で2人に別れを告げる。

そしてその翌日、こうして再会してまたすぐにセックス。別にそれが悪い事だとは思わない。

先生と生徒という立ち位置は、学校の中や人目がある場所でだけ守ればいいんだ。

「っは、脱がせるとさらに強烈なニオイだ。濡れるっつの」

「クサイならお風呂でも借りるのに」

「このくっさいのがいいんだよ。ヒロキだっつてそうだろ？」

「ですね。うん、今日もいいおっぱいです」

「こら、まだ揉むなっつて。すぐ欲しくなっちゃうだろうが」

「自分はSだっつて言い張ってるのに、本当は焦らされるのが好きなホムラさんにはご褒美でしょう。あは、もう乳首もコリコリですね」

「つく、この。ん、っちゅ……」

たった2日。

フェエラを覚えてそれしか経っていないホムラさんが仕返しをしようとしたって、それほどの効果は与えられない。

Dカップだという美乳をブラウスの上から揉みながら、僕のアソコに熱心に舌を這わせるホムラさんの整った顔を眺める。

「へへっ。いかにもセンコーって感じの女が、スーツ姿で這いつくばっつてチンコにむしゃぶりっつてるのはエロくていいな。とーちゅん」

「だねえ。もう勃起しちゅったよ」

「……っちゅ。今日こそ啜えて喘がせてやるからな、覚悟しろよ」

「それはそれは。是非ともお願いします、赤岩せんせ？」

「ったく、余裕ぶりやがっつて。かわいくねえな」

僕の肉棒を啜えたホムラさんの顔が激しく上下している。

熱意はかなりのもの。

それにフェラのコツを訊かれた時にこれは男の感じ方ですけど前置きしてから僕が言った、『啜えたら唇で包むようにして歯をなるべく当てず、頬をすぼめてアソコを圧迫。できるだけ唾液をアソコにまとわりつかせながら、舌で刺激を与えつつ顔を上下させる』というのも頑張っではいるみたいだ。

もつとないかと聞かれたので言ったそれ以外の、たとえば意外性のある変化を加えるとかは忘れていいのか、それとも顎を大きく開いているので余裕がないのか。

まあ、どちらでもいい。こうまで熱心にされると、それだけで気持ちいいし。

「あら、もう啜えさせてるの?」

「あ、はい。ゴハンを作ってもらってるのにごめんなさい」

「どうせホムラが強引に始めたんでしょう。とりあえずのおツマミ、ここ置くわね。メインのクリームシチューは煮込むから、最低でも1時間は待って」

「了解です。アヤメさんは、もうワインですか」

「ええ。六堂くんも飲む?」

「口移しでなら、喜んで」

「……この子ったら。煽るのが上手ねえ」

今日の2人はそのまま入学式とかにも出られそうな、いかにも真面目そうなスーツ姿。

アヤメさんはキツチンか別の部屋で上着を脱いだらしく、街で擦れ違った男の大部分が視線を向けるはずの巨乳のふくらみを惜し気もなく晒している。

白いブラウスなのでブラジャーが透けて、なんとも色っぽい。

そのアヤメさんがワインを口に含んで抱き着いて来たので、迷わず抱き止めて優しそうな顔に唇を寄せた。

甘い。

ワインも、その後に感じたアヤメさんの唾液も。

「今日も美味しいです、アヤメさんの」

「六堂くんのもね。あつという間に濡れちゃったわ」

「またまた。お上手ですね」

「ホントよ」

「じゃあ、確認させてくださいよ」

「んもう。そう来る?」

「もちろん」

「でもそしたら、また私の下着の臭いを嗅いだりするでしょう?」

「ええ。ニオイを堪能したら、一昨日みたいにクロツチの汚れを舌で掬って。考えただけで興奮しますね」

「もうっ。変態さんなんだから……」

言葉だけ聞けば嫌がついているみたいだけど、アヤメさんはそんなのが嫌いじゃない。

その証拠に僕がブラウスのボタンを外そうと手を伸ばすと、自分でそれを外して見事な谷間を露わにしてゆく。

「つたく、いちやつきやがって。あたしも脱ぐぞ。必殺技を食らわせてやる」

「おおっ。それは楽しみです」

もし必殺技というのがパイズリやそれをしながらのフェラなら、願ってもない。

昨日一昨日は、2人で同時にするダブルフェラくらいまでしかしてもらえなかったから。

「もう脱いじやっていいのよね?」

「はい。1時間あるなら平気ですから」

「あたしはもう脱いだぞ、ほら」

「さすが。わかってますねえ」

ほら。

そう言つて渡されたのは、ホムラさんが脱いだばかりの赤いパンティー。

重い。

ずっしりとした重量感。

どうやら愛液が染み過ぎて、こんな小さなレースの布切れとは思えないほどの重さになってしまっているらしい。

「食らえ、これが対変態鬼畜美少年用必殺技だっ！」

「あ。パイズリなら、おっぱいと僕のアソコに唾液をたっぷり垂らしてからお願いしますね？」

「なんつ、だと……」

やっぱりか。

そんな気分で赤いパンティーを鼻に当てる。

「ああ、エロいニオイです。オシッコと愛液、だけじゃないですね。これは、この香ばしさは」

「う、うるさいっての」

「アヤカさんのも、脱ぎ終わったんならください」

「え、ええ」

「いい物を見せてあげますから。まあ、見るだけじゃ困るけど」

セイに頼んだイタズラ。

ホムラさんとアヤメさんなら、気に入ってくれると思うんだよね。

「どういう意味かしら？」

「そのベージュのパンティーを渡してくれたら、すぐにわかりますよ」

「もうっ。こうなるってわかってたら朝、もっとオシヤレなのを着けてたのに」

「こういうのはこういうのでいいんですって。……うん、いい重さと

ニオイです。それじゃあセイ、お願い」

「はあい♪ 場所は、ととさまっ？」

「腹筋でいいかな」

「わかったのっ」

なにをする気だ？

アヤカさんは視線でそう言っている。

それに微笑みだけ返して、ホムラさんがパイズリをする手前の割れた腹筋を指差して待った。

セイの小さな体から、純白の魔力が放たれる。

それが僕の腹筋に吸い込まれるのはアヤカさんにも見えたようで、整った眉と真面目で優しそうな瞳が、すぐに驚きに歪む。

「んぎやあつ!？」

「こ、これはっ」

僕の6つに割れた腹筋の中央に、音もなく生えた物体。

それを見たホムラさんとアヤメさんは、かなり驚いているみたいだ。

イタズラ成功、かな。

「ととさまチンポ2号、ハメータツラヨガール君なのっ♪」

「うん、その名前はダサイからやめところうね」

「ぶうーっ。いい名前なのにーっ!」

「ど、どうなってるのよコレ……」

「知るか。でも順番待ちがなくなるのはありがたい、それでいいだろうが」

「あはは」

「これ、感覚とかは?」

「普通にありますよ。射精も可能だし。見た目の異様さだけが問題なんですよね」

「腹からチンコ生えてんだもんなあ」

「ええ。触ってみてください、アヤメさん」

「わ、わかったわ」

白い手が、腹筋から脇腹に向かってだらしなく垂れているもう1本の肉棒に伸びる。

「しっかしヒロキは特技が多いなあ」

「器用貧乏なんですよ」

「よく言うぜ。それよりどうだ、あたしの必殺技は?」

「最高ですよ。おっぱいでしごきながら啞えられたり、先っぽを舌でチロチロされたら、ガマン出来なくなっって射精しちゃうかも」

「ふっふーん。なら、そうしてやろう」

「チヨロイわねえ……」

お腹と肉棒の接合部を確認したアヤメさんは、呆れたように言いながら亀頭の辺りを人差し指の腹で撫でた。

それから、昨日一昨日でだいぶ慣れたらしい手コキが始まる。

全裸の美女2人がパイズリと手コキをしてきている光景は、やはりたまらなくいい。

腹筋から生えたアソコがムクムクと持ち上がってゆく。

「えつと、アヤメさん」

「うふふ。口でして欲しいのね」

「はい」

苦笑いを浮かべ、長い黒髪を耳にかけてアヤメさんが上体を折る。

「んっ、やっぱり癖になる味ね。それに、凄い媚薬効果。ほんの少しガマン汁を舐めたただけなのに、オマンコがもうコレを欲しがってるわ……」

「こうしておけば2人同時でも、2穴同時でも出来ますからね」

先にガマンの限界が来たのはアヤメさんの方だった。

パイズリとフェラ。

2本のアソコに与えられる2つの快感を愉しんでいると、アヤメさんが不意に体を起こす。

「もうダメ、挿入するわ。いいわよね？」

「もちろん」

「むっ。ならあたしもだっ」

「どうぞどうぞ」

言いながらソファアーに横たわると、大きなお尻が2つ僕を跨ぐ。

僕の肉棒が2本とも、ギャップが素敵な違う感触の熱いヌメリに飲み込まれてゆく感触は、やっぱり最高だ。

どちらも顔はこちら向き。

挿れただけでイキかけている、眉根を限界まで寄せたアヤメさんの表情がたまらなくエロい。

「ああっ」

「これだよこれっ。たった1晩これを啜え込めなかっただけで、最低の目覚めだったんだ」

気に入ってくれたようで安心。

そう思いながら、踊るように腰を振り出した2人を見る。

僕の視界に見えるのはほとんどアヤメさんのダンスだけど、2分割した画面のようになっていいるもう片方は、セイが見ているホムラさんがメインの視界だ。

「ちよ、ちよつとホムラ。なんで胸を揉むのよ、あんっ!」

「ヒロキの目を愉しませてやろうかなってよ」

「いいですねえ。なんならクリトリスも弄ってもらって、ホムラさんの指でイッチちゃえばいいんですよ。料理の途中だし」

「だな。そんじや、気合を入れてイカセっか」

「ちよつと、んくうっ……」

片手で巨乳を潰すように愛撫しながら、もう片方の手が1本の恥毛もない恥丘へと伸ばされる。

「おー。僕のアソコを、大人のオモチャみたいに使いながらのレズプレイ。いいですねえ」

「ははっ。そうかそうか」

「あ、あまり見ないで、あはあっ!」

「そう言いながら、クリはビンビンじゃねえか。いつも通りこのデカクリを、チンコでもしごくみたいにシコシコしてやろうな。アヤメはそれで、すーぐイッチちゃうだろ?」

「や、ああっ……」

アヤメさんのアソコが締まって、腰の動きがリズムを崩す。

クリトリスをシコシコされるとすぐにイッてしまうというのは、どうやら本当みたいだ。

「えっろ」

「や、ああっ。ん、つく。ダメ、ダメよ。せっかく六堂くんとまた会えたのに、もうっ……」

「いいんだよ。これからいくらでもハメれるんだから。ほら、気にせずイッチまえ。こんな美少年のデカチンを、恥ずかしげもなくパイパ

ンにした淫乱オマンコで啜え込んで。女にクリをシコシコされながらイクのが、アヤメみたいなメスブタにはお似合いなんだ」

「んーっ……」

キュウキュウと蠢く膣の締め具合からして、アヤメさんの限界は近い。

「うっわ、すっごい締まっています。アヤメさんの淫乱オマンコ」

「くくっ。だってよ、アヤメ。大好きな六堂くんに呆れられてるぞ？」

「あゝはあっ！ ダメ、イクツ。ホントにいつ！」

「イケって言うてんだよ、あたしもヒロキも」

「んゝんっ、イクツ、イツちゃうわっ。あ、んああっ、あっ、あっ、

んーっ、あっあっあっあっ。……イ、イグウ——ツ！」

アヤメさんの体が、大きく跳ねた。

「おお、またお漏らしコースですnee」

「派手にイツてんなあ」

失禁の途中で、まるで痙攣のように全身が震え出す。

巨乳を揺らしながら。

「蠕動って言うんでしたっけ。アソコのうねり方もハンパじゃないですよ。気を抜いたら搾り取られちゃいそう」

「いくらでもヌイてやるから、今日からは好きに吐き出させて」

「あ、はい。覚えときます」

「そして、まーた失神してっし。シチューの火は止めとくか」

「じゃあ僕がアヤメさんを寝かせておきますよ」

「頼む。ったく、あたしだって抜かねえでイキたいってのに」

ソファアアはコの字型で、僕はお客だからか真ん中に座らされていた。

セイに魔法で生やした男性器を消してもらって、キッチンから見て奥のソファアアに意識を失ったアヤメさんを横たえる。

「なあなあ、とーちちゃん」

「んー？」

「オレ、早く弟が欲しいっ」

「まだ言う？ これだけ家族が増えても妹しか生まれないんだから、

そういうものだと言めた方がいいと思うんだけど」

「えー。わっかんねーじゃんか。もしかしたら、この2人がポロつと男を産むかも」

「ポロつと産まれても困るって」

「なんだなんだ、あたし達を孕ませる算段か？」

「あ、いや。そうじゃなくって」

「なあなあ、ねーちゃんセンサー。もっと強くなりたくねえかつ？」

弟か妹を、生まれる前から戦力扱い。

育て方を間違えたかな……

「強く、かあ。あたしもアヤメも、だいぶ前に成駒したからなあ」
「やっぱり2人共、もうしてたんですわね」

棗さんがたしかそう言っていた。

「ああ。でも人狩りじゃないぞ？ 大学時代に、気合を入れて妖異を狩りまくったんだ」

「なるほど。ちよつと失礼しますね、よいしょつと」

「こ、こら。なに自然な感じで挿入しようとしてんだよ。しかもバツクで！」

「だっていくらでもヌイてくれるって。……ん。ホムラさんのアソコ、もうトロトロ。僕のが溶けちやいそうですよ」

「つく、あんっ」

うん。

強気な見た目の美人さんの、ふわとろ感触なアソコ。

やつぱ、たまんないなあ。

「あ、説明するんならしいいよ。フウカ」

「ヤリながらかよ」

「だって時間ももつたいないし。あー、気持ちいい」

「動きは抑えろよ、とーちゃん？」

「もちろん」

僕はウソが嫌いだ。

セイとフウカの教育にもよくない。

いくら片方の親がイギリス人だからといって幼稚園児にしか見えない2人に酒を飲ませるなどか、実の娘の前でセックスをするなど言われたら困るけど。

ゆるゆると腰を振る。

パンパンという音がしない程度の動き。

これなら僕の『孕ませて使役蟲を増やす能力』を説明するフウカの

邪魔にはならない。

「だからこそ、ヒクヒクするアナルとか目で愉しめていいよね」

「こ、こらっ。どこを見てるんだっての」

だからアナルですって。

指摘された恥ずかしさからか、今もキュウツとすぼまったアナル。

「ねーちゃんセンセ、聞いてんのかよ?」

「あ、ああ。聞いてるぞ。ヒロキは女を普通に妊娠させて子供を産ませる事もできるけど、んんっ。し、使役蟲を増やすつもりですれば、すぐにつて。ああっ、焦らすみたいにしやがって。くうっ……」

「そうそう。今まで何人かに産ませたけど、どうやら銀将級が相手じゃオレ達みたいに人間型にもなれる使役蟲じゃなくって、半人半蟲の姿になるらしいんだ。んでとーちゃんは使役蟲を産んだ相手が能力者なら、その女の影で子供を暮らさせて母親の護衛と手伝いを命じてる。だからさ、ねーちゃんセンセ達も産みなって」

ホームラさんとアヤメさんは担任で、僕が飽きらられなければ3年間は学校だけじゃなくこうしてベッドでもお世話になる人達。

使役蟲を増やす方法を告白するのはいい。

問題は、2人がどんな選択をするかだ。

産んで欲しいような、そうじゃないような。

たしか棗さんの時にも9歳の僕は、こんな風に悩んだような気がする。

「でも、無理強いはしませんよ」

「まあなあ。いくらとーちゃんが好きでも、蟲を産むなんて生理的にムリって女も多いだろうし」

「だからこそ孕ませる時、女の人は必ず失神しちゃうのかもねえ」

「だなー」

「役に立ってくれるのは確実だから、まあゆっくり考えてくれればいいですよ。アヤメさんと話し合う必要もあるだろうし」

「あ、ああ」

「それじゃ、少し激しく動きますね。正直、もう射精したいです」

「ん、ーっ……」

「ザーメンの量も調節せずにブチ撒けてやれよ、とーちゃん。かーちゃんが言ってたぜ、壊れた蛇口みたいにオマンコの奥にビュービュー吐き出されるのは癖になるって」

「僕はそうしたいけどねえ。量が普通じゃないから、怖がられそうだし」

「センセなら平気だつて。な?」

「つくうっ。も、もうなんでもいいって。好きなだけ射精していいから、もつとっ!」

ホムラさんは、もうイキかけてるのか。

ならばと腰を振るスピードを上げる。

「ははっ、アへってるアへってる」

「あッ、ア——ッ……」

アヤメさんと比べると、ホムラさんの喘ぎ声はずっと大人しい。

そのホムラさんが、こんな風に獣みたいな声を上げるなんて。

どうしてだろうと考えながら腰を振る。

肉と肉がぶつかり合うたびに鳴る、ビタンビタンという音がうるさいくらいだ。

ホムラさんの掻いている汗も、昨日一昨日とは比べ物にならない。

「あっ」

「どしたよ、とーちゃん?」

僕達の体勢は、テーブルとソファの間での後背位。

獣のような姿勢と声で喘ぐホムラさんの体に、のしかかるようにして耳元に口を寄せた。

「があっ、奥うっ」

「ホムラさん、なんかこないだより興奮してませんか?」

「……う、うるさいっ!」

Mっ気の強い人は、だいたいそうだ。

セックスの相手が興奮なんかしてないって感じで普通にしていると、それと自分を比べてか、凄く感じやすくなる。

ホムラさんも今まさに、そんな感じなんだろう。

「へえ。そういう言い方するんですか。なら僕は腰を振りませんか

ら、自分でイッてください」

「なっ!?!」

「ちなみにアヤメさんが起きたら、僕はアヤメさんとイチヤイチャしながらセックスするんで。イキたかったら、なるべく急いだ方がいいですよ?」

体を起こす。

宣言通り、僕から動くつもりはない。

そしたら、まだまだ自分の性癖、M気質に気がついていないホムラさんは、どうするんだろう。

「……っく。わかったよ、動けばいいんだろ。動けばっ!」

大きなお尻が、僕の股間に打ちつけられる。

「ええ。そうやってイクまで腰を振ってください」

「んーっ、おいっ。ケ、ケツの穴にツバを垂らすなっ!」

返事はしない。

黙って媚薬効果のある唾液をアナルに向かって垂らす。

糸を引いて落ちたそれは肛門のシワを伝って、僕のを啜え込んでい
るアソコへ。

どのくらい保つか楽しみだ。

「くくっ。もう堕ちかけてっし。ケツマンコに媚薬が染みて、チンポをぶち込んで欲しくなってるんだろな。ねーちゃんセンセ、頑張れー」
「ムダなのっ。ととさまがこうなったら、アナル調教コースは確定なのっ!」

「そんじゃオレ達も手伝うか、セイ」

「うんっ!」

「あたしはアナルなんて、あゝアゝッ!?!」

セイの魔力が放たれて、フウカの下腹部に吸い込まれる。

さつき僕のお腹にもう1本のアソコを生やしたのと同じ魔法だ。

「へへっ。通常時のとーちゃんチンポで口を犯してやるよ、ねーちゃんセンセ?」

「セイはおっぱいを責めてあげるのっ」

こうなるとホムラさんは自分で腰を振るところじゃなくなっ

まうんだけど、だからってウチの子達がここで止まってくれるはずがない。

まだ射精はおあずけかあ。

「……んぶっ!? んんぶっ、んーっ!?」

「へっへ。ねーちゃんセンスのクチマンコ、なかなか具合がいいな」

「んーっ、んっ、ん——っ!」

「あは。セイの乳搾りも気に入ってくれたみたいなのっ♪」

アヤメさんに視線をやる。

幼馴染で相棒で親友で、レズプレイのパートナーが男にバックで貫かれながら、股間から男性器を生やした少女に口を犯され、もう1人の少女はまるで牛の搾乳でもするようにその大きなおっぱいを責めているんだ。

正直、意識を取り戻してこんな光景を見たら、僕らがホムラさんを犯してると思われそうで気が気じゃない。

「やりすぎて気がついたアヤメさんに攻撃されたりしないでよ、ホント……」

「へーキへーキ。なんならシックスナインにして、オレがとーちゃんチンポでズボズボしてやるし」

「もし気がついたら、セイも舐めまくってあげるのっ」

「んっ、ん——ッ!」

「あ、ホムラさんイッてる」

はっや。

でもすんごい締め付けと蠕動。

「もうかよっ!」

「うん。残念だけど白目まで剥いてるや。まあ手は人型のままだけど、セイに乳首責めなんてされたらねえ」

「まあなあ。射精がまだならオレ達がヌイてやろうか、とーちゃん?」
「いいって」

「んじや来い、セイ。とーちゃんチンポでガン突きしてやるぞ」

「わっいっ♪」

この部屋のソファは、僕が床に座っているのと同じくらいになっ

てしまうほど背が低い。

なのでフローリングの床に突っ伏してしまっている状態のホムラさんからアソコを抜いて、優しく仰向けに寝かせた。

それから、半分くらいしか減っていない缶ビールを持ち上げる。

「あはあ、ととさまチンポ最高のっ♪」

「セイのロリマンコもたまんねえぞ。さすが淫蟲だよなあ」

「こらこら、さらっとセイの正体をバラさない」

「へへっ、まあまあ。ドーセアナルセックスすんならセイの触手で腸内洗浄するんだから、別にいいじゃんか」

「あー。僕はそのままでいいけど、普通の女の人は嫌がるか」

「後悔先に立たず、美人のだってウンコは臭いってな」

「そんな格言っぽく言われても」

人様の家の冷蔵庫から勝手に缶ビールを持って来る勇氣なんて、僕にはない。

ビールを飲み干したので、アヤメさんのワイングラスに手を伸ばす。

それを飲み終える前に、アヤメさんがその豊満なお胸を揺らしながら身を起こした。

「ううん……」

「気がつきましたか。ワインをどうぞ」

「ありがと。……ホムラもノックアウトしちゃったのね」

「ええ」

「まあそれはいいんだけど、セイちゃんとフウカちゃんに何をさせてるのよ」

「いや別に僕がさせてる訳じゃ」

セイにのしかかって腰を振りながら、フウカがニヤツと笑う。

正常位で喘いでいるセイは僕達の会話なんて耳に入っていないよ
うだ。

「例の肉体改造魔法、対象が六堂くんじゃなくっても発動できるのね」

「はい。ワイン、僕もいただきますね」

「いいけど、飲むならグラス出すわよ？」

「こういうのは同じグラスで飲むからいいんですよ」

「そう。……にしても、元気ねえ」

「はい?」

「これよ、コレ」

股間に柔らかな感触。

勃起したまんまの僕のアソコを掴んだアヤメさんの白く柔らかな手が、ゆっくりと上下する。

「あー、気持ちいいです」

「んふ。シコシコしててあげるから、ワインをちょうだい」

「あ、はい。でも、こぼさないで飲めます?」

「こぼさないように飲ませてくれたらいいだけよ」

「……なるほど。なら、こうですね」

口移しでワインをアヤメさんに飲ませると、ありがとうでも言うように股間への刺激が増した。

2回、3回。

僕が口移しでワインを飲ませる度、股間への刺激は強くなってゆく。

「もうダメ、唾液の媚薬効果で口の中がジンジンするわ」

「とりあえずフェエラで口を満足させるか、挿入してキスしながらイクまで腰を振りまくるかですね」

「……迷うわね」

「そんな真剣な顔で言われると、意地悪したくなりますよ」

大きな乳房に手を伸ばす。

麓から、撫で上げるように。

「んうっ」

頂を目指した指先が乳輪に届きかけたら、違うルートでまた下山。

それを何度か繰り返し返すと、切なげに眉根を寄せたアヤメさんは僕の尿道を人差し指の腹で優しく擦った。

「どうするんです、その指についたガマン汁を?」

「考えてもなかったわ。ただ、六堂くんが興奮してくれてるのを確認したかったの」

「ならそのガマン汁は、自分でクリトリスに塗りつけてくださいよ」
「そ、そんなの」

僕の体液には媚薬効果があるけれど、尿道から滲むガマン汁のそれはザーメンに次いで効果が強い。

前戯の途中でクリトリスなんかにまぶしたら、それこそすぐにでも僕に跨って腰を振らないとおかしくなってしまうくらいにだ。

「しないなら、フェラも挿入もなしですよ？」

「ううっ」

「僕は、ホムラさんのアソコを使って射精すればいいだけだし」

「す、するわよ」

「やった。なら、ご褒美にこの淫乱おっぱいを揉みますね」

やわやわとFカップの巨乳を揉みながら、白くて細い指を自分の股間へと伸ばすアヤメさんを見守る。

その指が目指す場所へと到達した瞬間、アヤメさんは小さくではあるけれど身を震わせて、僕の腕を痛いほどの力で掴んだ。

能力者ではない一般男性なら、腕の骨が折れていてもおかしくはないほどの力。

こういった事があるので能力者の、特に女性はずいぶんと苦勞をしているらしい。

なにせ一般人とセックスをするには免許が必要で、その試験は人前でセックスをして見せる実技なんだそうさ。

だからホムラさんとアヤメさんのように、レズプレイでお互いを慰め合う女の人達も多いんだろう。

「つく。ううっ。こ、こんなのっ……」

「もしかして、クリトリスに触れただけでイツちやいました？」

「え、ええ。誰かさんが、焦らしながら恥ずかしい事をさせるから」

「焦らされるのも恥ずかしい事を強制されるのも、どっちも大好きでしょうっ?」

「まあ、ね」

「なら今度はそのままオナニーをしてください」

「またそんな意地悪を……」

「僕は、このいやらしいおっぱいの感触を愉しむのに忙しいんです。でも、アヤメさんの白濁して酷く臭うマン汁のニオイと味も愉しみたい。だからオナニーですよ。ほら、早くしてください」

「もうっ。仕方のない子ね。……んっ。あ、あまり見ないで」

こんな素敵な光景を見ないなんて選択肢はない。

アヤメさんは左手で僕の肉棒をシコシコ扱きながら、開いている右手で自分のクリトリスを弄っているんだから。

悩まし気に寄せられた形の良い眉がピクリと動く。

優しく整った顔は羞恥と快感で朱に染まって、クリトリスを指で擦るたびに大きな胸とお尻が揺れる。

目が離せるもんか。

とうるか許されるなら、アヤマさんのオナニーを見ながら意識のないホムラさんを犯したいくらいだ。

「ね、ねえ。お願いよ。イクなら、六道くんのでイキたいの……」

「かわいい事を。でも、オナニーをした指を僕に嗅がれて愛液を舐められてからじゃないと挿れてあげませんけどね」

「いじわるが過ぎるわよ。んっ、くうっ」

「そんな声を上げながら身をよじらせて。指を挿れたんですか？」

「え、ええ。そうよ。私、六道くんに、自分の生徒に見られながらオナニーしちゃってるの。あつく、んっ……」

「ちゃんと音を出してくれないとホントにしてるかわかりませんって」

「もうっ、いじわるなんだから」

そうされるのが好きなんでしょう？

僕がそう煽る前に、くちくちという音が聞こえ出す。

アヤマさんはわざと大きく音を立ててオナニーを、それを男の肉棒を扱きながらするというシチュエーションに、かなり酔ってるみたいだ。

「いいですねえ」

「ね、ねえ。口でもいい？」

「したいんですか？」

「そうよ。六道くんのを頬張りながらしたいの。お願い」

「なら、もっと激しくしてくださいね、オナニー」

「わかったわ」

優しく整った顔が僕の肉棒に寄せられる。

必要ないと判断したのか、ただ単に余裕がないのか、アヤマさんはそのまま亀頭を口に含んで舌を使い始めた。

くっちゅくっちゅ。

そんな水音はすぐに、ぐちゅぐちゅと鳴る激しいものになる。

どうやらアヤメさんは膣に挿入した指先を曲げ、そのまま膣壁を引つ掻くようにして抜いてまた挿入したりもしているらしい。

「アヤメさんは、健気ですよね」

「な、なに突然。頭を撫でながらそんな」

「ただ舐めたりしゃぶったりするので、人によって感触とか快感とかは違うものでしょう。手でも口でも、アソコでも僕を気持ちよくしてくれるアヤメさんは、いつも優しいんです。なんかこう、奉仕されてるって感じで」

「奉仕……」

どうやら自覚はなかったようで、アヤメさんは唾液でテカる肉棒を握ったまま考えを巡らせているらしい。

「思い当たったみたいですね」

「え、ええ。そうね。私は、それがしたかったのかもしれないわ。奉仕。言われてみればそうとしか思えなくなっちゃった」

「ホムラさんなら、マゾ奴隷の口奉仕とか言いそう」

「うふっ。間違いないわね」

「じゃあその指をこっちに。マゾ奴隷のマン汁チェックが終わったら、今度はオマンコ奉仕の時間ですよ」

「また、あのホテルでの最後の時みたいにしてくれる?」

ラブホテルでの最後のセックス。

それは、かなり変態的なものだった。

「アヤメさんもホムラさんも、すっごく興奮してましたもんね」

「そうね。ホムラなんかわざわざ六道くんに服を着させて、それから逆レイプごっこですもの」

「あはっ。それを言うなら、アヤメさんだって」

頬が瞬時に紅潮したアヤメさんは、きつとあの時の事を鮮明に思い出しているんだろう。

でもそのかなり変態的な行為の記憶は今こうして自分から再現を望むくらいに気に入っていて、そんな自分がはしたなく思えてさらに興奮してるんだと思う。

「そうね。またあんな風にしてほしいわ。そのためなら、なんでもしちゃおうと思うの。そのくらい、あれは強烈だった」

白くて細い手が動く。

亀頭を濡らす唾液を、全体にまぶすように。

触れている亀頭がまるで宝石でできているような優しさで。

「また恥ずかしい命令がされたいんですか？」

「そうよ」

「恥ずかしい場所のニオイを嗅がれて」

「ええ。六道くんになら、いいわ」

「どうせお漏らしイキするんだから今ここで立ったまましてくださいって言ったら、大好きな恋人にプロポーズされた女の人みたいに、うっとりとした表情でしたもんね」

「そして緊張から放尿できない私を、私のお尻を六道くんはぶつてくれた。何度も、何度も」

「こうやっておねだりされたら今日だってそうするし、またイクのを止めるために乳首を振り上げたりしますよ？」

「されたいのよ、六道くんになら」

肉棒を握っていない方の手。

アヤメさんはうっとりとした表情でそれを、淫液で濡れ光っているのが遠目からでもわかる手を僕の鼻先へ差し出す。

「くっさいマン汁ですね。人前でオナニーをさせられてここまでの本気汁を出せるのは、よほどの淫乱変態女だけでしょう。恥ずかしくないんですか？」

「恥ずかしいわ。言葉にできないくらい、恥ずかしいの。もう1人の冷静な自分が、心の中で正気に戻って叫んでるような気さえしちゃう」

「でも、やめられない」

「やめる気もないんでしょね、きつと」

どうしようもないメス豚ですねえ。

そう言った瞬間、アヤメさんは大きく身を震わせた。

巨乳が揺れるほどに。

「クサイなあ。ただでさえ濁って粘っこいのに、それをあんな音を立ててかき回すから泡立っちゃってるし」

「ご、ごめんなさい。許して……」

「どうしようかなあ」

そんな会話をしながら、嗅いただけで勃起してしまいそうなアヤメさんの淫液を舐め取ってゆく。

「お願いよ。私、六道くんのためならなんだってするわ」

「本気で言ってます?」

「当然よ。たった1晩、たったそれだけの時間を六道くんなしで過ごすのがつらくて、私もホムラも浴びるようにお酒を飲んでどうにか眠れたんだもの。お酒が抜け切ったのは1時間前くらい」

えっと、教師がそんな状態で会議に出ていいんでしょうか。

もちろん思っても口には出さない。

今はそれどころじゃないからだ。

「じゃあアヤメさんには僕の所有物に、メス豚マゾ奴隷にでもなってもらおうかな。そしたら自分の所有物の粗相は、僕の責任って事になるでしょう?」

「ああ。私は、そう言ってほしかったのね。駐車場で、ううん、職員会議で自分が受け持つ生徒の中にあつた六道くんの写真の顔を見た時から、ずっと……」

「じゃあ、いいんですね?」

「ええ。私を、六道くんのモノにして。メス豚マゾ奴隷って罵りながら、好きなように使って」

「なら、契約のキスです」

「んっ」

アヤメさんの指の淫液はすべて僕が舐め取ってある。

でもアヤメさんは自分の淫液の味がする僕の口の中を、本当に奉仕としか言いようのない丁寧さと熱意を持って舌を隅々まで踊らせた。キスを終えてすぐに抱き締める。

耳に口を寄せる。

「じゃあ次は僕のメス豚マゾ奴隷に、オマンコ奉仕をしてもらおうか

な」

「嬉しいわ。ご主人様……」

横たわる。

するとすぐに巨乳を揺らしながらアヤメさんは腰を跨いで、僕の龟头はこれまでで一番と断言できるほど熱く、濡れたメス肉に包まれた。

肘枕をしながら揺れる巨乳と蕩けている表情と、それが淫靡さを醸し出しているダンスを、どのくらい眺めていただろう。

ふたなりセックスごっこを終えてセイを後ろから抱き締めながらまったりとしていたフウカが、「ナイスタイミングだ、センセー！」と叫ぶ。

「うあー。まーた意識を失ったのか、アタシ」

「セイに搾乳プレイなんかされたら当り前だつての。それより、ビール持つてくつから記念に乾杯しようぜっ」

「記念？ なんのだ？」

返事をするべきフウカはすでにキッチンにダッシュしている。

だからその代わりに、両足を投げ出すように座つてその間に両手を置いてるセイがいい笑顔を浮かべた。

「完堕ち記念なのっ♪」

「はあ？」

「アヤメせんせー。せんせーが、ととさまの何になったのか教えてあげてほしいのっ♪」

「あんっ♡ 私は、あつ、六道くんの、んんっ、所有物になったのっ♡

ああつ、ご主人様チンポ良すぎて腰が止まんない、また、またイクっ♡」

「おいおい。なーにやってんだか……」

呆れた表情でホムラさんが肘枕の僕を見下ろす。

「いやあ。軽い気持ちで煽つてたんですけど、アヤメさんが予想以上の食いつき具合でして。ならもう、ありがたくいただいちゃおうかな、って」

「ダメ、またあ♡ イク、イクイクイクイクッ♡ つううんっ♡」

「幸せそうにイツてんじやねえつての、副担任。喘ぎ声までトロトロになつてんぞ」

「とーちゃんのマゾ奴隷になるつて宣言してオマンコ奉仕を命令された時から、ずーつとこんな感じだぞ。エロマンガならぜつてー語尾にハートマークが付いてっから。はいよ、ビール」

「ととさまもどーぞなのっ♪」

思わぬ形でホムラさんとアヤメさんに再会した翌日、入社して挨拶もそこそこに桃さんから告げられたのは、これまた思わぬ形の仕事だった。

「じゃあ駐車場で棗さんを待つて、今日は支社でアルバイトをすればいいんですね？」

「ん。いい金額になるから。バイクで行つて、帰りはそのまま直帰でいい。そして明日は休み」

「わかりました。では、いつてきます」「ん」

突然のアルバイト。

というか、アルバイト中にアルバイトするのもアルバイトと呼んでいいんだろうか。

そんなどうでもいい事を考えながらエレベーターで1階まで降りると、エレベーターを待つている人が1人いた。

真っ白なスーツ。

派手な髪型。

セイとフウカも大好きでよくふくらませてはしゃいでいるフーセングラムが割れると同時に、その少年が僕を指差す。

「やっぱこないだのあんちゃんだ。あん時はありがとうなつ！」

「あー。あんな暗い路地で走りながら擦れ違っただけなのに、よく見えてたし覚えてたねえ」

「昔っから、昼でも夜でも人より目が良くてな」

そう言いながらニカツと笑うのは、僕がテストに合格して桃さんの事務所で飲み会をやった時、買い出しに行く途中で擦れ違った少年。

少年はガムを噛みながら器用にタバコを啜えて火を点け、なぜか自己紹介を始める。

仕方なく僕も名乗ると、今度は自分の勤め先は3階のニコニコロー

ンだから休みの前日の夜にでも飲みに行こうぜとまで言われてしま
う。

「ヤクザってのに興味はあるけど、付き合ってアルバイト先に迷惑は
かけられないからなあ」

「だーいじよぶだつて。ヒロキの勤め先には顔出したりしねえし。ほ
ら、これが俺の名刺な。スマホの番号もアドレスも書いてあつから、
飲みに行ける時にでも連絡してくれ。なんたつてヒロキは、ツキをく
れる存在だからな。じゃ、そういう事で。連絡待つてんぞー」

ひらひらと手を振りながらエレベーターに乗つて少年、結城真白が
上に消える。

「台風みたいな子だねえ。同年代の男の子とこんなに話したの初めて
だ」

(まーいいんじやね。あの日とーちゃんに助けられたとは思つてねえ
けど、逃げ切れたラッキーはとーちゃんのおかげかもつて感じてるみ
てーだし)

(座敷童じゃないんだけど。僕もフウカも)

(それよりとときま、棗ママの車が駐車場に着いたのっ)

(わわっ。急げ急げ)

押し付けられた名刺を胸ポケットに突っ込んで慌てて駐車場まで
走ると、赤いボルボの窓が下がつて棗さんが顔を出した。

「おはようございます、棗さん」

「おはよう。桃から話は聞いてるわよね？」

「あ、はい。今日は棗さんの指示に従つて、それが終わつたら帰つてい
いって」

「それだけ？」

「ですね」

「またあの子は。今夜あたり、本当にヒロキ君のデカチンで躡けてや
ろうかしら」

「あはは」

「じゃあ支社に着いたら説明するから、まずはバイクでこの車の後を
追つて」

「了解です」

僕が愛車を駐車場に引き出してエンジンに火を入れると、棗さんのボルボはゆっくりと走り出す。

それに導かれて辿り着いたのは、驚くほど大きくて高いビル。

従業員用だという駐車場から上を見上げると、最上階が霞んで見えるくらいだ。

「でっかー」

「能力者の家系に生まれた一般人。能力者でも裏の仕事に向かなかつたり、そうであってもそれを望まない者達を食べさせていくために必要な規模なのよ。さ、行きましよ。まず正面玄関に向かって、受付の場所を覚えてもらおうわ」

「はい」

とんでもなく高いビルの、とんでもなく大きな玄関。

そこを抜けると天井の高いホールがあつて、これまた大きな受付があつた。

そこに8人もいる女の人は、皆さんがそれぞれ違う魅力を持った美人さん達。やつぱ顔で選んでるんだろうか。

「今日、ヒロキ君にあるカードが発行されるわ。次からは、それをこの受付に提示して目的を告げれば大丈夫」

「次ってなんですかとか、なんのカードだとか、なんのために提示するんだとかは」

「後でわかるわ。1時間か2時間後、またここに来て流れを説明するし」

「はあ」

「じゃ、こっちよ」

エレベーター。

それに僕を連れて乗り込んだ棗さんは胸ポケットからカードを出して、ただの継ぎ目にしか見えない階数を指定したりドアを開け閉めしたりするパネルの溝に通す。

「ああ、カードってこういう」

「そうね。ところで、エレベーターには慣れた？」

「ぜんっぜんです！」

「そう。なら、頑張りなさい。目的地はかなり上にあるから」
「げえっ」

地獄のような数分間。

ようやくそれを終えて動かない床に降り立った僕は、アルバイトを始める前からすでにぐったりしてしまっている。

「唯一の弱点がエレベーターだなんて、本当に不思議な子ねえ。高いところは平気で、ビルの10階から飛び下りたりは平気でするくせに」

「そういう問題じゃないんです。それに、こんなの非効率ですよ。何分もエレベーターに閉じ込められてなきや行けない部屋で仕事をするより、階段でサツと行ける場所で仕事をした方がいいに決まっています」

「はいはい。着いたわよ」

「ちよ、ノックとかっ」

「自分の部屋に入るんだからいらさないわよ」

ノックもせずに棗さんがドアを押しかけたので思わず止めかけてしまったけれど、なるほどそういう事か。

「でも人が」

「いるわよ。すぐに紹介するわ。お待たせしてごめんなさいね」

「いえいえ。とんでもありません」

「気にしなくていいよ、室長」

部屋にいたのは2人。

メガネとスーツの似合う背の高い20代の男の人と、まるでテレビに出ている女優さんのような女の人。

「これがヒロキ君。ちなみにこの子、あまりテレビとか観ないのよ」

「あらら。せつかくの趣向が台無しじゃん」

「普通が一番よ、あなたはいつでも誰より魅力的なんだから。紹介するわね、ヒロキ君。こちらの男性は、早瀬さん。水系で、一般人と同じ医師免許も持つてる腕のいい医療系能力者よ」

「よろしく」

「よ、よろしくお願いします」
初めて見た。

なんというか、完璧ってくらいに色々と優れてる大人の男の人に。身長が高くてほどよく筋肉質で、知的なハンサム。

僕もこういう大人になりたいなあ。

「うちは夜宮。室長の部下。どんな能力者かは、クイズにしよつか」
「えっと、あーっと」

言い淀む。

だって、見た目だけで能力がわかるはずもない。

「ヒント。うちは、いつもこんな姿じゃない。顔や髪型、体形だって違う」
「えっ」

となると……

「まさかの変化系でしたか。あれ、変身系だっけ？」

「ぎーんねん」

「ええっ!？」

「ヒント。うちは今、たしかに変化はしています。高視聴率ドラマの主演をやっている女優に。でもこれから、キミが今セックスがしたい相手に変化します。さて、どうしてそんな事ができるんでしょう」

「それはやっぱり読心系の」

「ちなみにうちが読めるのは、性癖や今したいプレイの内容、それをしたいと思う相手の容姿だけ」

「えっと、そんな限定的な能力ってあります？」

「あるんだよねー、これが。難しいみたいだから、問題を変更。うちの能力は種族系です。さて、どんな種族でしょうか」

「種族系。……ヤバイ」

なにがヤバイって、棗さんの視線がヤバイ。

その目は、教師に恥をかかせるなど言っているに違いない。
思い出せ。

頑張っと思い出せ、僕ー！

じゃないと後が怖いなんてもんじゃないぞー！

「ヒロキ君?」

「ひやいつ。しゅ、種族系はですね」

「種族系は?」

頭をフル回転させて過去の授業を思い出す。

「ちやんと話を聞いているのかしら?」と言いながら足を組み替えるついでに、赤いパンティーをチラリと見せる棗さん。

ノートを取る手元を覗き込みながら、大きなおっぱいを僕の肩で潰すようにして耳元で色っぽい吐息を漏らす棗さん。

小テストで満点を取った僕に「ご褒美よ」と言つて、微笑みながらパンティストッキングで蒸れた足を差し出した棗さん。

「顔面騎乗して放尿してほしかったら、今日も100点を取りなさい」、そう言つてストリップウオッチをスタートさせる棗さん。

……ダメだ、これ勉強じゃない。

(ととさま。足コキ暗記シリーズなのっ)

(ああっ!)

(もつと言うと、初めて全部の暗記に成功して赤い脱ぎたてパンツのニオイ嗅ぎながら足コキで射精させてもらった日な)

(あれかあっ!)

「ふふっ。学生の頃を思い出すなあ」

「覚えの悪い生徒には、補習が必要よね。それも、徹底的なスパルタで」

「種族系はその名の通り神話なんかに出てくりゅ種族の姿になれる能力で、数は少ないけど強力な能力ですっ!」

「にはは。カミカミ少年爆誕」

ほっつといってください。

こっちは命がかかっているんです。

「笑つてやるな、夜宮。思春期の心は傷を負いやすいんだ」

「あら、残念。覚えてたのね」

「も、もちろんですよ」

「というか、問題が難しすぎる。いくら好みのかわいい男の子だからっておふざけが過ぎるぞ、夜宮」

「っはー。出たわ出たわ、マジメガネのお小言が」

「うるさい。いいから教えてやれ。時間は限られてるんだぞ」

「それを言われちゃ仕方ないわね。うちの種族は」

そうとまで言って夜宮さんは僕を手招きする。

なので歩み寄ると今度は仕草で耳を貸せと伝えられたので、素直に従った。

清潔で広いオフィスの空気が揺れ、僕の鼻になんとも言い難い、いい香りが届く。

「……………サキユバス」

その囁く声、それと耳にかかった吐息で、僕は一瞬にして勃起していた。

「サキユバスって。そりゃあ耳元で囁かれるだけで勃起しちゃいますよねえ」

「には。じゃ今度は、その勃起チンポに意識を集中して」

「はあ」

「それっ」

痛みが、スツと音もなく消える。

僕の肉棒は言霊系の能力のレジストに失敗したような感じで意思とは関係なく勃起していたので、ズボンの生地を押し上げてかなり痛みを感じていた。

それが、その痛みが今はまったくくない。

「すっご。相手の勃起を操れるんですか」

「それだけじゃないんだなあ。うちとセックスをしてる時はどんな能力者でも、たとえば玉将級の能力者だってうちを殺せない。それどころか、かすり傷さえ負わせる事ができないんだよねー」

「と、とんでもないですね」

「本当にね。セックス中ならどんな痛みも、負うはずだった外傷の分までも快感に変化させるなんて。とんでもないとか言えない。是非とも解剖してみたいものだ」

「ほえー」

てか解剖って。

お医者さんジョークなんだろうけれど、どこまでも生真面目そうな表情でメガネをくいつと上げながら言われると反応に困る。

「だからさ、キミ。うちとならどーんな変態プレイでもできるよ？
それも、キミの限界が来るまで何回でも連続で」

「おおっ」

「まずは喉奥どころか食道まで使って胃に直接ザーメンを、その後はオシッコを注ぎ込む？ それともアナルにチンポぶっ刺して、内臓を通して口から出たチンポを手コキさせる？」

「さ、さすがにそこまでののは……」

「どこのホラー映画ですかそれ。」

「ちえっ。キミほどの変態でもムリかー」

「当り前だ。夜宮の性癖に付き合える人間などそうはいない。それより、そろそろ試験を始めるぞ」

「へ？ 試験、ですか？」

「聞いてないんですけど。」

「そ。ここであちとパコって中出し。簡単っしょ？」

そんな試験があつていいんですか。
いいんですかそうですか。

そのミニスカートを捲り上げて見せている横が紐になった黒いパ
ンティーを嗅ぎながらバックでのしかかつて腰を振りまくつてもい
いんですか、そうですか。

「試験は簡単だ。試験官免許を持つ俺がモニタリングしている夜宮の
体を使って3回射精するまでの間、一般人が怪我を負うほどの数値が
観測されなければ、それで合格となる」

「ああ、これって剛力とかの特性がある人が、自由に一般人とセックス
をするための試験だったんですね。そっか、これがそうなのか」

「ついでに言うと、これは授業でもあるのよ」

「授業、ですか？」

「ええ。上には上がいる、その事実を身をもって体験しておきなさい」
「上って」

セイがいる僕より上なんですか？

そうとまではこの場で言えないけれど、棗さんはそれをわかつてい
るはずなのに、ハッキリと頷いた。

正直、簡単には信じられない。

「ま、ヌイてみせればわかるっしょ」

僕の前まで進んだ夜宮さんがしゃがみ込む。

そうしてすぐに、僕のベルトがカチャカチャと鳴った。

「えっと、いいんでしょうか？」

「いいに決まってるじゃない」

「それに最初は授業の方だろうからね。試験が開始となったら、ちや
んと伝えるから」

「はあ」

あつという間に下半身だけ裸にされると、夜宮さんは妖艶な笑みを
浮かべながら僕の肉棒を持ち上げる。

「あは。生意気チンポ、みーっけ」

「も、持ち上げられただけで勃起しそうなんですけど」

「にひひ。でもまずはこうだね。へーんしん、っと」

変身、変化。

そういった能力があるのは知っている。

でもまさか、それが発動する瞬間をこの目で見る日が来るなんて想像もしてなかった。

0、1秒。

いや、もつと少ない時間だったかもしれない。

一般人なら注視していても気づかないほどの時間だけ夜宮さんの姿がブレて見えると、そこにはさつきまでとはまるで違う女の人が、同じ姿勢で僕の肉棒を手で持ち上げていた。

「うわあ。ホントに変身した。でも、どこかで見たようなお顔ですね」

「桃の雇用試験じゃない？ テストにちようどいいから回せって言われて紹介したのよ」

「ああつ、そっか。あの淫気詰まりの奥さんだ！」

凄い。

本当にそっくりで、変身を目の前で見たんじゃないやなかったら「おひさしぶりです」と普通に挨拶してしまいそう。

「なるほどね。キミは最近、経験豊富な女のテクニクに興味があるよ。じゃあ、たーっぷりとサービスするよ」

「あ、ありがとうございます？」

あの清楚な奥さんが、僕の肉棒に顔を寄せる。

淫気詰まりを起こして夢現の状態で異性の性器を求めてた時とは違う表情。

清楚。

第一印象はと問われたらそう答えるしかない美人な人妻さんが、恥ずかしそうにしながら舌を伸ばす。

そして、その舌は尿道にやんわりと着地した。

「ううっ」

「あなたのお汁、どこか甘い香りがするわ。はしたない真似をしてご

めんなさいね」

「とっ、とんでもない快感なんですけど。これって能力なんですよね？」

「だね。最初は授業って言ったっしょ。弾けるならそうしてくれていいよっ。」

弾く、弾き返す。

それに守りが破られる。

レジストという言葉に馴染みのない世代は、干渉系の能力者の攻撃を受け流す時、そういう言い方をすると棗さんが言っていた気がする。

もしかすると、夜宮さんは僕よりずっと年上なのかな。

でもま、レジストしていいなら、それが可能なのか遠慮なく試させてもらおう。

(セイ)

(はいなのっ)

(この人、サキュバスってのは本当にヤバイ気がする。射精を全力で止めて。僕の方でもやっつくけど)

(任せてなのっ！)

(そんなヤベーのかよ、とーちゃん?)

(ヤバイなんてもんじゃないくらいにね。たぶん夜宮さんの方も、全力なんだと思う。セイがいつも視界に表示してくれる僕とセックス相手の快感度、どっちもメーターを振り切っちゃってるし)

(ふへー。マジかあ)

(尿道のガマン汁を舐められた時から、ずっとね)

(おっかねえなあ。一般人なら即射精じゃん)

だから気合を入れなければ。

丹田の気をキュツと凝縮し、戦闘前の心構えをして肉棒の根元まで舐め終えた夜宮さんを見下ろす。

ねっとりとした、玉袋を口に含んで睾丸を舌で転がしてマッサージまでする玉舐め。

そしてアナル舐め。

異変は、僕が快感でアナルを思わず強く締めた瞬間に起こった。

(ととさま、ダメ、破られるのっ！)

(くっ)

(お、おいおい。ヤリマンおばさんに変化したねーちゃんは、チンコに触れてすらいねえんだぞっ!?)

(……も、もうムリ)

フウカが言っていたように、僕の肉棒には誰も触れていない。

でも夜宮さんが最速でもするように肛門を舌先でノックした瞬間、僕の肉棒は大きく跳ねた。

「くあああっ!?!」

迸る。

白い雨が降る。

いつもは息をするより簡単にガマンできる射精だけでなく、同じく簡単にしている射精量の調整までもが破られたらしい。

師匠達が「かなりの勢いで水を出してる蛇口の先を指で押さえたみたいなの射精」と言っていたそれが、止まらない。

「こ、これは」

「医師からすれば興味は尽きないんでしようけど、この子を研究材料なんかにする気はないの。それと、もし……」

「絶対に他言なんてしませんよ。もしそうしたら数秒後には電腦妖精がそれを掴んで、飛車角が俺を斬りに来るんでしようからね」

そういえば桃さんって、電腦妖精って二つ名だったなあ。

「はあっ、やっど止まった。完敗です、夜宮さん。いい勉強をさせてもらいました」

「あら。誰が授業を終わるって言ったの？ チャイムはまだ鳴ってないわよ」

「えっ。ちよま、……ぐうっ!?!」

最後のザーメンが垂れて落ちそうになっていた肉棒の先。

夜宮さんはそれを啜えると、ゆっくりと顔を前へと進めた。

「なんと言うか、怪獣大決戦って感じね」

「え、ええ。どちらも規格外すぎるでしょう。常人が見たら卒倒しま

すよ、こんなの」

棗さんと早瀬さんがそう言いながら呆れるのもムリはない。

僕だつてかなり特殊な能力者の1人だけれど、それでも目の前の光景が信じられないくらいだ。

あの奥さんのが兎戯に思えるほどの舌技。

極上のフェラチオを僕の肉棒に加えながらされていた前進が、止まらない。

それどころか夜宮さんはいにその鼻を僕の陰毛の茂みに押し当て、さらに顔をひねって根元までを啜えてしまった。

計った事はないけれどおそらく30センチ以上はある、しかもビンビンに勃起した肉棒がすべて飲み込まれたのだから、僕の亀頭が当たっているのは本当に食道なんだろう。

口、喉、食道。

その構造は特に考えなくともすぐ思い浮かぶし、その知識が正しいのならば、こんなフェラは物理的に不可能でしょうと叫んでしまいうになる。

それをこんな容易く、こんな体勢で。

いったいどうなっているんだと夜宮さんをしげしげ見下ろしていると、顔をひねっているので片方だけ見えているその目が、笑っている気がした。

「それじゃ、最後の仕上げ。うちの本気フェラ」

「どっ、どっからしゃべってるんですかつ!? って、ぐうっ。な、なんだこれ。舌、なんですか。こんなたくさんの舌が、ま、まだ増えるつ!?」

「ほーら、ベロで押して食道の出口を実感させたげる。うちの胃に、直接チンポミルクを吐き出して」

たしかにカリ首が丸みのある肉の角、食道の出口を滑らされるのを感じる。

つまり、この下は夜宮さんの胃なんだろう。

でも……

「ちよ、それどころじゃないですからっ!」

唇を抜けてすぐ、当り前の場所にあるはずの夜宮さんの舌はちゃんとそこにある。

でも、それ以外にも無数の舌があらゆるところから生えて、そのすべてに僕の肉棒が攻められている状態だ。

全力の守りは、とうに突破されている。

それでも意地で耐えられたのは、ほんの一瞬だろうか。それとも、数秒は意地を見せられたんだろうか。

わからないまま僕は、強く歯を食いしばりながら射精した。

女の人の、夜宮さんの胃の中に直接。

「凄いですね、彼。5秒も夜宮の本気に耐えて見せましたよ」

「本人は悔しくて、それどころじゃないみたいだけれどね」

「くっはあ……い、いえいえ。完敗ですからね。全身に鳥肌を立てながらの射精なんて、いい経験をさせてもらえたなあって思っていました」

「はいはい、強がり乙。でもま、うちも悔しいのは一緒」

勃起したままの肉棒を簡単に口から抜き、尿道からザーメンをチュウツと吸った夜宮さんは苦笑している。

「そうなんですか?」

「うん。でも、そういうのはまた今度。ここからは試験だから」

「あ、はい」

「じゃあそのソファアに座って。最初は対面座位で、女を抱き締めながら腰を振って射精。次は後背位。最後はキミが最も興奮する体位で好きな場所を好きなように使う。そしてその3回のうちの1回は、うちと早瀬が納得できるくらいの全力で腰を振って」

「制限時間は1次試験から3次試験まで、すべて5分。5分経ったら夜宮の本気で射精に導かれる。それを3回終えるまで一般人が怪我を負うほどの数値が観測されなければ、それで合格だ」

「わかりました」

「いい返事ねえ。そんなに素人を自由に抱きたいのかしら」

「ギクリ！」

「ち、違いますよ。こんな試験があるのに和歌山からたまに行く京大

阪で淫気詰まりなんかの祓い仕事をさせてもらってたのも、こないだの雇用試験の時だって師匠達や棗さんや桃さんが監督責任をつて事で僕がやらせてもらってたんでしよう？ そんなのが申し訳ないから、1発合格を目指すんです」

一息で言い切った。

これが鍛冶場の馬鹿力、ってやつか。

「いいわね。頭を使う子は好きよ。たとえそれが、本音交じりのごまかしでもね」

優しく微笑みながら言われても。どう返せばいいやら。

それに子供扱いされてるのがまるわかりで、ちよつと悔しい。

「じゃあ夜宮さん、お願いします」

「はいはいー。試験は平均的な膾でするから、キミの方でちゃんとケガをさせない大きさに調節するんだよ？ そういう能力者なら、それも試験だから」

「はい」

「それじゃ、まずはこうだね。ほいっとな」

「うええっ!?!」

妙な声で叫んでしまう。

試験を受けるためにソファーに座った僕の目の前で、また夜宮さんが変身したからだ。

「これはこれは。くくっ」

「うふふっ。試験官が受験者を笑っちゃダメよ。……ぶっ、あははははっ。ダメ、堪えられない。ひさしぶりに爆笑しちゃってるわ私」

「もー。ヒドイおじちゃんとお姉ちゃんだね、お兄ちゃんっ♪」

そう言っつて僕の頭を撫でるのは、どう見ても小学生の女の子。

ランニングみたいな薄いシャツにお尻が見えそうなミニスカート。それだけでなく、赤いランドセルまで背負っている。

「僕はロリコンじゃありませんよっ!?!」

「うんうん。お兄ちゃんはロリコンじゃないよねっ。ロリコンでもある生粋の変態、が正しいよねっ♪」

満面の笑みでなんて毒舌を。

ここは、なにがなんでも名誉を守らねば。

セイとフウカは普通の人間、能力者と違って加齢で成長するのではなく、妖異を狩ったり悪堕ちした能力者を殺したりする事である程度まで体が大きくなるそうだから、下手をすれば僕が高校生のうちに小学生くらいになってしまう。

僕がロリコンだと誤解されるのは避けたい。

「試験官、悪意のある試験対象の選定に抗議しますっ!」

「だそうですよ、百里室長」

「ならその姿になった夜宮さんが、ちゃんと能力で性癖を読んで変化しましたと宣言してくれればいいわ。それでいいわよね、ヒロキ君？」

「ええ。棗さんはウソと本当を見分けられますからね」

「じゃあ宣言します。うちはお兄ちゃんの性癖を能力で読んで、これから小学生のオシッコで黄ばんだ子供パンツをクンクンされながら、せつくすしてあげるためにこの姿になりましたっ♪」

……あ、パンツだけは貰っておこうかな。

「虚偽反応はなし。試験を開始しなさい」

「ウソでしょおおおっ!」

うんしょっ。

そんな声を小さく漏らしながら、小学生に変化した夜宮さんがミニスカートを捲くって純白の、いかにも子供らしい、ウサギをモチーフにしたかわいいイラストがプリントされたパンティーを脱いでゆく。「はいっ。おにーちゃんに、脱ぎたておぱんちゅプレゼントっ♪」
「ええっ」と

どうしたらいいんですかと棗さんと早瀬さんに目をやると、ちやうど棗さんが早瀬さんから紙カップを受け取るところだった。

コーヒーを飲みながら高みの見物ですか、そうですか。

「ん？ ああ。試験官、夜宮は受験者の性癖を読んでなるべく勃起がしやすいように導入をしている。遠慮せずやりたまえ」

「それともまた虚偽判定してみましようか？」

「……それはいいです」

「勝てる見込みなんてないものね。時間がないんだから早くしなさいな。ロリコンくん？」

「しばらくからかわれるなあ、これ」

だいたい、変化して服まで変わるのをおかしくない？

しかもそれにオシッコまで付いてるとか、本当なんだろうか。

「もうっ、お兄ちゃんの意気地なし。なら、えいっ♪」

「むぐうっ!？」

顔にパンティーが押し付けられる。

そして僕の鼻は、その布の湿り気を感じた。

ゴクリ。

そう鳴った自分の喉の音を聞きながら恐る恐る息を吸い込んでみると、そこには嗅ぎ慣れているけれどそれよりどこか甘い、アンモニアを含んだ二オイがした。

しかもそれは初めて嗅ぐ、混じり気なしの、純度100パーセント

のオシッコのニオイだ。

「愛液なしのオシッコのニオイ……」

「こーぶんする?」

「べ、別に」

「ふうん。そういうウソ、いつけないんだー」

パンティーが鼻から離れていく。

これが試験で、本当によかったかも。

もしそうじゃなかったら僕の手はパンティーを追って勝手に動いて、また鼻にそれを押し当てていたかもしれない。

高級そうなソファアのレザーが軋む。

「えっと、夜宮さん?」

「お兄ちゃんウソついたから、お股ペロペロしてオシッコをキレイにしてもらうんだから。お仕置きね」

「ええっ」

頭が小さな手で掴まれる。

すると夜宮さんは、小学生3、4年生にしか見えない女の子は、足を開いて腰を前に突き出した。

「ね、ペロペロして」

「試験だから仕方ないわよね」

「ですね。ここで時間を食ったら制限時間内に挿入できなくて不合格もあり得ます」

「制限時間5分ってこの時間も含めてですかっ!?!」

「もちろんさ」

それはヤバイ。

「なら、先にこうです」

「おっ。やっぱりやるねえ、キミ」

「夜宮、それは? 術が発動した気配がしたが」

「おそらく魔法系で、体液の媚薬効果を完全にじやないけど薄らせる術。これなら一般人でもこの子クンニやセックスが上手だな、で済むと思う。前準備ごうかーく」

「よかったあ」

「律儀ねえ。時間もないのに」

「わ、そうだった」

慌てて視線を女の子の股間に移す。

当たり前のように細い腰と、小さなお尻。

同じく当たり前に割れ目付近は無毛。

その割れ目は幅が驚くほど狭くて、長さもかなり短い。

そしてそこには見慣れたビラビラ、小陰唇とかいうのがほとんどなくって、見るからに柔らかそうな、ふつくらとした大陰唇の切れ目から淡いピンク色をしている。

それに、クリトリスが一瞬では見つけられないほど小さい。

「お兄ちゃん、はやくう」

「時間がないのに見蕩れちゃった。では、失礼します」

あまりに体と腰と割れ目が小さいので、できる限りそつと顔を寄せ
る。

「んっ。お兄ちゃんのベロ、きもちー……」

僕はスカトロプレイも大好物だけど、それを望まない人とした経験はないし、これからもするつもりはない。

だからこの、愛液の混じっていないオシッコを味わうのは最初で最後かも。

舐め取る動きも優しく、できるだけ慎重に。

小さな割れ目だし、尿道はまるで針の先も入らないんじゃないかってくらいだから、そこはすぐに舐め終わった。

するとそれを待っていたようなタイミングで、大人のそれとはだいぶ違う淫液の二オイが鼻に届く。

これも味わっておかなくっちゃ。

そう判断して舌先を向かわせると、驚いた事に小さな小さな膣の入り口はヌルつと僕の舌を飲み込んだ。

「ああ。お兄ちゃんのベロに犯されてるう♡」

別に興奮してないから。

これは試験だから。

そう自分に言い訳をしながら、酷く狭い膣の壁を舌で引っ搔くよう

にして淫液を味わう。

やっぱり、大人のそれとは違う味と香り。

いや、もしかするとこれは僕の体液と同じく、媚薬効果がある事が原因なのかもしれない。

ならばこの機会にしっかりと記憶しておくべきだろうから、幼い割れ目を舐めまくる。

(あーっと、とーちゃんさあ)

(どしたのフウカ?)

(制限時間あんの、また忘れてね?)

「ヤバイっ。夜宮さん、あの」

「いーよ。お兄ちゃんのおちんちん、うちの子供マンコでシコシコしたげる」

壁にかかっている時計に目をやると、おそらく時間はほぼないだろうという感じだ。

「残り時間、1分」

やっぱりか。

「まずはむきむきしてー」

「夜宮さん、早く。ってか僕がっ」

僕が夢中で幼い割れ目を舐めていた時にセイがサイズを合わせてくれていた、肉棒と呼ぶのもおこがましいような、勃起をしているのに亀頭のほとんどが皮に包まれているかわいらしい男性器。

それが小さな手で剥かれた瞬間、思わず声が出そうになった。

サキュバスって、本当にとんでもない。

剥かれただけで射精しかけるなんて。

「よーっし。おちんちん、いっただっきまーっす」

「ま、間に合うのかな」

夜宮さんが腰を落とす。

僕の肉棒はかなり小さいけれど、夜宮さんの女性器はそれよりも小さい。

なのでその狭い膣の入り口を肉棒の先が押すと、ふっくらとした大陰唇までが広げられて形を変えた。

僕はロリコンじゃない。

ロリコンじゃないけれど、これはエロい。

「はいっ、たあ……」

「い、痛くないですか？」

「うんっ。お兄ちゃんのおちんちん、きもちーよ。腰が動いちやう。

こうやって、あんっ♡」

「ホントだ。苦痛度は0で、快感度と興奮度は凄い高い」

「もうっ。お兄ちゃん、うちだけ見ててっ！」

「あ、はい」

見ろと言われても。

セイは肉棒を生やしたりサイズの調整はできるけど、僕の体はいつもと同じ。

その僕に小学生にしか見えない夜宮さんが跨って腰を振るのを見ていると、なんというか、絶対にしてはいけない事をしている感がパンパじゃない。

「ひうっ♡ お兄ちゃんのおちんちん、きもちーよう♡ あんっ♡

おなか、キュンキュンしちゃうのっ♡」

キツチリ音色や、その高さまで幼くなっている喘ぎ声。

それを追うようにカチャカチャと鳴るランドセルの金具の音。

子供が大人に跨って、腰を振っている。

でも、腰使いは熟練のそれだ。

「あ、出る」

足音にすら気づかなかった射精感。

それが急激に、小さな亀頭と一緒にふくらんだ。

「きてっ♡ お兄ちゃんのせーしで、子供マンコいっぱいにしてえ♡」

(量の調節は任せてなのっ♪)

(あ、ありがと)

「うあっ」

「んくくくっ！ あっいのいっばい、でてるうっ♡」

どっちだ。

今の射精は、夜宮さんの能力でしたのか。

それとも僕がこらえ切れず吐き出したのか。
どっちだ。

試験に関係はないんだらうけど、それが気になる。

「お兄ちゃん♡」

「は、はい」

「お兄ちゃんのせーしでいっぱいにされたまま、子供マンコがおちんちんとせーしでパンパンになったままキスしてっ♡」

「えっと、いいんですかね」

「いいに決まってるのっ♡」

強引なキス。

唇も歯も、絡みついてきた舌も酷く小さい。

でもさすがと言うべきかその舌の動きは絶妙で、僕はすぐ舌を絡め合うのに夢中になった。

それこそ、前触れなく顔を離された途端に「あっ」と小さく声を上げたくらいに。

「あは。お兄ちゃん、かわいいー」

「かつ、からかわないでくださいって」

「ね、次は後ろからズボズボして。ねっ?」

「そういえば次はそうでしたね。わかりました」

「やったあ♪」

状況が状況なので気にする余裕がなかったけれど、驚くほどキツキツな膣から肉棒が抜かれる。

そして僕と入れ替わる形で、夜宮さんはソファアの背もたれに手を置いて小さな白いお尻を突き出す。

「えっ」

「お兄ちゃん、目、やらしー」

僕が思わず声を上げたのは、小学生に変身してお尻を突き出して僕を誘う夜宮さんの横顔が、どこか哀しそうに見えたから。

試験中だし、本当にそう思ってしまったので口には出さないでおく。

「あ、いや。ごめんなさい」

「いいの。もつと見て、ほら。お兄ちゃんのせーし、出てくるよ。……んっ。こぼれてくのヤなのにつ」

ぷびゅっ。

そんな音を立てながら、穴の奥なんて全く見えない膣口から僕のザーメンが流れ出し、音を立ててソファァーに落ちる。

「多い。けど、一般的な量ではありませんよね?」

「うんっ。だから心配してないではやくう」

「二次試験、開始。今度は普通に愉しむくらいの気持ちでいいぞ、六道君」

「わかりました」

「……んっ。お兄ちゃんのおちんちん、おかえりなさいっ。はあんっ♡」

早瀬さんもああ言ってくれた事だし、今度は丸々5分の時間がある。

なのでまず時計に目をやり、日常生活では絶対に味わえない狭い膣を探るようにゆっくりと肉棒を埋めてゆく。

「お尻が小さいから、このサイズでも現実感がない。不思議な感じ」

「ねえ、お兄ちゃん。お願いだからもつと、もつと激しくしてっ! うちの子供マンコが壊れるくらいっ!」

「あ。そういえば1回は全力ででしたね。でも、本当に平気なんですか?」

「うんっ。だからはやくう」

「わ、わかりました」

腰を突き出す。

一般人でも痛みを感じない程度の勢いで。

「はあんっ♡」

しかし、これは凄い。

ここまで子宮口の感触が薄いのは初めてだ。

ゴリツとどころか、コリツという感触もない。ともすれば膣壁のヒダと間違えそうなそののすぐ奥に、柔らかな行き止まり。

僕はロリコンじゃないから確認する方法はないけれど、これがこの

年頃の女の子の瞳を忠実に再現したものだとしたら、夜宮さんはハンパじゃない精度の変化能力を持っているんだろう。

「全世界のロリコン向けの市場にこの動画やDVDを流したら、このビルがもう1つ建てられそうねえ」

「本当ですねえ。本社に属する能力者にのみ販売でもかなり稼げそうですねよ」

「でも男の能力者は、精通前から有力な家に囲われるのが普通でしょう？」

「……ですね」

「これは雑談ついでの世間話なのだけど、彼、ヒロキくんはこの春から能磨学園の高等部に入学するの」

「それは。……まったく、棗桃コンビが本社の最長老達からも恐れられる訳ですねえ。どこまでぐ存じなのやら」

「その桃はとある能力者の才能を見抜いて、すぐに本社を抜けて東京に来たわ」

「そして今度は室長までが。嵐でも起こす気ですか」

「まさか。巻き起こるのは、吹雪よ。誰もが一寸先さえ見えなくなりそうなほどの、ね」

上京20 (終)

二次試験も無事に突破。

そしてついに三次試験の開始が告げられると、僕はまず夜宮さんのランドセルを細い肩から抜いた。

「やあんっ、お兄ちゃんに裸にされちゃうっ♡」

「そうですねー。裸にされて舐めまくられちゃいますねー」

「舐めるだけなのっ?」

「まさか。こういうのもしますよ、お望み通りに」

ランニングを捲り上げてほぼ平坦と言っている胸の、それだけ平らでもその頂にちゃんと存在する小さな、本当に小さな乳首を舐めながら、スカートの中に手を突っ込む。

目指す場所はもちろん、あのふつくらした大陰唇に守られた淡いピンクの割れ目だ。

「やあっ♡ おっぱい舐めながらお股、はあんっ……」

「すべすべ。そしてふつくら。なのに、こんな濡れるんだ?」

「ううんっ♡ お兄ちゃんのいじわるう♡」

「ノリノリねえ」

「さすがですよね、どっちも」

制限時間はたった5分。

なので服とスカートを脱がせながら甘酸っぱい腋や汗の溜まった鼠径部を手早く舐め、それから本命の肌色のままの窄まりに舌が辿り着く。

もちろん、そうしながらも僕の中指はそれだけで広がり切り、その長さでも子宮口を探れる幼い膣に挿入したままだ。

「うんちの穴あ♡ そこうんちする穴だから舐めちやらめえ♡」

「すっご。もうほぐれてる。味とニオイがしなくなったら、すぐ挿れますね」

「やあっ♡ んっく、ふひんっ♡ なんて、なんでうんちする穴がこん

なきもちーのっ♡ あふっ、やんっ♡」

ただでさえ小さな肛門。

味と香りは、すぐになくなってしまった。

「なら、中の味見ですわね」

「やつ、ベロっ♡ お兄ちゃんのベロ、うんち穴に、あひいつ♡」

（あはっ。サキユバスのおねーさん、本気で感じちやつてるのっ♪）

（まあ、普通はここまでしねえもんなあ。こんなの、アナルマニアか真性のスカトロロマニアしかしねえだろ。サキユバスって種族系能力のせいでスカトロ趣味もあるなら、とーちゃんは理想の相手ってこつた）

（僕は蟲使いの特性で、蟲の好む物を好むようになってるからねえ）

（そんなのただの予想だろって。とーちゃんはただのド変態）

（はいはい。酷いなあ。あ、もう吸っても少ししか味がしないや）

（ならロリケツマンコにたつくさん中出しキメて、最後に色付きザーメンひり出させるのっ♪）

（だね）

（……いくらサキユバスでも泣きながらやめてくれって言うんじやね、コレ）

ここまで煽ってるんだからそれはないでしょう。

そう願いながら夜宮さんの手を取ってテーブルに置かせ、小さな腰に両手を回して持ち上げる。

どうせなら幼い体を堪能するため、大人の女の人じゃできない体位で腰を振りまくりたい。

「なにっ！　なんで足ぶらんぶらんさせると!?」

「こうするためです、よっと」

思った通り。

サイズがかなり小さくなっているとはいえ指よりだいぶ太い肉棒を、夜宮さんの肛門は簡単に受け入れた。

「ひぐうっ♡」

「早瀬さん」

「あ、ああ。なんだい?」

おお。

イケメンさんって、ドン引きしてもイケメンなのか。

「制限時間はあと3分45秒。その間、複数回の射精をしても合格になりますか？」

「それはもちろん合格だが……」

「アレをお見舞いするのね。どれだけ悔しかったのよ」

「いえいえ。種族系の手練れ、それもサキュバスなんて方とできる機会は、そうそうないでしょうからね。めいっばい愉しんでおきたいだけです。夜宮さん」

「なあに、お兄ちゃん？」

「まずは1発目ですっ」

腰を突き出す。

そしていつもは最低でも50まで上げているダイヤルを、一気に0へ落とすイメージを頭の中に描く。

膣と同じく、酷く狭い腸。

それを掻き分けながら進む肉棒が、跳ねる。

「いぎいっ♡」

「射精しながら腰振るの、やっぱ気持ちいいなあ」

「うそっ♡　せ、せーし出しながらズンズンされてりゆうっ♡」

「まだまだ出るからね。止まったと思ったら、次の瞬間にはまた出るから」

「そ、そんなのっ♡　おなかの中せーしでいっぱいにされるうっ♡」

（くっそ、まだ余裕あるなあ。これはムリか）

（わっかんねーぞ。いくら相手がサキュバスだつっても、とーちやんみてえなマネができる人間なんてまずいねえんだからさ）

（だといーねえ）

（頑張つてなの、ととさまっ♪）

射精しながら腰を振る。

もちろん一般人の射精量なのでそれはすぐ終わる。

でも射精量は加減しないといけないらしいが、さつき早瀬さんは射精を何度してもいいと言っていた。

腰を引き、また突き出す途中で2度目の射精。

「またっ、またせーしきたあっ♡」

「夜宮さんのケツマンコが気持ちいいからですよ。ところでこの、僕のアソコにコツコツ当たる塊ってなんなんですか？ さつきから気になってるんですけど」

「そんなのゆわないっ、あううっ♡」

「ごめんなさい。話の途中でまた射精しちゃって。まあ、まだまだ出ますけど」

「らめえ♡ もうおなかタプタプだよ♡」

「……室長、これはどうすべきなんですかね？」

「許可した自分の軽率さを反省しながら、祈るしかないわね」

「祈る、ですか？」

「ええ。あなたの友人、東京支社の情報室に所属する色事系なら日本一とまで呼ばれるエージェントが、ぽっと出の15歳の能力者に屈服させられない事を祈るのよ」

その心配はなさそうですよ。

顔の見えない2人の会話に割り込みたいのは山々だけど、だからと行ってここで諦めるつもりはない。

時間ギリギリまで、挑む。

どれだけ高い壁でも、どれだけ堅い守りでも、いつか破ってやる。

そう強く誓いながら射精を繰り返す僕の耳に、「試験終了、合格だ」と言う早瀬さんの声が聞こえたので、ずっと一般人の全力程度で振りまくっていた腰を止めた。

ザーメンを注ぎ込まれすぎたせいでぽっこりとふくらんだお腹を手で押さえ確認しながら、夜宮さんは息を整えている。

小さなお尻の中心からズルリズルリと肉棒が抜けていく様が酷く淫靡で、慌てて0にしていたダイヤルを上げた。

「あうう♡ お兄ちゃんの、うちをイキまくらせてくれたおちんちん抜いちやらめえ♡」

ぬぽんつと肉棒が抜けた拍子に、少量のザーメンが僕の足元に飛ぶ。

明らかに芝居だとわかるふらついた小さな体を抱き止め、ソファへ。

すると夜宮さんは浅く腰掛け直してM字開脚で腰を突き出し、ほんの少し充血している肛門を両手で広げるようにした。

「らめえ♡ できるとこ見ちゃらめえ♡ やつ、出るっ♡ うんち穴からお兄ちゃんのせーしぜんぶ出ちゃうよう♡」
ブピッ。

かわいらしい見た目とは裏腹な下品な音。

それに続いて特殊な性癖を持たない人なら確実に顔を顰める排泄音が鳴り、ピンク色の肛門から真っ白なザーメンが噴き出す。

テーブルの向こうのソファの背もたれにザーメンが滝のようにへばりつき、座る部分とテーブルにザーメンの小川を作って、夜宮さんが座っているソファと床とにザーメンが小山のように盛り上がった、ようやく肛門からの噴出は終わった。

「やっぱり完敗ですねえ。とうとう最後まで本気で喘がせられなかったし、腸内のザーメンだけをこうやって出して見せるなんて。おみそれしました」

「キミもさすがだったねえ。途中で気合を入れ直さなきゃ、ほんつとに堕ちてたかもー」

「またまた。お世辞はいりませんよ」

「それで夜宮さん、あなたの方の試験の結果は？」

「免許試験はもちろん合格。アッチの試験は花丸合格、かなっ」

「それはよかったわ。いつから、どのくらいの頻度で？」

「仕事の合間を見て。週1で、この子と電脳妖精の都合に合わせて。週1以上だと溺れそうだし、週1以下だと欲求不満と空腹で死んじゃう」

「わかったわ」

「えっと、なんの話ですか？」

棗さんが微笑む。

妖艶って表現がピッタリな微笑み。

これが出る時は、僕がからかわれる直前なんだよなあ。

「ヒロキ君の4人目の師が決まったという話よ。これから週1で夜宮さんがあなたに、性技や色事系の仕事を仕込むわ。依頼がある時はそれを授業に、ない時はいろいろな姿の夜宮さんと考えうる限りの性行為を試しなさい」

「わあ、ラツキー。でもそれを言うなら6人目、ですね」

「あら。どうして?」

「ティファニーちゃんと桃さんです。僕はそういうつもりで修行してたし、こつちでもそういうつもりでアルバイトしてますから」

これは本音だ。

「うふふ。2人が聞いたら喜ぶわ」

「では室長、我々はこれで」

「例の報告書は夕方までに仕上げまーつす」

「ありがとう。お疲れ様ね」

早瀬さんは僕に生真面目そうな表情で頷き、いつの間にか20代のスーツを着た美人さんに変化したらしい夜宮さんは笑顔を見せてから部屋を出て行った。

「もう大丈夫ですか?」

「ええ」

「セイ、フウカ。おいで」

2人が影から飛び出す。

「はあい。すぐにととさまザーメン片付けるのっ♪」

「オレはマモリと遊ぶっ!一緒に携帯ゲームすんだっ!」

「はいはい。じゃあ僕はコーヒーでもいただいで」

「それは、もう一仕事を終えてからね」

「ええっ」

喉が渴いてるんだからコーヒーくらい。

そう出しかけた言葉を、僕は飲み込んだ。

ついでに生唾も。

だっていくつかあるデスクに片手を置いた棗さんが、もう片方の手で自分のタイトなスーツの裾を上げて見せたからだ。

「嫌ならいいのよっ」

「僕には一生言えませぬね、そんな言葉」

足早に歩み寄って、大きなお尻を撫でながらスカートを完全に捲り上げる。

「準備は万端よ」

「みたいですね。ニオイ、いいですか？」

「ダメよ。時間がないんだから。下着もこのままでいいから、早く挿入して腰を振りなさい」

「ちえーっ」

なにも言わずともセイが歩く途中で元に戻してくれた肉棒。

それを筆に見立てて、じつとりと濡れた赤いパンティーのクロツチを中心に上下させる。

「うふふ。もうカチカチじゃないの」

「相手が棗さんですからね。もう挿れます?」

「ええ。ちようだい、ヒロキくんの」

「はい」

赤いパンティーの股間部分をズラす。

「ああ、今日もいやらしいや。舐めまくりたいなあ」

でも棗さんの言いつけを、特にセックス中のそれを破ったら怖いなんてもんじゃない。

なので大陰唇だけでなくヌメって光る小陰唇を肉棒の先で搔き分け、出会ってから何度も何度も僕がザーメンを注ぎ込んだ、抜群の膣に侵入してゆく。

「ああっ、やっぱいいいわねえ……」

「嬉しいです。もう動きますか?」

「お願い」

棗さんは、ほとんど喘がない。

その棗さんがうつとりとした様子で「ああっ」という声を聞かせてくれたんだから、気分が悪いはずがない。

揺るように腰を振りながら、じわりじわりと先を、2人のお子さんを産んでも抜群の締め付けを誇る膣の行き止まりを目指す。

棗さんが好きな最奥の目指し方。

「……いつもよりキュウキュウ締まりますね。なんでだろ」

「言わせないの。大好きな男の子が、自分の部下と本気セックスをしてるのを見て、嫉妬と興奮を同時にしてたからだなんて」

「マジですかっ!？」

「さあ、どうかしら。それより、もつと腰を振りなさい。乱暴にしてもいいから」

「はいっ!」

棗さんは桃さんとはタイプが違うけれど同じ諜報系の能力者。

時代劇に出てくる忍者、そのクノイチみたいな人。

だから拷問やなんかで犯されたりしても自白しないような能力があつて、いつも普通に会話したり、時には黙り込んだりしたままイツて終わりを迎える。

でもその棗さんは今日、挿入したばかりだというのに、会議中に悩んでる人みたいに手を組んで肘をデスクに付きながら、ほんの少しだけど息を揺らしているみたいだ。

「ねえ、ヒロキ君」

「はい」

「私にもたくさん出さないよ? こぼれちゃうくらいに、たくさん」
「喜んでっ!」

閑話・水面に揺れる華1

都内の住宅地などではまず見かけない規模の門を、取り立てて特徴のない青年が潜る。

強いて言えばその特徴は少し大きめの黒縁のメガネだろうか。

もしもコンタクトレンズにしたなら世の女達が熱い視線を送るであろう顔立ちをメガネで隠す、青年はそういう人物である。

その先にはいくつかの建物が見えているが、そのすべては木造の日本家屋。

中でもお屋敷と呼べるほどの、最も大きな建物に青年の足が向かう。

やがて玄関にまでその足が達すると、青年はその引き戸を至極気軽そうに開けた。

「お兄ちゃんっ!」

叫ぶように言いながらバタバタと足を取を立てて板張りの廊下を駆けてきたのは、真新しいブレザーの制服を着た少女。

今時の女子高校生にしては少し長さのあるスカート揺れが収まると、青年は微笑みを浮かべながら少女の高校入学を祝う言葉を口にする。

それに元気よくありがとうと返した少女は、満面の笑みだ。

「おかえりなさい、真ちゃん。ひさしぶりね」

奥から上品な足運びで現れた和服の女が少女の横に並ぶ。

年齢と顔立ちから見るに、少女の母親であると誰もが一目で察するだろう。

身に着けている着物も帯も、結い上げた黒髪を飾る簪も、一見して高級品とわかる見事な物。

だが世の助平な男共はまず、その優し気な美貌と、むしやぶりつきたくなるほどに蠱惑的な肉付きの良い肢体に目を奪われるはず。

「早苗さん。そんなにひさしぶりでもないでしょう、1か月前に顔を

出しに来たばかりです。それと、真ちゃんはカンベンしてください。俺、もう28ですよ?」

「ちよつと、お願いだから歳の話はしないでちょうだい。私まで老けたって言われてるみたい」

真と呼ばれた青年が浮かべた苦笑いを見て、少なくとも三十路の半ばには差し掛かっていそうな女が鈴を転がしたように笑う。

「早苗さんはいつでも綺麗ですから、年齢なんて気にする必要はないでしょう」

「あら、相変わらずお世辞がうまいのね」

「本心ですって」

「うーっ。お兄ちゃん、無駄話はいいから早く上がって。今日は杏の入学祝いでご馳走なんだからっ」

「そりゃあ楽しみだ。んじや遠慮なく、おじやまします」

「ただいまでいいのに」

また苦笑いを浮かべながら真が屋敷に上がると、杏はすぐさまその横に並んで長い板張りの廊下を歩き出す。

杏の手が自分のそれに伸ばされては何度も引つ込められるのを、真は気づいているのかいないのか。

母親の方はそんな娘の後姿を見て微笑んでいたが、特に助け舟を出してやるつもりはなさそうだった。

ついに手を握れず終わった杏が開けたのは、この家の外見には似つかわしくない洋風のドア。

その向こうにあつたりビングもその調度もすべて洋風で、まるでありふれた一般家庭のそれである。

どこにでもありそうではあるが、見る者が見れば一目で高級家具ブランドの物とわかるソファークーセット。

そのテーブルの上に並んでいる料理は唐揚げやエビフライ、卵焼きといった、いかにも若者が好みそうなものだった。

「おお、これはたしかにご馳走だ」

「でしょー。ね、座って早く食べよっ」

席に着いた真はまず杏へ入学祝いだよと、丁寧にラッピングされた

細長い箱を渡す。

腕時計、それもこの元気でかわいらしい少女によく似合いながら、社会に出て普段使いをするのに問題なさそうなそれを、杏はとても気に入ったらしい。

家で食事をする前に腕時計をしてどうするのかと笑われても、一度細かい手首に着けたそれを外そうとせず、時計を見ては心からのものとなる笑みを浮かべていた。

それから談笑しながらの食事が始まる。

特に高校入学を祝ってもらおう立場の杏はよく食べ、よく喋った。

真と早苗はビールを飲みながら豪華な大皿料理をツマミにして、彼女が食事を終えるのを待っていたらしい。

その証拠に杏が箸を置くと、早苗は真剣な表情で話を切り出す。

「杏」

「なあに、お母さん？」

「オナニーは週に何回してるの？」

「ぶっ、ぶはあっ！ げへっ、ゴホッゴホッ……」

あまりといえばあまりの問いかけ。

杏は当然、飲みかけたジュースを嘔き出して咳き込みながらも、自分の耳を疑っている。

「早苗さん、最初っから飛ばし過ぎですって」

「そう？ でも、何より大事な事ですもの」

「いやいや」

「大事に決まってるわよ。杏、心して答えなさい。あなたが週に5回以上オナニーをしているなら、今日から真ちゃんは、またこの家で暮らします」

「ええっ!？」

驚きで再起動を果たしたらしい杏が、思わずといった感じで腰を浮かせる。

「だから飛ばし過ぎですから……」

「それで、どうなの？ 毎日してるわよね？」

「え、ええっ」と

杏が顔を真っ赤にして言い淀む。

それはそうだ。

年頃の、恋する少女が想い人の前で、毎日かかさず自慰をしていますなんて言えるはずがない。

「ああもう、かわいそうだから俺が説明しますよ」

「相変わらず杏には甘いよね。妬けるわ」

「はいはい。それで杏ちゃん」

「な、なに？」

「男女を問わず、能力者は一般人よりも身体能力が高い。それはわかるよね？」

「うん。そんなの当たり前でしょ」

真が頷く。

そして、ゆっくりと語り出した。

異能を持つ存在。

能力者と呼ばれる人間が、そうでない人間と体を重ねる危険性を。

実例を交えながら、事細かに。

「……と、いう訳だ。杏ちゃんは高校入学を機に関西の前衛能力者を婿に迎えて一緒にこの家で暮らすよう早苗さんに言われたけど、絶対に嫌だつて断つたんだよね？」

「う、うん」

「さっき言ったように能力者が一般人と恋に落ちても、その恋心を成就させるのはかなりハードルが高い。能力や特性に剛力系が含まれていたりしたら、なおさらだ」

「わかってる。あたしは【剛力】だけじゃなく【頑強】と【自己再生】も持つてるから、小っちゃい頃から一般人の友達なんて作れなかったし」

生粋の能力者にはよくある話だ。

一般家庭に産まれて成長の途次で能力に目覚めた能力者なら別だが、この家のような家庭に能力者として生を受けたのなら仕方ない事である。

「だから早苗さんは早い結婚を勧めた。無理強いはずだね」

「それは感謝してるけど……」

「うん。それでさっきの話に戻るんだけど、自慰、オナニーじゃ思春期の『淫気』が散りにくい。そしたら、どうなる?」

「あつ」

「どうやら杏はその言葉で気づいたらしい。」

「わかったんだね」

「う、うん。『淫気詰まり』を起こしちゃう可能性が高いって事でしょ?」

「正解。能力者とのレズプレイでも淫気はある程度なら散るけど、杏ちゃんはソツチの嗜好がないって話だし」

「それも学校で習ったかも。能力者は女の方がかなり多いから、保険の先生から淫気詰まりの兆候があるって言われたら、友達同士で対処する方法もあるって」

「なら、淫気詰まりの怖さは学校で習ってるよね?」

「当然だ。」

「能力者のみが通う一貫校では、初等部の3年時から保健体育でそれを習う。」

「うん。気怠さから始まって、毎晩淫夢を観るようになったらもうヤバイ。最悪の場合は淫夢の出来事を、夢うつつの状態で現実でも求めちゃうんでしょ? 能力に目覚めてない一般人だけど素質のある人が、それでニュースになるような性犯罪を起こしちゃうたりするって」

「そうだね。だから早苗さんは、俺に頼み事をしたんだ」

「頼みって?」

「真がこれ以上はないと断言できるほどの苦笑を浮かべる。」

「この家に戻って、杏ちゃんが婿を取るまで淫気が詰まらないように相手をしてってくれって」

「そ、それってまさかっ!?!」

「まあどこまでするかとか、そもそもするかしないか。それも杏ちゃんの気持ち次第だけだね」

「お、お母さん」

杏はこれ以上ないほど真剣な表情。

対する早苗は、そんな娘を見て笑いを堪えている。

「なあに？」

「も、もし杏が嫌だつて言ったらどうするの？」

「外出時に監視を付けるわね。それも東京支社、下手をしたら本社から派遣されて来る複数の能力者にバカ高いお金を払い続けながら」

「……い、いくらくらい？」

「金将級が2人なら500と500で1000万。銀将級なら3人が4人必要だから900から1200万ね。言っておくけど、これって1日分の報酬よ？」

うひい!?

そんなかわいらしさの欠片もない声がりびングに響くが、杏はそれどころではないらしい。

「いっせんまんかけるさんじゅうがさんぜんえんになればなんとか……」、とか訳のわからない事をブツブツと呟いている。

「まあ、杏ちゃんも順調に成長して18になれば、最低でも金将級だからね。支社の情報室だつて、それくらいじゃないと納得はしてくれない。銀将級ならそこまではしなくていいけど、金将級は確実に早い段階で『視て』もらつた杏ちゃんだからさ」

「ううっ、好きでこんな風に生まれた訳じゃないのに……」

「能力者なんて誰もがそうよ。それで、どうするの？」

たしかにそれは正しい。

もつと言えば人は誰しも、生まれ方や周囲の状況を選べない。

「ええつと、それはその……」

「答えを急ぎすぎですつて、早苗さん。とりあえず杏ちゃん」

「ひゃ、ひゃいっ!」

「部屋に戻つて着替えて、まずは落ち着いて考えてみるといいよ。かなり混乱してるでしょ?」

「う、うん」

「だからまずはよく考えてみて」

「わ、わかった。でももししたら、お兄ちゃんはもう帰っちゃう?」

「俺は泊まつてくから、まだここで飲んでるかな」

「……なら、部屋に戻って考えてみる」

「うん。それがいいよ。そうしな」

よろけながら立ち、ふらついた足取りでリビングを出てゆく杏の背中を見ながら、真と早苗が同時にグラスを口へと運ぶ。

すっかり泡のなくなったビールを真はまるでブランデーでも舐めるように少しだけ口に含み、早苗は天井を仰ぐようにして一息で飲み干してしまふ。

「バカな子。相手が大好きなお兄ちゃんなんだから、何も考えず抱かれちゃえばいいのに」

「そうもいかんでしょう。杏ちゃんが俺に抱いてる感情は、幼い子にありがちな年上の異性に対する漠然とした憧れです。それを今日から性の対象として見ろと言われたら、混乱もするでしょう」

「体だけ大きくなっても、まだまだ子供なのね」

「まだ15歳ですからね。自慰だけで性欲と淫気の発散が可能なら、男を知るにも個人的にはまだ早いかなくなってくらいです」

「ねえ、隣に移ってもいいかしら？ やりきれなくって、むしやくしやるわ」

「母親としちや、この上なく嫌な宣告だったでしょうからね。もちろんいいですよ」

「ありがとう」

そう言つてグラスを持ったまま席を立った早苗は真の隣に腰を下ろし、それを置いた手で真のふとももを優しく撫でた。

「能力者が自由に生きるなんて夢のまた夢、か……」

「私達には納得できても、あの子の年頃じゃムリでしょうね」

「俺達もそうでしたもんね」

「ええ」

「ホント、やりきれなくなりますよねえ」

「だから男には女が、女には男が必要なのよ」

眩くように言いながら、早苗の手が動く。

己を撫でる手が股間に移動したのを見て、真はまた苦笑いだ。

「やめときましようって。杏ちゃんが早く答えを出したらどうするんです。」

「お母さんが準備を整えておいてあげたわよ、って言いながら、真ちゃんのコレを舐め上げるわね」

「母親の唾液まみれのナニで処女喪失なんて、トラウマになりますって」

「そんなにヤワな淫乱家系じゃないわよ。いいから、早くしやぶれって命令なさい」

「はいはい。ちゃんと準備をしたら、好きなだけ啜えさせてあげますよ」

閑話・水面に揺れる華2（終）

準備。

そう言われ、いそいそと立ち上がって早苗が部屋の隅にある金庫から出したのは、準備という言葉にはふさわしくない銀色の物体。

ジャラツ。

そんな音を立てる金属製の物体を、早苗は酷くうれしそうにしながら真に手渡す。

「なんで2つも。1つでいいでしょうに」

「絶対に途中で必要になるもの。ねえ、それより早くして」

「はいはい。でもまあ、まずはこうだな」

真の手が早苗の胸元へ伸びる。

「あんっ」

別に着物の上からでもわかる巨乳をどうこうしたのではないのに、そんな嬌声が上がった。

真が掴んだのは着物の胸元、その衿だ。

見るからに高級そうな和服であるのに、それが傷む事など気にも留めていないような乱暴な動きで、大きな乳房の半分ほどが外気に晒される。

「よし、いい眺めだ。今日もいいおっぱいと谷間をしますね」

「どれだけ半脱ぎが好きなのよ。これじゃ、啞えながら乳首をイジメてもらえないじゃないの」

「口で上手にできたら、手を突っ込んで振り上げてあげますって。手はどっちです?」

「後ろがいいわ。啞えたら髪を掴んで、乱暴にピストン運動してもらえるように」

「変態」

「誰のせいよ」

「何の事やら。ほら、後ろを向いてください」

嬉々としてその言葉に従った早苗が両の手首を腰の後ろに回すと、すぐにガシャリと音がしてその両手が拘束された。

「ねえ、早くう」

「うん。今日もいい尻だ」

「あんっ」

かなり乱暴な動きで大きな尻が撫で回され、まるでその大きさと柔らかさをたしかめるように揉まれる。

最後にそこをピシリと叩くと、真は満足したようでソファアに腰を下ろした。

「どっちでします、早苗さん？」

「床がいいわ。見下ろされながら口奉仕したい気分なの」

「なるほど」

真が少しばかりテーブルを押すと、早苗は待つてましたとばかりに床へ跪く。

「ああっ、今日も素敵匂いをさせちゃって……」

「風呂には入って来たから、スラックス越しに臭うほどじゃないんですけど」

「索敵向きの特性に感謝ね」

女に股間で鼻を鳴らされながら、男がビールやタバコを口にする。

真も早苗もそれを特に変態的な行為だとは思っていない。

なのでしばらく、リビングには真が飲み食いをする音と早苗の鼻音だけが流れていた。

「もう満足したみたいですね」

「ええ。早くお口も満足させたいわ」

「ならまずはこちらです。ほら、口を開けて」

真が立てた人差し指の先に、音もなく小豆大の水の玉が出現する。

それは宙を漂いながら、早苗が素直に開いた口の中へとするりと入り込んでしまった。

水系統の能力者、それも医療系の能力に長けた者が操る、各種の病気予防と避妊の効果がある万能薬のような水。

『避妊水』などという呼び方もある。

「うふ。イチゴ味って、子供じゃないんだから」

「あはは。それと、あんま最初から張り切らないでくださいよ？引越しの準備やらなにやら色々忙しかったんで、こんなのは1か月ぶりなんです」

「ひと月分の特濃精子なの？ どこで受け止めるべきか悩むわね。いっそ、あの子の部屋に押し入って処女オマンコの奥にぶち撒けちゃいませうか？」

「嫌ですって」

「うふふ」

とても母親の言葉とは思えないが、早苗は朗らかに、心の底から楽しそうに笑う。

「あんまふざけてると、スーツを脱ぎませんよ？ 早苗さんの聴覚嗅覚向上特性は、本社謹製のその手錠でかなり封じられてるんだし。もしも杏ちゃんに、こんなトコ見られたら」

「いっそ見せた方がいいのよ。だからきちんと閉まってないドアも、そのままにしてるんだし」

「杏ちゃんにはできるだけ普通の初体験をしてもらいたいですけどねえ」

「優しいのね、お兄ちゃん？」

「茶化さないでくださいって。ほら、脱ぎますよ。お待ちかねのチンポです」

期待と情欲でその瞳を濡らしながら、早苗は食い入るように真の動きを見ている。

「ああっ……」

そんなうっとりとした声は、真の男根が眼前にだらりと下がった瞬間に発せられた。

苦笑いしながら空色のスラックスと黒いボクサーパンツを完全に脱いだ真は、標準よりだいぶ大きなそれを自身の手で早苗の鼻先へと差し出す。

「クサイでしょう？」

「それがいいのよ。ああ、匂いだけでイツちやいそう……」

「好きですねえ」

「大好き。うふっ」

「そんじゃ口で清めてもらいましょか。隅から隅まで丁寧に」
「うれしいわ。ねえ、いつもみたいにく奉仕を命じて」

「はいはい。いいからしゃぶれよ、肉便器」

ねっとりとした口淫が始まった。

まず早苗が紅を引いた形の良い唇を落としたのは、陰毛の生え際、腹との境目である。

くちづけ。

それから慈しむように陰毛を食む。

舌が肌をなぞるのはその後だ。

それを繰り返しながらゆっくりと、早苗の顔が下りてゆく。

「ん。おちんちん、美味しい……」

「まだ根元なんだから汗の味しかしないでしょうに」

「それもいいの。真ちゃんのなら、汗だって天上の甘露」

苦笑いしながら真はグラスを呷る。

「ああ、気持ちいいな」

「1か月ぶりって本当なのね。根元をちよっと舐めただけで、もうこんなにしちやって」

屹立した男根。

剛直と呼ぶに相応しいその根元を、早苗は大きく舌を伸ばして舐め上げた。

その頬を撫でてやった真は口の端を吊り上げるようにして笑み、テーブルに手を伸ばしてタバコに火を点ける。

「いい眺めだ。早苗さんはいっ見ても美人だけど、俺のチンポ越しに見せる表情が一番色っぽい」

「うふふ」

後ろ手に拘束されながらの口淫、その行為を早苗は口奉仕と言った。

さらにその始まりを命じてくれと言えば、真は年上の女に当たり前の命令口調で肉便器呼ばわり。

それでわかるように極度のマゾである早苗だが、己を焦らすため酷くゆつくりとした速度で剛直の頂点を目指していた訳ではないらしい。

その理由は早苗が背中を向けている、リビングの出口にあった。

「……ッ!?!」

危うく出しかけた声を口を強く手で塞ぐ事でどうか押し止め、杏は極限まで目を見開きながらドアの隙間から見える景色に目を凝らす。

ウソ。

お母さんとお兄ちゃんがそういう関係なのは知ってたけど、まさかリビングで……

自慰を覚えてた頃の頃、借りていた本の続きを探すために入った母の部屋。

そこでテーブルに置き忘れられたらしいDVDを見つけ、杏は何気なくそれをその場で再生した。

画面で繰り広げられていたのは母と、血の繋がりにこそないが自分が兄と呼ぶ男の濃密な痴態。

その日から母のいない隙を狙ってはその部屋からDVDを持ち出し、自室でヘッドホンをしながら自慰するのが密かな愉しみになっていたのである。

「ヤバイ。あたし、今までで一番濡れてるかも……」

杏は真の言葉通り、自室で着替えを済ませていた。

パーカーにミニスカートというラフな格好。

そのスカートの中に、細く白い指が伸びる。

くちゅっ。

そんな音が未成熟な秘裂の入り口から背骨を駆け上がり、脳天で頭蓋に弾かれ、酷く淫靡に響くのを杏は聞いた。

「あつく、ダメ。お母さんとお兄ちゃんに聞こえちゃう……」

だが、杏の手は止まらない。

それどころかショーツに染み切った淫液が潤滑液となって、秘裂を上下する手の動きは加速してしまう。

ダメ、ダメ、……ダメなのにつ！

忌避すべき行為だからこそ昂る。

そんな人間なら誰もが持つ機微など、つい1時間ほど前だけ勇気を振り絞っても思い人の手すら握れなかった少女には、わからなくて当然か。

「お母さん、あんなにはしたくない音を立てながらお兄ちゃんのタマタマを。んっ………」

ドアの隙間の向こうでは、たしかに早苗が『ブボツ』だの『ジュルルツ』だのという下品な音を鳴らしながら真の玉袋を口いっぱい頬張って、口奉仕に励んでいる。

まるでその母の熱意に引っ張られでもしているかのように、杏の手の動きもまた激しさを増した。

「ヤバイ、ヤバイよお。止まんないの、指いつ……」

廊下で足を開き、荒い息を吐きながら自慰に耽る杏。

その興奮を煽る母親は、真だけに見える妖艶な笑みを浮かべながらさらに顔を下げた。

2人は、廊下で自慰に興じる杏の存在に気付いている。

杏ちゃんの前でさすがにそれはと言いかけた真だが、結局は口を嚙んで早苗の行為がやりやすいように浅く腰かけ直してやっている。

早苗の目論見通り杏がリビングを覗いているのはいいが、廊下で自慰を始めてしまっているので、動きを決めかねているのだ。

「や、やっぱりお尻の穴まで、そんなトコまで舐めちゃうんだ。お母さん……」

DVDの中でも繰り返されていた行為だが、実際に目の前でそれが行われるのを見ると、興奮はひとしおであるらしい。

くちゅ、くちゅくつ、ぐちゅつ。

先程から廊下の空気を揺らすそんな水音がさらに大きくなり、そのリズムも大幅に上がる。

息も荒い。

杏の限界は近そうだ。

もはや開いた足は肩幅より広く、腰を突き出すようにしながら割れ目を上下する指には、シヨーツに染みた淫液が、これでもかど付着している。

それどころかこの男を知らぬ少女は、廊下で他人の情事を盗み見ながらする自慰の快感で、その薄い桜色の唇の端から涎までも垂らしていた。

「ダメ、もう直接じゃないとおかしくなっちゃう……」

杏は淫液が染み切つて重さを増したシヨーツを一気に膝まで下ろすと、布越しに刺激するだけで何度も達しかけていた、皮被りの幼い淫核を指の腹で撫で上げた。

「ひぐつ……」

仮性包莖であつても陰核、クリトリスを直接指で擦り上げる刺激に杏の背が仰け反る。

ちゆくちゆくという音を掻き消すほどに、息が荒い。

「ご主人様のアヌス、今日も美味しいですわ」

母親が娘の自慰を、そんなセリフで煽る。

「……いい、いいなあ。お兄ちゃんのアナル、あたしも舐め。んんっ！」
突如として訪れた、限界。

あまりの興奮から生まれてこの方、味わったことがないほどの絶頂に襲われ、杏は膝から板張りの床に崩れ落ちた。

「——っ！————ッツ!？」

膝が笑ってしまっている。

全力で口を押えて声を殺しながら杏は思ったが、そうではない。

膝が笑っているどころか、杏は全身を痙攣させながら絶頂の大波に飲み込まれているのだ。

パタツ、パタツ。

そんな音すら、杏の耳には届かない。

人生初の潮吹き。

その潮が板張りの床に小さな水溜りを作っている。

「さあて、始めましょうか」

「お願いだからムチャだけはしないでくださいよ?」

「あの子次第ね、それは」

立ち上がった早苗は困ったと顔に書いてあるような表情の真に笑みを見せ、後ろを向いて手錠を外させてからドアに足を向けた。

杏は未だ絶頂の余韻に小さな体を震わせているので、それには気づかない。

「どうすんのが正解なのかねえ……」

早苗が連れて来るであろう杏にどんな言葉をかけるべきか。

それよりまず、この勃起したままの息子をムリにでもスラックスかクツシヨンで隠すべきか。

そんな考えを、真は途中で放棄した。

「まあ、約束は約束だからなあ」

それは、まだ中学に上がったばかりだった真が、妊娠安定期に入った早苗と優しく緩やかなセックスをしながら交わした約束。

もし生まれてくる子が女の子で、その子が望んだなら、いつかお姉ちゃんと同じように抱いてあげて。

恩人であり姉であり、生れて初めて惚れた女が、どこの誰かもわかぬ男の種で身籠った子供。

その子を抱けと言われ、思春期の真は言葉を詰まらせたものだ。

父親の顔は、早苗ですら知らない。

名家とまで称される前衛系の能力者の家を絶やさぬため、親が選んだ同じ前衛系の能力者の男から本社を仲介して精液を高額で買い取り、医療系の能力で人工授精をして杏を授かったからだ。

本社はそんな仕事に慣れているので、完璧にその依頼に応えた。

母と子は、父の名前すら知らない。

女の子なら、名前は杏がいいわ。

真、杏。そして早苗。

まるで家族みたいでしょ?

家族なんだけどね。

そう言つて早苗が心からの笑みを浮かべたので、真は約束を決意した。

「派手にイッたわねえ。さ、立ちなさい。予行演習が終わったなら、あとは本番に臨むだけよ」

早苗の母親とは思えぬセリフの後に、杏の絶叫が上がる。

それを聞きながら真は、苦笑いを浮かべてタバコに火を点けた。

怒張した股間の剛直を特に隠す事もせず、どこか泰然とした様子で。

「だから違つて言ってるでしょ、バカッ！」

「むっ。親に向かつてバカとはなんですか、バカとは」

「バカだからバカって言ってるんでしょ、このヘンタイっ！」

「なあんですつてえ？」

「するんだつたら自分の部屋でしてつて言ってるのよ、このヘンタイオバサン！」

「あーもー、ブチギレたわ。おかーさんブチギレちゃった。知らないわよ？ どうなるかわかつてるんでしようねえ、ええ？」

「あ、あたしは悪くないもんっ！」

「……だよなあ。どう考えたつて杏ちゃんは悪くない」

悪かつたのは、喧嘩を売る相手だ。

真がそう続きを口にする前に、また杏の絶叫が尾を引きながらリビングにまで響く。

家全体に防音加工がなされているし、敷地が広いので人様に聞かれる心配こそないが、もしそうなったら事件でも起きたかと警察に通報されかねない。

「は、離せえーっ！」

「うるっさいわねえ。私なんかよりずっと素質はあるくせに、日々の修行が足りないからこうなるの。悔しかつたら体術の稽古に励みなさい。さ、行くわよ。大好きなお兄ちゃんが待ってるわ」

「うるっさい、いいから離せーっ！」

「嫌に決まつてるでしょ、バカな子ねえ」

開けっぱなしだったドアの向こうから、杏を肩に軽々と担いだ早苗

がりビングに足を踏み入れる。

「早苗さん、もうちよつと穏便に……」

「母親であり師匠である存在にバカなんて言う子は、こんな扱いで充分よ」

「お兄ちゃん助けてっ!」

「ああもう、耳元で怒鳴ってるんじゃないわよ。うるさい子ねえ。あんまり騒ぐようだと、このマン汁まみれのお子様オマンコとアヌスをお兄ちゃんの目の前に持ってくわよ? いいの?」

「ちよ、待つ、お兄ちゃん見ないでーッ!」

あまりのバカ騒ぎに呆れ、真が大きなため息をつく。

それを見た早苗は苦笑いを浮かべ、全力で身を振ったり足をバタつかせている杏の抵抗をいなしながら、真の座るソファアに歩み寄った。

「さあ、悪い子にはお仕置が必要よね。このままお尻ペンペンしてあげましょうか、昔みたいに」

「ご、ごめんさいごめんさいっ! お願いだからアレだけはやめてえーっ!」

「なら、大人しく座ってお話しできるの?」

「できますっ! ぜんっぜん、できますっ!」

「ホントかしら」

「まあまあ、そのくらいにしてあげましょうよ」

「仕方ないわねえ」

ひよいと、まるでダンボールの空箱でも置くような気軽さで杏が床に下ろされる。

「うわあああん。お、お兄ちゃん!」

「よしよし」

「甘えん坊ねえ」

「だって、こんなカッコを。お兄ちゃんに。ううっ、うええ……」

「はいはい。大丈夫だから泣かないの」

ソファアに座る真に抱き着きながら鼻を擦る杏が、ビタツと動きを止めた。

自身の体と、真の体の間で天を指すモノの存在に気がついてしまったからだ。

「うふふ。どう、お兄ちゃんの生チンポは？ DVDで見るよりずうっと興奮するでしょ？」

「お、お母さん。まさか……」

「当然よ。あんなのを仕舞い忘れるなんて、わざとに決まってるでしょ」

「ううっ」

バツの悪さが頂点に達し、唸る事しかできない杏。

その頭を真が撫でる。

大好きなお兄ちゃんに優しくそうされた杏は酷く嬉し気に瞳を細めたが、状況が状況だけに、すぐ真つ赤になって顔を背けた。

「気持ちちは固まったみたいだから、具体的な説明をするわね」

「な、なにがよ？」

「だから早苗さん、急ぎすぎですから」

「だって、見えてイライラするんだもの」

「そんならい許してあげましょうって。それで、杏ちゃん」

「ひゃいっ」

「本当に、こんなオジサンでいいの？ この家がお婿さんを探してまですって通達を出せば、若くてイケメンな能力者がたくさん、我こそはと殺到して来るんだよ？」

母と兄に見られぬようそっぽを向いていた杏の顔が、ゆっくりと真の正面に向けられる。

生まれた時から今まで妹同然の、これからようやく高校に入学する子供の真剣な表情に気圧されたような気分になった真は、その眼差しに子供ではなく、女の色を見つけてまたさらに覚悟を決めた。

このいつもかわいらしい妹はまだ子供であるが、同時に女でもあるのだと。

「お兄ちゃんが、真さんがいいの。他の人とするなんて考えらんない。お兄ちゃんじゃなきゃ、絶対にヤダ」

「……そうか」

真が早苗を見遣る。

その早苗は、黙って首を横に振った。

この子が、最愛の娘が、将来どんな選択をするのかはわからない。もしかしたら自分とは違って、家のためだからと惚れた男以外の種で身籠るのを拒否するかもしれない。

それならばそれでいい。

早苗は心からそう思ったからこそ首を横に振ったのだ。

万葉の頃より続く名家が何だ。

100年ごとに開く扉と、その向こうに暮らす住民との大戦が何だ。

陰陽寮に端を発し、複数の企業として今も本州全土の能力者を束ねる本社が何だ。

「この子が望むなら、世界中の能力者だって敵に回してやるわ」

「な、なに言ってるのよ?」

「俺達はそういう心構えって事だよ。杏ちゃん、キスの経験は?」

「う。……な、ない」

「なら、まずはこうだね」

真が眼鏡を外す。

ゆっくりと近づいてくる愛しい男の顔。

そこにいつももある眼鏡がないのを、杏は不思議な感情で見守った。

眼鏡してなくてもカッコイイ。

でも、なんか変な感じ。

……あ、わかった。

コレ、この表情はDVDの映像の中で、お兄ちゃんがお母さんを押し倒す時の顔だ。

「んっ……」

触れただけのキス。

まだ子供であっても、好きな男が1匹の雄となって自分という雌を求めているのを察すると、女はそれに応えてやりたいと思うらしい。

「あらあら。がつつくわねえ」

離された唇。

それを追ったのは、キスの経験なんてない杏の方だった。

真が思わず動きを止めてしまうほどの迷いのなさで、その未成熟な舌が大人の男の唇を割る。

「んっ、ふっ、んっ……」

舌を絡めたのも杏からで、先に唾液を吸い上げて飲み下したのも杏だ。

技巧の欠片もなく、性的な快感などまず与えられないほどに拙い、だが心のこもった、これ以上はないだろうと思わせるほどに熱心なキス。

それに真は優しく、時に激しく応えた。

細く小さい体を抱きしめながら。

「ホント、妬けちゃうわ」

焦らすように動きを止めた真の舌を、杏が吸い上げる。

その舌を甘く噛み、杏の体が予期せぬ刺激でピクリと動けば、微笑みを形作りながら真の唇が離れてゆく。

「やっ」

自らを追った乙女の唇を、今度は真の方から割ってやる。

「んうっ。は、激しっ……」

強く、深く、まるで蹂躪のようなキス。

それがひと段落すると、これから結ばれる男女は熱い抱擁を交わす。

「場所を変えよっか、杏ちゃん」

「う、うん」

「どこがいいかな。俺の部屋はまだ使えるし、杏ちゃんの部屋でもいいよ」

「ちなみにお母さんの部屋でするなら、お兄ちゃんのDVDをすべて焼き増ししてプレゼントするわよ」

「えっ」

「童貞をお母さんで捨てた瞬間。まだ小さかったお兄ちゃんの初めてのオナ見せ、からの射精おねだり。初めての人前でのおしっこ。ありとあらゆる初体験を収録したスペシャルDVDボックス、欲しくない

の?」

「ほ、欲しい……」

「なら決まりね。私の部屋に行きましょう」

「ちよ!?!」

杏は慌てるが、プレゼントの魅力には抗えないのをしつかりと自覚している。

そして杏は実の母親の部屋で、母親に見られながらその処女を散らし、能力者ならではの回復力で自ら求めた2回戦では母親を交えた3Pでとてつもない絶頂を迎えるのだが、今の杏がそれを知る由はない。

能磨学園1

能力者って、こんなにいるのか。

これから3年間通う能磨学園高等部の入学式が始まると、僕はまずそう思った。

でも広い体育館に集まった全校生徒と全職員は通常の高校と比べると、もの凄く少ないらしい。

(まあ、だからこそこんなイベントがあるってホムラさんとアヤマさんが笑ってたなあ)

(んだよ、とーちゃん。もしかして緊張してんの?)

(そりやーするでしょ。全員が壇上に1人ずつ上がって自己紹介だよ? 小学校を低学年で中退の僕にはハードルが高いって)

(ととさまならへーきなのっ。なんなら好みの女子高生を見つけるっいで自己紹介でおっけーなのっ♪)

(そんなお気楽ではいられないなあ)

80人ほどいる在校生。

順番待ちをしている僕達、新入生からだいたい離れた場所に整列している生徒達が、自己紹介の1人目が壇上に立つといきなりざわめく。

(なんだなんだあ?)

(アナルの弱そうなお嬢様っぽい美少女が壇上に立ったのっ。くんくん。……処女、淫乱度40、直近のオナニーは昨日の就寝前なのっ♪)(まーた勝手に淫気からそういう情報を読み取って。やめなさいって)

セイは特技が多い。

それはいいんだけど、向上心が強すぎて将来が心配になる。

どこまで成長する気なんだか。

(これもセイの修行なのっ! かかさま達も棗ママも、桃ちゃんだつてどんどんやれって言ってたのっ!)

(だからって、それをいちいち聞かされるのはちよっとねえ)

(なら聞かせないで見せるの、はいっ♪ 性癖読みは夜ちゃんにこれから習うから、もうちよつと待ってなのっ)

その言葉の通り、壇上の美少女の頭上にセイが言っていた情報が表示される。

まるでフウカがやってるゲームの登場人物みたいだ。

きつとセイもそれを見て、こうして僕の視界に入る人の頭上に情報を表示しようと思いついたんだろう。

にしても『性癖読み』って、習えば身に付けられるものなの？

(にししっ。もし淫乱度80以上のがいたら帰り道でヤツちやおーぜ、とーちゃん)

(しないって。ほら、ざわめきが落ち着いたから自己紹介が始まるよ)

壇上の女の子はこれだけ注目されたって気にもならないらしく、体育館が静かになるのをただ待っていた。

たしかに美人。

そして、ホントにアナルが弱そう。

ホームラさんに似てるからか、見るからにプライドが高そうだからか、どうしてもそう見えるなあ。

「煉上家が長子、煉上朱音ですわ。中等部から実技では常にトップで、高等部でも負けるつもりはありませんの。立ち合いを望む方は、いつでも教室までいらしてくださいな。では、失礼いたします」

そうとだけ言って、朱音というありふれた名前が似合うような似合わないような美少女は、反対側からステージを下りて1年生が整列する予定らしい場所の先頭に立つ。

「にしても、立ち合いって。いつの時代だったの……」

「ははっ。やっぱ一般校から来るとそう思う？ これがこの学校じゃ普通だから」

「ふうん。面倒そうだなあ」

「なあ、名前なんてーの？ 俺は、鳴神浩二。クラスに男は5人しかないからさ、仲良くやってこうぜ」

「あ、うん。僕は六道弘樹、よろしく」

「その新入生、私語は慎めっ!」

次に壇上に上がって自己紹介していたショートカットのかわいらしい女生徒が驚いて、それを中断してしまったほどの怒声。

頭を下げるためにそちらを向くと、それを飛ばしたのはホムラさんだったらしい。

ヤバイ。

顔に怒ってますって書いてある。

今日は夜から僕の入学祝いに3人でしこたま飲むぞと言われていたので、そこでもまた怒られる事になりそうだ。

「すみませんっしたー!」

「ごめんなさい!」

「次は注意じゃなくゲンコツだからな、おしやべりをするなら覚悟を決めてからにしろ」

(うひひ。もう指でケツマンコほじられるとキャンキャン喘ぐメス犬が怒ってるな。とーちゃん、今夜こそメス犬のアナル貫通式やっちまおうぜ)

(いやいや。たとえ何か月かかっても、ホムラさんにはガマンの限界が来たその時、素敵な状況でとびつきりエロくおねだりしてもらわないと)

(鬼畜だねえ)

(ととさま素敵なのっ♪)

そんな馬鹿話をしているうちにも列は進み、とうとう最後の1人、僕の番がやってきた。

さつき浩二という男子生徒が言っていたように、この学園はほとんどが中等部からそのまま進学するそうで、今年そうじゃない生徒は僕1人との事。

どうせ僕の事なんて誰も知らないんだから、気楽に簡単な自己紹介をすればいい。

そう思って壇上に上がったんだけど、残念ながらそうはならなかった。

さつきの朱音ちゃんとかいう生徒の時よりも、在校生がざわついている。

「あれが」とか「思ってたか普通」とか「あの2人の弟子じゃなかったら」、なんて声も聞こえる。

(もしかして師匠達、サラさんとアヤカさんって東京でも有名人?)
(そりゃーそうだろう。今って玉将は3人いるのに、飛車角は1人ずつって話だし。状況によっちゃ玉より断然つえーし、歴史上でも数人しかいねーのが飛車角なんだから。それに、例の件もあるしな)
(ほえー。凄いねえ)

「在校生、アタシのゲンコツが欲しいならそう言えっ! いくらでもくれてやるぞっ!」

そんな一喝で体育館に静寂が戻る。

(とーちゃん、自己紹介自己紹介)

「あつ。そうだった。六道弘樹です。和歌山の山奥で暮らしてたのでこちらは不慣れですが、なんとか頑張つて卒業したいと思います。よろしくお願いします」

拍手。

今まで上がったのと同じくらいのそれを聞きながら、反対側の階段を使って壇上を後にして1年生の列に向かう。

するとその列に向かう途中で、先頭に立つ女の子に物凄く睨まれているのに気がついた。

引き締まった、けれどスカートで隠されている部分はむっちりとしているに違いない白いおみ足。

大きさはちよつと残念だけれど、それを補うようにまあるいお尻とお胸。

見るからに上流階級って感じの澄ました顔は非常に整っていて、艶のあるロングヘアがよく似合っている。まるで日本人形みたい。

さつき凄く独特な自己紹介をしていた、ナントカ家のチョーシの朱音ちゃんだ。

(あれっ。でも長子って、男の子の事じゃないの?)

(能力者は違うんじゃないの? 能力者は男の方が数が少なくて、つえーのはだいたい女だって棗ねーちゃん言ってたし)

(なるほどねえ。お、ここに並べばいいのか。早く終わらないかなあ、

入学式)

(ととさま、帰りに女子高生ナンパしてせんせー達の家に行く時間までやりまくるのっ)

(ヤダよ。悪目立ちしちゃうって)

(ぶーっ！)

長々と続くヒマな時間。

それを終わると新入生だけで記念撮影があつて、その後ホムラさんとアヤメさんに連れられて教室へ向かった。

どうでもいいけれど、クラスの女の子全員のお処女であるとか、経験人数とか淫乱度とか、ましてや最後にしたセックスやおナニーがいつかなんて情報をいちいち表示するのはやめてほしい。

黒髪おさげに黒縁メガネという地味な見た目の小柄なクラスメイトが驚くくらいの巨乳で、しかもお処女で淫乱度75、最後のオナニーが入学式が始まる数分前とか見ちゃったら、教室で普通に話せる気がしないじゃないか。

「はい。じゃあこの箱のくじを引いて、その番号の机に座ってくださいいね。机の番号と教室の見取り図は黒板に書いてあるから」

「おおっ。初日から席替え、出席番号順じゃないのか。やっぱ高等部は違うなあ。近い席を引こうぜ、ヒロキ」

「狙って引くのは反則でしょって」

「別に狙える能力があるんなら狙っていいんだよ。能力を磨く、そのためにならなんでもするってのがここの校風だ。ちようどいいから六道、まず新顔のおマエが引いてみる」

「はあ」

(任せてなのっ！)

僕の影から認識阻害魔法を自分にかけて妖精形態のセイが飛び出す。

その小さな体がまずドアが開けっぱなしの教室に、次にくじ引きの箱に消えてすぐ「見つけたのっ」という声が僕にだけ聞こえたので、箱に人差し指と中指の先を入れ、押し付けられた紙片を挟んで取った。

「35、ですね」

「チツ。やっぱりか。次、狙えるヤツはどんどん引いていいぞ。なんなら黒板を確認してから引け」

「ちよつと赤岩先生、黒板を見せるのはダメですよ。それは生徒が能力で確認しないと」

「そつかそつか。んじや、適当に引いてけ。六道は早く席に着くんだ」
「あ、はい」

一番に教室に入って黒板で確認すると、35は窓際の最後尾だった。

まあセイなら、ここを選んで当然か。

セイが好きで繰り返し観ていたアニメでは、主人公はそこに座っていた気がする。

僕の次に入ってきたのは、女子生徒。

しかも、僕を今も睨んでいる朱音ちゃんだ。

(ありや。アナル弱子、こっち来たぜ)

(アヤカママ、アヤメせんせー。どっちもドMだから、名前が似てるこの子もMなのっ)

(はいはい。なんで睨まれてんのか知らないけど、席が近くないといいなあ……)

そんな僕の願いは、至極簡単に打ち壊された。

窓際の最後尾なので1つしかない隣の席。

そこにアナル弱子ちゃん、じやなかった、ナントカ朱音ちゃんが腰を下ろしたからだ。

どうせなら、淫乱巨乳メガネちゃんがよかったなあ……

「あたし瀬本杏。プリント回したりするだろうから、よろしくねっ」

開いている机が半分ほどになった頃、そう笑顔で言った少女が僕の前席に座る。

いかにも活発そうな、ショートカットの似合う美少女。

入学式で2番目に自己紹介していた女子生徒だ。

こちらもお胸とお尻は残念だけれど、やっぱり能力者には美男美女が多いってのはホントらしい。

クラスメイトは誰もが、普通の学校の子が本気で羨ましがりそうな

ほど美男美女揃いだ。

「朱音もよろしくっ」

「ふんっ。ライバルに気やすく話しかけないでくださる？ それより、歩法が乱れてますわよ。ケガでもなさったの？」

「いやそれを聞くうっ!？」

ヤバッ。

思わず言っちゃった。

でも、そうなるのも仕方ないと思う。

アンちゃんの頭上には『非処女、経験人数1人、最後にしたオナニーは昨日、その後セックスを初体験。最後には3Pで中出しされて激イキ』なんて書かれてるんだから。

「なんですの。文句でもありませんの?」

「いやそうじゃないけど、そういうのはほら。パーソナルだっけ、そういう他人が口出しちゃいけない話で」

なんで僕が焦ってるんだ。

つつい口を出しちやっただけど、失敗だったなあ。

「意味がわかりませんわ。口を開くならハッキリおっしゃいな、このグズ」

「朱音、ちよい待ち」

「はあ?」

顔を真っ赤にした杏ちゃんが立ち上がり、朱音ちゃんの耳に顔を寄せると朱音ちゃんの顔は本人、杏ちゃんよりずっと真っ赤になっ

た。

「その、相手はやっぱり?」

「当たり前でしょって」

満面の笑み。

それを浮かべたのは杏ちゃんではなく、ちよつとした秘密を打ち明けられた朱音ちゃんの方だ。

この子はこんなかわいらしい表情もできるのかと感心しながら見ていると、朱音ちゃんは攻撃と判断されてもおかしくない速度で腕を

振り上げ、大きな音を立てて杏ちゃんとハイタッチを交わす。

「やりましたわね、杏！」

「朱音達の応援のおかげだよっ」

「明日にでも詳しく聞かせていただきますわよ？」

「えっ、あ。そ、それは考えとく」

「意地でも吐かせてやりますわ。覚悟なさい」

処女喪失の次の日の鈍痛と異物感。

それで歩き方が一般人にはわからないくらい乱れてたのに、その話を聞き出すと宣言するんなら、この2人は親友ってやつなのか。

ちよつと羨ましいなあ、そういうの。

（つてゆーか、僕も処女としてみたいんですけど）

（このクラスの女子生徒は30人、処女は24人。好きなを選んで、帰りにぶちつと破つちやうのっ♪）

（しないしない）

ショートホームルーム、とかいうのは気抜けするほどすぐに終わって、僕は浩二くんという話しやすい、いかにもムードメーカー的なさっきの男の子に他の男子生徒を紹介され、教室で10分ほど談笑をしてから学校を出た。

全員が戦闘に出るタイプの能力者ではないので選択授業が違うのは残念だけど、1クラスしかない同学年の男子生徒はみない人そうで、僕はいい気分で家路につくことができた。

（とーちゃん、ハンバーガー食ってこうぜ。駅前店の）

（今日は入学祝いのパーティーなんだからガマンしなさい。アヤメさんにカツカレーと、かつ丼までおねだりしてたでしょ）

（オレは今ハラ減ってんの！）

（なら家で朝に炊いたゴハンとふりかけ）

（なんでだよーっ！）

（こないだのアルバイトであんなに稼いだのに、僕はまだ借金を返し切ってないんだよ？ せめて返済が終わるまでは節約）

（うげー）

（ととさま、またあのアルバイトした支社の地下に行きたいのっ！）

(そのうちねー)

(約束なのっ)

あの地下。

セイがそう呼んだのは、一般人とセックスをしてもいい免許の試験の日に行った支社のビルの地下だ。

そこにはいくつもの階層があつて、本社に属する能力者だけが足を踏み入れられる。

訓練場や射撃場、武器や防具を売ったり修理したりする工房のフロア。

気兼ねなく能力者同士の話ができるレストランや居酒屋、ゲームセンターやカラオケに、ホストクラブまでもがあるフロア。

他にもいろいろな階があつた。

そんな中でも僕が一番驚いたのは、『グローリー・ホール東京支店』という看板が下がった飲み屋街の一角にある店。

(……明日にでも行こっか。借金返済のために)

(くくっ。思い出してムラムラしてっし。次の日がバイトだけで学校がねえ日は、あつこに泊まり込みで稼いでもいいなあ)

(だねえ。ロングコース、それも泊りになると報酬が跳ね上がるらしいっ)

能磨学園 2

春の澄み切った空に、1匹のてんとう虫が飛び立つ。

それを見送った僕は教科書に視線を戻し、人を眠りに誘う魔法がかけられているらしいチョークの音に舌打ちでもしたい気分です。そっと右目だけを閉じる。

(テンコ、いい速度と高度だろ。とーちゃん?)

(だねえ。さすがうちの子。そしてフウカの一番弟子だ)

閉じた右の瞼には、暗闇ではなくテンコの視界が広がっている。

先生が読み上げる教科書の文字を目で追いながら、空中散歩の景色を楽しむ。

そんなものには慣れたもの。

東京は建物がゴチャゴチャ密集して自然が少なく、気軽に運動もできないので少し溜まっているストレスを、こんな景色で宥めるのも悪くない。

(テンコ、ととさまが動かす?)

(いーよいーよ。好きに散歩させただけ。いっつも影の中じゃかわいそうだから、散歩に出かけてもらったただけだし)

(はあい)

何年ぶりになるのかもすぐには思い出せない学校の授業は酷く退屈で、この数十分も続く静かな時間が僕の高校生活で一番の難題になるんじゃないだろうか。

もしかすると学校というのは、こういった時間をいかにしてやり過ごすか経験させ、僕達の忍耐力を培うために通う場所なのかもしれない。

(ととさま、見て〜♪)

(んー?)

セイは影の中。

なので見てくれというのはテンコの視界だろう。

(まだ朝っぱらだつてのになあ)

(なんの話、って。わあお)

どこかの家の窓で羽を休めるテンコ。

その妹を斥候に出したりして僕の補佐をするセイだから、テンコのお腹から見える景色だつて僕に届けられる。

うちと同じワンルームマンション。

そのカーテンをほぼ閉め切った部屋で、派手な色と髪型をした若い女の人は大きな大人のオモチャで自分の膺を貫いていた。

ああっ、くっ、ううんっ、おつき、ああ……

そんな声と荒い息と、大きなバイブが出し入れされて鳴っている淫らな水音まで聞こえる。

にしても、経験人数89つて凄いなあ。淫乱度が70と高いはずだ。

(次はあっちの方角にあるはずのおっきい学校と高校を探すのっ♪)

テンコの水分補給ついでに、まずは女子トイレに向かうのっ♪)

(こらこら。トイレの覗きなんて、人として絶対にしちやいけないよ。

……それとは関係ないけど、今夜の飲み会の差し入れはフィッシュ・

アンド・チップスにして、僕の方はセイにあげよう)

僕はこれからの日常生活で特に予定のない夜はホムラさんとアヤマさんの部屋に行つてお酒を飲むんだけど、「なら食費とお酒代を出しますね」と言ったら、2人はそれを即時に却下した。

こんな学校だから、教員の給料も破格らしい。

でもそれじゃあまりに申し訳ないので、僕は晩ゴハン代わりにツمامミを作つて差し入れをする事に決めている。

ホムラさんとアヤマさんも能力者らしくお酒とツمامミをかなりお腹に入れるから、差し入れを持って行つてもムダにはならないはずだし。

(やったくなのっ♪)

(えーっ、ズリイっ！)

テンコが飛び立つ。

飛ぶ速さも高度も普通の虫とは別物なので、セイの目指す場所はす

ぐに見つかったようだ。

覗き、それも女子トイレのそれをするなんて、ここはガツンとし
かってやらなくっちゃ。まあ、でもそんなのは授業が終わってからだ
よね。うん。

「六道。……六道ってば」

「ひゃいっ!？」

大きなお尻の真ん中、僕が知っている女の人より少し赤黒っぽい割
れ目の下の方で生理用品であるタンポンの紐からポタポタとオシツ
コが垂れている視界を瞬時に消し、顔を上げる。

すると僕の机の前に、クラスに4人しかいない男子生徒が集まって
いた。

「次とその次は体育だぞ。着替えて地下に行こうぜ」

「あ、うん。でも、なんで地下?」

「能力者がスポーツしてるトコなんて、普通の人に見せれる訳ねー
じゃん。隠蔽系の能力とかで監視や盗撮なんかは対策してあるけど、
それでも校庭なんかで授業したりはしないんだって」

「なるほど」

「ところで、六道くんって戦闘系? じゃないと普通の体育でも
ちよつとキツイかも」

今まで話していた浩二くんというクラスメイトではなく、どこか小
動物チックな男の子がそう聞いてくる。

たしか名前は三好、えつと、……み、三好くんだ。

「使役系だけど」

「うーん。使役対象が戦闘向きなら、ギリギリ身は守れつかなあ」

「それでも危険だって。ねえ、みんなで先生に六道君だけは男子生徒
とだけ試合させてくださいってお願いしに行こうよ」

「試合? ドッジボールとかサッカーじゃなくって?」

「だよ。学期の最初の体育の授業は、クラス全員トーナメント形式で
武器あり能力ありの試合すんのがこの学園の恒例。ま、ランク付けし
て向上心を煽りたいんだろ」

「うへえ。通常授業初日にかあ」

「だからたぶん、先生に言ってもムダだ。余計なケガしねえように、さつさと『まいった』してりやすく終わるさ。行こうぜ」

「うん」

試合。

そしてランク付け。

18歳になったら本社から級を決められるのは知ってるけど、まさか学校でもそんなのをしてるとは。

ホントに本気を出してもいいのかなあ。

師匠達、サラさんとアヤカさんは常に本気でやれって言ってたし、3年間1度でも実技でトップを譲ったらヤキどころじゃ済まないって脅されたけど。

でも隣の席のお嬢様、朱音ちゃんは入学式の自己紹介でトップで居続けると宣言してたし。

その翌日にそれを失敗させちゃうのもなあ。

ああ、どうしよう……

そう悩んでいる間に僕達男子生徒は、なんと職員室の隅にある階段を使って地下へと下りた。

なんでも地下にはそこからしか行けなくなっって、早朝や放課後も生徒なら誰でも地下の運動施設を自由に使っていいたい。

ちようどいいタイミングで、いい事を聞いた。

放課後はアルバイトなのでムリだけど、体を動かしたくなったら早起きをして使わせてもらおう。

学園の地下は支社のように何階層もある訳じゃないそうだけれど広い部屋がいくつもあって、浩二くん達がいなかったら始業時間までに僕が目的地に辿り着く事はなかっただろう。

中等部の頃、見学に来た事があるというみんながいて本当によかった。

「わあ。広い道場だねえ」

「まだ狭い方だっって。全校稽古をする道場なんて、軽くこれの5倍はある」

「ほえー」

「お、先生達もういるじゃん」

浩二くんの顔が向いた方に僕も視線を移す。

するとホムラさんとアヤマさんもちようどこちらを見ていたようで、ホムラさんに手招きされた。

「なんだろうな。まだ授業始まってねえのに」

「やっぱり先生も六道君を心配してくれてるんだよ。優しいね」

「ごめんなさい。」

そんな人達じゃないと思います、絶対。

「どうしたんっすか、先生ー?」

「今年からこの学園に入った六道はこんなのに慣れてないから、最初に説明しておこうと思ってな」

「助かります」

ホムラさんの説明が始まる。

今から行う試合は、くじ引きで対戦相手を決めるトーナメント制。

武器は好きな物を使えるから、僕だと木刀になる。それはカートのような物に入ってる中から、好きに選んでいいらしい。

試合に反則とかはなし。能力も使用可能だけれど、相手が死ぬような攻撃はホムラさんとアヤマさんが即時介入して攻撃を防ぎ、そうされた生徒は失格。

他にも重症判定とかいうのがあって、それは試合を見学していればそのうちわかるし、それが出たら浩二くん達が説明してくれるらしい。

そしてなにより、試合は常に本気でやれとの事だ。

「こんなとこだな」

「えーっと、本気って言われても。先生達はある程度、僕の能力を把握してるんですよね?」

「そうなるな」

「それでも本気でやれと?」

「当たり前だ」

「はあ。覚悟はしてたんでいいけど、今から心配だなあ……」

始業を告げるチャイムが鳴ると、クラス全員がホワイトボードの前

に集められた。

そのホワイトボードにはトーナメント表が、アヤメさんの手にはくじ引きの箱がある。

まずは準備体操だと言われたので皆と同じく等間隔に散り、簡単なそれを終えてまたホワイトボードの前に集合。女の子ばかりなので、ごちや混ぜになっっているシャンプーなんかの香りが凄い。

「さて、お待ちかねの格付けを決める時間だ。中学最後の試合から、ずいぶんと時間が経っている。あの試合を録画した物は私も柗先生もしっかり目を通してあるからな。成長が見られないようならば補習もあり得る。そのつもりで全力を出せ。では柗先生、お願いします」
「はい。これが今回のトーナメント表になります。クラスは35名で、すでに空欄に×がしてあるのを見てわかるように1名が欠席。なので不戦勝が1名。シードが3つありますが、昨年の上位3名がシード選手となります。その発表をしてトーナメント表に名前を書き込んだら、希望者からくじを引くように」

第1シードは本人が言っていた通り、朱音ちゃん。

その朱音ちゃんがライバルだと言っていた杏ちゃんが2番なのもまあわかる。

でも驚いたのは、3番目のシード選手だ。

幸田霧。

その霧ちゃんはなんと朱音ちゃんの前の席の、あの小柄だけど巨乳な、黒髪おさげに黒縁メガネの、処女なのに淫乱度75を誇る、マジメを絵に描いたような女の子なんだから。

「朱音と杏と委員長とだけは当たりたくねえなあ」

「へえ。あのメガネの子って学級委員長なんだねえ」

「朝のホームルームで決めただろうって。あんな席だからわかってど、どんだけ話を聞いてねえんだよ」

「あはは」

だって常にといいいくらい、影の中からセイとフウカが話しかけてくるし。

「六道くん、早く」

「なにが？ 三好くん」

「くじを選んで引けるんなら、あの3人と当たらない場所を引くんだよ。だから早く」

「いや、本気でやれって言われてるから。僕は最後でいいかなあ。それか3番手の人を狙って引いてもいいけど。1番と2番は普通に勝ち上がるだろうから」

立ち姿や歩き姿を見る限り、木刀を持っている朱音ちゃんと、徒手空拳ではあるけれど杏ちゃんはそれなりに修練を重ねてるんだなと納得できる。

でも委員長ちゃんは徒手空拳で、見るからに素人っぽい動き。きつと能力や術のみで戦うタイプなんだろう。

前回のランク付け結果を鑑みても、最初に脱落しそうなのは委員長ちゃん。

だから、先に当たっておきたい。

どうせ本気を出すんなら僕も稽古のつもりでやるから、いい経験になるはず。

「委員長とっ!？」

「バカ、絶対にやめとけ！ ヤケドじゃ済まねえぞ!？」
ヤケドって。

ジャージ姿の委員長ちゃんから、炎気は漏れてないけどなあ。

まあ爆乳が強調されて、エロさは漏れ出すどころか噴出しちゃってるけど。

（あれっ。そういえば委員長ちゃん、淫乱度の割に淫気がそんな詰まってるねえ）

（金持ちなら、娘の淫気祓いなんていくらでもするだろ。この学園の生徒は、みんなそうじゃなか）

（でも、ととさまはセイがいるから簡単だけど、普通の術師じゃ手も触れずに淫気祓いは厳しいのっ。だからきつと、処女の子はクンニとかで淫気を散らしてると思うのっ）

（となると、かなり頻繁にかなりの長時間、それも激しく、まだ膜のあるアソコを舐められてるって事かあ。そりゃ淫乱度も上がるよねえ。

その被い、じゃなくって散らしの依頼、桃さんの事務所に回ってこないかなあ)

そんな話をしながらトーナメント表が埋まるのを待っていたけど、結局、僕がくじを引く事はなかった。

けど僕は今、そうした判断をちよつと後悔している。

最後まで残っていた場所が、第1コートでの1回戦だったからだ。一番最初は少し緊張する。

「いいか、六道。ヤバイと思ったらすぐに、まいったって大声で言うんだぞ?」

「そうだよ。というか、試合開始の声がかかった瞬間にまいったでいいからっ」

「あはは。それも面白そうだけど、やったらいろんな人に怒られそうなんだよねえ。だから普通にやってきます」

立ち上がる。

生徒が座っているのは、第1コートと第2コートの間。

でもそのままコートには入らず、道場の入り口の方の面に移動して、一礼してからコートに入る。

「岩永流槍術、土使い岩永博美。板張りの床からでも土や岩を出せるから、油断はしないでね」

淫乱度が0という信じられない数値のショートカットの女の子は、そうやって子供のように笑う。

子供っぽいからこそ、淫乱度が0で淫気も詰まっていなんでしょうか。

ショートカットに日焼けした肌とスレンダーなスタイルで、顔もかわいらしいからモテるだろうに。

淫乱度が0って事は、下手をするとオナニーすらちゃんとした事がないのかもしれない。

純真無垢。

けれど体は子供ではなくすっかり少女で、女になるために助走をつけてまでして成長を始めている。

ほんのわずかでも刺激を与えれば普通に濡れるだろうし、そうなっ

たらこの子は未知の快感に怯えながら、どんな風に乱れてゆくんだろう。

こんな子に、1からいろいろと教え込みたいなあ。

「親切にありがとうございます。僕は六道弘樹。剣は吉喰流で能力は、……使役系ですね」

明かす明かさないは学校では個人の自由らしいので、蟲使いだとは告げないでおく。

これからセイとフウカはクラスメイトの前に、今日だけじゃなく実技の授業のたびに影から出てくるんだし。

2人には、あまり傷ついてほしくない。

「なら、もう使役対象を召喚した方がいいよ。私はしないけど、面倒だからって一撃で終わらせようとする子も多いし」

「なるほど。それじゃおいで、2人とも」

セイとフウカ。

2人が僕の影から飛び出す。

と同時に、大爆笑。

「ととさま、どうしてセイ達は笑われてるのっ?」

「あー。なんと言おうべきか。僕はこうなるってわかってたけど……」

「決まってるんだろっ。オレ達をバカにしてんだよっ! とーちゃん、こいつら全員ぶっ飛ばしていいかっ!」

「試合で、しかも死なない程度に手加減するならね」

「よおっし。まずはオレがどんだけっえーか見してやるっ。セイ、この試合は手を出すなよっ!」

「次がセイでいいなら先を譲るのっ♪」

「委員長とはセイだけでやるのか。しばらくヒマになりそ」

ようやく生徒の笑いの声が収まると、審判のホムラさんがコート中央近くに進む。

入学式の時のように怒声を飛ばさなかったのは、この後の展開を読み切っているからだろう。

飲みながら「うちの学園の生徒はほとんどがエリート気取りの修行不足なガキだから、ヒロキがその鼻っ柱を折ってくれるのが今から楽

しみだ。そうすれば、少しは修行に身を入れるだろう」とか言つてたし。

「へへっ。かーちゃんから饞別に貰った木刀、やつと使えるぜ」

「鬼斬りの業物だけじゃなく、そんなのも貰つてたのか。カッコイイね」

「だろ？」

フウカが持っているのは、小太刀の木刀。

しかもその子供用なので西洋の少し大きなサバイバル・ナイフのように見えるそれを、フウカは二刀とも逆手に握っている。

「はじめっ！」

その声と同時にフウカが動く。

一直線に突撃。

「は、速いっ！」

そう叫ぶように言った博美ちゃんはその突進を止めるためコート
の中央に大きな土の塊を出したけれど、もしもその土の向こうを見る
術がないのなら最悪の手だ。

「見えてるのかなあ、こっち」

「関係ないのっ。全力と見せかけてマラソンくらいの速さ、そこから
フウカの全力スピードにまで上げたら、目がついていかなくて消えた
ようにしか見えないのっ♪」

「だろっねえ」

やめっ。勝者、六道！

そんなホムラさんの声と同時に、コート
の中央にあつた土の塊がほろほろと崩壊してゆく。

それでやつと見えるようになった向こう側では、フウカが小さい体
でヒロミちゃんに馬乗りになつて首筋に木刀を置いていた。

もう片方の小太刀は、いつでも心臓に突き立てられる位置。

「ま、まいりました……」

道場が異様に静まり返っているので、そんな声がやけに大きく聞こえる。

それからいつでもまたヒロミちゃんを斬れる構えのまま大きく飛

び退き、「笑ってたヤツの顔は覚えてっから、こんなんが羨ましくなる
ほど恥ずかしい負け方をさせてやるぜ」と言って笑うフウカの声も。

能磨学園3

「どーなつてんだよっ！ なにがどーなつてんだよ六道っ！」

「スゴイ。スゴイスゴイスゴイ！ スゴイよ六道君！」

「男子が一回戦突破なんて初等部の4年トキ以来じゃね!？」

「六道すげーっ！」

僕が礼をして観戦場所に戻ると、4人の男子生徒は大興奮。

その言葉を胸を張って受けるフウカも、それを見守るセイもうれしそうだ。

対照的に静まり返って聞こえるのがヒソヒソ話だけの女子生徒達は気になるけれど、本気を出せと言われた時から、クラスで孤立する覚悟なんて決めてある。

男子生徒がこうして普通に話してくれるだけで、充分うれしい。

「でもま、次はちゃんとまいったしろよ?」

「えっ。僕、優勝するつもりなんだけど」

「その心意気は買うけど、次の相手は委員長だからなあ」

「ふうん。だつてよ、セイ。僕も手伝おつか?」

「いらなのっ！ それと相手の情報なんかも聞いちやダメなのっ！

その上で華麗にぶちのめしてやるのっ！」

「はいはい」

残念。

委員長ちゃんがどんな能力を使って戦うのかはわからないけど、試合となったらあの爆乳がぶるんぶるん揺れるように立ちまわりたかったのに。

「ちっちゃいのに強気だなあ、オマエ」

「オマエじゃないのセイなのっ！ あと、ちっちゃくないのっ！」

「いや。ちっちゃいから」

「ああっ！ またちっちゃいって言ったのっ！」

「まあまあ。セイも浩二くんも、とりあえず静かにしよ。赤岩先生が

睨んでるよ?。」

「お、おう」

「むー」

剣術には見取り稽古というものがある。

他の人の稽古を観察して、そこから得るものを吸収しようとするやり方だ。

だから今は無駄話をするんじゃない、他の能力者の試合が見たい。

「凄いいえ、弓も使っていていいんだ」

「あんなクツションみてえのが付いた矢なんて、まっすぐ飛ぶのか？

とーちゃん」

「さあねえ。って、おおっ」

「弓じゃない方の子、式神を出したのっ♪」

「しかも5体同時に。けっこう心力あるなあ」

そういうえば式神使いは陰陽師系の能力者だから、僕と違って使役力じゃなくて心力だったっけ。

「やっぱ式神使いは使役系の花形だよねえ。いろいろと羨ましい。ここじゃ言えないけど」

「ホントだなあ。ここじゃ言えない事に使ったら、めっちゃ楽しそうだけ」

はじめと号令がかかると、フウカがまっすぐ飛ぶのか心配していた弓が、かなりの威力で先頭の式神に迫る。

でもその矢はなんの前触れもなく左にスライドして、術者である式神使いの頬をかすめた。

「うわー。風尾のやつ、かなり腕を上げてんなあ」

「あの京極さんが防戦一方だもんな」

たしかに。

弓の女の子は矢を番える動作の際を風使いの【風刃】で消し、また矢を放ってさらに2体の式神を紙切れに戻している。

「が、頑張って小百合ちゃんー!」

そんな三好くんの声援を受けた式神使いの女の子は、上品そうな見た目には似合わないニヤリとした笑みを浮かべて、袖口から新たに符

を4枚取り出す。

そして口の中で何事かを唱えると符を前方にばら撒いて、追加した式神と残っていた式神を一斉に突撃させた。

「もしかして、三好くんの彼女さんとか？ 式神使いの子」

「つてか、婚約者。2人が揃つてるとそりやあもうラブラブで、他人の入り込む隙間なんて1ミリもない」

「ほえー。僕と同年で、もう結婚が決まってるのかあ」

お嫁さんが1人で足りるなんて羨ましい。

試合は、僅差で三好くんの彼女さんが勝利。

なので僕が委員長ちゃんに勝ったら、彼女と対戦する事になる。

三好くんの彼女さんだし、その試合では僕が相手をしてプライドがあまり傷つかないようにしておこう。

「でもなんか、あつさり終わる試合も多いねえ」

三好くんの彼女さんの試合を含めて7試合。

それが終わっても、たった30分ちよつとしか時間が過ぎていない。

ちなみに男子生徒は、全員が初戦敗退。

全員が戦闘向きじゃないそうで、剣術のみで戦ってたから仕方ないんだろう。

「そりやそうだって。純粋な戦闘系は、俺達からしたらバケモノみたいな感じだから。ほら、それよりこれの次は六道の2回戦だぞ」

「あ、んじや向こうに移動しとく」

「ぶっ飛ばしてやるの〜♪」

「早くまたオレの番にならねえかなー」

「セイの活躍を見ててなのっ♪」

互いに一礼してコートに立つ。

委員長ちゃん、ジャージ姿でもやつぱりおっぱいが目立つなあ。

あれに挟みながらフェラしてもらって、小さな顔とメガネにぶっつか
けたい。

マジメで気弱そうな顔をザーメンで汚してからアレコレ。

……うん、たままないや。

そんな事を考えていると委員長ちゃんはこちらに届くか届かないかの小さな声で、流派や能力の系統を名乗るのではなく、なぜか謝罪の言葉を口にした。

ま、まさか心を読まれたっ!?

「ど、どうして謝るのかなー?」

「ご、ごめんなさい。私、今から六道さんに嫌な思いをさせちゃうんです。本当にごめんなさい」

「はあ」

よかった、バレてないっぽい。

「私、その。あの。かつ、干渉系、なんです。ごめんなさい……」

「あー。気にせず自由にしていいですよ。試合なんだし。僕は見ての通り使役系なんで、干渉する対象が増えて申し訳ないですし。全力でどうぞ」

干渉系。

それはその名の通り、相手の五感や身体、術者によっては心にまで干渉して戦いを有利に進める能力の事。

「もうよさそうだな。では、はじめっ!」

干渉系かあ。

修行を始めてすぐくらいに耐性確認って言われて本社の術者さんにだいぶかけられたけど、レジストばかりで1回もかかんかったんだよねえ。

「本当にごめんなさい。私、『六道さん達の動きを止めます』……」

「おっ。ピリッって来たぞ、とーちゃん」

「セイものっ」

「僕は感じなかったなあ。すみません委員長ちゃん、もう1回いいですか?」

「えっ……」

木刀すら持っていない委員長ちゃんが息を呑む。

僕達はたしかに委員長ちゃんの「言霊」を受けたのに、全員がピンピンしていて、腕を回してみたり足踏みしてみたりしているのが意外なんだろう。

「いやだって委員長ちゃん武器持ってないから、その【言霊】で相手の動きを止められなかったら、まいったするんでしょ？」

「そ、そうですけど」

「なら全力で心力を込めて使っていいよ。じゃないと本気の試合にならないし」

「でも、そんな」

「いーからいーから。なんなら僕にだけかければいい。子供好きならこの子達にかけるのはキツイだろうし。僕の動きが止まったら委員長ちゃん勝ちって事で」

「あ、あの。赤岩先生。私、どうすれば？」

委員長ちゃんが本当に困ったという表情で審判のホムラさんを見遣る。

けどその視線を受けたホムラさんは、口の端を上げただけ。

「全力で【言霊】をぶつけてやれ。それだけでいい」

「その、大丈夫なんでしようか？」

「相手が六道だからな。責任は先生が持つから、自分の全力がどんなものかここで試すといい。ほら、集中してやってみろ」

「は、はい」

委員長ちゃんが目を閉じる。

おさげといい黒縁メガネといい、本当にアニメに出てくるような、見るからにマジメそうな委員長タイプ。

でも、超巨乳。爆乳と言ってもいいくらいの。

……そんな子がド淫乱。

僕が強引に迫ったら、たとえば放課後の人気のない廊下で女子トイレに押し込んで入学式の直前みたいにおナニーして見せろって言うたらどうなるんだろう。

淫乱度が75もあれば本当にしそうだし、それだけじゃ満足できずその先もあるかも。

そしたらオナニーでトロトロになったアソコに立ちバックで僕のをねじ込んで乱暴に腰を振りながらあの爆乳を揉みまくって、本当はセイが遮音魔法をかけてるのに喘ぎ声がうるさいバレるぞって口を

塞いで。

そんなレイプまがいのセックスでも感じちゃって、自分から腰を振り出す委員長ちゃんは泣いちゃったりなんかして。

でも、勝手に動いちゃう腰は止められなくて。

ヤバイ。

めっちゃ興奮しそう。

「……『私はっ、本当の全力で、六道さんの動きを止めますっ！』」

さつきまでのがウソだったような大声になっただけでなく、左手で手首を持った右手を突き出すようにして委員長ちゃんが【言霊】を放つ。

「あ、ホントだ。ビリッてきた。弱めのスタンガンくらい？」

「へえ。じゃあオレとセイになら通じるレベルじゃんか。やるなあ、

メガネーちゃん」

「スゴイのっ♪」

「だねえ。今すぐにも実戦に出れそう」

「ま、まいりました……」

2回戦もそうして無事に突破。

でもセイが今ので出番がなかった分、次の試合で頑張るとか言い出したのが困る。

相手は数少ない男友達になつてくれそうな三好くんの彼女さん。

セイはたまに父親の僕でも驚くほど過激な事を言ったりしたりするから、かなり不安だ。

そして、その不安は的中。

はじめの号令がかかると同時にセイは巨大な火球を放ち、5体の式神を一瞬で焼き尽くしてしまった。

換気装置の風に舞う元式神、紙人形のような符の燃えカスを呆然と見ていた三好くんの彼女さんには一応「この先の試合で使う分の心力を残してるなら再召喚を待ちますよ」と言っただけで、彼女は諦めたような表情で首を横に振って、まいったと小さな声で言っただけで下りた。

次の準々決勝なんてもつと酷い。

なんでも相手がセイとフウカを僕が呼び出した時に一番笑っていた女子生徒だったそうで、その鎖鎌を使う前衛系の女の子はセイとフウカを相手にまったくいいところを見せられないまま、最後には心が折れて座り込みながら呻くような声で、まいったと言った。

「ここまで来たら勝ちまえ、六道！」

「そうだよつ。あと2つ。2つ勝ったら、そしたら史上初かもしれない男子生徒の優勝だから。だから頑張って！」

「三好くんに言われたら頑張るしかないね。じゃ、いつてきます」

準々決勝最後の試合はなかなかの熱戦。

共に前衛系と思われる女の子2人が、まだ槍と薙刀で剣戟の音を響かせている。

2人とも、満身創痍。

もちろん本当にケガをしているのではなく、相手の武器でいい一撃を受けた時、審判のホムラさんが『赤。左肘から下、重症判定』とか宣言すると、そこからはその腕で武器を持つのを禁じられる。それでお互い片足を引きずって、片手で武器を振るっているだけだ。

もう少しかかりそうかな。

そう思っただけ見るともなしに視線をやると、コート向こうで次の対戦相手、杏ちゃんがいい顔で笑う。

その笑顔はどこか僕の師匠に、フウカの母親であるアヤカさんに似ていた。

顔のタイプが似てるんじゃないかと、強い相手と戦える事にワクワクしている笑みがそっくり。

気の弱い人ならそれを見ただけで怯えそうな戦闘狂特有の物騒な笑顔。

コワイコワイ。

「ねえ、六道くん。お願いがあるんだけど」

前の試合が終わってお互いにコートに入ると、杏ちゃんはあの剣呑な笑顔のままそう言う。

「はいはい。なんでしょ？」

「お願いだから、全力で来て。本気の本気で」

「もしかして3人で同時にかかってこいつて事？」

杏ちゃんが頷く。

僕は別にそれでもいいんだけど、杏ちゃんにとってそれはいい事なんだろうか。

学年で2位のプライドとか、男でここまで戦える人に初めて会ったならその経験を少しでも長く、とか。そういうのを考えると微妙なよ
うな。

「お願い。あたし、強くなるって決めたの。本気で。だからこの試合で自分の立ち位置を、弱さを知っておきたいんだ。そしたらあたしは、明日から本気で強くなる努力ができる。それも、目指すべき場所を見上げながら」

「……りよーかい」

まるでいつかの僕じゃないか。

恋が実ると前向きになるんだね、男の子も女の子も。

そう茶化せる雰囲気ではないので、了解と言ってから右手にぶら下げていた木刀を左手に持ち替えた。

納刀状態の日本刀。

まさにそんな感じで、その抜き打ちから勝負は始まる。

ジャージなので木刀を腰には差せないし鞆走りの勢いを使えはしないけれど、本気でやるならこれがいい。

「へえ。吉喰の剣じゃなくても抜き打ちを見せてやるなんて、よつぼどあのねーちゃんを気に入ったんだな。寝取るのか、とーちゃん？」

「人前でそんな冗談を言わないの。怒るよ？」

「はっ。まあどんだけ怒られても、うちの一番槍はいつだってこの才レだ。わかっただろーな、とーちゃん？」

「はいはい。好きにやっつていいよ」

「サポートは任せてなのっ♪」

そんなやり取りを聞いていた杏ちゃんが満足げに頷き、瞳を閉じて大きく息を吸う。

そして、その目がカツと見開かれる。

いい気合い、そしていい目だ。

「大水流合気、瀬本杏。行きますっ！」
「どうぞ」

コートはテレビで見た覚えのある剣道のそれよりもだいぶ広くて、僕達3人と杏ちゃんの距離は30メートルほど。

その30メートルを徒手空拳の杏ちゃんとフウカが一瞬で駆け、コートの中央で拳と小太刀の木刀を激突させた。すると同時に2人がニヤツと笑う。

あれだけ大きな音がしたのに笑ってられるんだから、杏ちゃんは頑強系か耐性系の能力か特性を持つ能力者なのかもしれない。

「ヒューッ。やるなあ、ねーちゃん！」

「そっちこそっ！」

拳と木刀。

両者の攻撃の応酬が始まる。

でも、10秒と経たずそれを見ている意味はなくなった。

「ととさま、見切ったの？」

「うん。もう充分かな。才は銀か、上手くすれば金ってトコだけど、圧倒的に修練が足りない。あれじゃフウカ1人でも余裕だ」

「ならこうなのっ！」

なんのタメもなく小さな火球がセイの手から放たれた。

それを追って、僕も走る。

コートの中央で睨み合いになったフウカの背中。

それで隠すため小さくしただけで、火球には式神5体を焼き尽くした時のものより魔力が込められている。

「合気のねーちゃん」

「なにさ？」

「プレゼントだ、受け取れっ！」

フウカが右前方にジャンプしながら逆手に持った木刀で杏ちゃんの首を狙う。

そして杏ちゃんの下っ腹に迫るセイの火球。

火球と小太刀。

左腕で小太刀を受け、サツと上げた右膝で火球を止め、左手と右足

を重症判定されて封じられてでもその攻撃を止めると決断をしたらしい杏ちゃん。

その目の前で火球は消えて、小太刀は腕のギリギリ直前で寸止めにした。された。

「ウソ、いつの間に……」

僕はいえばフウカが右に跳んだ瞬間全身の力を抜き、転びかけた状態から全力で加速して杏ちゃんの左から背後に回り込んだ。

そして抜き打ちの一撃、脇腹からの逆袈裟斬りを寸止めにして、杏ちゃんのまいったを待っている。

「その前に言うべき事は？」

「あつ。……ま、まいりました」

「お疲れ様」

能磨学園 4

3位決定戦は危なげなく杏ちゃんの勝利。

クラス全員でその試合の見学を終え、ようやく決勝戦となった。意外と早く終わったのかな。

そう思いながら壁にかかっている時計に目をやると、あと数分で授業の終わりを告げるチャイムが鳴る時間。

小学校の時にはたしか存在しなかった2連続体育の授業など、次の時間はなにをするんだろう。僕はてっきり、このトーナメント戦があるから2連続で体育なんだと思っていたんだけど。

「では決勝戦を始める。両者、前へ」

一礼してコートに上がる。

相手は予想通り、入学式の日から僕を敵視している朱音ちゃんだ。得物はお互いに剣。

でも隣の席だから感じられる炎気の漏れ具合、それと少しは見られた試合運びからすると、朱音ちゃんは剣よりも炎術がメインの武器なんだろう。

「ホムラ姉さま」

「学校でその呼び方はやめろと言ったはずだ。直せないなら停学も覚悟してもらおうぞ、煉上」

「失礼しましたわ。赤岩先生」

「で、なんだ？」

「わたくし、もしかして負けますの？」

「もしかしなくとも負けるだろうな」

「そうですね。やっぱり、負けるのですね」

「恥じる事はない。六道が規格外すぎるだけだ」

「お母様もそうおっしゃってました」

「だろうな」

「そしてこの殿方に勝とうだなんて思わず、チャンスがあれば在学中

でも構わぬから子種を仕込んでもらえとも」

「うええっ!?!」

行為だけなら是非ともお願いしたいけど、さすがにそっちの意味でも子持ちになるのはまだ早い。

でも、そうか。そういう事か。

そんな事を母親に言われてたら、僕を嫌っても当然だろう。

嫌われている理由が、生理的に嫌だからとかじゃなくってよかつた。

こんな美少女に、やめなさいと言いながらもアナルの皴を舐め上げられるたびに感じてしまつて逆ギレしながら腰を揺すつてしまひそうな女の子に本気で嫌われていたら、シヨックなんて話じゃない。

「ちよつ、ちよつと待つてください！ 四大家の火を司る朱音んちのおばさんがそこまで言うつて、六道はいったい何者なんですかつ!?!」

試合は決勝戦。

3位決定戦からはコートを一つしか使っていないので、クラス全員が浩二くんの叫ぶような問いの答えを待つて僕達を見ている。

「あー。それは六道のプライベートな話だから」

「この日ノ本に1名ずつしかいない飛車角の最初で最後となる弟子、その飛車角と仕事を共にして名を上げた棗桃コンビがわざわざ上京してまで世話を焼く存在。それがこの殿方、六道弘樹ですの」

「勝手にバラしてんじゃねえつての、煉上。つたく」

クラスメイトはけっこうな騒ぎ。

ああだこうだと好き勝手に情報交換なんかを始めてしまつている。

どうすんのさこれ。

「静かに！ 今すぐに口を閉じないと顔面を床に踏みつけて黙らせるわよー!」

かなりうるさかつた話し声がピタリと止む。

その叱責の声が審判としてコートにいるホムラさんではなく、生徒の近くににいるいかにも優しそうなアヤメさんの口から飛び出した大きな声だったからだろう。

普段は怒らない人が怒ると異常に怖く感じてしまうというのは、僕

も身に覚えがある。

「で、だからなんだ？ 煉上」

「わたくしは、子を産むただけにこの世に生を受けたのでしうか。もしそうであるなら、わたくしは……」

アカネちゃんが涙目で言葉を詰まらせる。

まあ、そうなるよねえ。

「バカな勘違いを」

「なにがバカで、なにが勘違いだとおっしゃるんですのっ!？」

「自分がどれだけ親に愛されてるかも知らないのがバカで、たまにか会えないのが理由でも親の冗談をそうまで重く受け止めてるのが勘違いだと言っている」

「お、おっしゃっている意味がわかりませんわ」

そう返されるとホムラさんは、時間がないから手短かに言うぞと前置きをして話し出した。

煉上ほどの家の長女に未だ許嫁すら与えていないのは両親がせめて結婚相手は娘に選ばせてやりたいという優しさで、親はそう思っているのに当の娘は煉上の長女としてふさわしくあらねばと男になど見向きもしない。

なので母親は、六道弘樹ならば娘も興味を持つかもと水を向けてみただけ。

「思い出してみろ。母親は冗談っぽくそう言っただけでたろう？」

もしそうじゃないなら、しっかりと命令するはずだ。それが煉上の当主というものだぞ。しかも、子種だの仕込むなんて言い方はしてなかつたんじゃないか？」

「そう言われれば。冗談っぽく、それも笑顔で、チャンスがあればデキちゃってもいいから押し倒しちやいなさいって……」

いやん。

そんなの、完全にお母さんが朱音ちゃんをからかっただけじゃん。それを本気にしてここまで悩んで、しかも僕を見るたびに睨み続けるなんて、お嬢様って怖い。

「わかったならいい。試合を始めるぞ」

「は、はい」

「では、はじめっ！」

と言われても。

どうすればいいんだろう。

アカネちゃんも動かないし、構えすらしない。

「えーっと。どうしますよ？」

「1本入れて目を覚ましてやればいい」

「ヤですよ」

「じゃーこーしよぜ。おい、お嬢様のねーちゃん。それからクラス全員の女ども、よーっく聞けっ！」

「えっ、あ。ど、どうしたんですの？」

「嫌な予感しかしないから魔法でフウカの声止めてくんない、セイ？」

「おもしろそーだからほつとくのっ♪」

そのセイの言葉に背中を押されたようにフウカが前に出る。

だけでなく、両手を上げて盛大な発表をするような芝居があった仕事草をしながら、朱音ちゃんとクラスの女子生徒を見回す。

「ここで約束をしてやろう。今日からこういう授業でうちのとーちゃんに一撃でも入れられた女は、種付けでもゴム有りでも1晩中好きなだけ、好きなよーにとーちゃんを抱かせてやる」

「きやーっ。六道くん、かわいい顔して大胆！」

いや僕はなにも言っていない。

「もしマジだったら、今日から必死で稽古するわ」

そんななくても稽古は身を入れてやろうよ。

「1本だけなら奇跡のマグレでどうにかなるんじゃない？」

甘い、けど君くらいの巨乳ちゃんにならわぎと1本あげてもいいかな。

「乱戦稽古が最大のチャンスよ。わかってるんでしょね、みんな？」

乱戦稽古って、もしかしてクラス全員でバトルロイヤルでもするの？

「頑張ろうね、乱戦稽古だけはっ！」

乱戦稽古が乱交稽古なら喜んでクラスの女子生徒全員お相手しま

す。

「ねえおチビちゃん、フウカちゃんっていったっけ。それマジ?」

「マジマジ。だからほら、さっさと構えろって。お嬢様ねーちゃん」

「えっ、ええっ!? わっ、わたくしはそんなのっ!」

「なーを言っっちゃってるんだかなあ、この子は」

「ごめん。あたし六道くんから一本は取りたいけど、彼氏いるからそーゆーのはパスなんだ。どうすればいいの?」

「そしたら権利をダチにあげるなり売るなりすればいいっって。じゃ、そゆ事で」

チャイム。

タイミングがいいんだか悪いんだか。

「ほら、チャイムが鳴り終わるまで決着がつかなきや両者失格にするぞ」

「ひっど」

横暴だ、横暴。

今夜どうなっても知りませんからね?

「うるさい。嫌なら早く終わらせろ」

「はあ。行っついで、フウカ。どうしてかはわかってるよね?」

「へーい。お嬢様ねーちゃん、覚悟! お説教を減らすため負けてもらうぜっ!」

「えっ?」

フウカが駆け出す。

思わずといった感じでアカネちゃんが正眼に構える。

「切り替えヘタだなあ、お嬢様ねーちゃん」

「やめ。勝者、六道。全員しつかりと水分補給をして次の授業に備えろ。次の授業も、この道場で行う」

ホムラさんがそう言い終わると同時にチャイムが鳴り終わり、朱音ちゃんの股間を小太刀でぼふっと叩いたフウカがこちらに戻ってくる。

「この木刀のニオイ、嗅ぐ? とーちゃん」

「嗅がないっての。かわいそーに。真っ赤になって蹲ってるじゃん、

朱音ちゃん」

「クリトリスを切っ先でクリクリってしてやったからな。にしし」

「わざわざ嫌いな順手に持ち替えてまでする事じゃないでしょって」

高校はどこもそうなのか、それともここが特殊なのか、朝のホームルームで決まったナントカ委員の女の子が全員にスポーツドリンクのペットボトルを配っている。

僕にも差し出されたのでありがたく受け取り、キャップを開けてセイに渡す。

「ありがとなのっ♪」

「フウカと半分こしてね」

「さすがだなー。とーちゃんって太っ腹だし、なにやってもつえーし、カッコイイよなー」

「見え見えすぎて哀しいよ。お説教は家に帰ってから」
「うえー」

さて、お説教の内容を考えるのなんて後回し。

今はまず思いもよらず有名人だったららしい師匠達や、棗さんと桃さんの件で僕にどう声をかけたらいいかわからなくなっているらしい男子生徒達にどう話しかけるべきかを考えよう。

と思ったけれど、それを考えるのはやめにした。

師匠や先生やアルバイト先の雇用主はたしかにちよつと変わっているけれど、僕という能力者の存在自体がもつともつと変わっている。

孤立するのは覚悟していたし、そうになったらそうなたで気が楽なものもたしか。

放置する事に決めてセイとフウカと話しながら次のチャイムが鳴るのを待ち、授業が始まってからは男子生徒とちよつと離れてホームラさんの説明を聞いた。

「それじゃ説明した通りさっきの試合の上位3名、それから選択授業が『前衛戦闘』になっている者は武器を持って等間隔に並べ。そういった者は、通常の体育では教師の下の師範みたいなものだと思えばいい。そうでない者は、さっきの試合を参考にしたり、習熟したい武

器種を使う者に教えを乞うように」

「赤岩先生、上位3人に入ってるし選択も前衛戦闘だけどトップ3と稽古がしたい。そういうのってアリですか？」

「教える側の数が極端に足りなくならなければアリだ」

「やあつた」

「では、はじめっ」

そういう事なら、この授業はただ突っ立っているだけで終わりそうだ。

女子生徒は僕の所に来たら体が目当てみたいだし、男子生徒は僕とどう接したらいいか迷っているので相手はいない。

「六道くん、一手お願いします」

「ちよつと。あたしのが先に並んだんだけどっ？」

「いーえ。私だったって」

「どっちでもない。あたしだもんっ」

「早い者勝ちでいいじゃん。六道、覚悟ッ！」

「ど、どゆ事？」

とりあえず振り下ろされた薙刀を弾き返し、僕の前であーだこーだと喚いている20人くらいの女子生徒達を観察してみる。

するとその中にいる非処女は3人だけで、1人は三好くんという婚約者がいる式神使いの女の子。

そして昨日処女を卒業したばかりの杏ちゃん。

もう1人の子は、最後のセックスが約1年前と表示されていた。

「モテるなあ、さすがとーちゃんだ」

「これ、モテてるって言ってるの？」

「じゃね？ ヤリモクでも寄ってくるだけマシじゃん」

「ととさまカッコイイから当たり前なのっ♪」

「六道。言っておくがこういつた授業の形態は前衛戦闘を希望した者、つまり同世代の少人数で組んで討伐に出たなら指揮を執る事になる可能性が高い者の訓練も兼ねている。いつまでもこんな騒ぎを許してるようじゃ、六道の成績にもそれが加味されるぞ？」

さすがにそれはヤバイ。

なので思いっきり両手を叩き合わせて普通じゃちよつと出せない大きな音を出し、みんなが驚いて僕を見たところで話を切り出した。

「んー。それじゃ、まず杏ちゃん」

「うんっ。なにになに？」

「彼氏さんのいる杏ちゃんは、今がめつちやくちや幸せな時でしょ。それでも僕の前に並んだのは、純粋に僕と稽古がしたかったからだよね？」

「当たり前じゃーん」

「なら、杏ちゃんはこつち」

「はあ」

「そして杏ちゃんと同じく、さつきうちの子が言った抱かせるとか抱かせないとか関係なく稽古をしたって人だけ、杏ちゃんの後ろに並んでくださーい」

女子生徒達が顔を見合わせ、仲のいい人同士で相談を始める。

そして1分ほどが経って、杏ちゃんの後ろに並んだのはたったの4人だけだった。

「OK。じゃあ、僕はまずこの5人と順番に稽古をします。他の人はこの5人が満足したら順番に稽古するって事で。はい、解散解散」

えーつと大きな声上がるけど、まだ腕組みをして眉を顰めているホムラさんがこちらを見ているのに気付कि、女子生徒はすぐそれぞれに合った稽古相手の元へと向かう。

「元1位から3位までと、とーちゃんと最初に戦った槍のねーちゃん。それに式神使いのねーちゃんか」

「三好君の彼女さんは意外。他はまだわかるけど。なんで僕に？」

三好君くん彼女さん、小百合ちゃんだったかが、なんともSっぽい笑顔を浮かべる。

「私は、式神使いとしてまだ未熟で。具体的に言うとな数は人並み以上に出せるけど、条件付け、使役系じゃない人にわかりやすく言うところプログラミングとか式神のディテールがお粗末すぎるの。だからここまで完全な人型のかわいらしい子供達を使役する六道くん、そのあたりのアドバイスをいただけたらなあつて」

「ならそれはセイがアドバイスするのっ！」

「……適役だろうけど、変な事まで教えないでよ？」

「もちのろんなのっ♪」

どうしよう、１ミリも信用できない。

能磨学園5

「んじや他の4人の中で、試合形式で戦いながらアドバイスを受け
るって方法じゃないのを希望する人は？」

「そう言っただけを待っても、誰一人として声を発しないし挙手もし
ない。」

「なら最初は杏ちゃんやんと博美ちゃんとフウカが、委員長ちゃんと朱音
ちゃんが僕と試合形式でやろうか。フウカ、口頭での説明やアドバイ
スをする時は3人で話し合い、デイスカッションでもする感じでよろ
しくね。こつちもそうするし、一巡したら組を交換して僕もそうする
から」

「あいよっ」

「こつちも心配だけど。」

「まあフウカなら平気だろう。」

「これでもれっきとした吉喰流の使い手だし。」

「じゃあ、僕達はまずお話から。いいですか？」

「え、ええ。仕方ないから聞いてあげてもよくなってよ」

「テンプレなツンデレありがと」

「あの、よ、よろしくお願いしますー！」

「うんうん。でも、肩っ苦しいのは抜きで。じゃあまずは委員長ちや
ん、まだ【言霊】っていう能力の行使には抵抗があったりする？」

「委員長ちゃんが表情を暗くして俯く。」

「でもこの問題は委員長ちゃんが能力者として生きてゆくため、この
伸び盛りの時期に強くなるためには避けて通れない話なんだと思う。」

「僕は嫌われたっていいから、ちゃんと話そう。」

「……はい」

「やっぱりねえ。その理由は？」

「だって【言霊】は相手の意思を踏み躪って」

「それを言うなら僕や朱音ちゃんだってそうでしょ。相手の勝ちたい

という意思を踏み躪って試合に勝つ。それって、悪い事？」

「そうじゃないです。そうじゃないです、けど……」

やっぱ根は深いか。

僕との試合の前に見せた卑屈さは、かなり長く自分を責め、そう
なってしまうほどに誰かから責められないと、ああまではならないよ
うに思う。

「霧はいつも考えすぎなんですわ。あれほどの能力を誇るどころか恥
じるなんて、親やご先祖様どころか、神様方に対しても不敬ですわよ」
「でも、干渉系は嫌われるってよく聞くし」

「そんなの、やつかみに決まってますわ。現にこの六道ヒロキやわた
くし、それに杏はレジストしてますもの。弱い犬に吠えられて落ち込
む必要なんてありませんわ」

「ホント、それだよねえ」

「でも……」

ここは、ホムラさんに手を貸してもらおうか。

さつき朱音ちゃんの勘違いを容易く見抜いて、あつという間に誤解
を解いたように。

亀の甲より年の劫、ってヤツだ。

「なーんか失礼な事を考えてないか、六道？」

「め、滅相もない。それより先生からもアドバイスを」

「根っこの部分を今どうしようと思うのがダメなんだよ」

「はあ」

ならどうしろと……

「なあ、幸田」

幸田って誰ですかと声に出しかけてしまったけれど、ホムラさんの
声に涙目の委員長ちゃんがそつと顔を上げる。

そーいや、そんな家名だったっけ。

「なんでしよう、赤岩先生」

「幸田は、本当に強くなりたいのか？」

すぐには返事をしないと置いていた委員長ちゃんが、驚くほど素早
く、力強く頷く。

その迷いのなさを見せられて、僕は自分の心配が酷く的外れだった事に気づいた。

本当に強くなりたいなら、そんなに問題はない。

そのためにすべき事はわかり切っているんだから。

「私、強くなりたいです。こんな自分を、変えたいんです」

「なら、その方法を教えてやろう。六道がな」

「僕ですかっ!？」

「当たり前だろうに。ほら、どうせ思いついてるんだからさっさと話せ」

「はあ」

「お願いします六道さん。どうか、どうか教えてください。私みたいなのが、本当に強くなれるんでしょうか!？」

「あ、うん。たぶんこのクラスの誰よりも簡単に、誰よりも大幅に強くなれると思うよ」

「そんな……」

委員長ちゃんの顔に、『信じられない』と書いてあるのが見えるようだ。

なら、实例を交えて話そう。

「朱音ちゃん。今まで委員長ちゃんの【言霊】をずっとレジストして試合に勝ってたんだよね?」

「そうですわね。でも、小学校の頃にはレジストできずに負けたりもしてましたわ。中学に上がったからは無敗ですけど」

『小学校の頃』、そういった瞬間に泣き出しそうになった委員長ちゃんが気になるけれど、さつきホームラさんが言ったようにそういう根深いトコを今、それも出会ったばかりの僕が掘り返したって絶対になにもしてあげられない。

なので、今できる事を話す。

「それはいつも『朱音ちゃんの動きを止めます』って言って?」

「ですわね」

「じゃあそれが、『朱音ちゃんの炎弾は徐々に小さくなって私に届く前に消える』だったら?」

「考えるだけで恐ろしいですけど、そんな事が本当に可能ですの？」
【言霊】の威力と怖さはこの身をもつて知っていますけれど」

「あー、ごめん。例えばが悪かった。術じやなくて剣で例えよう。全身の動きを止めるより簡単な、例えば『その踏み出した朱音ちゃんの足は硬直して地に転ぶ』とかさ」

比喩でも大袈裟に表現しているのでもなく、朱音ちゃんは大きく身を震わせながら自分の肩を抱く。

「か、考えたくもありませんわね。霧ほどの使い手が【言霊】を全身ではなく、もつと術のかけやすい、それも片足や片手に限定して行使して動きを止めようとされたら、わたくしですらレジストできる気がしませんもの。そしてその霧が、もし……」

「だよねえ」

「煉上さん、あの、なにが、もしなんでしよう？」

「教えたげて、朱音ちゃん。委員長ちゃんを友達だと思ってるなら」

「友達どころか、霧は大切な幼馴染みで大親友ですわ。家も仲がよろしいですし。母親同士も幼馴染みで大親友ですもの。……いいこと、霧」

「う、うん」

大切な幼馴染みで親友。

そうであるらしい2人は真剣な表情で見つめ合い、仲の良さを証明するかのように同時に生唾を飲み下す。

「考えてみなさいな。もし霧が六道ヒロキの言ったように細かく【言霊】を駆使したら、もしもそんな戦い方を身に着けた霧が、……武器を持つていたら」

「あつ」

正解だ。

そうとでも言うように腕組みをして黙って話を聞いていたホムラさんが大きく頷く。

当たり前。

委員長ちゃんは、このクラスの誰よりも伸びしろがある。

それは能力に目覚めてから高校1年生、15歳になるまで最大の武

器である【言霊】で、大技中の大技とでも言うべき『全身の動きを止める』という戦い方しかしてこなかった事。

そして同時に【言霊】と、その大技のみを鍛え上げて、本人は自覚していないくとも武術などの小細工を一切使わずにここまで強くなった事が、期せずして功を奏して。

つまり委員長ちゃんは今よりずっと簡単で心力を消費しない程度に【言霊】を行使し、さらに武術や、なんなら拳銃だけでも併用すれば、今すぐにでも銀将級くらいの能力者と肩を並べて討伐なんかに参加できるはず。

「簡単なのは拳銃だと思っんですけど、赤岩先生はどう思います？」

「それは急ぎすぎだ、六道。たしかに今の幸田が授業用の模擬銃を持って試合に出れば2位にはなれるかもしれないが、そんなのを望んで幸田は強くなりたいと言っただんじやないはずだぞ。そうだろう、幸田？」

「えっ。あ、はい。私は能力者としてより、人間として強くなりたいと思います」

「よしよし。なら、まずは自分が学びたいと思う武器なり武術なりを探せ。そうすればその修行の途次で、幸田は人間としてもっと強くなる。それは保証しよう」

「は、はいっ！」

うん、いい返事。

これなら大丈夫そうかな。

となると次は……

「こつちの方が大変そうだよねえ」

「間違いなくな。座って話すか」

「ですねえ」

アヤメさんはさつきからいろいろな班の稽古を見て回っているけれど、ホムラさんはうちの班にまだ付き合ってくれるようで、4人で車座になって板張りの床に座る。

「な、なんですの。六道ヒロキ。そんなにじっとわたくしを見て。あなたなんか懸想されたって、嬉しくなんてありませんわよ？ え

え、決して嬉しくなんてありませんわ」

「いやまあそんなのどうだっていいんだけどさあ」

「そんなの、ですって!?!」

そこでキレるなど言いたい。

「まあまあ落ち着いて。朱音ちゃんってさ、剣でも術でもかなり稽古を積んでるよね?」

「当然ですわ」

そんなにない胸を張られても。

今まで努力しすぎてたのが問題なんだし。

「マジメで努力家なのが裏目に出てる状態だからなあ。本人も、それを鍛えている師にも落ち度はない」

「だから困るんですよねえ。この子、朱音ちゃんと委員長ちゃんと杏ちゃんは最低でも銀将級、うまくいけば金将だって狙えるくらいの逸材でしょう?」

「だなあ」

「な、なんですの。ホムラ姉さまも六道ヒロキも、褒めるならもつとちゃんと」

「褒めてないって」

「ならなんだとおっしゃいますのっ! ハッキリおっしゃってくださいいな!」

チラリとホムラさんを見る。

ホムラ姉さまと呼んだのを注意するつもりはないらしいホムラさんが頷いたので、僕の口から言うのがいいという判断なんだろう。

ならばと朱音ちゃんの目をまっすぐに見る。

「朱音ちゃんの剣はね、基本的に忠実すぎ。炎術もそうなんだろうなつてのは、見なくたってわかる」

「基本に忠実なのが悪いんですの? それこそを美しい剣と言うべきでしょうに」

「剣の名人や剣豪になりたいならそれでいい。でも朱音ちゃんは時には人を斬り、主に瘴気を取り込んで妖異化した獣なんかを狩る能力者になりたいんだよね?」

「と、当然ですわ」

頭は悪くない、か。

「どうやらこれだけの言葉で、自分の欠点がボンヤリとはあるけれど見えたみたいだ。」

「人は、咄嗟の時にその本質を覗かせる。そう僕の師匠、龍王はよく言ってたよ。少しは知ってるんだよね、あの人の事？」

「え、ええ。知らぬ者などおりませんわ。あのお方達は飛車角が玉将より強いという事を、その身をもって証明されたんですもの」

「だね。実の父親である玉将を殺して、たしかに証明した」

「ッ！ わ、わざわざ言葉にせずともっ！」

腰を浮かせままでして朱音ちゃんが怒鳴る。

人気あるなあ、アヤカさん。

「はいはい。で、そのお方はこうも言ってたよ。自分の弟子であるうちは咄嗟の判断を間違う者に背を預けてはならない、肩を並べるのも許さんってね」

「わ、わたくしは……」

「さっきの試合の最後、朱音ちゃんはフウカの突進に正眼で応戦しようとした。間違いだったのは理解してるよね？」

「……下段に構えるべきでしたわ」

「だね。でもそんなの今はどうでもよくって、そう選択した理由が朱音ちゃんの危うさだって気づいてくれたんじゃない？」

「ええ。言われて身に染みましたわ」

「剣術を教えようと思ったら、それを達人にまで育てようと思ったら、どうしても正眼からの技を教える事になる。」

「弟子の剣の腕を誰かに証明しようと思ったら、その弟子に腕が上がったと自覚させたかったら、強いと言われる人間と竹刀や木刀で立ち合わせるのが最も簡単で効率的。」

それは揺るぎない事実で、誰も責める事のできない判断だろう。

「朱音ちゃんが剣術と呼ばれるものの腕を上げただけなら、いい家の子みたいだから後方で指揮に徹して前線に出ないってんなら、それでもいいんだけどねえ」

「だが、この世代はそれじゃ困る。そんな者ばかりを後方に置くなら、前線に回すはずの銀将を突破された時の備えにだいぶ残さなきやならないからね」

「難しいですよねえ」

能磨学園6

結局、ホムラさんも交えたディスカッションのようなもので1コマの授業時間を使い切り、その話はこの場にいる全員が次の体育の授業までに考えを尽くして、それからまた話し合おうという事になった。

その授業の後から明らかに落ち込んでいた朱音ちゃんはホームルームが終わると青ざめたままの顔を伏せて足早に教室を出てゆき、それを追って委員長ちゃんと杏ちゃんも教室から姿を消している。

「どうしたもんかなあ」

「六道、ちよつといいかつ！」

そんな声が聞こえて突っ伏していた机から顔を上げると、浩二くんを先頭に男子生徒全員の姿が見える。

「どしたの？」

「ごめんっ！俺のせいでっ！」

「はい？」

この子は、浩二くんはなにを言ってるんだろう。

そして叫ぶように謝りながら、どうしてこんなに深く頭を下げているんだろう。

とりあえず意味がわからないから頭を上げて説明してと3回ほど頼むと、また謝られてようやくその理由が話される。

それを聞いて僕は、思わず大声で笑ってしまった。

「そ、そんな笑うなって。こっちは真剣にっ」

「いやだって、おかしくって。入学式の自己紹介、僕の際に先輩達があーだこーだ話して赤岩先生に怒鳴られてたでしょ？」

「あ、ああ」

「だから僕は元から噂になってたんだって、たぶんだけど。だから決勝前の浩二くんの質問とかなくなっちゃって、明日には1年にも噂が伝わってたよ。だから気にしない気にしない」

「許して、くれるんだな？」

「だから謝る必要も、許す許さないもないんだって」

「……よかった」

「こつちこそごめんね、気を使わせちゃって」

「なんで六道が謝ってんだよ。じゃあさじやあさ、これからみんなでカラオケかゲーセンでも行かか？ 俺のオゴリで、パーッと！」

「あー。ごめん、これからアルバイトあるんだ。それも毎日。だからそういうの行きたくつても行けない。ごめんね」

「そつかー。でも近いうち、休みの日とかに遊び行こうな」

「時間が合えばね。じゃあ僕は帰るけど、あんなのホント気にしないで」

「サンキユ。また明日なー」

男子生徒全員に見送られ教室を、ほんのちよつとの好奇の視線に苦笑いしながら学園を出て、まっすぐマンションへ。

それから黒い細身のスーツに着替えて桃さんの事務所に向かったけれど、いつも通り僕の仕事はないまま夕方になって家路についた。

「とーちやくつと。たぶん桃さんも棗さんも夜宮さんも、僕の学校が始まったから慣れるまで仕事を回すの控えてるんだろーな。ありがたいうな、困るような」

そんな独り言を漏らしながら愛車を施錠し、ヘルメットを抱えて自分の部屋かコンビニか、どちらに向かうべきか考える。

(ととさまっ。ただいまって通信魔法したら、せんせ達が飲んでるからヒマだったら来てって言ってるのっ)

(どうしよつか。でも、行くならツمامミを差し入れしたいし)

(アヤメせんせが、今日は早く帰れたからおツمامミたくさんあるって言ってるのっ)

(そうなのか。セイとフウカは行きたい?)

(うんなのっ！)

(行く行くっ)

(それじゃ、すぐ行きますって言つといて。それとき、セイ)

ちよつとした悪だくみを説明しながら、エレベーターではなく階段でホームラさんとアヤメさんが待つ部屋へ。

呼び鈴を押すとすぐにドアが開いて、帰りのホームルーム以来5時間ぶりの再会を果たす。

「おかえりなさい、六道くん」

「よ、よう。アルバイトお疲れさんな」

「ホームラさんとアヤマさんこそ、お疲れさまです。お邪魔しますね」

10メートルもない廊下。

それを歩くだけだというのに、アヤマさんは僕の腕を取って抱えるようにする。昨日と同じく。

教師と生徒という立場では外でこんな恋人っぽい事ができるはずもないので、好きにしてもらっていた。

「うふふ」

「純白のワンピースが眩しいですね。似合いますよ、アヤマさん」

「六道くん、ご主人様はこういうのが好きかなって。気に入ってもらえたならよかったわ」

「でも、僕以外の男の前じゃ着ないでくださいよ？ そんなに谷間を見せて、しかもノーブラだから勃起乳首がバツチリ透けちゃってるし。男なら絶対ツンツンしたくなるんだから、こうやって」

「やんっ。六道くんのえっち」

「チツ。いちやつくんじゃないっての」

意地を張っているのか単純に恥ずかしくって着飾れないのか、地味なナイロンのジャージ姿のホームラさんが舌打ちを言う。

「だってアヤマさんは僕の所有物で、僕のためならなんだってするメス豚奴隷ですもん。そりゃあ、いちやつきもしますよ」

「へいへい。いいから飲むぞ」

「はい」

「うふふ。妬いてるホームラ、やっぱりかわいいわあ」

「べっ、別に妬いてねえしっ！」

それは困るなあ。

お酒が飲みたかったのも今日の授業で気になってた事を聞きたかったのもそうだけど、僕は今日こそはって思いながら階段を上がってこの部屋に来たんだし。

もうだいぶ見慣れたリビングのテーブルにはそれほど高価なものではないけれどいくつもの料理が並んでいて、そこにあるワインのボトルはすでに半分ほど空いていた。

「けっこう飲んでますね」

「今日は早く帰れたんでな。さ、座ってくれ。ビールでいいよな。セイもフウカも」

「はい。じゃあ失礼します」

「ただだつきー」

「いつもありがとなのっ♪」

僕達親子3人はビール、ホムラさんはバーボンのロック、アヤメさんは赤ワインで乾杯。

全員がそのグラスをグイッとやると、アヤメさんは僕の胡坐を搔く足に顔を突っ込むようににじり寄ってきた。

「ご主人様。今日はまずどんなご奉仕がいいですか？ ショーツのクロッチの汚れを、目と鼻と舌でチェックしますか？ それとも、ご主人様のメス豚奴隷がオナニーショーでもします？」

「今日は体育もあったし、まずはおしやぶりかなあ」

「うれしい。じゃあ、準備しますね」

このリビングで僕達と飲むようになるまでほとんど使わなかったという機能、ローソフアーの背もたれを倒しフラットにしたアヤメさんが僕のズボンを脱がせにかかる。

そして靴下にかけてボクサーパンツが下ろされると、露出した肉棒を見てアヤメさんは小さく驚きの声を上げた。

僕の斜め前にいるホムラさんも、声こそ上げなかったけれどロックグラスを持ち上げた手止めて驚いている。

「まったく、このアホは……」

「凄いわ。こんなにかわいらしくなって、すっかり皮も被ってる」

「今日は体育もありましたからね。こんなシヨタチンを剥いて恥垢を舐め取るのは、どう考えたって奴隷の役目でしょう」

「素敵。濡れるわあ」

「にしし。ほむほむセンセも素直にとーちゃんのモノになりや、あれ

をたっぷり味わえるんだぜ？」

「いらぬね。あたしは、どつかのド変態と違ってシヨタコンじゃないんだ」

「失礼ね。私はシヨタコンじゃなくて、ヒロキコンプレックス。略してヒロコンよ」

「ふん。中毒性があんのもヒロポンと同じじゃねーか」

「ホムラさんも隣に。聞きたい事もあるし、くっついて飲みましようよ」

「し、仕方ねえなあ」

隣に移動してきたホムラさんの腰に手を回してビールを飲む。

「さつきまでは胡坐だったのに、僕の隣に来たら女の子座り。」

かわいいなあ、もう。

それに口じゃあ言っていたけど興味がない訳じゃないようで、ホムラさんの視線は今まさに白い指で皮を剥かれようとしている子供らしい肉棒に釘付けだ。

「素敵な香り。初めて会った日を思い出すわ。ホムラ、一緒にしないでいいの？」

「あとでな。今はいい」

「そう？　なら遠慮なく。……あむっ」

独り占めしていいなら、こうだ。

そんな感じで亀頭を咥え舌を回してカリ首を1周させる動きに、いっただったかテレビで見たフグの贅沢な食べ方とかいうのを思い出してしまう。

最近じゃアヤメさんの舌技もだいぶ上達しているので、勃起はすぐにできるはず。

「ならこっちも準備をしとこうかな」

「お、おい。いきなりズボンに手をつ突っ込むなっの！」

「いいからキスしてくださいよ。いくら僕の所有物でも自分の恥垢の味がするキスなんてヤだし」

「……仕方ねえなあ」

キス。

最初なので軽く舌を絡め合いながら、ホムラさんの鍛え上げられていてもしつかりと丸く柔らかいお尻を撫でまわす。

「っぱあ。今日も美味しいです、ホムラさんのツバ」

「わざわざ言わなくていいんだよ。まだまだくれてやるんだから。こ
うやって、な」

「わーい」

今度のキスはだいぶ深い。

それにダンスのリードは、ホムラさんがしてくれるみたいだ。

お礼ですよと心の中で言いながら、Tバックらしいパンティーの中
にまで手を進める。

こういうオシヤレはちやんとできるらしい。

僕の手はお尻の谷間を通り、最近じやすつかりホムラさんのお気に
入りになったアナルをわざと避けて、そのまま膣へ。

濡れ方はもうバツチリだし、今は焦らすより急ぎたい。

なので3回ほど膣を犯した中指を曲げて淫液を掻き出すように動
かし、可能な限り根元までヌルヌルにした。

その中指の先で、アナルの窄まりの中心を優しくノックする。

「んっふ。んっ、っく。ううんっ……」

女の子座りしている腰が浮き、お尻が揺れる。

無意識なんだろうけれど、間違えようがなくおねだりだ。

やっぱり今日しかないな決めるなら、そう思いながら中指を進ませ
る。

「んうっ！ ……んっく、んっ、んっ、うんっ。んーっ♡」

（堕ちたっ。この瞬間ぜってー堕ちたろ、とーちちゃん？）

（まず間違いないだろうけど、見せ場はまだ先だねえ）

（わくわくなのっ♪）

意識して観察した事がないから他の人のは知らないけど、僕の中指
の第一関節にはペンだこがあつて、第二関節は中指で最も太い球形の
ようになっている。

第一関節と第二関節。

それをアナルビーズに見立て、ゆつくりと、変化を加えながら出し

入れ。

「おっ、おっ、おっ、っほ、おっ、おっ、おうっ♡」

ん。
いい感じにアへってる。

キスが途切れてるのにも気づいてないみたい。
これなら、目的は果たせそうだ。

能磨学園7

「アヤメさん、ちよつと口からシヨタチンを抜いてください」

「んっちゅ、ぢゅっ。……はい、ご主人様あ」

唾液まみれの小さな肉棒が外気に触れると同時に、アナルから指を引き抜く。

一気に。

堪え切れずジャージ姿で脱糞したと勘違いさせるくらいの気持ちで。

「んほおっ♡」

なるべく下着とジャージに触れないようにして手を持ち上げ、中指を鼻に寄せて息を吸い込む。

「ふうっ、今日もうっとりするくらいいいニオイ。……うん、味も最高です」

「変態め」

とか言いながら、僕が指を根元まで舐めるのを見ているホムラさんの方がうっとりとした表情。

ほぼ毎日、最低でも3回はするセックスの前に丁寧なアナル舐め。舌を尖らせて肛門の中心を押す動きの時、ホムラさんの括約筋が緩んだのは4日目だったかな。

その日からアナル舐めが当たり前のようにナカまで施されるようになったせいで、今のホムラさんはこんな行為への嫌悪感が欠片すらなくなっている。

いい成果だ。

「見てください、ホムラさん」

「ん、なんだ？」

「ほら。まったく同じでしょ？」

ハッとその事実に気づいたホムラさんは、見てわかるほど頬を染めながら生唾を飲み込む。

まったく同じ。

僕が股間に持つて行った中指と、勃起してはいるけれど小さくつてカリも未熟な短い肉の塊。

セイが寸分たがわぬ大きさにしてくれた肉棒を見ながら。

「お、おい。なんで膝立ちになるんだよっ」

「今日は自分で腰を振る気分じゃないんで。ほら、早くしてください」
いつもの大きさ、自分の膣に最適化された肉棒のままなら、絶対にホムラさんは動かないだろう。

でも、今は違う。

本人は必死で隠しているし、バレてるかもと覚悟しながらもそうじゃないと言い張っているだけで、ホムラさんはアナルでしっかり感じる体になってしまっているから。

そこまでアナルを育てた指と同じ大きさの肉棒を見て、ガマンできるはずがない。

「……………きよ、今日だけだからなっ」

「ええ」

こんなに優しくするのは、もどかしくつてお尻を思いつきり叩きたくなるくらい手加減してあげるのは、今日までです。

明日からは覚悟してもらいましょう。

「くっ。ほ、ホントに同じじゃないか。あつく…………」

「おねだりはどうしました、ホムラさん？」

「なんっ!？」

「しないならもういいです。そんな人知りません」

ホムラさんの表情が歪む。

こうして何度も何度も体を重ねているせいで僕という人間の事はよく知っているから、おねだりなんかしなくたってまた相手はしてくれと確信はしているだろう。

でも、アヤメさんが僕の所有物なると宣言してからのイチヤイチャっぷりを考えると、そうであってもホムラさんは、そうなってしまったらホムラさんだけが1人面白くない。

僕の、勝ちだ。

「……た、頼む。あたしのケツ穴も使ってくれ。いつもアヤメにするみたいに」

「物足りないけど、まあいいでしょう。さあ、自分で手を添えて迎え入れてください」

まあいい。

それは『今のところはまあいい』という意味だ。

「あ、ああ。くっ、なんでこんな簡単に、いつ……」

それはホムラさんがケツ穴をほじられて悦ぶでしょうしようもないメス犬だからですよ。

次にどうしてとかなんでだとか言ったら教えてあげる事に決めて、大きなお尻の真ん中に肉棒が沈んでゆく光景を見守る。

熱い。

今までアナルより膣内の方が熱いと感じた女の人は1人もいないけど、ホムラさんの温度差は群を抜いている。

そしてキツイ入り口の向こうは熱さだけでなく、感触も抜群。

膣とは違うこの気持ちよさを知らない人は、本当に損をしていると思う。

「いいケツマンコです。指じゃなくチンポで味わうと格別ですねえ」

「おっ、くうっ！」

「そうそう。奥まで啜え込んでください。こうしてあげますから」

舌を尖らせて突き出し、唾液を垂らす。

それは糸を引きながらゆっくりと、狙い通り肛門と肉棒の半ばあたりで落ちた。

「ううっ。染み、おうっ♡」

ここからは早いかな。

そんな僕の予想は見事に的中。

ホムラさんは僕の陰毛が潰れ下腹部に密着するまでお尻を押し付けると、すぐに前に出て「おほうっ♡」とエッチなマンガのような声を上げた。

さあ、仕上げの時間だ。

「ついにホムラも。うれしいわ」

「僕もです」

「つぶ、おうっ♡ 腰っ、止まんな、おほっ♡ ケツ穴セックスさいこ、おほっ♡」

「それはそうでしょ。弱点にしか当たらないようにしてますから」

僕の経験人数なんてたかが知れたものだし、それがアナルセックスとなればさらにガクンと数は減る。

でもこの間のアルバイト、『グローリー・ホール東京支店』で経験した1人を除いて全員、腸壁のどこかに1箇所か2箇所、どうしても感じて喘いでしまうポイントを持っていた。

僕は腰を振らない。

けれど微妙に位置を変え、バックで挿入すると中指の第一関節にあるペンだこが引っ掻いてホムラさんが甘く呻くポイントに龟头を当て続ける。

長さが足りないせいでまだ子宮を腸から刺激はできない。

けれどこの調子ならアナルセックス用の肉棒は早いうちにその長さになって、そしたら最近じゃすつかり子宮口を擦られて感じるようになったホムラさんは、アナルセックスでもそれに近い、でも膣から擦られるのとは違う快感でさらにアナルセックスが大好きになるだろう。

楽しみだ。

「ヤバイっ♡ うっあ、マジでヤバイって♡ あんっ♡ あたし、あたしケツ穴でイキかけてるっ♡ おほ♡」

「もしホントにこうやってケツマンコでイクようなメス犬がいるなら、僕がしつかり躡けてあげないといけませんねえ。そしたら僕の所有物にして、いつもアヤメさんと並べて使ってあげなくちゃ」

さあ来い。

「なるっ♡ あたしも、あんっ♡ ヒロキの所有物につ、おほっ♡ ケツ穴アクメするから、メス犬になるからあ♡」

「よくできました。ご褒美ザーメンが欲しいなら、ちゃんとイクまで腰を振りまくってください」

「うれしっ、あゝんっ♡ ヒロキのっ、メス犬のご主人様のザーメン

欲しいっ♡　くっ♡　イクっ、ケツ穴でイクっ♡」

これ以上は上がらないと思つていたペースが上がる。

あの様子じゃここ数日、さんざん悩んでいたんだろなあ。

この部屋に来るたびまず気合を入れてアヤメさんをイキまくらせて、毎回それをずつと羨ましそうに見てたホムラさんのアナル開発をねつとりじつくりやった甲斐があった。

「さすが僕のメス犬です。気持ちいいですよ、ホムラさんのケツマンコ」

「もつと、もつとよく、あゝはあ♡　もつと、イクからっ♡　ケツ穴でアクメるからせーしちようだいっ♡　っは、イクう♡　イクイクイクイクイク、おほっ♡　ケツ穴でっ、くくくくイ、イグうっ♡」

痛いほどに肛門が締まって、背骨を傷めそうなほどホムラさんの背が仰け反った。

「あは」

「アナルセックスで初イキだけじゃなく、お漏らしイキも初体験。それでこそヒロキくんの、ご主人様のメス犬よ。ホムラ」

長々と続いていた放尿。

そしてそれより長くビクンビクンと震えていたお尻がローソフアーに落ちる。

と同時に肉棒が肛門から抜け、おならというよりは下痢の排泄音が鳴ってザーメンが僕の腹筋にかかった。

「もったいない。舐めてキレイにしますね、ご主人様。っちゅ♡」

「下はしないでいいですよ？　使った本人に掃除させなくっちゃ」

「うふふ、楽しみね」

とはいっても、僕だって鬼じゃない。

はっっ♡　はっっ♡　はっっ♡　とその語尾にまでハートマークが付いているような荒い息がだいぶ落ち着くまで待つて、それからホムラさんの顔の正面に回って腰を下ろす。

「さあ、お掃除の時間ですよ。メス犬はこの腸液とザーメンが混ざって泡立ってるこれを、どうやって掃除するんですか？」

「大好きなご主人様のならこうやって、口で。あむっ、……ちゅっ。れ

ろっ、じゅるっ」

「いい子ですねえ。掃除が終わったら、次はどっちのメス穴を使ってほしいか言ってください」

指と同じ大きさだからこそ可能な、根元まで啜え込んでのお掃除フェラ。

それを終わるとホムラさんは身を起こし、グチヨグチヨの割れ目とアナルがどちらもはつきり見えるように座った。

それだけでなく膣と肛門、2つの穴をどちらも自分で広げて見せる。

「もうあたしのぜんぶはヒロキのなんだ。ご主人様の好きな穴を、好きなように使ってください♡」

「いい答えです。じゃあ、セイ」

「わかってるのっ。はいっ♪」

僕の肉棒が指でなくホムラさんの膣に最適化された、そこで最も強い快樂を得るための大きさと形に変化。

そしてその少し上に、指よりも少しだけ長く太く、今度はちやんとカリの傘が張り出している肉棒が音もなく生える。

「よいしょっと。まずは大きくして、それから上になって啜え込んでください。もちろん、2本ともですよ」

「ああっ、任せろっ！」

どちらかを常に啜えたままの手コキ。

背面騎乗位での2穴姦。

どちらもお気に召したらしいホムラさんは最後にはまた残っていたオシッコを漏らしながらイツて、僕に腕枕をされながら息を整えている。

「いやあ、乱れましたねえ」

「じ、自分が一番わかってるから言うな、バカ」

「終わった途端にバカとか、酷いなあ。お仕置きしちやお、えいっと」
「い、いたっ！」

まだセックスの余韻で硬くしこったままの乳首を軽く抓る。

するとセイが訓練のためにもいつも視界の隅に表示してくれてい

る興奮度と快感度と苦痛度が、まるで電子メーターのように波打つ。それを見ながら、力加減を微調節。

「苦痛度10。このくらいの痛みならどうです?」

「な、なんだこれ。痛気持ちいい、って感じだぞ……」

「でしようね。苦痛度が10しかないのに快感度は70近くもあつて、それより高い興奮度は徐々にだけど上がり続けてますから」

「ヒロキくんのそれ、本当に気持ちいいわよね。はあんっ♡いきなり突き上げちゃ、あはあ♡」

「誰が無駄口を叩いて腰を止めろつて言つたんですか? 使えない奴隷は遠慮なく捨てるか、そこらのおじさんにでもあげちゃいますよ?」

僕はホムラさんがいればそれでいいし」

「やあつ。お願いっ、なんでもするから捨てないでっ! こうやってちゃんと腰も、あんっ♡」

「やれやれ」

「オマエがやれやれだつての、バカ。アヤメの操縦、巧すぎだろ」

「あはは。それより、質問いいですか?」

「幸田のトラウマを教えろとか言わないならいいぞ」

さすが教師で年長者。

お見通しか。

「まあそこまで聞き出そうとは思つてないんですけど、そうしてくれやがった相手はどうなつたんです?」

「敵討ちはもう不可能だし、不意の遭遇も心配する必要はない。幸田家は関東じゃ一番と言つてもいいくらい腕のいい干涉系をコンスタントに輩出する名家で、当代は四大家の火と親友同士。そんな子にトラウマを植え付けた男が生きていられるはずもないさ。たとえ犯罪を犯してはいなくとも」

「処女だから最後まではされてないんだろうけど、やつぱ男関係。しかも犯罪じゃないんなら、手も触れてないんですか。なら、その四大家のお嬢様の方はどうしたもんですかねえ」

「難しいところだからなあ」

能磨学園 8

今日は土曜日。

週休2日制というのがない能磨学園の半日授業を終えた僕は、セイとフウカと今夜は家に帰らずグロリー・ホールで日曜の夜か月曜の朝まで、なんだつたら学校をサボって夕方までアルバイトついでに遊ぼうかなんて話をしながらバイクを走らせている。

(ととさま、桃ちゃんの事務所にお客さんなのっ。どっちも和服で、30歳くらいのちよい熟。で、どう見ても銀将以下じゃないって感じのおばさん2人なのっ)

(僕にも映像を繋いで)

そうセイに頼んでギアを1つ落とし、アクセルを開けた。

2スト独特の加速でフロントタイヤが持ち上がる。

それをアクセルで宥めてアスファルトへ接地させ、ウインカーをしつかり出して、さつきから少しだけジャマだなど思っていたトラックを抜く。

桃さんの能力はほとんど知らないけれど、体術の腕は立ち姿や歩き姿からある程度は想像がつく。

1ならまだしも、銀将2枚はキツイ。

でもあの棗さんが事務所に桃さん1人で居てもなにも言わないんだから、能力の方で足りない分を補うんだろう。

それなら間に合うはず。

(桃ねーちゃんと知り合いではあるみてーだぞ、とーちゃん)

(だねえ。って、煉上と幸田？ マジでっ!?)

(うわあ)

(嫌な予感しかしないのー)

毎日の帰り際、僕は室内の蜘蛛1匹と、いつも窓に止まってるてんとう虫1匹と、廊下の隙間に住んでいる1匹の蜘蛛に使役力をあげて事務所の見張りを頼んでいる。

そのおかげでもし面倒事になっても間に合いそうだと思っただけで、その面倒事の元、そしてその向かう先が高確率で僕だとなると、どうしたって気が滅入る。

「うあー。なんだ、苦情？ それとも圧力？ よくもうちの子をイジメたなって攻撃されたりしないよねえ？」

（とーちゃん関連なのは確定だな。棗ねーちゃんには話を通してあつて、桃ねーちゃんも聞いてるから待つなら自由に待っていていいって言ってる。頑張れ、とーちゃん。いざとなったら、ぶち犯せばいいさ）
（ファイトなの一）

できるはずのない解決方法を示されたって、できないんだから意味がない。

アクセルを緩め、ギアをシフトアップしてスピードを落とす。

ついさつきまでとは逆に『このまま着かなければいいのになあ』なんて考えながらRZ350を法定速度以下のスピードで走らせていると、あつけないほど簡単に事務所のある雑居ビルの駐輪場に到着してしまった。

「ヤダなあ。ヤダなあ。でっかい家とモメたくないなあ。でもあのおばさん達のおっぱいは揉みたいなあ。でも、やっぱ入りたくないなあ」

いつものように目についた虫、今日は一匹の蟻に使役力を分け与え数時間の見張りをお願いしてキーを抜き、ヘルメットを抱えて大嫌いなエレベーターに乗り込む。

つい先日このエレベーターではなく外、駐車場の奥からじやなきやいけない通りに非常階段を見つけて喜んだけれど、桃さんにエレベーターに慣れるのも修行だから階段は使用禁止と言われてしまった。

「ああ、着いちゃった。蜘蛛さん、いつもありがとね」
ノック。

一応それが礼儀だろうと頑丈な鉄製のドアを叩くと、「いいから入って」と普通なら聞こえない小さな声で桃さんが言う。

男は度胸。

そう自分に言い聞かせて、事務所に足を踏み入れた。

「失礼します。すぐにお茶をお淹れしますので、少々お待ちください」
「あら、さすがねえ。来客に気づいてないフリもしないなんてー」

「飛車角の秘蔵っ子ですもの。そのくらい肝が据わって当然よ。飲み物はいいわ、六道くん。知ってるみたいだけれど私が煉上、朱音の母親。こっちのポヤポヤっとしたのが幸田で、霧ちゃんの母親」
「よろしくねー」

「はあ。それで、ご用件の方は?」

「うん。君に依頼を出しに来たのよ」

「はあ」

依頼って。

自分の家に部下やら分家ならいくらでもいるでしょうと言ってやりたいけど、ガマンして次の言葉を待つ。

「うちはー、霧ちゃんの男性恐怖症を治す手助けと教材役をお願いしまするわー」

「こっちは朱音が休日にしてる自主練の相手ね。どちらも、報酬は1回100万。手数料抜きで」

「ひゃくっ!?!」

1回ずつで借金が返せそう。

でも、リスクを考えたら……

いやいやでも100万円だよ?

「あー。すみませんがやっぱり」

「ヒロキ」

「どしたんです、桃さん?」

いつもの無表情だけど、なぜか諦めているような雰囲気。桃さんが手招きをする。

なんだろうと近づけば今度はパソコンのモニターを指差されて、僕はそれを覗き込んだ。

「ヒロキにメール。まずはサラからの」

僕に?」

なんで?」

モニターの文字を目で追う。

「げえっ」

面白そうだ、ヤレ

言霊使いは1人欲しかったし、地味メガネ淫乱枠はいくらいてもいい

誰かさんはアタシみたいな巨乳が好物だから、数を揃えておきたいしな

ちなみに、受けなかったら殺す

「次はアヤカ」

吉喰流を教えるのはまだまだ許せんが、ヒロキ流を教えるのはいい修行になる

それと大事な事なのでハッキリ言っておくが、お嬢様には羞恥プレイに言葉攻めを加えて最初に自分の立場をわからせてやり、それからしっかりと調教してやるのが一番だ

担任副担任と一緒にカリカリに仕上げ私達の前に連れてくるように

「バレてんのは別にいいけどなんじゃそりやあつ！」

「ま、そゆ事。依頼は幸田家が土曜の午後から日曜の朝まで、煉上家が日曜の朝から夕方まで。最低月1回以上、上限はなし。あと毎月200あればクルマ買えるから、見繕って明日の夜ヒロキのマンションに納車するって棗から伝言」

「問答無用で借金増やさされて僕には選ぶ権利も、うがが……」
どうなってるの？

僕のまわりにはどうして常識のない人しかいないの？

教えてください、神様。

(そんなの、とーちゃんがいちっばん常識ねえからに決まってんじやん)

(当たり前なの〜)

「それじゃ電腦妖精ちゃん、この子は幸田の家が責任を持って明日まで預かるわねー」

「ん。よかつたら味見もどうぞ」

「あらやだ。おばさん期待しちゃうわあ♪」

「桃ちゃん、そちらの手数料は毎回倍額を振り込むわ。その言葉を待っていたのよ」

「まいど」

「さらつと僕を売らないでくれませんか!?!」

「さあさあ、行きましようねー。やだあ、普通に腕なんか組んじやつたわ。うふ」

高級だと一目でわかる和服を着た、僕よりだいぶ小柄な30過ぎのおっとりした美人さんが、どうしてこどもも簡単にどちらかという体格がいい部類に入る男子高校生を引きずって歩けるんだろう。

そして朱音ちゃんのお母さん、私にも触らせろって言いながら股間を撫でないで。

エレベーターに押し込まれる。

「お先」

「あら。ズルイわよう、綾ったらー」

「むぐっ!?!」

いきなりのキス。

「ここぞ!?!」

……あ、でもめっちゃ巧い。

フェラも期待できるんだろうなあ。

「ほら、文。いい味してるわよ、この子。やっぱり当たりだわ」

「じゃあ遠慮なく。んっ……」

こちらもお上手、だけでなく適度にながつついている感じがそそられる。

朱音ちゃんのお母さんと違って思いつきり背伸びをして舌を絡めてるからそう感じるのかな。

「ふうっ。いいお点前ねー」

そちらこそ。

そう口に出す間もなくエレベーターは1回に到着し、牛井屋さんの横からビルを出ると、笑ってしまうくらい車体の長い黒い車が待っていて、まるで応接室のような座席に3人並んで座らされた。

「ええつと、あの」

「なあにー?」

そんな邪気のない、子供みたいな笑顔を向けられましても。

「どちらもアヤさん、なんですね」

「偶然にもね。その偶然が縁を結んで、今じゃ双子の姉妹みたいなものよ」

「次の時にでも、味比べ貝合わせと愉しみましようねー」

「むむつ。今ここで味見はダメなの、文?」

「当り前よー。上手くしたら今夜、この竿で霧ちやんが女にしてみらうんですもの〜♪」

「いやしませんってば。つか竿って」

クラスメイトと関係を持つくらいなら、今ここで2人同時に犯した方がマシ。

僕は強姦とか嫌いだけど。

「あらあら。こんなおばさん2人を押し倒したいだなんて〜♪」

「へっ?」

「気をつけなさいよ、六道くん。文は心くらい簡単に読むし、発情したらたとえ青姦だろうと厭わないんだから。むしろ娘の、霧ちやんの前でだつてノリノリで六道くんに跨って腰を振るわ」

「やだあ。それじゃあ綾は朱音ちゃんの前で六道くんのオシッコ飲みながらオナニーしちゃうでしょ〜♪」

「いいわねえ。あの子のオカズは私が書庫に紛れ込ませておいたソレ系の本だから、2人で並んで大きく開けた口で六道くんの濃い聖水を受け止めたいわ」

「じゃあ私は、六道くんにその場で脱糞しないと霧ちやんを犯すぞつて脅されて、そこからの3P、母娘凌辱プレイがいいわあ。うふふ」
「いやいや」

そんな妄想を語りながら股間を撫でまくらないでいただきたい。

勃起を抑えるのが大変だし。

「あつ。こつ文と抱き合う形で縛られて、使う穴を変えるたびいちいち乱暴に転がされたりするのもいいわね」

「きゃー。それ、濡れるわあ」

そんな親友同士の会話にガリガリと理性を削り取られながら高級車に揺られていると、しばらくして停車したと同時にぐらぐらにドアが外から開けられた。

「お疲れ様でございました、奥様」

「ありがとうねー、佐伯。じゃあ、六道くんを霧ちゃんの部屋に案内してあげてー」

「はっ」

凄いな。

メイドさんって実在するのか。

「それとこの依頼中は霧ちゃんの向かいの部屋で休憩がてら待機して、六道くんがムラムラしても霧ちゃんに手を出せないって時は、佐伯が好きな穴を使わせて射精させてあげるのよー?」

「はっ?」

「ではね〜♪」

「六道くん、明日の朝食は煉上の家で。その時にまた会いましょう。ちよつと佐伯、そこで呆けてちや降りられないわよ」

「し、失礼しました」

2人はさっさと車を降りて、僕だけが応接室みたいに広くて豪華な座席に取り残される。

どうしたものかなあと困っていると、ようやく助け舟が出された。

「失礼しました、六道様。お嬢様のお部屋にご案内いたします」

「は、はあ。それはいいんですけど、鼻血が出てますよ?」

「お気になさらず。さあ、まいりましょう」

「どうしたって気になりますから。これ、ティッシュ使ってください」
なんか様付けとかされてるから遠慮されないように、シユツとした美人のメイドさん、佐伯さんの手にポケットティッシュを握らせる。

すると佐伯さんはだくどくと鼻血を流したまま鼻息を荒くしちやつたから、それで血の雫が散って高級そうなシートや床をかなり汚してしまう。

こんな美人さんでも鼻から血を流して、しかもそれが鼻息で泡立っていると、いろいろ台無しだ。

「もう思い残す事はございません……」

「あつてもらわないと困るからっ！ テイツシュ、ティツシュ鼻に詰めてっ！」

「お気になさらず、マイ・ロード」

「格上げっ!? もういい、セイ。治療と掃除っ！」

(はいなのっ！)

佐伯さんのほどよく高い鼻から流れていた血はすぐ止まり、整った顔から赤い色が消える。車内も前と同じか、それ以上にピカピカになった。

でも僕はそんな事より、セイは姿なんて見せていないのに僕の影に頭を下げてありがとうございますと言った佐伯さんの方が気になつて仕方ない。

「そちらの世界のお一人は、セイ様とおっしゃられるのですね。魔力の感じから姫君とお見受けいたします。もう一人の御方のお名前をお伺いしても？」

「フウカですけど、何者なんですか佐伯さんつて……」

僕より少しだけ高い身長で、痩せているのに大きなお胸とお尻をした20代半ばくらいの日本人。

ちやうど、僕の師匠であるサラさんとアヤカさんを足して2で割つたような見た目。

能力者としてかなり強いのは、それもさっきの2人より確実に強いのは見て取れるんだけど、だからこそ見鬼や看破系じゃないと推測できるから底が知れない。

関東の名家、それに四大家の火の当主より戦闘の腕がいいのに、見鬼系でも金将級以上じゃなきゃ見つけれない影の中の世界を見つけて、それが2人で最低でも1人は女の子だつて見抜くメイドさんつて。

それに佐伯さんは『そちらの世界』と、僕達がずっと隠している事実を事も無げに言った。

怖すぎでしょ。

「私は、幸田家に仕えるメイドです。それ以上でもそれ以下でもござ

「いません」

「それを信じろと?」

「事実ですから。あと少し変わっているところといえば、飛車角の友であるという事くらいでしようか」

「……ああ、それで理解しました」

納得だ。

そうであるなら、考えるだけムダ。

「そうですか。マイ・ロードはやはり聡明でいらつしやる」

「いいえ。理解したのはあの人達の友達ならどこまで変人でも、どこまで強くて底が知れなくても気にしたって仕方がないって事だけなんです。佐伯さんも、そういう人なんでしょう?」

「恐縮です。ですが、『どこまで淫乱で変態でも』が抜けておりますよ」

能磨学園 9

笑つちやうくらい広い庭。

自転車くらい置きませんか？　と言いたくなるほど長い廊下。

それらを抜けて辿り着いた、風の流れから察すると迷路のようになつていて侵入者を足止めする作りになつていているらしい大豪邸の一室で、普段着の委員長ちゃんを僕を出迎えた。

さっきの桃さんが見せたような諦めの表情を浮かべた委員長ちゃんは、僕を部屋に通すなり平謝り。

あの母親の事だから絶対かなり強引に連れてこられただろうし、その途中で失礼もたくさんあつたでしょうと。

気にしないでと言って僕がソファアに座つたのにまだ立つて深く頭を下げている委員長ちゃんを宥めていると、佐伯さんが芸術品みたいな銀のワゴンをいくつも引いてきて、テーブルの上にグラスや食器を次から次へと並べ出す。

それ終わると次に出てきたのは、見るからに高級そうなツمامミっぽい料理。

そして高そうな、シャンパンなんかのお酒。

「あの、佐伯。夕食にはまだ早いし、それにお酒なんて。霧と六道さんはまだ高校生で」

「奥様の指示でございませす。初日ですし、今日はお酒でも酌み交わして親睦を深めるようにと」

「でも未成年がお酒なんて」

「ご安心ください、お嬢様。お酒の愉しみ方はもちろん、お嬢様が望まれるのならお酒を飲んだ男女のすべき事もマイ・ロード、六道様が優しくお教えしてくださいませす」

「ええっ!？」

3年間もずっと同じ教室で過ごすクラスメイトじゃなかったら、それこそ手取り足取り教えるけどなあ。

(いいから2人並べて喰っちまおーぜ、とーちゃん。佐伯ってのはいかにもタフそうだから、ムチャだつてできそうじゃんか)

(ととさまの3P技は世界でいっちばんなのっ♪)
(しないって)

「では、佐伯はこれで。料理やお酒のおかわり、それと特に初体験の介添が必要でしたら、いつものようにお呼びください。では」

そう言つて佐伯さんは連結したワゴンを引いて部屋を出てゆく。

残された委員長ちゃんは初体験と言われたあたりから「はう〜」とか「あう、あうあう」とか変な声を出して固まっているので、再起動に時間がかかりそう。

「なら飲んでおこっかな」

(いーなー。とーちゃん。酒は間違いなく高級品だし、料理もなんか見た時ねーのばっか)

(食べさせてあげたいけど、人様の家だからねえ)

(でもでもっ。でっかいテーブルには椅子が4つあって、その2つは明らかにセイとフウカ用なのっ)

(うん。明らかに座る位置が高いもんね。だから、委員長ちゃんがそれを思い出すまで待つて。飲み食いできるのは間違いなさそうなんだから)

(むきーっ。地味メガネ爆乳ド淫乱、早くこれ食わせろーっ!)

(そうなのっ。じゃないと縛り上げてメイドさんとのセックス見せつけて、大好きなオナニーすらさせてあげないのっ!)

それもいいなあ。

委員長ちゃん私服は白いニットのセーターに、丈が短くも長くもない淡い緑色を基調としたチェックのスカート。

このセーターをずり上げてスイカみたいなおっぱいを露出させて、後ろ手の開脚縛り。

となると、次の問題はパンティーをどうするかだ。

(あ、このシャンパン美味しい)

パンティーのクロツチに淫液が染みてゆくを見て指摘して愉しむか、最初から脱がせちゃって処女膜まで見られてるのにトロトロト

口ト口垂れてくる淫液を見て指摘して、なんならスマホで自分のアソコがどんな状態か観察させて。

うーん、悩むねえ。

(乳首に洗濯ばさみは譲れねえぜ)

(それとぶつといデイルドをアナルにぶち込んでおくのっ♪)

(んで、そんな委員長ちゃんには、自分のメイドさんの愛液と僕のザーメンの味はどうだつて聞きながら、お掃除フェラだけをさせるのかあ)

(とーぜん、イマラからのな。あれ、イラマだっけ?)

「あつ。ろ、六道さん!」

「はいなー」

「あの子達、えつと、セイちゃんとフウカちゃん。あの2人も自由にしてもらっ」

「サンキュー!」

「ありがとなのっ!」

「話の途中だったのにごめんね、委員長ちゃん」

「いえいえ。たくさん食べてくださいね。セイちゃん、フウカちゃん」

ようやく再起動した委員長ちゃんが席に着いたので、僕が飲んでい
るシャンパンをそのグラスに注いでおく。

飲酒に抵抗があるんなら飲まなくていいよと言っただけど、興味
はない訳じゃないようで、委員長ちゃんは何度かシャンパンを舐める
程度だけ飲んでいた。

「はー、食った食った。ごっそさんっ」

「ごちそうさまでしたなのっ♪」

「ホントごめんね、委員長ちゃん。ごちそうさまでした」

「いえいえ」

「んで、僕がここに連れてこられた理由なんだけど。委員長ちゃんは
聞いているんだよね?」

怯え。

隠し切れないそれを隠して、委員長ちゃんは頷く。

「でも男性恐怖症、だっけ? そんなんどうやって治すんだよ?」

「それなんだよねえ。僕なんかが想像できるのは、徐々に慣れてくつて事くらいだし」

「あのお母様もそう言っていました。別にただの雑談でもいいし、今なら私がどんな武器を習うべきかとかにアドバイスをもらいながら、徐々に徐々に慣れていけつて」

なるほど。

欲望に忠実だし、見てて心配になるくらいのはほんとしてるけど、その辺はちゃんと考えてるのかあの人。

まあ、自分の娘のこれからの人生に関わる問題だもんなあ。

「なるほどなるほど。じゃあ、武器の話からだねえ」

「それなら、隣のリビングに本や映像なんかの資料があるそうです」

「オレとセイはまだここで飲んでつから。いつてらー」

「あんま飲み過ぎないですよ？ 僕らはザルなんだから、少しは遠慮しない」と

「はいはい。とーちゃんはこれな。話しながら飲むといい」

そう言つてフウカが押して寄越したのは、まだ封も切つていないビンの中でも特に大きな物。

一升瓶だ。

「日本酒かあ。あつちじゃよく飲んだけど、そういえばこつち来てからはないね」

「だから飲んでーだろうと思つてさ。いいよな、委員長ねーちゃん？」

「六道さんが大丈夫なら私は気にしません」

「ありがと。じゃ、行きますか」

「はい」

委員長ちゃんに案内されたのは、ドアを1つ抜けるだけで辿り着いた広い部屋。

まさしくリビングつて感じだけど、ちよいちよいかかしな点がある。

対面式の2つソファと、その間にある大きなテーブル。

テーブルの上にはたくさんの本とノートパソコン。それに灰皿とポットと急須と湯飲みが乗せられたお盆、お菓子と果物が乗せられて

いるカゴが一つずつ。

んで果物やお菓子があるんだから、箱ティッシュがあるのはわかる。

「な、なんでティッシュの横にローションが……」

「化粧水がどうしたんですか？」

真顔でそう聞くて事は、委員長ちゃんはあれがエッチな方のローションだつて知らないのか。

「いや、なんでもないです」

「そうですか。では、まず映像を流すのでアドバイスをお願いします」
「はい」

その映像を見る方法もちよつとおかしい。

武術の映像なんだろうけど、ソファアールから等分に見渡せる壁には見た事もないほど大きなテレビがかけられているんだから、そこに繋いで映像を出せばいいだけなのに。

わざわざ小さなノートパソコンで見せるつてのは、やっぱりそういう意味なんだろうな。

あのお母さん、もしかしたら今夜つて言つてたし。

ノートパソコンの画面がちやんと見える、そして男性恐怖症だという委員長ちゃんからできる限り距離を取った位置に座り、一升瓶の注ぎ口に引つ掛けられていた茶碗に日本酒を注ぐ。

僕がひさしぶりの日本酒に口をつけると同時に、ノートパソコンは使い込んでいるのが一目でわかる板張りの床と傷だらけの壁が見える道場を映した。

「最初は剣術みたいですな」

「うん。防具と竹刀を使った稽古もある流派みたいだから、とっかかりとしてはいいかもね」

「防具なんて映つてませんし、おばあさんが持っているのは木刀ですよね？」

「道場の壁、傷だらけでしょ。あれは剣道なんかの竹刀稽古で使う『面』つて防具が壁に激突して付いた傷なんだ。竹刀かはわからないけど、防具を使つてそれなりに激しい稽古してる証拠だね」

剣の稽古が激しいのなんて当たり前で、よく僕も下手な打ち込みをしてはアヤカさんに壁に向かってぶん投げられた。

その時たまたま稽古を見ていたティファニーちゃんが「防具があれば少しはマシなのになやあ」なんて言っていて、その日のゴハン中に普通の剣術道場がどんなものか教えてくれたのを覚えている。

普通がいいなあと僕が言うとティファニーちゃんは、「吉喰流はキチガイ流って言われるくらいだからにやあ」と笑っていたっけ。

「なるほど。では、とっかかりとはどういう意味なんですか？」

「そのまんま。とりあえずこういう道場で剣術つてのを齧ってみて、続けられそうなら他にいい流派がないか探したりすればいいんだし」「知りませんでした。流派とかは、一度決めたら死ぬまでそうだとばかり」

マジメだなあ。

そう思っただけ日本酒を飲みながら委員長ちゃんに目をやると、ノートパソコンに映るしわしわのおばあちゃんの演武を食い入るように見るあまり、前へ小さな体を倒し気味にしているのに気づいた。

自宅にいる委員長ちゃんはもちろん、学校の制服じゃなく私服。それも春物のセーター。

でもって前に体を倒すと、そのお胸は自分のふとももにゆつくりと接近していつて。

あと少し、もうちよつとで……

ふによんっ♡

おおっ。

爆乳がいやらしく形を変えるナイスなシーン、いただきました！

「これは。なかなかですよね？」

「うん。いいねえ」

やっぱり、こういう眺めをツマミに飲むお酒は美味しい。

「ふー。終わりましたね」

「終わっちゃったねえ」

根がマジメだから委員長ちゃんは、映像が途切れると同時に背筋を伸ばし、ポットのお湯でお茶を淹れている。

委員長ちゃんがそれを口に運んでテーブルに戻すと、次の映像が流れ出す。

……これ、かんっぜんに監視されてるでしょ。

まるで僕の考えを肯定してくれるように、その次の映像へ切り替わる時さつきみたいな間はなかった。

今度は若い男女の演武だけど、また剣術。

これで最初の映像から3連続で剣術の演武になる。

「やっぱり剣術が多いんですね」

「だねえ。まあ、基本中の基本だろうし。今は昔みたいに刀を佩いて歩きはしないけど、槍や弓より取り回しがいいから」

「携帯性も重要なんですな」

「うん。道場で戦うんじゃない、例えば森の中とかだと槍や弓はキツイね。だから普通は同時に剣も学ぶし、人によっては銃も使う」

「やっぱり剣術でしょうか」

「まだわかんないって。映像は終わってないし、本だってこんなに積んである。急いで決めない方がいいよ」

「はい」

「でも、一番いいのは身近で最も強い人が武術を教えてくださいるか聞いてみる事だと思うけど。せつかく僕でも剣のみで相手したらヤバイくらい強、……違うな。棗さんがそうだったように、師匠達も僕に教えたかったんだ。まあそんな人が近くにいるんだから、まずその人に頼んでみるのがいいんじゃないかな」

棗さんは僕に、上には上がいる事を知っておけと言った。

それが夜宮さんで、僕は棗さんの読み通りあの人に完敗している。僕が佐伯さんと立ち合っても、きっと勝てはしないんだろう。

「それはもしかして、うちの佐伯の事ですか？」

「うん」

「私、聞いてきますー！」

委員長ちゃんが勢いよく立ち上がり、さつき通ったドアへ小走りで行かう。

素晴らしいプルンをありがとう。

もうちよつとスカートが短ければなあって、おおっ。
おっぱいおつきすぎて、後ろ姿でもお胸が揺れてるのがバツチり確
認できるんですけどっ!?

「小柄な爆乳ちゃんって、凄いな」

隣の部屋に後ろ姿が消えたから僕はそう呟いたんだけど、その言葉が終わる前に閉じかけていたドアが開き、それを背中で閉めるようにして委員長ちゃんがこっちの部屋に戻ってきた。

ビツクリするくらい、顔が赤い。

「あー。いちおう聞いてくけど、大丈夫？」

「はっ、はい！ それと本当に、本当にごめんなさいっ！」
最敬礼。

体を90度、直角に曲げての謝罪。

それをしていた小柄な体がドアに押されて、委員長ちゃんがつんのめる。

「きゃあっ！」

「大袈裟ですよ、お嬢様。ちよつとドアでお尻を押されただけじゃありませんか」

「さささささ、佐伯っ！」

「はい。どうなさいましたか、お嬢様」

澄まし顔で問う佐伯さん。

それを後押しするように、その足元に2つの小さな人影が現れる。

もちろん、セイとフウカだ。

「そう怒んなくて、爆乳ねーちゃん。佐伯ねーちゃんのクンニはなかなかだったから、オレとセイも愉しめたいし」

「そうなのっ。愛のある舌使いができる人に悪い人はいないのっ！」

「はいはい。いいからまず、服を着ようね」

セイとフウカは当り前のように全裸。

委員長ちゃんがあまりに慌ててたんで何事かと2人の視界を確認したら、子供用の椅子をピツタリくつつけて並べて、それに座りながらメイド服の佐伯さんに股間を舐めさせていた格好のままだ。

「本当にごめんなさい、六道さん！」

「いいっていいって。本人達、セイとフウカから望んだんだろうし。謝るんなら僕の方でしょ」

「どちらも謝られる必要はございません。それより、お嬢様は佐伯に御用があつたのでは？」

「い、今はそれどころじゃ」

「いいからいいから。ほら、委員長ちゃん。本気なら、ちゃんとお願いをしないと」

「あつ。は、はい」

ドアを開けるまでは心が浮き立って、開けてからはあまりの光景に湧き出した怒りで感じていなくなった緊張が、委員長ちゃんの動きを奪う。

まるで【言霊】でそうされた委員長ちゃんの試合相手のようだけど、佐伯さんはなにも言わずに辛抱強くただ待った。

さすが、大人だなあ。

「はい、ととさま。佐伯つちが追加してくれた軽いおツマミなのっ」

「ありがとう。でも、声はもうちよつと静かにね」

「はいなのっ」

大きなお皿を小さな体で、全裸のまま運んできてくれたセイと僕のそんな会話で、委員長ちゃんは動きを取り戻す。

その喉が動いて唾液を飲み込むと、ようやく委員長ちゃんは覚悟を決めたみたいだ。

「あの、その……」

「はい。なんでしよう、お嬢様」

「その…… き、霧に武術を教えてくださいっ！」

再度の最敬礼。

「でしたら明日の朝からお教えしましょう」

「い、いいのっ!？」

佐伯さんが微笑む。

それはまるで、菩薩のような表情だ。

「当然でございます。佐伯はお嬢様のためならばどんな事でもいたし

ますと、いつも言っているではありませんか」

「ありがとうございます」

「そしてその言葉が本当だというのは、ついこの間お風邪を召した際に、3日も洗っていない腋や下乳やピンク色の秘肉を舌で清めて証明させていただいたはずですよ?」

あ、やっぱ菩薩のほずがないか。

サラさんとアヤカさんの友達だもんね。

「なっ、なにを言い出して、きつ、聞かないでください六道さん! 耳を、耳を塞いでっ!」

「は、はあ。……あーあー、聞こえないーい。聞こえないけど羨ましー。僕も3日とか汗を溜めた委員長ちゃんペロペロしたーい」

今さら耳を塞いだって。

「ろっ、六道さんっ!」

「六道様。それはお嬢様の男性恐怖症を治す過程で、是非ともお願いいたします」

「やあつた」

「ですが今日は初日という事もありますし、お嬢様の学ぶ武術も決まりましたので、ここまででよろしいでしょうか。そろそろ、六道様にお泊りになっていただくお部屋にご案内しますので」

「いえいえ。時間もまだ早いし、僕達は家に」

「申し訳ございませんが、六道様がこの依頼を遂行なされる時、常にこの家にお泊りになると決めたのは奥様なのです。もしそうされたいのであれば、奥様と煉上の当主様がお酒をお飲みになられる席にご案内いたしますので」

「……あー。ちなみに、その場所には奥さん達以外の方は?」

「おられません」

じゃあ選択肢はなしで、お泊り決定か。

2人の美人さん、それも30代のセックスが上手そうな奥さん2人との3Pは魅力的だけど、ここまで大きな家と、四大家とまで称される家の奥さんと不倫セックスは、できれば避けたい。

そんなリスクを負うくらいなら、酔っぱらって寝ちやつた方がマシ

だろう。

「なら素直に泊めてもらうんで、そっちの部屋に」

「かしこまりました。セイ姫様とフウカ姫様はどうなさいますか？」

「とりあえずこっちなかな。だろ、セイ？」

「もちのろんなのっ♪」

「ではすぐに」

パンパンと佐伯さんが手を鳴らす。

するとわずか数秒でメイド服を着た4人の若い女の人が見れ、深々と僕に頭を下げ、見事に声を揃えて「それではお部屋にご案内させていただきます」と言った。

こ、これはまさか……

「六道様」

やけに似ている4人のうち、一番左に立っている美人メイドさんがそれとなく僕を促す。

「あ、はい。すぐに」

「とーちゃんもしつかりな」

「セイとフウカは、お願いだからはっちやけないんだよ？」

「へいへい」

「ととさま。じゃあまたあとで、なのっ♪」

「心配だなあ……」

僕が案内されたのはさつきまでいた、委員長ちゃんとノートパソコンを覗き込んでいた部屋と同じようなリビングルーム。

そのソファアーに腰を下ろすと、さつき飲んでいた日本酒が今度は見事な切子細工のグラスに注がれる。

「気づいておられるようですね、六道様」

「あー。まあ、なんとなく」

「では補足説明を」

「補足、ですか？」

リーダー格らしい一番スレンダーなポニーテールの美人さんが「ええ」と言うと、その隣に3人のメイドさんが並ぶ。

スレンダーな美人さんだつてBかCはあるのに、順番に大きくなつ

てゆくお胸のふくらみとお尻。「標準から特大まで、各種取り揃えております」とか言われそう。

でも、いいのかなあ。

フェロモンを操れる僕にしか嗅げないニオイからすると、4人が4人もすすつかりその気みたいだけど。

まずスレンダー美人さんは、この家がメイドにこんな事を命じているどころか、普段ならメイドの方が望んでも決して許さないという事を語り出した。

それなのにこうなっているのは、佐伯さんが奥さんに特別の許可を得たからであるらしい。

きつとサラさんとアヤカさんが絡んでるんだろう。間違いなく。

そして僕の前に立つ4人の美人さんは佐伯さんに僕の写真を見せられ、人となりなんかを説明されてから、この役目に立候補するか決めてくれと言われたらしい。

そして全員が了承すると、佐伯さんは4人にいろいろな訓練を施してくれたんだそうだ。

「……聞くのが怖いなあ、その訓練の内容」

「ならお聞かせせずに体験していただきましょう。まだ訓練を初めて日が浅いのが申し訳ないですが、誠心誠意、心を込めてさせていただきます。さあ、まいりましょう」

「もしかして、お風呂ですか？」

「お嫌いでなければ、ぜひ。お酒もお運びしますし」

「お風呂は好物ですよ」

差し出された手をそつと握つて立ち上がる。

この大豪邸の敷地に入った時から感じているニオイの元、それにゆっくりと、こんな美人さん達と浸かってお酒が飲めるなら、朝までだつて入ってたいくらいだ。

「こちらで、まずお召し物を失礼させていただきますね」

「脱衣所ひろつ。服なら、自分で脱ぎますよ」

「いいえ。すべて私達にお任せください。こちらの部屋にお泊りの間、歩く以外のすべての事はこの4人がお世話させていただきます。

六道様が指の1本も動かす必要はございません」

いやそんなのムリでしょ。

トイレとか。

「この子、ヨツバはそうだったものが好物ですから。顔でも体でも好きな場所、口の中へだつてどうぞご遠慮なく」

その言葉は、ウソじゃないらしい。

ヨツバと呼ばれた美人さん、メガネの似合う4人の中で一番おっぱいとお尻の大きな美人さんは、「口の中へだつて」と言われた瞬間、興奮度のメーターが振り切れるまで上がったからだ。

4人がかりで服を脱がされそれから案内された浴室は、とんでもなく大きな檜風呂に硫黄の香るお湯が、贅沢にもかけ流しになっていた。

「やっぱり天然温泉でしたか」

「お察しの通りでございます。まずは、あちらの椅子へどうぞ。フタバ、お湯で椅子を温めて」

「はい。イチハ姉さま」

「ずいぶん不思議な形の椅子ですね」

「はい。なんでも世間では、『スケベ椅子』などと呼ぶそうです」

「あはは。ド直球にもほどがありますねえ」

「本当にそうですわ。まずはあの椅子に座つていただいて、私達4姉妹の舌で体を洗わせていただきます。それからあちらのマットへ移動していただいて、今度は香油をたっぷりと垂らした私達の体で、また全身を洗わせていただきますね」

「おおっ」

スケベ椅子の奥にある、銀色がかった灰色のマットには見覚えがある。

サラさんとアヤカさんとティファニーちゃんとセイとフウカ、それに僕を入れた6人で見たエッチなアニメに登場して、そのシーンが印象に残っていたから。

それにしても、この4人はやっぱり姉妹だったのか。

「イチハ姉さま、椅子が温まりました」

「では六道様、まいりましょう」

「あ、はい」

肌触りのいい、やはり檜であるらしい釘なんか見当たらない木の板の上を歩いて椅子に座る。

いつもなら垂れ下がって椅子の前面に、下手をすると床に当たる肉棒が、それと玉袋が座っても垂れ下がった状態になる不思議な形状の椅子。

「では、失礼いたしますね」

イチハさん、フタバさんが左右の親指を。

たぶんミツバさんという名前だと思われる人とヨツバさんが這いつくばって左右の足の親指を、そっと口に含んで舐め始める。

「うわあ。なんか、変な感じ」

「舌洗いや全身リップと呼ばれるそうなのですが、お嫌いですか？」

「いえいえ。大好きなんですけど、こうまで息が合った動きでされるのは初めてなんで。だから、ちよつと不思議な感じで」

「お嫌いではないのでしたら、どうかリラックスなさってください。フタバ、六道様にお酒を」

「はい。イチハ姉さま」

能磨学園 1-1

控えめに言って天国。

そう断言するしかない洗体は進み、まだ洗われていない場所は2箇所だけになっている。

前後の股間。

それ以外の場所は本当に隅々まで、耳の中の舌を挿し込める範囲や、ヘソの中まで4姉妹の舌で舐め尽くされた。

「六道様」

「ほえ、極楽じゃ。あ、はいはい。なんででしょう」

「残る場所は2箇所ですし、次の準備もありますので。そこは代わる代わる舌で清めさせていただきます。ですのでまず、私とフタバがお目汚しになるのを承知で衣服を脱いでもよろしいですか？」

「お目汚しなんてとんでもない。喜んでその様子までじっくり見させてもらいますよ」

例え本人が本気でそう思っているでも行き過ぎた謙遜だからもっと強く言っておきたいけど、全身リップですでにフル勃起だし、早くみなさんの裸が見たいのでこのくらいにしておこう。

「六道様。六道様はイチハ姉さまとフタバ、先にどちらが実の姉妹の手で裸にされてゆくのを見たいですか？」

「こら、フタバ。言葉も口調も碎け過ぎですよ」

「いえいえ。もっと碎けてくれた方が安心できるし、もっともつと愉しめると思っています」

「やっぱりっ。六道様なら、そうおっしゃると思いましたが。佐伯お姉さまから聞いてた通りっ♪」

「この子ったら……」

「この方がいいんですって。なら、問題です。フタバさんは、僕がどっちを先に見たがってると思います？ 正解したら粗品をプレゼントしましょう」

マジメ一徹って感じのイチハさんと、活発で口調にもかわいらしさが滲むフタバさん。

どちらの裸も見たいのは当然だし、そうしてゆくのが実の姉妹だからとても楽しみなんだけど、どっちを先に見たいかと言われたら答えは決まっている。

「んー。六道様なら、まず長女で見るからにマジメなイチハ姉さまをじっくり目で犯したいんじゃないかなっ」

「正解！ 正解のフタバさんには、もしセックスまでするならばその時に好きなように好きなプレイをする権利が贈呈されます。セックスなしなら、好きなように好きな体勢でされるクンニをプレゼント」

「やったあ♪ 騎乗位っ♪ 騎乗位でパンパンはしたない音を立てて初セックスッ♪」

「わあ。初めてとか光栄なんですけど」

「うちの姉妹は全員セックスは初めてですよーっ。みんなでレズプレイばかりしてるから、処女膜なんてとっくにないけど。あははっ」

「それはそれは。最高じゃないですか。ありがたやーありがたやー」

「六道様ったら。それではミツバ、ヨツバ。始めなさい」

「は、はい。恥ずかしいけど頑張って頬張ります。……あむっ」

おおっ。

真っ赤な顔をした巨乳の美人さん、それもまだ10代っぽいミツバさんが恥ずかしそうにしながらも肉棒をパツクリと。

これはいい。

「ついに、ついに六道様のバラのつぼみのようなアヌスを。おトイレでもこうせよと命じられたい。……っちゅ。れろっ」

「あはは。ヨツバさんが本当にしたいならいいですよ。水使いなら病気にもならないでしょうし」

「ヨツバが水だと見抜いておられましたか」

「六道様、ご慧眼ですっ」

「いえいえ。そしてミツバさんは土だからか、うれしそうに恥垢を味わってますね。いい舌の動きです」

恥垢を味わっている。

そう姉妹の前で暴露されたミツバさんはさらに顔を赤くしたけれど、メイド服の長いスカートの下からムンムンとフェロモンを垂れ流しながら、跳ねるように上がった興奮度のメーターを真似たように顔全体を上げ、デープスロートを開始した。

恥ずかしい秘密を暴露されてギアを上げるとか、なんとも僕の好みでいい。

「あはっ。4姉妹で一番の変態はヨツバちゃんだけど、一番の淫乱はって聞かれたらミツバちゃんって答えるしかないんですっ。じゃあ、今から妹の手で裸にされちゃうイチハ姉さまはどんな性癖でしょう?」

「火使いだし、見るからにマジメだし、長女だからしつかり者で、気も強そう。そうになると、アナルセックスが大好きとか?」

「正解っ! 正解した六道様には、いつでもどこでもこの4姉妹を好きないように使っていただけ権利を差し上げますっ♪」

「やあつた。もうその権利は手放しませんからね!」

「もう。六道様つたら、お戯れを。それよりフタバ、そろそろ」

「はい。イチハ姉さまの敏感なカラダ、六道様にじっくりと見ていただきますしよう」

肌の露出なんてほとんどない、テレビなんかで見るのとはだいぶ違うメイド服。

それが目の前で、ゆっくりと脱がされてゆく。

本当に恥じらっているらしいイチハさんの表情と、僕の反応を見ながら興奮する脱がせ方を探っているらしいフタバさんの気遣いのおかげで、めっちゃくちやワクワクしている。

そしてイチハさんは実の妹の手でパンティーまでを剥ぎ取られると、脱がされながら胸と股間を隠していた手をゆっくりと下ろす。

「むぐうっ!?!」

「ああっ、ごめんなさい! ミツバさん、大丈夫ですか!?!」

「は、はい。驚いただけです。続けますね」

「いったいなにがあったの、ミツバ?」

僕の肉棒をまた啜えようとしたミツバさんはその動きを止め、両手

でそれを固定したまま恥ずかしそうに、でもうれしそうに少し微笑む。

「六道様の、その、剛直がお口の中で跳ねて。それでビックリしてしまっただんです。六道様、イチハ姉さま、ごめんなさい」

「ごつちこそ。ミツバさんのフェラがだんだん激しくなって気持ちよくなつた時に、イチハさんの最高の裸をバッチリ見ちゃって。それで射精しかけました。ごめんなさい」

「そ、そうだったのですか。続けなさい、ミツバ。六道様、すぐにフタバも裸にして、今度はこの子がアナル舐めをさせていただきます。少しだけお待ちください」

となると、フェラはイチハさんか。

楽しみだなあ、どつちも。

「わあを」

姉であるイチハさんの手で元気っ子なフタバさんが素っ裸にされると、ついついそんな声を上げてしまう。

「あはっ。六道様は、パイパンの方がお好みですか？」

「あるのも好きですけど、どちらかと言えばそうですね」

「ですって、イチハ姉さま。洗いがひと段落したら、温泉に浸かる六道様に剃毛シヨールをご覧に入れましようね」

「なんっ!?!」

「ほら、六道様をお待たせしてはいけませんよ。前を譲ったんだから、しっかりお願いしますね」

「え、ええ。でも剃毛をしてしまつたらタワシ洗いが」

「フタバが佐伯お姉さまに確認を取っておきますから。それより、これ以上六道様をお待たせしては」

「そ、そうね」

2人が僕に歩み寄る。

そしてフタバさんは僕の背後に、イチハさんは目の前に膝をついた。

膝の内側。

そこにキスが落とされて、伸ばされた舌が肌をくすぐる。

反対側の同じ場所でも、同じ動きの同じ刺激をイチハさんの白い指が与えている。

でも、焦らすつもりはないらしい。

イチハさんは体ごと前進して、すぐに股間を、まだ勃起したままの肉棒を指し始めた。

さっきの部屋を出がけにセイがなにも言わないで通常状態より小さくした肉棒は、それでも通常状態のそれとほとんど変わらない大きさ。

その根元に舌が辿り着くと同時に、背中に『ふによん』という感触。「六道様あ、おっぱいは好きですかあ？」

背筋をゾクツと何物かが駆け上がる。

驚きのような、怯えのような、くすぐったさのような、快感のような、それらがごちゃ混ぜになったような何か。

いきなり耳元、それも至近距離で甘い声を聞かされて驚いていると、それを慰めるように背中の感触が変化してゆく。

密着していたおっぱいが離れかけ、またゆつくりと、その柔らかさを見せつけるように背中で潰される。

そしてまた体が離され、今度は途中で止まらずに小さな、とある2箇所だけが僕の背中にくっついていてる状態になった。

「おおっ。大好物ですよ。みなさんみたいな美人さんの、こんなキレイなおっぱいは特に」

「あは。六道様ったらお上手。ミツバとヨツバが脱ぎ終わったら今度は舌ではなく、全員のカラダ、おっぱいや蜜壺をスポンジのように使って、六道様を洗わせていただくんです」

「それはまた楽しみな」

「今日は、これからもこの部屋にお泊りになる時は、六道様は自分で歩く以外の事をなさる必要はないんです。すべて私達姉妹がお世話させていただきますので、お好きナだけ、お好きナように射精なさってくださいいね」

「ほえー。あ、でも」

「ここでは誰もが能力者ですから。射精をどれだけしたって誰も驚き

「ませんし、人並み外れた回復力を見せつけたって構いません」
「なるほど」

つまりフタバさんは、今ここで1発出しておけと言っているのか。手早く根元から亀頭までを舐め終えたイチハさんが肉棒を啜えた顔を上下させているから、そうしようと思えばいつでもできる。

「というか何回でも射精していいんなら、ここで1度そうしておきたい。」

「こんな美人さん、イチハさんの口の中にたつぷりと。」

「あは。その気になっていただけみたいですね」
「ですねえ」

「ではそのお手伝いを後ろから、それと視覚でも。ミツバちゃん、ヨツバちゃん。オーダー変更。いつもの濃厚なレズプレイを六道様に披露しながらお互いに服を脱がせていつて」

「は、はい」

「六道様の前で実の姉と。それだけでイキそうです」

「ミツバさんはとても恥ずかしそうに、ヨツバさんは待ち切れないといった感じで頷き、動き出す。」

「うわあ。キスからもう濃厚ですねえ」

「ド淫乱とド変態の公開レズプレイですもの。どちらも最初から全開です。お酒をどうぞ」

「あ、はい。ありがとうございます。……うん、やっぱり美味しい。おっ、お胸がメイド服の上から揉まれたただけであんなに形を変えて」
「おっぱい、お好きなんです。んっ……」

「はい。見るのも触るのも、こうして背中を乳首だけで撫でられるのも大好きです」

「ではごゆっくりお楽しみください。お酒のおかわりと、軽いおツマミもこのテーブルにありますので」

「ありがとうございます」

たしかに僕の横、手を伸ばすのに苦労しない位置には小さなテーブルが置かれていて、グラスと同じ切子細工の徳利と小皿が乗っている。

美味しいお酒。

僕好みのシンプルな、でも初めて見る干した小魚を炙ったツマミと、それに添えられた木の実。

それらを飲み食いしながら凜とした美人さんに熱心な、普通の人より巧いフェラをされている。

だけでなく、その興奮を勃起した乳首の感触で伝えるようにしていた快活な美人さんは徐々に姿勢を低くしてゆき、僕の体の最も汚い場所、つまりは肛門を砂糖で作った菓子でも溶かすように舐めながら、手で玉袋をマツサージ。

そしてそしてさらに、そんな王様みたいな愛撫をされている僕の眼前では、双子のようにも見える美人巨乳姉妹の濃厚レズプレイが。

「ほんっと、王様にでもなつたみたい」

能磨学園12

「王様だなんて。六道様は、間違いなくそれ以上ですわ」

刺激を変化させるためか、肉棒を口から抜いて手でしごくイチハさんが、ねっとりと下から上へ裏筋を舐め上げてから言う。

「なんで僕にここまでするんだとかは、聞いても答えてはくれないんでしょうねえ」

「それは、奥様と佐伯お姉さまに訊ねていただかなくては」

「……やっぱりかあ。じゃ、今はなんにも考えずただ溺れておきます」
「そうなさってください」

「ならレズプレイも佳境だし、とりあえず1回って感じで出してもいいですか?」

「ほ、望外の喜びですっ!」

普通に暮らしていたらなかなか聞けない、僕も生まれて初めて耳にしたセリフを放ったイチハさんがまた肉棒を啜える。

同時に肛門を這い回る舌の動きも激しさを増し、前に回された手はまるで「存分に精液を吐き出せ」とでも言うかのように袋の内にある2つの睾丸を揉みほぐす。

僕が言ったように、レズプレイは最佳境。

喘ぎとそれを漏らす時の動きが激しいミツバさんはメイド服が床に落ち、実の妹と深いキスをしてその指で膣を貫かれながら見事な巨乳を揺らして。

その姉をそうまで喘がせているヨツバさんも床にこそ落ちていないけれどメイド服が半脱ぎになって、乳首こそ見えないけれど大きなお胸が、むにゅむにゅと形を変えて。

「はあー。こりゃあ、辛抱たまらんってヤツですねえ。そろそろ出ちやいます、イチハさん。口に出しちやっついていいんですか?」

返事はない。

でもどんな肯定の言葉より雄弁に、上下する顔の速さと、さらに激

しくなった舌の動きは伝えている。

このまま、口の中に精液を吐き出せと。

「ああつ、ミツバさんがイッてる。ヨツバさんも限界みたい。それと、僕も……」

助走。

男なら誰でもこうしている時、願う射精のためにそれを取る。

フェラなら女の人の頭を掴んだり、自分から腰を少しだけ振ったり、それを相手が許してくれると信じているなら肉棒の先に喉奥を指させたり。

でもそうした助走すら、イチハさんは僕にさせるつもりがないらしい。

こういうのはそれこそ男がサービスを受ける側になる、風俗なんかじゃ当たり前なんだろうか。

「もう出ます。もうっ、……出ま、すっ」

肉棒が跳ねる。

熱い口の中に、精液を吐き出す。

2度、3度と、跳ねる。

その動きが収まって僕が細く長く息を吐くと、尿道を舌先が撫でて、それからちゅうちゅうと音でも立てそうな感じで肉棒が吸われた。

「ほほうはま……」

上気した美貌。

その口が開かれ、赤っぽい肉の穴を埋め尽くす粘性の高い白い液体が僕の目に映る。

「うっわ。めちやくちや射精しましたね、僕。まあ、これくらいなら常識の範囲内だからいいけど」

「イチハ姉さま、蕩けてますって表情になって。そんなに美味しいんですか、六道様の精子が」

僕の耳元で囁かれた問いに、大きく口を開けてザーメンを見せているイチハさんが頷く。

「ふはは、ははく……」

「はい。わかってますよ。ミツバちゃん、ヨツバちゃん。どっちもイッたのなら、六道様に壺洗いを」

「は、はい」

「うれしいです。でも、フタバ姉さま」

「わかってるから。フタバの次はミツバちゃん、それからヨツバちゃんね」

まさか、順番に口内射精を？

そんな僕の予想は、そう悪くはない形で外れた。

「すつごい量。4分の3でも、お口がいつぱいになりそう。……んっく、おくひいつぱいにはってふ」

「ふうっ。味と香りもすごいでしょう？ それに、射精された精子が上顎や、喉の入り口を叩く感触が途轍もなかった。私、ロイキなんてしたの初めて」

4姉妹だから4分割。

自分の取り分、つと言つてもいいんだろうか。それを喉を鳴らして飲み下したイチハさんがうつとりと眩く。

「ほんほら。ほいひー……」

「あ、あの。六道様」

「あ、はいはい」

姉妹のキス、そして口内射精されたザーメンの口移しに釘付けになつていた視線を声のした方に移すと、ミツバさんが物凄いポーズで立っていた。

さつきのレズプレイで乱れた黒髪。

内向的な印象を受けるけれどそれが魅力となつている整つた顔は、羞恥に赤く染まり切つて。

ヨツバさんよりはたしかに小さいけれど、それでもFかGはありそうな巨乳を惜しげもなく晒し、腰を前に突き出してパイパンのアソコを指で広げて見せている。

「ろ、六道様。今から実の妹の指でああも簡単に達した、どうしようもなく淫らな蜜壺でお手を、お指を一本ずつ清めさせていただきます。具合がお気に召しましたら、いつでもいくらでもご自由にお使いくだ

「さいませ」

「な、なるほど。壺洗いつてそういう意味なんですか」

「六道様。左手は私、ヨツバが。失禁でも脱糞でも六道様が命じてくださればどこでも、たとえ繁華街の真ん中でも致しますので」

「わあを」

左右の手が引かれ、まったくの無毛と、けっこうな剛毛の茂る股間に導かれてゆく。

くちゅっ。

そんな音が鳴ると2人の美人巨乳姉妹はよく似た小さな声を発しながら、よく似た淫靡な表情を浮かべながら僕の小指以外の指を優しく押さえ、熱く濡れた肉の壺に小指を迎え入れた。

「ああっ」

「六道様のが、ヨツバの淫乱な蜜壺に。今すぐ水術で浣腸をして、お漏らししたら馬鞭で100叩きだぞって言われながら乱暴に犯していたたきたいです……」

「さあ、次はミツバの番よ。六道様に感謝しながら、ありがたくいただきますなさい」

「は、はい。これが男の人の、六道様の子種のニオイ。すごい……」

何年ぶりだろう。

思っても、答えはすぐに浮かばない。

もしかしたら子供の頃、あの防空壕からサラさんとアヤカさんに助け出され、太陽のあまりの明るさに驚いて以来かも。

そう思うくらい僕は驚いて、ビクツと体を震わせまでしてミツバさんとヨツバさんを意図せず喘がせてしまった。

でも、仕方ないと思う。

まさかイチハさんが、「おみ足は私とフタバの壺で」なんて言いながら僕の足を跨ぐなんて想像もできなかったから。

「両手両足の指が、ぜんぶ女の人のアソコに……」

「このまま同時に姉妹のダブル口奉仕などはいかがですか、六道様？」
「お願いします！」

即座にお願いしてダブルフェラを受けながら僕の頭は、もう向こう

に見えているマットとか後でいいから順番に、全員の膣に1度ずつ射精して、それから温泉にゆつくり浸かりたいと、そればかりを考えるようになっていた。

「あは。六道様、もしかして？」

「はい。もう、とりあえず全員に中出ししないと収まりそうになくつて。ごめんなさい」

「謝られる必要など。フタバ、ミツバ、ヨツバ」

「はいっ、イチハ姉さま」

「わ、わかりました」

「ああっ、夢のようです……」

4人が僕から体を離す。

それが少し寂しかったけれど、長女のイチハさんから順番に4姉妹が並び、僕にお尻を向けて床に膝をつくとき、そんな気持なんかどこかへ吹き飛んで行ってしまった。

小、中、大、特大。

そんな4つのお尻が。

恥毛有りで薄毛、無し、無し、有りで剛毛とバリエーションに富んだ割れ目が突き出されて並んでいるからだ。

「六道様。まずは、どの穴をお使いになりますか？」

「その間に残る3人で体をお洗いますね」

「……えっと、じゃあ順番にイチハさんから」

「かしこまりました」

フタバさんの言葉はウソじゃなかった。

僕は指の1本も動かさず、腰も振らずに、四つん這いで巧みに腰を使うイチハさんの膣内に10分ほどでザーメンを吐き出している。

「あー、すいません。今しかないようなタイミングだったんで、つい出しちゃいました」

「わ、私が大きく達するのを見計らったの膣内射精。それで見事に、2段ロケットのようにまた達してしまいました。さすがは、……お待ちください」

大きく、それでも極限まで喘ぎを堪えながらいったイチハさんが、

僕の勃起したままの肉棒を膣で啜え込んだまま浴室の入り口に鋭い視線を向ける。

僕の右手にたわし洗いというのを施していたフタバさんも、左手のミツバさんも、大きなお胸を石鹸の泡まみれにして背中を洗っていたヨツバさんも、気配を感じ取ってそちらを見ているようだ。

「……イチハ姉さま。佐伯お姉さまですわ。2人の姫様をお連れして、プレゼントを届けにいらっしやったとおっしやってます」

「プレゼント？」

「あちやー。アレかあ」

「六道様、あれとはいったい？」

「すぐにわかりますって」

「そうですか。……ええっ!？」

そういう事なら、仕方ない。

口に1回、オマンコに1回射精したんだから、次はここだ。

引き締まった白くて小さなお尻を少し乱暴に引き寄せる。

そしてザーメンと愛液で充分に潤い、尿道から白い雫が垂れそうになっている肉棒をアナルにあてがう。

「あは。佐伯お姉さまのお出迎えは、イチハ姉さまのアナルを犯しながらですか。さすが六道様です」

だってこの後の展開なんて、完全に読めるもん。

なら、こっちにもたっぷりザーメンでマーキングしとかなくっちゃ。

「お、お待ちください、六道様。不浄の穴をお使いになられるのでしたら、私が、……はううっ!？」

「急がないといけないんで。あー、キツキツの向こうはトロトロふわっふわ。イチハさんって、アナルも名器なんですわねえ」

「恐縮で、んくっ……」

やっと聞けそうになった喘ぎ声を、引き戸の音が掻き消す。

「佐伯お姉さま。まあ、かわいらしい。まさか、3人ともメイド服を着てらっしやってるなんて」

「佐伯っちにもらったのっ♪」

「へへーん。どうだ、とーちゃん。オレとセイもなかなかのモンだろ？」

「だねえ。かわいいかわいい」

「六道様。イチハが1人目のようですが」

「あ、はい。でもすぐにお渡ししますよ。プレゼントって言ってたんで、急いでほら。今はこんな感じですよ」

「ろっ、六道様っ!？」

小柄でも大柄でもなく、よく鍛えられて引き締まったイチハさんの体を抱え上げる。

そしてそのまま、石鹸のおかげで滑りがよくなっているスケベ椅子の上で体を回転させ、イチハさんを浴室の入り口の方に向けた。

「っはー。オマンコからとーちゃんのザーメン垂れ流しながら、今度はケツマンコでチンポを啜え込んでやがんのか」

「愉しめそうでよかったの〜♪」

「さすがイチハですね。いい淫乱具合ですよ」

「まだまだシ足りないんですから、壊さないでくださいよ?」

「当然です。次が来るまではセーブしますし。ですよ? セイ姫様、フウカ姫様」

「まつ、いちおーはな」

「だから早くなのっ、ととさま」

「はいはい」

「あの、六道様。お3人は、いったいなんの話を」

「すぐに見せてもらえると幸いですよ。それと佐伯さん達をあまり待たせても悪いんで、ちよつと腰を振らせてもらいますね。……うん、やっぱり名器だ」

「あんっ、い、いきなりそんなっ!」

体を持ち上げながら腰を振り出すと、さっきは決して上がらなかつた喘ぎが発せられる。

「へっへ。早くアナルに中出しキメちゃってくれよ、とーちゃん。じゃないとコレの出番が来ねえ」

言いながらフウカが佐伯さんにもらったという子供サイズのメイ

ド服のスカートを捲り上げた。

「ひいっ」

「うええっ!?!」

「し、信じられない……」

「ふたなり幼女!?! 萌えの神様は存在なさったと言うのですかっ!」

4 姉妹の驚きの声に、3人の笑い声が混ざる。

「セイのも準備万端なのっ♪」

「私もよ、イチハ。たっぷり犯してあげるから、覚悟なさいな」

「ろ、六道様。こ、これはいったい……」

3人のスカートで隠されていたモノ、勃起しているだけでなく、先走りの汗で根元までがテラテラと光る肉棒を見てイチハさんが震え声で問う。

「最初に選んじやってごめんなさい、イチハさん」

「そ、それはまさか……」

「はい。次のフタバさんに射精するまで、あの3人はイチハさんが相手をする事になると思います。頑張ってくださいね」

「そ、そんな。あんなのを3本もなんて……」

鼻歌を聞きながら助手席で車に揺られる。

その鼻歌は後部座席のセイとフウカと、ハンドルを握っている佐伯さんの合唱だ。

「朝からゴキゲンですなえ」

「ええ、それはもう。姫様お2人をお迎えしての4Pレズプレイ、もいい、お嬢様の『淫気散らし』を終えたらセイ姫様の隠し技を教えてください。ただい。そこからあの4姉妹を、六道様と姫様方で代わる代わる。それはもう最高の夜でしたので」

「だからって、全員が失神するまでしなくても」

それに佐伯さん、僕とはしてくれなかったんだよねえ。

なんでもそれは僕が佐伯さんと手合わせをして、合格が出るまでおあずけなんだそうさ。

「能力者、特にその中でも有能な者ほど天狗になりがちです。ああいった子達には、上には上がいる事を身をもって体験させておかないと」

「で、わざわざ朱音ちゃんの家まで着いてきて、今度は僕にそれを体験させてくれると?」

「六道様がお望みなら、ですな」

「悩みなあ」

佐伯さんとセックスは是が非でもしたい。

それにもちろん僕より上なのは間違いなさそうな戦闘の腕は見たいし、そんな人だから稽古はつけてもらいたい。

師匠であるサラさんとアヤカさんには及ばずとも、僕より強い人に稽古をつけてもらえる機会なんて、そうそうないだろうから。

「六道様はどこまで付き合うおつもりなのですか? 朱音お嬢様の自主練に」

「そつちも悩んでます。朱音ちゃんの師が、それこそ目指す生き方ま

でもを示すような人ならそれに従うんですけど」

「それはありませんね。煉上の家は、子の人生を誰かに委ねるような事をしません。剣は剣の、炎術には炎術の師を付け腕を磨かせるだけです」

「なら目指す場所は、朱音ちゃん自身が決めるんですか？」

「そうなりますね」

厄介な。

そんなだから朱音ちゃんは煉上の、四大家とまで呼ばれる名家の跡継ぎに相応しい人間であらねばと頑張りすぎて、伸び伸びと成長できずにいるのに。

「うーん」

「アドバイスを許されるなら、あまり考えすぎず自然体でと申し上げておきましょう。六道様はまだしも、普通の高校1年生はそれでいいのです。悩み、傷つき、たくさんの失敗をして、その道を歩みながら成長してゆくのが自然な流れなのですから」

「なるほど」

となると僕はあまり口出しせず、朱音ちゃんの自主練に付き合うだけがいいのか。

それなら、かなり気が楽だ。

「なあ、とーちやんとーちやん」

「んー？」

「あの朱音ってねーちやん、押せばすぐ股を開くだろ。自主練つてのが終わったらヤツちまおうぜ」

「ヤダよ。名家のお嬢様とか、めんどくさい」

「かーっ、根性ねえなあ」

「そんな根性いらさないから」

「でも、ととさま。どんなスカトロプレイもノリノリでしてくれるヨツバちゃんもいいけど、恥ずかしがりながらツンデレ風味でスカトロに応じる女子高生も捨てがたいのっー」

「まあねえ」

母親の綾さんいわく、朱音ちゃんのオナニーのオカズは母親が書庫

に紛れ込ませておいたハードなスカトロ系の書籍。

もし本当に朱音ちゃんのおカズがそうであるなら、そんな変態的なプレイを現実のものにできるチャンスがあれば、おそらく誘いに乗ってくれるとは思うけど。

「本当に楽しみですね。六道様の剛槍を姫様方と佐伯の股間に生やし、四方から小水をぶっかけてそれから口奉仕を命じられたら、朱音お嬢様はどんな表情であのかわいらしい手を、未成熟な舌を肉棒に伸ばすのでしょうか」

「言つとくけどしませんからね?」

はいはい。

そんな言葉が顔に書いてあるような苦笑いを見せ、佐伯さんは大きな通りから1車線の道に高級車を進ませる。

その道が2車線になり、さっきより狭い、車が擦れ違えないほどの道を縫うように走ったりして、僕達は委員長ちゃんの家にも勝るとも劣らない大邸宅に到着した。

「でっかい家なのー」

「んだなあ。敷地、うちのマンションと学校を合わせたくらいじゃないかね」

「お待ちしております。六道様、佐伯様。どうぞ、道場の前までお車でお進みください。お嬢様はそこにおられます」

学校の校門のような、トラックが突っ込んでも破れそうにない門が自動でガラガラと開き始めると、ピシツとした服を着た初老の男の人が運転席に駆け寄って、そう言いながら頭を下げる。

アニメなんかでよく見る、執事さんってやつなんだろう。

委員長ちゃんの家にはメイドさんしかいなかったけど、やっぱりお金持ちの家にはこういう人がいるのか。

「ありがとうございます、氷谷さん。お邪魔いたしますわ。それともしお時間があれば、いつか六道様に氷谷さんの妙技を見せていただきたいのですが」

氷谷さんという執事の男の人が微笑む。

「いつなりとご覧に入れましょう」

「ありがとうございます。では」

「ごゆっくりなさってくださいませ」

氷谷さんが頭を下げ、それが上がらないうちに車が走り出す。

見えている限りで最も和風な、いかにも道場という感じの建物はかなり先にあるので、雑談くらいは余裕でできそうだ。

「家名が氷谷さんって事は、もしかして」

「ええ。水系の希少種、氷使いですね」

「ふわー。炎使いの家の執事さんが氷使いって」

「万葉の昔より優秀な炎使いを輩出し続けられるからこそ四大家とまで呼ばれ、だからこそ他家に手を借りる必要がないほどの人材を揃えられる。煉上はそういう家ですので」

「住んでる世界が違うなあ」

「六道様がそれを言いますか」

「気分的には一般庶民ですからねえ」

それも、最下層の。

「怖い一般庶民もおられるものですね。あらあら、朱音お嬢様ったら、待ちかねて自らお出迎えなんて。よほど待ちかねておられたのですね」

「純白の稽古着と袴、下駄を履いて手には木刀まで。車を降りた途端に立ち合えとか言われそうで怖いなあ。にしても、稽古着って」

「普段着で鬼斬りを抜く事や、その戦闘が野山で行われる事なんて想定もしておりませんからね。当然でしょう」

だからそれがダメで、だからこそ朱音ちゃんの剣は上品すぎるって話なんだけどなあ。

「待っておりますしたわよ、六道ヒロキ。さあ、今すぐ道場でわたくしと立ち合いなさい」

「わあい、予想通りー」

助手席を下りるなり放たれたそれは予想通りのセリフで、苦笑いしか出てこない。

「朱音お嬢様」

「な、なんですの。佐伯」

「煉上の奥様から頼まれ、幸田の奥様が了承なされた話では、佐伯が朱音お嬢様の師の1人となつて稽古ではなく、実践的な訓練を施すという事でした。もしそうではなく朱音お嬢様が勝手に六道様と立ち合いなどをされるなら、佐伯はこのまま幸田家に戻りますが?」

「じよ、冗談ですわ。やつと佐伯に剣術の指南役も受けてもらえたんですもの。その指示には従いますわ」

「ならよろしいのです。準備運動はお済みなのですか?」

「ええ」

「でしたら、フウカ姫様」

「おうっ! 任せろっ!」

佐伯さんが微笑みながらお礼を言い、フウカは母親のアヤカさんに貰ったという2本の木刀を影から出してその手に握る。

そしてフウカは、かなり手加減をした打ち込みを朱音ちゃんに向かって繰り返した。

「ちよっ、いきなりですのっ!」

「実戦にはじめの声などありませんし、敵が時と場所を選んでくれるはずありません。朱音お嬢様が動けなくなるまで、これを続けますよ」

「ははっ、だつてよ。おら、気を抜いてつと骨の1本や2本はいただくぞっ! おらおらあっ!」

いきなり稽古開始、それもこんな形で、動けなくなるまでとは。

どうやら佐伯さんは、かなり厳しく朱音ちゃんを指導するつもりみたいだ。

フウカは手加減をしているので、朱音ちゃんの木刀はフウカのそれをギリギリ弾き返している。

そのカンカンと鳴る音に気にも留めず、佐伯さんはスマホを取り出してどこかに電話をかけてるみたいだ。

「おひさしぶりです。佐伯です。……ええ。はい。……ですね。百里さんからお話は行っていると思いますわが」

棗さんも絡んでるのか。

となると、桃さんも。

あの2人だけじゃなく佐伯さんまでが今回の依頼に関わっているなら、僕がいくら足掻いたってどうにもなりそうにない。

黙って指示に従っていた方がよさそう。

「六道様」

「あ、はい」

「どうぞ」

スマホが差し出される。

相手と話せて事なんだろう。

佐伯さんの指示には従うと決めただけなので、素直にそれを受け取ってスマホを耳に当てた。

「えっと、六道ヒロキですけど」

「やつほ、うちだよー。」

「も、もしかして夜宮さんですか?」

「うん。」

今その家で始まった訓練は、うちの授業も兼ねてるから。

そのガチレズメイド、佐伯の指示には従ってね。

「えっと。授業、ですか?」

「うん。」

処女の淫気散らし、それも週1つて短いスパンでそれを経験できるのは貴重な体験だから。

「いんっ!」

「じゃ、そゆ事で。」

こつちの本チャン授業も、近いうちに。

「ほんじゃねー。」

「ええっと、はあ。お待ちしてます、でいいのかな。……あ、切れちゃったや」

プープーとスマホが鳴っているので終話ボタンを押し、スーツの袖で画面を拭いて佐伯さんに返す。

「あの、佐伯さん」

「なんででしょう」

「朱音ちゃんの淫気散らして、本当に僕がするんですか?」

「もちろんです。煉上の奥様も、電腦妖精も百里室長も、和歌山のお師匠さん達も了承済みですので」

「でも、それをされる本人には言っていないんですよね？」
「だって僕も聞いてないもん。」

「もちろんですわ」

「やっぱりかあ。」

にしても、朱音ちゃんの淫気散らしって。

ほとんど絶え間なくカンカンと鳴り続けている音、その方向に視線を移す。

「フウカはいつもと変わらず。」

人間形態で服をテレビで見た流行りのキャミナントカとミニスカートにして、ポニーテールを激しく揺らしながら斬撃を繰り出している。

対する朱音ちゃんも、学校では下ろしている長い黒髪をポニーテールにしていた。

「純白の稽古着と袴。」

それに隠されているお胸はBか、上手くすればCはありそう。

お胸がそうだからお尻もボリウムはないけれど、かなり運動はしているようでよく引き締まった、それでも丸さは失っていない、なかなかのブツだ。

「クラスメイトの淫気散らし、かあ……」

「そういうえば、和歌山の2人から伝言がありました」

「はあ。サラさんとアヤカさんからですか」

「ええ。『クラスメイトには手を出さないようにしているようだが、ムダな努力だからやめておけ。むしろ女の恪気を制御するいい修行になるから、ヤレるだけヤッておけ』、との事です」

「はあ」

ムダな努力って。

まあこの光景を、あっちじや考えもなかったのに東京に来てから気になっている処女、それも極上の美少女である朱音ちゃんを見てると、たしかにムダな努力かなとは思っけど。

「それと申し訳ございませんが、朝食はここで。すぐにご用意しますので」

「なしでも平気ですよ。修行で1週間くらい絶食とか慣れてるし」

「特性が特性だというのにはですか。やはりあの2人はイカレ女ですね。すぐにお弁当をお持ちします」

「同意したいけど、後が怖いからやめておこうかな」

それが賢明ですという言葉を残し、佐伯さんは道場に最も近い豪邸に向かう。

でもそれより大きな、まるでお城のようなお屋敷がずうつと向こうに見えているんだから、やっぱり四大家ってとんでもない。

「そこまでです」

佐伯さんの声が曇り空に吸い込まれてゆく。

稽古中に怪しくなってきた雲行きが、本当に雨を降らせてくれたらいい経験になったんだけど、その機会は次に持ち越しか。

「けっこう保ちましたねえ」

「ええ。昼食まで30分。正直、ここまで体力が保つとは思いませんでした」

「マジメだから体力作りも、しっかりしてたんでしようね」

「ええ。では六道様」

「はいはい」

「先導しますので、朱音お嬢様を浴室まで運んでくださいませ」

「わあを」

「なっ、なんですすってえ!?!」

座り込んで立つ事もできなくなっているのに上がった、朱音ちゃんの大声。

それを浴びた佐伯さんはいい笑顔。

となると、運ぶだけじゃ済まなそう。

「運ぶだけではありませんよ。六道様には、そのまま朱音お嬢様のお体を洗っていただきます」

「なあっ!?!」

やっぱりか。

「それと……」

佐伯さんが伝えた午後の予定。

それを聞いている途中で朱音ちゃんの顔は真っ蒼になり、それからすぐ茹でたタコみたいに真っ赤になった。

「ごめんね、朱音ちゃん。こういうのは僕の和歌山の師匠達とか、東京での保護者をしてくれてる人達、それになんて言ったらいいのかな、

……ああ、そつか。新しい師匠だ。その人も承知してるみたいで、僕には逆らえないんだ。遠慮せず断ってくれていいから、佐伯さんの説得を頑張ってみて」

申し訳なき半分、この後に期待しているワクワクが半分って感じをごまかすため、ついつい早口になってしまう。

「も、もしかしてうちのお母様も……」

「当然です。もしも嫌がるようなら、覚悟はしておくようにとの伝言ですよ」

「……終わった。終わってしまいましたわ」

「もしかして朱音ちゃんも逆らえない感じ？」

「当然ですわ。そんな恐ろしい事ができるなら、本気で世界征服をまくろむ方が簡単に思えるレベルですもの」

「あー。そんじや、仕方ないか。お互いに覚悟を決めよ。……よいしよつと」

「きやあつー！」

かわいらしい悲鳴。

それは僕が座り込んでしまっている朱音ちゃんの体に手を伸ばし、お姫様だつことやらをする途中で発せられた。

「かつるいなあ。ゴハンもつと食べた方がいいよ？」

「おろつ、下ろしなさいっ！ 六道ヒロキ！」

「煉上の奥様に叱られたいのなら、どうぞご自由に」

そんなセリフで、怒鳴りながら暴れていた朱音ちゃんの動きがピタリと止まる。

「どれだけ怖いんだか、あの人。お茶目だけど優しそうに見えるのに」「母と子という立場ではありませんが、煉上の現当主と次期当主ともなれば優しさだけを向けてはいられなくて当然です。さあ、まいりましょう」

「なるほどねえ」

自然な動きでセイとフウカを抱き上げ、道場らしい木造建築に近い、高級住宅地の一軒家のような家に足を向けた佐伯さんの後を追う。

まるでお城のような母屋と思われる建物じゃなく、さつき佐伯さんがお弁当とテーブルセットを運んでできてくれた、大きくて豪華だけどまだ一般的に見える家に向かうのはどうしてなんだろう。

「ろ、六道ヒロキ」

「はいはい」

「その、わたくし、……あ、汗臭いですわよね？」

「うんにゃ、まったく」

「ほ、本当ですか？」

「うん」

クサイ、じゃなくってイイニオイ、とは言わないでおく。

僕は同じ年頃の女の子となんてマトモに話した経験すらないけれど、テレビドラマやアニメでは、女の子はそういうの、体臭とかを驚くくらい気にしていたのを覚えているから。

「まさか、わたくしの部屋に殿方を入れる日が来るとは」

「部屋？」

「ええ。道場に近いあの建物がわたくしの部屋ですわ」

「マジっすか」

大豪邸の敷地にある豪邸。

それが自分の部屋とか、朱音ちゃんが僕達の住んでるマンションを見たら犬小屋かなにかと勘違いしちゃうんじゃないかな。

っていうか、そんなに部屋って必要？

ゴハン食べてくつろいだりお酒飲んでセックスしたりする部屋と、ベッドでセックスしてそのまま寝る部屋の2つあれば充分じゃない？

お金持ちって、ほんつと意味わかんない。

「どうぞ、六道様」

「あ、はい。おじゃまします。……わあ。玄関に入ったただけなのに、なんかいいニオイ。朱音ちゃんのニオイだ」

「ばっ、そういうのは口にしないのが礼儀ですわよ！ 六道ヒロキ！」
「なるほど。ごめんごめん」

僕の部屋には存在すらない、ホムラさんとアヤメさんの家のそれ

よりずっと長くて広い廊下。

それを慣れた様子で進んだ佐伯さんは脱衣場と思われる広くて清潔な場所に僕達を案内して、いくつかの指示を与えてからセイとフウカを抱いたままそこを出ていった。

「か、体を洗われるだけでなく、服まで六道ヒロキに脱がされるなんて……」

「制限時間は30分。で、どうしよっか」

「な、なにがですの？」

「たぶんバレるだろうけど、朱音ちゃんが自分でお風呂に入っちゃう？　もうそれくらい動けそうだし」

「……………怒られるのを承知で、ですわね」

「うん」

「そんなささやかな抵抗ならしても許され、きやあっ！」

驚きに歪んだ朱音ちゃんの顔が、見る間に青くなってゆく。

この会話すら、聞かれてたのかあ。

「セイの通話魔法かな。佐伯さんからの伝言でしょ？」

「え、ええ」

「佐伯さんはなんて？」

「ズルをしたら、もう一度お風呂のやり直し。し、しかも……」

「しかも？」

お姫様だっこされたままの朱音ちゃんの顔が、今度は真っ赤になつてゆく。

「あなたの、六道ヒロキの糞尿でわたくしを徹底的に汚してからお風呂に入れるそうですわ」

「えー。僕、自分のオシッコやウンチじゃ興奮しないんだけど。朱音ちゃんのじゃダメ？　それは困ったなあ」

「困るポイントを間違えすぎですわっ！」

「あはは。じゃあ、佐伯さんの言う通りにしているの？」

「……………え、ええ。もう諦めるしかありませんわ」

「ラッキー」

あ、思わず本音が。

「い、今なんとおっしやいましたのっ!？」

「なんでもないなんでもない。そのベッドみたいにおつきな籐の椅子でいいよね」

「ど、どこでもいいから早くなさい」

「はあい」

見るからに高級そうな、布地を使っていないので濡れた体のままでも座れる大きな籐椅子。

そこに朱音ちゃんを横たえると、見事にすっぽり体が収まってしまふ。これじゃベッドと呼んでもいいくらいだ。

ギョツと閉じられている、いつもは呆れるほど勝気な瞳。

あれほど激しく動いていたのでたっぷりと汗で濡れ、抱き上げた時から僕の鼻をくすぐり続けていた稽古着。

それらを見下ろしながら、まずは小さく震えている白い足先に手を伸ばす。

「あっ」

「木刀は置いたけど、草履を玄関で脱がすのを忘れちゃってたや。ごめんね、緊張しすぎて」

「ろ、六道ヒロキでも緊張なんてしますの?」

「当たり前でしょって。さ、次は左足ね」

「え、ええ」

処女の女の子してみたい。

つい最近そんな事を言ったのは僕だけど、それを申し訳なく思ってしまうくらい朱音ちゃんは緊張しているらしい。

なんとか少しでも気分をほぐしてあげたいけれど、どうやってそれをすればいいんだろう。

「草履はOKつと。ここからが問題だよねえ」

「そ、そうですね」

「やっぱり恥ずかしいよねえ?」

「あ、当り前ですわ。ようやく佐伯が武術の指南役を受けてくれて、その助手のような形で六道ヒロキが参加するとは聞いてましたけど、まさかこちらの指導にも参加するだなんて」

「こちら？」

もしかしてそれって。

「こちらの指導って、もしかして。朱音ちゃんは淫気が」

「ええ。『視え』てますわ」

「ほえー。炎使いとしての素質は最上級で、身体能力増強系の特性もあるのに。さらに見鬼系の能力か特性まで」

淫気散らしを僕が施すだけじゃなく、朱音ちゃんがそれをする練習台にもなるとは。

想像もしてなかった。

「わたくしですもの。それで、それがどうしましたの？」

「いや、朱音ちゃんが恥ずかしいなら僕の方から先に脱ごうかなってさ」

「裸になるんですのっ!?!」

「だってそうしなきゃ洗えないし。それじゃ、パパッと脱いじゃうね」
ゴクリ。

そんな音を立てて生唾を飲み込んだ朱音ちゃんの方をあまり見ず、スーツのジャケットとワイシャツを脱ぎ捨てる。

それから手をかけたベルトがカチャッと音を立ると籐椅子が軋んで、身を起こした朱音ちゃんが食い入るように僕を凝視しているのに気づく。

さすが前衛もこなせる炎使い、体力の回復が早い。

それにその男女比からいつも欲求不満の人が多い女性能力者、さすがの食いつきっぷりだ。

なんかこういう、見せつけながら脱いでくのとって興奮するかも。

そんな事を考えながらスラックス、靴下と脱いでゆき、最後の1枚、今日は赤のボクサーパンツをゆつくりと下ろす。

「そ、そんなに大きいんですの。その、男の人のつて……」

「まだ小さい方だよ。僕の、って言っているのかわかんないけど、能力でこれの大きさは処女の朱音ちゃんに最適なサイズに調整されてるから」

「ど、どんな能力を持っていますの」

「触ってみる？」

また朱音ちゃんが生唾を飲み込む。

でも、その真つ赤になった端正なお顔はすぐに横に振られてしまった。

「まだ怖いので遠慮しますわ」

まだ、か。

「りよーかい。んじゃ次は朱音ちゃんを僕が脱がすんだけど、コレが大きくなっても怒らないでね？」

「それはその、あれですの？ 行為の時などに男性が興奮するとなるという、あの……」

「うん。勃起だね。朱音ちゃんみたいな美少女の裸を見たらそうなるちやつて当たり前だし、僕はちよつと厄介な特性がたくさんあるからさ」

「厄介、とは？」

「女の人の体臭とか、汗のニオイとか汚れ、それにオシッコなんかでも興奮しちやうの。じゃ、袴から脱がせるね？」

「え、ええ。こうなったら覚悟を決めますわ」

「さすがー」

朱音ちゃんは男のストリップを見るために上体を起こした事に気がついていないみたいだけど、そうしてくれたのは僕にとって都合がいい。

僕も身に着け慣れている袴というズボンのようなスカートのような古い衣服を脱がせるには、体の前後の結び目やらなにやらを解いておく必要があるからだ。

「その、六道ヒロキ」

そんな朱音ちゃんの声は袴をほとんど脱がせ、もう少しでたつぷりと汗を吸い込んだパンティー、運が良ければノーパンで汗と淫臭が混じり合った割れ目ちゃんとご対面できるとワクワクしている僕の耳に届く。

「どしたの？ やつぱり恥ずかしい？」

「それはもちろんですけど、その。ちよつと気になって」

「なんざんしょ」

「その、さつき六道ヒロキは言いましたわ。女のおし、じゃなくって小水で興奮すると」

「うん、言ったねえ」

「それってその、世間では変態的であるとされているのでは？」

「まあそうだけど、世の中なんて変態ばかりだよ」

僕だけじゃない。

それはそう数は多くないけれど、今までのセックスの相手が教えてくれたんだから間違いないと断言できる。

「そうですの？」

「うん。知り合いの読心系能力者さんが言ってたけど、100人を並べて全員の性癖を読んだらノーマルって言い切れるのなんて10人いないのが普通らしいし」

「……そんなにですの」

「うん。それに朱音ちゃんは見た事ないだろうけど、エッチなビデオや動画じゃ相手にオシッコさせるのなんて普通だし。それを飲んだりして、やつと変態的って呼べる感じかなあ」

「なるほどですわ」

さあ。では待ちに待った、ごたいめーん。

「おおつ、やっぱりノーパンだった!」

「あ、あまり見ではダメですわ」

「そう言いながら身を竦めるようにして、股間を隠し切るには短すぎる稽古着の裾を一生懸命下げる美少女。」

「……これは、イイ!」

家で暇潰しに見てるエッチ動画じゃコスプレってジャンルにあまり魅力を感じていなかったけど、こんなものを見たら大好きになってしまいそう。

「見ないと洗えないからねえ。さ、次はこっちも」

「ううっ、恥ずかしさで死ぬる気までしてきましたわ」

冗談じゃない。

佐伯さんが朱音ちゃんに淫気散らしや淫気祓いを教えてるなら、午後からほぼ確実に練習だからと朱音ちゃんに僕の淫気散らしを命じるはず。

朱音ちゃんは処女だから本番セックスはないだろうけど、この必死で稽古着の裾を下げている白くて見るからにすべすべの手で、もしかしたらちよつと気難しい印象を与えるけれど抜群に整った口で射精させてもらえるんだから。

今こんな時に死なれたら困るなんてもんじゃない。

「恥ずかしさで死んだ人の話は聞いたときないなあ。さ、脱ぎ脱ぎしよーねー」

「ううっ。今すぐに叩き斬ってやりたいですわ、六道ヒロキ……」

「そしたら反撃して体の自由を奪って、全身をくまなく舐め回すけど?」

「恥を知れですわ」

「それだけじゃない。処女を奪われなくなかったら口で気持ちよくしろって言うてさ」

「か、考えただけで吐き気がしますわね」

「それでも朱音ちゃんはそうするしかなくって、でも生まれて初めてのフェエラが上手な訳ないからさ。怒った僕はお仕置きだって言って、朱音ちゃんの、こんなにキレイな顔をオシッコで汚しちゃうかも」

「……へ、変態ですわね。死ねばいいのに」

はいはい。

その変態プレイを聞かされただけで股間からムワツと発情フェエロモンを立ち昇らせた女の子がよく言うねえ。

ちようどお風呂場だし本当にオシッコで汗を流してあげて、それから股間に手を伸ばしてどれだけ濡れてるかを見せてあげようかな。

恥ずかしいとか言ったら、じゃあクラスメイトに言われたくなかったらオシッコで汚れた僕の肉棒を口で清めるとか命令して。

……あ、考えただけで勃起しちゃったや。

「おお、キレイなおっぱい。芸術品みたいだねえ」

「そ、そういうのはわざわざ言わなくていいんですわ」

「はい。それじゃ行こっか」

「え、ええ」

また朱音ちゃんを抱き上げる。

バッキバキに勃起してる肉棒が当たってるけど、僕は悪くない。

「はい、ドア開けて」

「え、ええ。それよりその、なにか当たってるような」

「当ててるんだよって言ったら怒るよね？」

「当然ですわ」

「なら、ぐーぜんだった。ってなんだこれ。でっかいお風呂」

「ジャグジーバスを知りませんか？」

「うん。初めて見た。30分コースじゃお湯を溜めるだけで終わっちゃうだろうから、入るのはムリだねえ」

「人様の部屋でお風呂に入るつもりとか、信じられませんわ。あら、見慣れない椅子が。佐伯が置いたのかしら」

「んー？」

ジャグジーバスとやらから洗い場に視線を移すと、そこには昨日あ

れだけお世話になった椅子があった。

スケベ椅子。

間違いない、佐伯さんが誰かに用意させた物だろう。

「不思議な形。六道ヒロキ。そつと、優しく下ろさないと怒りますわよ」

「お任せください、僕のかわいいお嬢様」

「か、軽口を叩くんじゃありませんわ。いいからさっさとなさい。こっちは1秒でも早く離れたいんですの」

「僕のお嬢様は手厳しくてらっしやる」

それと、なんて軽率な。

こんな状況で1秒でも早くオマエから離れたいとか言われたら、仕返しをされて当然でしょうに。

「ふうっ。ようやく離れましたわ。それにしても、不思議な座り心地の椅子ですわね。どうしてこんな形なのかしら」

「すぐにわかりますよ、お嬢様。では、洗体を開始させていただきますね」

「覚悟は決めたと言いましたわ。それと普通に話さない。気味の悪い」

「はいはい。では失礼して。……ん、いい味」

「なあっ、なあっ、なああっ!?!」

お嬢様がみつともない声を上げちゃって。

「どうしたの、朱音ちゃん？　ちちゅ、じゃあ次は薬指を洗いますね」
「なっ、なんで舐めるんですのっ!?!」

「舌洗いに決まってるじゃないですか。石鹸で洗う前に、こうして舌ベロで洗う。常識だよ?」

「そんな常識、んくっ……」

右手の指のすべて。

それを根元まで口に含んで舌で舐め回し、逸る心を抑えながら手のひらと甲を舐める。

朱音ちゃんは舌洗いをかなり気に入ったのか、フェロモンどころか僕の鼻にすっかりニオイが届くほどアソコを濡らしてるみたいだ。

その噎せ返るような、けれど今まで嗅いだどれよりも青臭い淫臭を堪能しながら、ゆつくりと上を目指す。

「ふうん。朱音ちゃんみたいな美少女は、腋の下のニオイまで甘酸っぱいのか」

「その、臭くはありませんの?」

「うん。いいニオイ。でも酸味も香ばしさも足りなくって、ちよつと物足りないかなあ」

こういう若々しい香りもいいけど、そこに大人の、もつと酸っぱかったり香ばしかったりするニオイがブレンドされたらきつと、もつともつと興奮できる。

「へ、変態ですわね」

「まあね。でも、世の中は変態だらけって教えたでしょ。それより朱音ちゃんはやたら変態的だとかに敏感みたいだけど、なんか気になる事でもあるの?」

「あ、あるはずありませんわ」

「したい事とかされたい事があつたら、正直に言うんだよ? もしこの後で僕と朱音ちゃんがお互いの淫気散らしをしろって佐伯さんに言われたら、なるべくその性癖に沿った方法でしなきゃだから」

「それは……」

どうやら朱音ちゃんも佐伯さんならそうさせるだろうと予想はしていたようで、言葉を詰まらせてから生唾を飲み込む。

ここは少し、背中を押してあげた方がいいか。

「想像もできないなら変態っぽい、フェチ的なのを少しずつ試す?」

「た、たとえばどんな事ですの?」

「まずニオイ。寝汗を掻いたまま、昨日と同じ服や下着をまたつけてた僕のアソコのニオイを嗅いでみる。よいしょつと」

「わ、わざわざ立つ必要があるんですのっ!?!」

「あそつか。じゃ、手を貸して。恥ずかしいなら目を閉じていいから」

「わ、わかりましたわ」

通常時の僕の肉棒は、少しだけれど皮を被っている。

その皮に隠れていた部分、カリの裏に白くて細い指の腹を当て、汚れ、少しだけれど存在する恥垢をこそぐように動かした。

「はい、どーぞ。この指を嗅いでみて」

「……その、ほ、本当にしなきゃダメですか？」

「朱音ちゃんが性癖を自覚してないんなら、こうやって少しずつ試すしかないからねえ。さ、早く」

返事すらできないらしい朱音ちゃんの興奮度はすでにメーターを振り切って、134まで上がっている。

これが二オイを嗅いでまだ上がるようなら、朱音ちゃんは二オイフェチでもある事になるだろう。

「なんですの、これは。家畜小屋のような、肥料のような、乳製品のよ。うな。臭くってたまりませんわ。本当に酷い二オイ……」

興奮度を跳ね上げながら、うっとりした表情で言われても。

「じゃあ次は、トイレ行こっか」

「トイっ!？」

あは。

焦ってる焦ってる。

興奮度が200超えて、すごいひさびさに見たや。

「エッチな動画なんかじゃ、お風呂だとそのままするんだけどね。家主の朱音ちゃんがいいなら、時間もないしここでするけど？」

「その、恥ずかしくありませんの？」

「恥ずかしいけど、朱音ちゃんみたいにかわいい女の子が相手だと興奮の方が勝っちゃうかな」

「変態ですわね、やはり。……な、なら、ここでしなさいな。六道ヒロキのためにお手洗いまで歩くのもバカバカしいですもの」

「りよーかい」

それが照れ隠しだろうが強がりだろうが、憎まれ口を叩けば叩くほど自分に帰って来るのに。

ジャグジーバスというのに背を向け、朱音ちゃんの目の前をオシッコが飛ぶように位置調整。

勃起はしたままなのでちよつと出しにくいけれど、こんなには慣

れているので迷わず膀胱に開放を許す。

「きやつ」

「朝からトイレ行ってないから、やっぱ勢いがあるなあ」
長々とした放尿。

それが終わりに近づくと当然、放物線は徐々に小さくなって、飛沫が朱音ちゃんの足を汚す。

しまった。

まだ足の指の間を舐めてなかったのに。

「酷い二オイ。汚物にも劣りますわね」

「いやこれが汚物そのものだから。それより朱音ちゃん。先走りとか、ガマン汁って知ってる？」

「なんですの、それは」

ならばとまず、それをざつと説明。

男の人も濡れるのですね、とか呟いちやつてる朱音ちゃんの手を取る。

「僕は朱音ちゃんに恥垢の二オイを嗅がれて、すっごい興奮してたみたいでさ。それがオシッコと混じり合って、ほら」

「なっ、なんてものをわたくしの指に付けてますのっ!？」

「オシッコとガマン汁。液体じゃないみたいでしょ？」

「……ネバネバしてますわ」

わざと恥垢の上に塗りつけたガマン汁とオシッコをしげしげと見ながら朱音ちゃんが言う。

もつと大騒ぎするかと思っただけど。

「うん。ガマン汁はそういうものだから。で、どう？ 僕のオシッコを見て興奮した？」

聞く必要なんてないけどね。

「まさ、……いいえ。わかりませんわ」
いいねえ。

まさかって否定しかけたけど、すぐにわからないって言葉に変えた。

もうちよーつと素直になってもらおうかな。

「そっか。なら実際に淫気散らしをしろって言われたら、その時にまた試そう。オシッコをシャワーで流しちゃうね」

「ええ。早くなさいな。鼻が曲がってしまいますわ」
なるほどなるほど。

まだ言うか。

でもね、スカトロ趣味のお嬢様。

もしそのオシッコとガマン汁、それに恥垢の混合物をほんの少しでも舐めたら、媚薬効果でとんでもない事になっちゃうよ？

ホムラさんやアヤメさんみたいに成駒をしてもああなんだから、ヒヨッコ能力者が僕の体液なんて、それもザーメンの次に媚薬効果の高いガマン汁なんて舐めたら、どんな処女だって僕が欲しくなっておねだりなんかしちゃうはず。

「ま、それはそれで楽しみだけど」

「なにか言いました？」

「いーえ。さ、シャワーシャワー」

わざと朱音ちゃんに背を向け、シャワーで壁から床を洗い流す。

もちろん、一瞬たりとも朱音ちゃんの方は見ない。

そうやってたっぷり時間をかけてお湯を流し続け、ボディースープのボトルを取って朱音ちゃんに向き直る。

「ようやく生き返りましたわ。まだ臭っているけれど」

「そかそか、はい。僕が汚しちゃった手を洗って」

「え、ええ。当然ですわ」

僕が向けたシャワーで朱音ちゃんは手を洗い出すけれど、その動きはとても不自然で、人差し指の先には白く濁った物体も、ゼリーにも似た透明な汁も見当たらなかった。

バカめ。

小次郎、破れたり！

「じゃ、洗ったらシャワー持ってたて」

「どうしてですか？」

「こうするから」

ボディースープをたっぷりと手に取り、それを陰毛で泡立てる。

そしてその泡を僕が体の前面に塗りたくっていると、朱音ちゃんはカッと目を大きく見開いた。

昨日あれだけ体で教えてもらった洗い方だから、まあなんとか再現くらいはできるはず。

このスカトロお嬢様がどんな反応をしてくれるのか、今から楽しみだ。

「ほら、朱音ちゃん。しつかり立って」

「え、ええ。わかってますわ。……わかってますわよね？」

「僕に聞いてどうするのさ。ほら、行くよ。お昼ごはんだって」

「え、ええ」

そう言つて踏み出された1歩が、あまりにあっけなくふらつく。

なのでこれはもうダメだなと、また朱音ちゃんの体を抱き上げた。

「僕のお嬢様はワガママだなあ。歩くのも面倒だとか」

「うるさいですわ。抱き上げるのを許した覚えはありませんけれど、こうなったのならしつかり運びなさい」

「はいはい」

熱い吐息が腋の下にかかる。

朱音ちゃんには用意してあつた上品な浴衣を着せたけれど、僕の服はさつきまでと同じスーツで、それが腋の下ともなれば、それなりに臭うはず。

お風呂で体を、その隅々までを僕に洗われ、何度も何度もイキかけると、その度に手を止められていた朱音ちゃん。

そんな焦らしに健気に耐えていた処女の女の子は、僕のクツサイ腋の下のニオイを嗅いでいるのを隠す余裕すらないらしい。

僕が『処女つてこんなに濡れるのか』と驚いた凹凸の少ない割れ目は、あれからずうっと、絶えず淫液が染み出して浴衣を濡らしているし。

少しだけやりすぎちゃったかな。

「でもま、僕は悪くないよねえ」

「つく、ううっ。し、振動が酷いですわよ。なるべく揺らさないようにしなさいな、六道ヒロキ」

「へーい」

ちよつと揺れたただけでお股を『くちゅっ』と鳴らしてしまっている

お嬢様に廊下で、それも浴衣を半脱がしにして口の利き方を教えてあげられるのもいいけれど、ここまで発情しちやってるなら普通に食事をして焦らす方が楽しそう。

なので朱音ちゃんに道を教えてもらいながら優しく運んで、広い食堂の大きなテーブルの豪華な椅子にそつと体を下ろした。

「朱音お嬢様。ずいぶんとお顔が赤いようですが」

「き、気のせいですわ」

「そうですか。では、どうぞお召し上がりください。大好物でらっしゃる天ぷらそばですよ」

「え、ええ。いただくわ」

「オレはカツカレーで、セイはオムライス。とーちゃんは、その3つぜんぶなっ」

「1人前でいいのに。すみません、佐伯さん」

「いえいえ、とんでもない」

全員が全員、気がついてる。

それなのに朱音ちゃんは自身の欲情を必死で隠しながら箸を持ち上げ、震える手で蕎麦をどうにか口に運んだ。

（くくつ。箸を持ち上げただけで勃起乳首が浴衣に擦れて、危うく喘ぎそうになってんし。これで処女だってんだから笑えるよなあ）

（それにととさまのガマン汁が染みてるから、お蕎麦ですら口に入れたらチンポを想像して妄想が止まらないのっ♪）

（バツカでー）

（ととさまのガマン汁なんか舐めるからなのっ。自業自得なのっ♪）

（あーあ、ビックリしてお蕎麦を落としてるや。かわいいねえ。わざとゆっくり食べよっつと）

（佐伯っちは、それに会話も普通に雑談がいいって言ってるのっ）

（だねえ。次に立ち上がった時、浴衣にどれだけシミができてるか楽しみだ）

「……って、お蕎麦のツユ黒っ!?!」

「そういえば六道様はずっと西にお住まいでしたね。関東、それより東は、どこもこのような感じですよ。食べてみて味が濃すぎるような

ら、蕎麦湯を注ぎ足しますよ」

「そうなんですか。ありがとうございます。……あ、でも美味しいや美味しい。」

それに、見た目ほど塩辛くもない。

これならおツユまで飲めそう。

「安心いたしました。お代わりもありますので、たくさんお食べください」

「いえいえ。これだけあれば充分です。うん、お蕎麦は関東風でも、いや、関東風の方が美味しいくらいだ」

たっぷり30分ほど時間をかけて食べた昼食。

その食後のデザートも食べ終え、僕がコーヒーを半分ほど飲んだところようやく、佐伯さんは話を切り出す。

「聞いておられるのですか？ 朱音お嬢様」

「朱音ちゃん、おーい」

「……なっ、なんですの。六道ヒロキ。そんなに大きな声を出して」

「なんかボーっとしてたからさ。大丈夫？」

「あ、当り前ですわ」

「なら朱音お嬢様、もう一度申し上げておきます」

ワクワク。

「ええ。なにかしら」

「午後は朱音お嬢様には男性に施す淫気散らしを自室で六道様を相手に、六道様には朱音お嬢様を相手にそれを行っていただきます。時間は夕方までしかありませんので、淫気系の先輩である六道様の指示には素直に従っていただきますよ？」

「え、ええ。良かった。佐伯やその子達の前でしなくていいんですね」

「初回ですから。それでは六道様を自室に」

「わ、わかりましたわ」

ふらつきながら朱音ちゃんが立ち上がる。

「危ないな。またお嬢様だっこしようか？」

「……結構ですわ。こちらですわよ、六道ヒロキ」

「はい」

ナイス強がり。

おかげで大雨の日に水溜まりで尻もちをついたんじゃないかってほどの、もしくはお漏らしをしたと勘違いされてもおかしくないほどのシミが観察できる。

ほんっと、処女なのにこんなに濡れるって不思議。

「こ、この階段を上がった先ですわ」

「うん。それより、せめて手を貸そうか？」

朱音ちゃんは返事をしない。

無言で階段に足をかけ、びしょ濡れになっている小ぶりなお尻を見せながら、ゆっくりと2階を目指す。

うん。

お尻もシミも、そこから漂ってくるニオイも最高。

さて、味の方はどうやってたしかめようかな。

「ここが、その、……お手洗いですわ」

「そりやあちようどいいね」

「なにがですか？」

「さっきの確認。朱音ちゃん、僕のオシッコで興奮したかわかんないって言ってたでしょ？」

「え、ええ」

「だからまた至近距離で見て、次はオシッコをした僕のアソコを舐められるか確認しよう」

「舐める。六道ヒロキの、汚物と、その、アレを……」

「うん。さ、入るよ」

手を引いたりほしくない。

その必要すら、まったくくないから。

現に朱音ちゃんはおずおずとした動きで、けれど瞳を潤ませ頬を上げさせながら僕の後に続く。

「広めだから楽そうだね。そこ、しゃがんで」

「え、ええ」

まるで催眠術にでもかかったように、朱音ちゃんは素直に便器の横

に腰を下ろそうとして、ぺたりと床に座り込んでしまう。

「平気？」

「え、ええ」

「じゃあオシッコするよ？」

「え、ええ」

「さつきから、そればかりだねえ」

でもまあ、それほどに余裕がなくなるまで焦らしたのは僕だ。

責任を取ってあげようという気持ちでいつもよりだいぶ小さい肉棒を持ち上げ、出せる限りのオシッコを吐き出す。

「もっ、もう限界ですわっ！」

いきなり朱音ちゃんが僕の腰を抱く。

これは、さすがに予想もしてなかった。

僕のオシッコは朱音ちゃんのかわいらしい、でもいつもと違って少女ではなく『女』や『メス』と言うのがピッタリな気配を色濃く浮かべている顔に降り注ぐ。

さつき長々と出したばかりなのでそう量は多くないけれど、朱音ちゃんの前髪は額に張り付き、頬を伝って顎から落ちるオシッコは、高価そうな浴衣や清潔なトイレの床を汚している。

さすがに朱音ちゃんはヨツバさんのようにオシッコを口で受けてゴクゴクと喉を鳴らしたりはしないけれど、自然と口に入ったそれは無意識にか飲み込んでいるみたいだ。

「どう？ 興奮してる？」

「わ、わたくし自身が正気とは思えないくらいに。その、六道ヒロキ。い、いいかしらっ。」

「なんでも好きにしていよいよ。浴衣や床は後でセイが魔法でキレイにしてくれるし」

「服や床なんてどうでもいいのですわ。今は、これを……」

直前まで放尿していた、最後のオシッコの雫が今にも垂れてしまいそうになっている肉棒。

それを思い切った動きで、朱音ちゃんが口に含む。

でも、それだけじゃない。

フェラチオという行為を知っているのか、それとも本能的な、まるで嵐のように朱音ちゃんの内側で荒れ狂っている衝動に従っただけなのか、頬をすぼめて尿道を吸い上げると、すぐに舌が躍り出す。

「おお、いいねえ」

「むふう、んむう。つちゆ、六道ヒロキい……」

「はいはい。さつきみたいに大きく硬くしたいなら、もっと簡単な方法があるよ」

「どうすればいいんですの？ 早く、早く教えなさい」

「なら、まずは浴衣を脱ぐ」

「ええ。……ほら、脱ぎましたわ」

「じゃあ便座を下ろすから、ここに座って」

朱音ちゃんが素直に僕の言葉に従う。

「ま、まさか……」

「うん。限界まで足を開いて、そのままオシッコしちやって」

「そんなんっ」

「そしたら、すぐに大きくなるから」

「でも、でも殿方の前でそんなんっ」

「いいから。しないと、淫気が散らせないよ？」

「そ、そうでしたわね。わたくし達は淫気散らしのために……」

「うん。だからしてもいいし、した方がいいんだよ。怖いならこうして手を握ってるから、がんばって」

「え、ええ」

恋人繋ぎ、って言うんだったかな。

手をしっかりと握り合っていると、朱音ちゃんがいきんで眉根を寄せる。

やっぱり人前で、それも異性の目の前で放尿するのは抵抗があるらしくってなかなか音は上がらないけれど、なにも言わず辛抱強く待った。

「んっ」

チヨロツという水音。

それが聞こえた瞬間、繋いだ手に力を込める。

「大丈夫。そのまま」

「つく、ううつ。で、出ますわっ！」

「うん」

盛大な水音。

ジヨボジヨボと鳴るその音をアンモニア臭が追って、僕の鼻にまで届く。

さいっこー。

恥ずかしそうな顔も、痛いくらいに握られた手の色が変わっているのも、本当なら恥ずべき水音も、アンモニア臭が足りないそのニオイも、すべてが僕を興奮させる。

「っはあ、う、うんっ！」

ジヨボツ、ジヨボボツ。

そんな断末魔だけでなく、最後の一滴が落ちる音まで僕の耳は拾ってくれた。

「よくできました。がんばったね」

「あ、ああ。そんな…… わたくし、本当にしてしまいましたのね……」

「うん。素敵だったよ」

「ウソ。あんなはしたくない音を立てて、こんなに酷いニオイまでしてるのに」

「本当だつて。じゃあ、証拠を見せてあげるよ」

手を伸ばす。

その行きつく先はもちろん、まだウオシユレットで洗われも、トイレットペーパーで拭かれてもない淡い色彩の割れ目。

処女膜というのがどの程度の耐久性を持っているかなんて知識があるはずもないから慎重に、割れ目のスジと指をクロスさせるようにして優しく液体を集める。

「っあ、くうんっ！ ああんっ！」

「かわいい声。……ほら、見て」

手を朱音ちゃんの鼻先に差し出す。

「糸を引いて落ちていく。それに、酷いニオイ……」

「でも、興奮するでしょ？」

「……知りませんわ」

「僕はしてるよ。ほら、またおつきくなってるでしょ」

朱音ちゃんが息を？む。

僕が淫液をこそぐため離れた方の手に、勃起した肉棒を押し当てたからだ。

「熱い。それに硬くって、まるで骨みたいに……」

呟くように言いながら、白くて細い指が僕の肉棒に巻き付く。

それをしごくという発想はないみたいだけれど、手は離れていかないのでまあいい。

「朱音ちゃんのおシッコで興奮したからね。ん、味もいい」

「き、汚いですわ」

「朱音ちゃんだって僕のを飲んだでしょ。ほら、ぜんぶ舐めるから見てて」

興奮を煽るため、わざとゆっくり、ピチャピチャと音を立てて淫液とおシッコを舐め取る。

オシッコの方はそうでもないけれど、1時間近くも濡れっぱなしだったアソコの方はなかなか熟成された香りと味で、僕的には大満足。

「ああつ。六道ヒロキ。変態、変態ですわ……」

「うん。僕達2人は、かなりの変態だね。ずいぶん苦しそうだけど、そろそろ楽になりたい？」

「楽に……」

「うん。そうして欲しかったら、立ち上がってここの壁に手を付くんだ。そして、便器に座った僕にお尻を突き出して」

「そんな破廉恥な、変態的な……」

能磨学園17

大部分の人が隠して生きている、特殊な性癖。

それが変態的であればあるほど、それを満足させてくれる相手に巡り合うのは難しい。

朱音ちゃんはそれを理解しているのかいないのかわからないけれど、その特殊な性癖をこうまで煽られたら、もうガマンはできないだろう。

そう言い切れるほどに、能力者の業は深い。

ある知り合いなんかは能力者という存在は一般人の2倍ほど戦闘能力に優れているが、少なくとも5倍は性欲が強いと言っていた。

だから簡単に淫気詰まりなんかを起こすんだと。

役に立つ、戦える、だから子を産んでその数を増やせ。

神々がそう言っているかのようにだと、その人は寂しそうに笑った。

まるで改造人間。

誰も言葉にはしないけれど、この現代に生きる能力者達の中にはそんな風に思っている人も多いと思う。

「平気だよ。僕は変態な朱音ちゃんが大好きだし、朱音ちゃんの望む変態的な望みはなんだって叶える。ほら、立って」

「だからといって、こんなの。こんな格好なんて……」

とか言いながら立って、素直にお尻を向けちゃって。

かわいいなあ、もう。

「大丈夫。僕達2人のオシッコのニオイで包まれて、トイレで発情しちゃってる朱音ちゃんのこと、オマンコを舐めて楽にするから。ほら」

「ああ。ダメ、ダメですわ。六道ヒロキ」

「いいお尻だ。処女マンコもいやらしいニオイを振り撒きながらヒクヒクして、僕を誘ってる」

「そんな言い方、くうんっ！ やっ、わたくし、舐められ。くっ、ああっ！」

そうだね。

舐められちゃってるね。

でも誰かさんがお尻を突き出したから舐めれたんだし、そうされて腰を揺すつちやってるんだから観念しなさい。

「いいよ。たくさん感じて。そうしたら楽になるから」

ダメと言いながら突き出された丸いお尻。

その中心にある肉にしては淡い色の割れ目に舌を這わせ続ける。

何度目かにピチャつと音が鳴って、白いお尻がビクンと震えた。

その瞬間、ようやく黒い靄が朱音ちゃんの下腹部から小さく上がる。

本当に、ようやくだ。

肉棒を突っ込んで亀頭で子宮口をゴリゴリとやれば簡単に散る淫気が、こうまで興奮させてイキかけた動きでやつと散り始める。

処女って興奮するし過程が楽しいけど、淫気散らしや淫気祓いの相手がそれだとなると、ちよつと面倒かも。

「ああつ。な、なんですのこれ。わたくし、んっ、こんな知らな、ああつ！」

散らし切るより、最初の波の方が早いか。

でもそれも当たり前だし、そうなればまだまだこの味を楽しめるので、僕にとつてはありがたい。

やっぱり、どこか甘酸っぱい香りと味。

もちろんアンモニア臭も強いし、いくら淫液の量が多くても恥垢になる前の溜まった場所すべてを洗い流すほどではないので、それなりに強い淫臭はある。

けれどその淫臭の奥に、まるで果実のような爽やかさを感じてしまうのはどうしてなんだろう。

「あつ、くうっ。あんっ、恥ずか、ああつ……」

アナルは味見程度。

大陰唇と小陰唇、その間の処女肉は遠慮せず。

尿道は痛みを感じないようにしながら、なるべくオシッコの出口を舐めたり吸ったりされていと意識させるように。

米粒を割ったように小さいクリトリスはとことん優しく。

そしてなにより舌先を挿し込むとごく浅い場所に行き止まり、処女膜がある膣は、それよりも優しく丁寧に。

そんなクンニを続けていると戸惑いの色が濃かった喘ぎが伸びやかに、しつかりと尾を引いてくる。

そろそろか。

「ダメ、ダメですわ。六道ヒロキ、お願い。もう許してっ。また、また出ちやいますのっ!」

「いっぱい出して。飲んで見せるから」

「ダメ、ダメえっ! あんっ、そんなのっ! や、ああっ! んんんっ、ああっ、つく。ダメ、ダメっ、……ダメえーっ!」

処女らしい、と言えばいいんだろうか。

物足りなさを感じるほどの声を上げながら、白くて丸いお尻が震えている。

朱音ちゃんは『出る』と言ったけど、潮吹きもお漏らしもしていない。

ハアハアと乱れている大きな呼吸音が少し収まるまで待つて、それから朱音ちゃんを後ろから抱き締めた。

「ん。上手にイキました。100点」

「バ、バカな事を。下品がすぎますわよ、六道ヒロキ」

「はいはい。それで、少しは楽になった?」

「……言われてみれば。途方もない体の熱さと疼きが、少しだけ楽に」
「僕の先走り、ガマン汁が混ざったオシッコ、それが乗った恥垢なんて舐めるから」

「ッ! ……な、なにをおっしやってるのかよくわかりませんわ」

異性の愛撫でイッたのは間違いなく初めてだろうし、休憩のついでに明かせる分だけ、僕の能力を話す。

「……って感じだね」

「わたくし、たったあれだけの、その、液体で守りを破られて……」

「うん。発情しっぱなし。このままなら、2、3日はね」

「情けないやら悔しいやら。どうしてくれますの、六道ヒロキ」

恨みがましい、でもそれ以上に艶っぽい目で僕を見ながら朱音ちゃんが問う。

「もちろん責任を取らさせていただきますよ、僕のお嬢様」
服を脱ぎ捨てる。

さつきから、朱音ちゃんが浴衣を脱ぎ捨てた時からこうしたかったんだ。

「な、なにを。……あ、熱いつ!？」

背後から覆い被さるようにして、お尻の割れ目から肉棒を進める。

もちろん挿入はしない。

スマタ、ってやつだ。

「朱音ちゃんの処女マンコ、もうトロトロだね」

「やあつ。わざわざ言うんじや、んくうっ!」

「ほら、そつちに突き出てる僕の勃起チンポの先を握って」

「……こ、こうですか?」

「うん。そして、持ち上げるようにして。朱音ちゃんが痛みを感じない程度に、グツと持ち上げるんだ」

「意味がわかりませんわ。……あつく。こ、これはっ」

少女らしい尻たぶに、少女らしい割れ目に、少年の持ち物にしか見えない肉棒が挟まれている。

背後からそうしているんだから、亀頭を持って持ち上げるようにすれば、あの米粒よりも小さなクリトリスが肉棒に擦れて。

「ああつ、なんですの。これ、すぐ、ううっ。っあ、……んつく」

「そう。こうして腰を揺すって。そして、朱音ちゃんが握ってるチンポをしごくんだ」

「あつ、ううんっ。こ、こうですか?」

「うん。いいよ。このまま朱音ちゃんの手には吐き出すから、手を袋にするイメージでなるべく溢さないでね」

「そ、それって……」

朱音ちゃんが生睡を飲み込む。

「僕の精子。ザーメン。オチンポミルク、とかの方が興奮する?」
「だから下品、あんっ!」

「ほら、もっとしごいて。欲しいんでしょ、僕のザーメンが」

「だってそうしないと、あんっ、破られた守りがっ。つく、ああんっ！」
「そうだね。だからもっとしごいて、そのかわいらしい手の中に吐き出させるんだ。そしたらご褒美に、オシッコだけじゃなくザーメンも顔に塗りたくってあげるから」

「そんな変態的な、あんっ、なんですの、なんですのこれえっ！」

今日からド変態の朱音ちゃんがドハマリするチンポ。

そう耳元で囁くと、腰と手の動きが驚くほど激しくなる。

もし僕が一般人なら、亀頭と皮から軽く出血くらいはしているかもしれない。

朱音ちゃんの膣から、処女膜の向こうから染み出る淫液は潤滑剤として十分な量だけれど、クリトリスが当たる場所より先にまで、それをまぶそうという発想がないから。

痛みもあるし、スマタも手コキもテクニクと呼べるような技巧はない。

それでも僕は全裸になったおかげで、どうにか能力を使わずに射精できそうだ。

年上の女の人達には口が裂けても言えないけれど、初めて自分のそれを重ねた同い年の女の子の肌が驚くほどにすべすべで、それを全身で感じるだけで射精感が高まっているから。

「ん、出るよ。朱音ちゃんの丸いお尻と、処女なのにグチヨグチヨのオマンコと、かわいらしい手でしごかれて。ザーメンを吐き出すから」
「ああつ、そんなっ。け、汚らわしいっ。なのに、なのにどうしてこんなにつ！」

「変態同士だからねえ。……ほら、受け止めてっ」

「わたくしもっ、わたくしもまたっ！ ああんっ！ つあ、んうっ」

「朱音ちゃんもイクんだね。じゃあ、一緒に」

「イク、これがそう、あ、ああつ！ そ、そうなのですね。わたくしっ、またはしたなく、あんっ、……イ、イクうっ！」

射精。

その跳ねるような肉棒の動きがそうさせたのか、それとも単純に限

界だったのか。

僕の射精に合わせて、朱音ちゃんの全身が震えている。

「ああ、あああ、こんなの、ううっ、つく……」

トイレの壁に爪を立てながら朱音ちゃんは絶頂の余韻に揺られ、呻き声を漏らす。

そのせいで朱音ちゃんの右手に吐き出したザーメンが壁に付着して、ドロリと垂れてしまっている。

「あーあ。壁にザーメンをこんな付けちゃって。悪い子だね、朱音ちゃんは」

「ご、ごめんな、ううっ!？」

腰の力が抜けているせいで、かなり低くなっている姿勢。

そこからまだカチカチに硬い肉棒だけで朱音ちゃんの体を持ち上げるようにして、壁のザーメンに美少女と表現するしかない顔を寄せる。

「ほら、舐めて」

「そ、そんな……」

「僕の体液でこうまで膨れ上がった発情を抑え込むには、どうすればいいんだった？」

休憩ついでの説明。

その時、普通の女の人が守りを破られたら僕のザーメンを膣奥にもっと言うように子宮に注ぎ込まれないと数日は発情が続いたままになってしまうと伝えてある。

まあ、それがなくってもスカトロ趣味の朱音ちゃんだから、精飲、ごっくんプレイくらい余裕でするだろうけど。

「わ、わたくしが六道ヒロキを、その、射精させて……」

「うん。それで？」

「その子種、せ、精液を粘膜から吸収しながら……」

「しながら？」

「何度も、何度も、ああやって……」

「そうだね。また、何度もはしたなくイク姿を僕の目に晒すしかない。だから、舐めてごらん。そしたら次はその手をベトベトにしてるザー

メンを顔中に塗りたくって、そのニオイで溺れそうな状態でイクまでしてあげるから。処女膜を破る訳にはいかないから、そうするしかないんだ」

オシッコを浴びた顔を、さらにザーメンで汚される。

その想像が最後の引き金になったのか、朱音ちゃんはそつと舌を伸ばす。

悪くない。

羞恥プレイは好物だし、それにこういうのを組み合わせて汚辱の限りを尽くしてくれと言われたら、僕はノリノリでそれをするに決まってるんだから。

「……甘い。でも、苦い。なにより、とびきり生臭くって。これが、六道ヒロキの」

「よくできました。じゃあ、次はこうだね」

スマタを続けたまま、朱音ちゃんを軽く抱き上げる。

そしてトイレの手前にある洗面台の、鏡の前に朱音ちゃんを下ろした。

「酷い顔ですわね、わたくし……」

「オシッコを頭から浴びて、涙と鼻水を垂らしながら大きくイッて。でも、その顔が今から」

「もつと、どうしようもないほどに汚されるのですね……」

「そうだよ。汚物を、僕のザーメンを顔中に塗りつけられて、そのニオイが取れなくなるほどにね」

「ああつ、そんなのダメ。お願いだから許して、六道ヒロキ……」

「許さない。僕は朱音ちゃんを徹底的に汚して、そうされながらじゃないと感じないってくらいまで辱める。覚悟するんだね」

「ダメ、いけないわ。お願いだから、許して。なんでも、するから……」

月曜日は憂鬱。

さんざん歌や詩にされてきたそのフレーズがまぎれもない事実だと痛感させられながら授業を受け終えた僕は、桃さんの事務所に来て初めて任された、探偵事務所らしい依頼に頭を抱えている。

「えっと、ここってどこ？」

「松濤なのっ」

「ええっ？ 僕は渋谷って街にこの子を向かわせたんだけどっ!？」

意味がわからない。

さつき店の看板に『ナントカ渋谷店』って書いてあったし。

「山とかならどんな能力者より見事に索敵して見せんのに、街中になるとこれだよ。ホントとーちゃんに任せてていいのか、桃ねーちゃん？」

「ん。いい勉強になる」

「はーあ。せっかくクルマ買ったんだから、それで探しに行きやあいのこ」

冗談じゃない。

パソコンで地図を見ながら蟲達を操ってもこれなのに、運転しながらなんて絶対にムリだ。

「アメジヨのミーちゃんどこー!？」

「とーちゃん。アメシヨ、な」

「あっ、ととさまっ♪」

「いたのっ?」

「このお店、本番アリなのっ♪ 渋谷駅に近いから、今度ととさまも行くのっ♪」

「いいからネコを探さない、ネコをー!」

「やれやれだぜ……」

結局、依頼の子猫探しは夜の8時までかかってしまった。

僕とセイでミーちゃんを見つけて監視、その場所を依頼主の飼い主に桃さんが伝えて、その20分後に無事に捕獲。

「お疲れさま。これ、今回の依頼料」

「ありがとうございます」

「ん。明日も学校なんだから、早く帰って寝る。残業代はつけとくら」

「はあ。でもなーんか疲れたし、今日だけ泊めてくれたりは？」

ダメ元で聞いてみる。

昨日マンションにクルマを運んできてくれた棗さんに、早く桃さんに使役蟲を産ませろと言われていたからだ。

それがなくとも僕は、朱音ちゃんよりだいたい小柄な桃さんにのしかかって腰を振りまくりたいけど。

「……今日はダメ。依頼の手際が悪すぎた罰」

「ぐうっ。それを言われると痛い」

「だから早く帰る」

「でも、次になんか上手くやれたら泊めてもらいますよ？」

「ん。考えとく」

「ほんつとお願ひしますね。じゃあ、お先に失礼します。今日もありがとうございました」

「ん」

いつものように虫達に見張りを頼んで、大嫌いなエレベーターに乗り込む。

するとそれはいつものように1階ではなく、1つ下の3階で機械仕掛けの箱が止まった。

「おおっ、ヒロキじゃんか。そっちも上がりか？」

「あー、うん。……結城くん、だっけか。お疲れさま」

「んだよ、他人行儀な。真白かシロでいいって。ドア閉めて1階つと」

「あー。なんか犬っぽいし、シロってピッタリだねえ」

「だろ？。したら俺はヒロって呼ぶからよ。それより、晩メシは食ったか？」

「これからだねえ」

「なら、ラーメンでも食ってごうぜ。俺は野暮用があつから、飲みはまた今度になつけどよ」

「ラーメンかあ」

それなら値段も高くないだろうし、たまには外食もいいか。

「決まりだな。行こうぜ」

「歩き？」

「もちろん」

「りよーかい」

「気分は利しりつて感じだなあ。ヒロはどこがいい？」

「まったくわかんないから、お任せで」

名前を言われても、僕はそれがラーメンの種類なのか店の名前なのかすらわからない。

お任せにするしかない。

「あいよ」

(セイ、フウカ。帰りにハンバーガーの持ち帰りでどう?)

(しゃーねーな。その条件で手を打つぜ)

(それがグロリー・ホールでタダで食べれるゴハンがいいのっ♪)

(んー。土日のバイトで財布の心配はあんなまいし、アルバイト後にアルバイトするくらいなら、ホームラさんとアヤマさんの家で飲みたいなあ)

(グロリー・ホール、だっけ。あっこじや女子高生なんていねーもんな)

(でも完熟のOLさん人妻さんなんかはいるのっ♪)

(なるほど。悩むねえ)

ラーメンは、悪くない味だった。

ついでに頼んだチャーハンも。

今日もずうつと喋りっぱなしだったシロと別れて、まるで外国のよ
うな街並みを歩く。

人が多い。

そして騒がしい。

ネオンが多すぎて、目がチカチカしそう。

(ちよつと歩いただけなのに、まったく街の景色が違うねえ)

(これが歌舞伎町だよ、とーちゃん。天下の不夜城、つてヤツだ)

(ふうん)

お酒は好きだけど、飲み屋さんというのに入った経験はないし、別に行ってみたいとも思わない。

なので僕には縁のない街だからと足早に通り過ぎる途中で、思わず足を止めかけた。

気。

立ち昇るそれが見事すぎて、鬼斬りを抜きたくなる。

そんな人には、ひさしぶりに会った。

(おい、とーちゃん)

(だねえ。間違いなく能力者。それも、ハンパな腕じゃない)

(くたびれかけた風俗帰りのおじさんなのっ♪)

もし本社の管轄下にあるんならセックス免許持ちって事か。

(へへっ。啞えた爪楊枝をピコピコさせて挨拶してやがる)

(こつちも能力者だつて見抜かれてるのかあ。腕だけじゃなく、目もいいんだねえ)

敵意はない。

こちらこそそう知らせるため、男の人の爪楊枝が揺れた場所、頬の横を軽く搔いてみせる。

お互い雑踏に流されながら擦れ違う瞬間、その男の人はニヤリと笑った。

その横顔になぜか不吉なものを感じたけれど、僕になにができるはずもない。黙って、振り返りもせず足を進める。

「世間って広いや……」

夜宮さん、佐伯さん、どちらにも驚かされたけれど、まさか夜の街を歩いていてあの2人のような、もしかするとそれ以上かもしれない能力者と擦れ違うなんて。

(男で腕のいい能力者は、めっちゃくちゃ少ねえらしいからなあ。棗かーちゃんか桃ねーちゃんに聞いたら、すぐにわかんじゃね?)

(そこまではしなくていいかな。いきなり稽古をお願いしたりもでき

ないだろうし、そもそも本社人間じゃないのかも)

(もしそーだとしたら、棗ママがお仕事で監視してるのっ。だから敵になつたら、ととさまの出番なのっ♪)

(勝てるかなあ、今の僕で)

(セックスとアルバイトと勉強とセックス。こつち来てからそればっかで、修行なんてしてねえもんなあ)

(んだねえ。それに、実戦もご無沙汰だ。そりゃあ体も鈍るよねえ)

とりあえず佐伯さんに稽古をつけてもらおうか。

それから棗さんに、誰も受けたがらないような討伐依頼を回してもらつて。

(ととさま)

(んー?)

(なんか、さつきから桃つちの様子が変なのっ)

(変つて。なにがどういふ風に?)

(焦つてカタカタしてたと思つたら目を閉じて泣きそうな顔して、またカタカタつて。なんか変なのっ)

カタカタというのは、パソコンのキーボードを操作してるって事だろう。

あの桃さんが、金将に最も近い銀将とまで言われる電腦妖精が焦るつて。いったいどんな状況なんだ。

(気になるけど、僕が口出ししていいのかなあ)

(とりあえず口出ししてみりゃいーじゃんか。いらねえなら桃ねーちゃんだから、そうハッキリ言うだろうし)

(あつ。でも、落ち着いたみたいでシャワー浴びに行つたのっ)

(なら大丈夫なのかなあ)

「あら、ひさしぶりね」

突然、そんな声がかけられる。

20代の中頃。

長い茶髪をウェーブさせた、仕事帰りのOLさん。

それも、かなりの美人。

(わあい、夜ちゃんなのっ♪)

「……夜宮さんでしたか。こんばんは」

「はい、こんばんは。こんな時間にこんな場所を歩いてるなんて、夜遊びでも覚えたのかしら」

「いえいえ。知り合いとラーメンを食べた帰りなんで。夜宮さんは、お酒でも飲みますか？」

「残念ながら仕事中。しかも、それに失敗して帰社命令が出たトコ。嫌になっちゃうわ」

「夜宮さんほどの人が失敗って、まさかさっきの……」

「やっぱり擦れ違ってたのね。顔を、よく覚えておくといいわ」

本社の監察部、その責任者。

おそらくこの現代の日本で、最も多く能力者を『喰った』男の顔を。

そう耳元で囁かれ、僕はさっき感じた不吉な印象は間違っていないかかったのだと知らされる。

「……覚えておきます」

「そうしてちょうだい。では、またね」

「はい。お疲れさまでした」

歩き去る夜宮さんを見送って、僕が歩いてきた方向に視線を移す。

最も上の等級である能力者、玉将級は日本全国で3人しかいない。

しかも、全員が有名人。

その玉将をも喰らうとされる飛車角は僕の師匠でセイとフウカの母親、サラさんとアヤカさんのみ。

となると、さっきの男の人は金将級。おそらくだけど、夜宮さんと

佐伯さんも。

「ホント、世間は広いなあ」

事務所のある雑居ビルの駐車場から4階を見上げると、明かりが漏れているの見える。

もう一度事務所に戻って桃さんに手伝える事はないか聞こうかなり迷ったけれど、僕は足をビルではなく、昨日届いたばかりの黒い車に向けた。

「よし、支社の地下で少し体を動かしていこう」

(ならとーちゃん、オレとセイはカラオケボックスで飲み食いしながら

ら待っていていいかつ?)

(別にいいけど。カラオケなんて歌えるの?)

(練習なのっ♪)

(なるほどね。予算はぜんぶで1万円。それならいいよ)

(せめて2万!)

(ダメ)

能磨学園19

今日は金曜日。

それが関係しているのか、いつもより道が混んでいる。

車は魔法で外から見えなくなっているセイとフウカが後部座席で遊んでいられるから気に入っているけど、こうも道が混んでいるとかつたるくって仕方がない。

比喻でもなんでもなく、歩いた方が速いくらいだから余計に。

「ごめん、セイ。桃さんに魔法で、いつもより少し遅れるって伝えてくれる?」

「はい」

これで安心。

でもこの様子じゃまだかかりそうだと、普段はほとんど吸わないタバコを啜えて火を点ける。

懐かしい香りが車内に充満すると、それだけで少し気分が和らぐ。

「かーちゃん達の吸ってたタバコのニオイでイライラが収まるとか、どんだけだよ。とーちゃん」

「こんだけだよ。にしても、進まないなあ」

「ととさま」

「ん?」

「道が混んでるのは、事故だからなのっ。そして桃っちが渋滞を回避するルートを教えるからそれで西新宿に向かって、今日は夜ちゃんの授業を支社で受けて帰りなさいって言うてるのっ」

「なるほど。了解、それとわざわざありがとうございますって伝えて」

「はい」

夜宮さんの授業。

となれば、昼から……

「スケベな顔なってるぞ、とーちゃん」

「失礼な。学ぶ喜びに表情が緩んだだけだから」

「はいはい。でもま、やっぱり楽しみだよなあ」

「だねえ」

本音を言うとは授業より討伐系の依頼を回してもらった方がうれしいけれど、東京くらい能力者が多いとそうもいかないのかな。

東京奠都と同時に、かなりの数の能力者の家がこの都に居を移したそうだし。

討伐でしか稼ぐ方法のない能力者と、討伐でも稼げる僕のような能力者。

依頼を回す先がその2つなら前者に渡って当然だし、そういう人から依頼を奪いたいたいと思わない。

支社に着いてつい先日バイクを置いた駐輪場に併設された社員用の駐車場に車を入れると、掃除のおばさんが吸殻を拾い上げてから運転席の僕にペコリと頭を下げる。

セイとフウカに影に入ってもらってから車を降り、しつかり施錠して掃除のおばさんに歩み寄った。

「今日はよろしくお願いします、夜宮さん」

「あは。見抜くねー」

「さすがに、この状況なら」

つい先日のように雑踏の中でなら自信はないけど。

「よしよし。なら受付に回って、19番エレベーターを降りたら一般席じゃなく特別室の1号室に。そこで合流」

「やっぱりグロリー・ホールですか」

「せっかくあるんだから使い倒さないかね。あれ以上の訓練場なんてないんだし」

「了解です。では下で」

「うん」

この間もそうだったけれど、本当に僕なんかが社会人に、それもこんなビルに出入りするビジネスマンに見えるのかなとドキドキしながら受付で身分証を見せる。

「お待たせしました。19番エレベーターへどうぞ」

「ありがとうございます」

ホッとした気分で、ビルの最も奥にあるエレベーターに向かう。

19番は男性専用。それも、グロリー・ホールでアルバイトをする男の人だけが使うエレベーターだ。

「特別室つと。……あ、あつたあつた」

エレベーターを降りてすぐ目に入った案内板に従って辿り着いたのは、かなり豪華な部屋だった。

春休みにホムラさんとアヤメさんで行ったラブホテルより広い。

「やっほ」

「お待たせしました。豪華な部屋ですねえ」

「能力に目覚めたばかりの能力者が、ここにカンヅメにされたりもするからね。住み心地も良くないと」

「そっか。色事系の能力が制御できないと、外なんて歩けませんもんね」

「うん。昔の誰かさんみたいだね」

「あはは。棗さんあたりに聞いちゃいましたか。恥ずかしいなあ」

「子供は恥をかって大人になるの」

「はあ。で、いちおう聞きますけど、どうして夜宮さんは女子高生に変化してるんですか?」

「生徒がマジメに授業を受けて成績も悪くなかったら、このカツコで好きだけパコらせるために決まってるじゃん」

「よっしゃー! では、お願いします」

「うん。好きな飲み物を取ったら、そのパソコンの前に座って。セイとフウカの分はこっちのソファアに」

「ありがとうございます」

グロリー・ホールは繁華街フロアの1面すべてが店舗となっている大きな店。

飲み屋さんであり、レストランであり、インターネット喫茶であり、ラブホテルであり、そして『大人の出会い』を提供するお店でもある。

なので僕が缶コーヒーを持って座った机にあるパソコンのモニターには、女の人の顔写真とプロフィールと希望するプレイ内容や時間、それと女の人が払う最低金額が並んでいた。

「ここは2回目?」

「ですね」

「前はどんなだった？」

「えっと、30分の穴部屋つてのを1回。プレイルーム2時間を2回でした」

「穴部屋はどんなので？」

「僕が寝っ転がって、下半身がある向こうの部屋で女の人すべてしてくれる形でしたね」

「受けの腰部屋ね。なら、最初は攻めの腰部屋に決定」

「はあ。よくわかんないですけど」

「ここ、今からオープンチャットに書き込むから見えて。この店はこれからの授業でも使うから、なるべく早く慣れてほしいの」

「わかりました」

いい二オイを振り撒きながら、夜宮さんがキーボードを打ち込む。

特別室1号。

研修のため男部屋に教師役同席、ゆえに完全遮音。

攻め腰部屋。

オプシヨン応談可。

チン長、能力で自由自在。ちな10代。

そこまで夜宮さんが打ち込んだ瞬間、ぶわーっと文字が流れ出す。

「あは。がつつくねえ」

「な、なんなんですか。これ」

「チンポに群がる欲求不満な女達の心の叫び？」

「意味わかんないですって」

「あは。なら、説明してあげよう。……おほん」

特別室1号。

というのはそのまんま、この部屋に付いてる穴部屋を使うという意味。

研修のため男部屋に教師役同席、ゆえに完全遮音。

これは色事系の能力者の修行目的で相手を募集するので自動的に教材にされますよ、授業をしているから貴方の声も男の子の声も相手方には聞こえないようにしますよ、となる。

攻め腰部屋。

これは男の子が動いて女の子の人を悦ばせる側に回って、それは女の子の人が腰から下だけを相手に任せて施される。

オプシヨン応談可。

これもそのまんま、希望があれば聞きますよと。

チン長、能力で自由自在。ちな10代。

なんとチン長というのは男の肉棒のサイズの事で、それが自由に変えられるから、それとその男が10代だから一気に問い合わせなんか来たらしい。

「穴部屋は一律30分コース。だからこんなのを追加すると、さらに希望者は増えるって訳」

「えつと。……射精1回保障。中出し、割れ目ぶっかけ、尻ぶっかけ、ふとももや足の甲も可。持ち帰りも可。わあ、ホントに文字の列が増えましたよ」

「とーぜん。そしたらこの中で気になったのに返信して、話を決めちゃって」

「ええっ!?! な、内容を把握すらできる気がしないんですけど。文字も片手で、指1本でしか打てないし」

「あちゃー。なら、タイピングなんかは明日から練習してもらおうとして」

「うええっ!?!」

桃さんのとんでもないスピードを間近で見てるからか、練習したってできるようになれる気がしないんですけど。

「これなんかどう?」

「ええつと。……わ、すごい美人さんだ。アリアリ、ナシナシOK。生中希望。10万。まったく意味がわかりません」

「アリアリは男の子、キミがなにをしてもいいって事。スパンキングだろうがアナルセックスだろうが、ご自由につて。なにされても感じるからって事」

「おおっ」

「ナシナシは逆に男の子が特にサービスなんかせず、ただ穴に突っ込

むだけでもいいよって意味。生中はそのままゴムなしで中出し希望って事で、その料金が10万円。どう?」

「最高ですけど、貰いすぎじゃありません? もっと安くってもいいの?」

30分で10万円って。

「いーのいーの。金持ち女だしね、この厚化粧は」

「はあ」

「そんじゃ返信して希望のサイズを聞くから、セイに調整してもらって」

「はい」

ラッキー。

なにしてもいいとか、ほんつとありがたい。

30分じゃ物足りないと思つてたけど、それならしつかり愉しめそうだ。

「には。講習なら次もあるのかつて聞かれたから『授業の補足が終わり次第連続予定』つて返信したら、オープンチャットが盛り上がる盛り上がる」

「あはは」

準備が終わつて、夜宮さんとセイと僕とで、まるでトイレみたいに自然に配置されたドアを抜ける。

そこは本当に狭い、本棚とアダルトグッズの並んだ棚、それと壁際に小さなテーブルとスツールが置いてある小部屋。

でも僕はその小部屋で待っていた異常な光景に、思わず足を止めて乾いた笑いを漏らす。

壁からお尻が生えている。

それも全裸の。

こんな光景を見たら、笑うしかないじゃないか。

「にはは。じゃあ、まずはセイ」

「はいなのっ」

「時間はかけていい。30分の時間制限は、男が女に触れてからカウントされるんだ。相手もそれは知ってるから」

「はい」

セイが妖精形態になって、白い物体に接近してゆく。

この小部屋の異常な光景の大元、壁から生えている白くて大きなお尻に。

「ね、淫乱度とかの表示はされてる？」

「はい。いつも通りに。あの、セイはなにをしてるんです？」

「淫気の分析。漏れ出してる淫気から数値を計測するんじゃない、その発生源の思考を覗き見る訓練だね」

「それって、かなり難しいんじゃない？」

「もちろん。でも、この子ならきつと大丈夫」

そうか。

これは僕への授業でもあるけれど、セイのための授業でもあるのか。

ありがたいな。

「なるほど。わざわざありがとうございます」

「なんのなんの。だからパパさん、あのデカ尻を舐めまくるのはもうちよっと待ってね」

「了解です。いくらでも待ちますよ」

能磨学園20

夜宮さんの授業を終えた僕は、その夜宮さんに案内されて棗さんの仕事場にいる。

セイとフウカが影から上半身だけ出したマモリと僕達にはわからない方法で談笑し、棗さんはコーヒーを飲みながら微笑んでその光景を見守って。

僕はそんな4人を見ながら、聞きたい事を聞いていいのか悩んで、言葉を見つけれないままタバコを啜えて火を点けた。

歌舞伎町で擦れ違った、手練れの男性能力者。

その人と擦れ違ってすぐに会った、夜宮さんの失敗。

そして、様子がおかしい桃さん。

他にもホムラさんとアヤマさんの事とか、委員長ちゃんの家と朱音ちゃんの家から出された依頼の事とか、聞きたい事はたくさんあるのに。

どうにも言葉が出てこない。

「うふふ。あいかわらずねえ」

「僕ですか？」

「ええ。今じゃ龍王の本気の一撃を10回に1、2回は見切れるのに、あいかわらず人との距離を測りかねて。イライラしていつもは吸わないタバコを吹かす。かわいいわ」

人との距離。

それはさつきから僕がしたくてもできないでいる質問の事なんだろう。

「聞いたら答えてくれるんですか？」

「私が、私達がヒロキくんの質問に答えなかった事なんてあったかしら」

すごい。

こんなわかり切ったウソを堂々と言えるなんて尊敬する。

「いっぱいありますから。……じゃあ、聞きます。たぶん棗さんに報告が行ってる、僕が歌舞伎町で擦れ違った男性能力者は。その人が東京に現れた理由は」

「その前に、あの男が所属する監察部の説明をしてあげるわ。推測だけを持って聞くより、その方が理解しやすいでしょうし」

「ありがとうございます」

本社の監察部。

それはやはり、僕の想像通りの部署らしい。

古来から内戦を繰り返していた日本。

その歴史の中で能力者は、そう少なくともはない活躍を見せてきた。

でも、どんな事にだって限度はある。

朝廷への反乱は元より、能力をひけらかしすぎたりするのもご法度。

ではそんな能力者をどうしてきたのかと問われたなら答えは簡単。

抹殺だ。

古くは鬼使いだった藤原千方の反乱や、情報系と指揮系の複合能力者だったとされる織田信長の暗殺、もつとも最近では西南の役の終結にまで、あの男の人が所属する『監察部』の前身が深く関わっていたらしい。

「自分の立場は理解してるわよね、ヒロキくん」

「はい。……バレた、そう思っていないんですか？」

「微妙ね。それを私も疑って夜宮に尾行を命じたのだけれど、簡単に見破られたからすぐ退かせたの。でも、バレる日なんて遅かれ早かれ来るのは知ってたわよね」

「ですね。そして、そうなった時からの動きも、みなさんが綿密に予想を立てていた」

「だから、それは心配しなくていいわ。まだまだ予想の範囲内」

「でも……」

「そうね。動く時は一気に動くわ。けれど、動かない可能性の方が高い。私達はそう考え、ヒロキくんを上京させた」

「……強く、ならなくつちや。みんなを守るくらいに」

「急ぐ必要はないわ。切り札となる最強のカード3枚は、こちらが握っているの」

能力者の最上級位、玉将級は現代に3人。

そのうち2枚は生産系なので、今のままでも心配するなど棗さんは言いたいんだろう。

それどころか向こうが焦って動いてくれて、それを大義名分にして叩き潰す事まで狙ってそう怖い。

「なら、桃さんの様子が少し気になるんですけど。それは？」

「その答えを出すには、もう少し時間がかかるわね」

「というと？」

「確実に嵐は起こる。けれど今はまだ、風が強くなっただけの状況なのよ」

「……嵐にならなきゃ、僕の出番はないか」

「そうね。もしそうだったら、自分が出るつもりなの？」

「当り前じゃないですか。桃さんは僕の東京での保護者で後見人で雇い主で、師匠であり家族でもあります。あの人のために僕にできる事が少しでもあるなら、黙って見てるつもりはありませんよ」

これは本音だ。

「そう。なら、仕事を回すわ」

「おおっ」

「うふふ。残念ながらあの子、桃の関係じゃなく、支社からの依頼。嵐に備えた準備運動って感じね」

「なるほど。でも、ありがたいです。内容はどんなです？」

「かなり広範囲の索敵、それから発見した妖異の殲滅よ。大物はいないだろうけど、範囲が範囲だから2週間はかかるわね」

「了解です」

「すぐに資料を用意するわ。この依頼を終えるまで、事務所には出ななくていいから」

「あ、はい。でも、数日に1度は顔を出します」

「律儀ねえ」

棗さんはこれからお偉いさんと会食の予定があるとの事なので、キスもせず別れて支社のビルを出る。

車に乗り込むと同時にセイとフウカが影から飛び出し、助手席のシートに置いた資料をひったくっていった。

「ふうん。けつこうな広さだなあ」

「湖、湖があるのっ!」

「メインは青梅街道って道らしいよ。それを山梨県まで進みながら索敵して、妖異がいたら棗さんに報告。よほど試験や講習に向けた相手じゃなきゃ、そのまま僕達で斬っていいらしい」

「おっしやつ、成長チャーンス!」

「セイの通信魔法が届けばいいけど」

「余裕なのっ。それに届かなくっても、桃ちゃんカスタムのスマホなら盗聴の心配なんていらなのっ」

「ふうん。さすがだねえ」

「それよりとーちゃん、晩メシは?」

考えてなかったや。

でもセイとフウカはあの特別室でアルバイトに来た男なら誰でも無料で頼めるビールやゴハンをたらふく食べてたし、適当にある物でパパッと作ればいいか。

となると問題は飲み会の差し入れにするツマミ。

ささて、どうしようか。

「セイ、あれを使ったのがいいのっ!」

「あれって?」

「ホットプレートなのっ。買ってから1回も使っていないのっ!」

「あー。そういえば棚にしまい込んで出してないなあ」

「じゃあ晩メシは焼肉に決定だッ!」

「こらこら。せめてお好み焼きで許しなさい。僕達が焼肉なんてしたら、いくらかかるか」

考えるだけで恐ろしい。

「いいじゃんか。この依頼でガッツリ稼げるし、明日からオレとセイが頑張っからさ」

「ホントにー?」

「頑張るのっ! なんなら影の中でぜんぶするから、ととさまはナンパしてカーセックスでもしてくれていいのっ!」

「あはは。どんな酷い親なのそれ。でも、ホントにお手伝い頑張る?」
「おうっ!」

「任せてなのっ!」

なら、たまにはいいか。

どうせたまの贅沢をするんなら、いつも飲み食いさせてもらっているのに食費を受け取ってくれないホムラさんとアヤメさんも呼んで、うんと豪勢な焼肉にするのもいい。

「ならその言葉を信じようか」

「やたー!」

「わあい♪」

「ついだって言ったらあれだけど、ホムラさんとアヤメさんによかったら一緒にどうですかって聞いて」といて

「はあい。やつきにく、やつきにく、なのっ♪」

「ねーちゃん達には、とーちゃんが斬ったイノシシも食わせてやらなくっちゃな。オレ、影の中で準備しとくっ!」

「おー。いいねえ。ありがと」

ホムラさんとアヤメさんは焼肉パーティーを了承。

なので僕にしては思い切った量のお肉や野菜を買い込んで帰宅して、3人で焼肉パーティーの準備を始める。

「お酒は大丈夫、肉と野菜もOK。あとなんか要るっけ?」

「とーちゃん大変だ」

「ん?」

「や、焼肉なのに、焼肉のタレがねえぞ……」

「あちゃー」

慣れない事をするこれだ。

部屋着のジャージのまま、財布だけ持って立ち上がる。

留守番を2人に頼んで、玄関へ。

すると僕がサンダルをつっかける前に、呼び鈴が鳴った。

「はい、どうぞー」

野球帽を目深にかぶった怪しい人。

それに4月も半ばになるのにマフラーを鼻の上まで巻いた、同じく怪しくしか見えない人が玄関に滑り込む。

「ふうつ。ミツシヨン成功、だな」

「ドキドキしたわね」

「いやそこままでしなくても」

怪しい2人は、もちろんホームラさんとアヤメさん。

僕のクラスの担任と副担任だから人目を気にするのはわかるけど、ここままでしなくなっちゃって。

「なんだ。財布なんか持って。どっか行くのか？」

「焼肉のタレを買い忘れちゃって。スーパーかコンビニまで」

「だとさ。さすがアヤメ」

「はい？」

「塩コショウ、焼肉のタレ3種類、それと氷。カセットコンロとそのポンは持参したのよ。もしものために」

「さっすがー。じゃあもう始められるんで、どうぞ」

「ああ。邪魔するぞ」

「ワンルームって初めて入るわ。お邪魔するわね」

まずは乾杯。

そしてセイとフウカが肉を焼き始めたので、僕はホットプレートと同じく新品のすき焼き鍋をキッチンのコンロにかけた。

「とーちゃん、もしかしてその鍋って」

「うん。白菜も春菊もないけどシイタケとお豆腐はあるから、イノシシをすき焼きにしようと思って。カセットコンロあるし」

「やあったー」

「ぐちそうとぐちそうで幸せ2倍なの〜っ♪」

この部屋はワンルーム。

なので料理をしながらだって、全員で話せる。

僕達が明日から放課後は支社の依頼で夜まで出かけると言うと、ビールの缶を呷ったホームラさんはニヤリと笑って僕を見た。

「アヤメ。明日から毎日仕事が終わったら、夜になったらヒロキ達と合流すんのはどうだ?」

「いいわね。実家からテントなんかのキャンプ用品も持っていきましようか」

「いやいやいやいや、ダメですつて」

「なんでだよ?」

「その依頼は2週間かけてする準備運動みたいなもので、キャンプなんかしてすぐ終わらせるのはちよつと」

「準備運動? なら、本番はなんだよ?」

「さあ。僕は聞いてないです」

「ホムラ、それってもしかして……」

「かもなあ」

「もしかして、というのは?」

「こつちの話さ」

ホムラさんとアヤメさんの方にも、厄介事の兆しでもあるんだろうか。

もしそうだとしたら、桃さんのそれと動きが被らなきやいいけど。

自由に動ける時ならいくらでも手伝うし。

「せんせ、お肉焼けたのっ。はいっ♪」

「お、サンキューサンキュー。しっかし意外だなあ。3人が料理できるとは」

「ホムラも見習いなさい」

「いいんだよ。人には得手不得手があつて当たり前つてな。……うん、美味しい。セイは料理の天才か?」

「あは。焼いただけなのっ。アヤメせんせも、はいっ♪」

「ありがとう、セイちゃん」

「どんどん焼くから、どんっどん食つてくれよなっ!」

能磨学園21

放課後。

僕はかなり驚き、そして少し感動しながらハンドルを握っている。「すごっ。都心方面とは反対側に車を走らせると、こんなに緑があるのか」

「だなあ。まったく東京っぽくなくって笑えるぜ」

「ととさまー。次の沢井駅をすぎたら、クルマ停めてほしいのっ」

「りょーかい。僕の感じでは尾行はなさそうだけど、警戒したい相手が相手だからなあ。徒歩で山に分け入る？」

「かんけーないのっ」

「んだんだ。逆に見てもらって、とーちゃんの実力にビビってくれた方が楽だって」

「とは言ってもねえ」

「お、造り酒屋っぽいのがあぞ。今日は休みみてーだから、ちよつと駐車場を借りようぜ」

「はいよ」

もし誰かに咎められたら「すいませんカーナビを確認したくてお借りしました」とでも言えればいいかと、駐車場にハンドルを切った。

正面にはそう高くも深くもないけれど、春らしい緑の山々。

こんなに山の近くに来たのはホームラさんとアヤマさんに出会ったあの依頼以来なので、ちよつと心が浮き立つ。

「……依頼以来って、あはは」

「おもしろくねーから。いいから早く使役力を降らせろって、とーちゃん」

「はーい」

エンジンは切らず、窓も開けない。

けれど僕がイメージすると、窓の外は一瞬で大雪が降り出してすぐの景色に変わった。

「あいかわらずキレーなのっ♪」

「そしてあいかわらず、とんでもねーよなあ」

「はいはい。それより、ホントに2人だけでやる気？」

「とーぜんだ。とーちゃんは手え出すんじゃねーぞ」

「任せてなのっ♪」

「りよーかい。じゃ、準備ができたら言つて。ゆつくり走りながら、コンビニでも探すから」

「はあい」

すぐにセイの準備は終わり、僕は青梅街道にクルマを戻す。

けれどすぐに見つかると思つていたコンビニがなかなかなくて、使役力を分け与えた蟲達よりだいぶ先行する形になってしまった。

少し進めばコンビニがある。

そう思つてしまった僕は、自分が思つている以上に東京という街に馴染んでしまつているのかもしれない。

蟲は青梅街道の左に伸びる多摩川のだいぶ向こう、右はさつきから見えている山中までを索敵している。

まだ蟲達との接続が切れてしまうほど離れてはないけれど、しばらくここで車を停めておくしかないだろう。

「飲み物を買つてくるよ。なにがいいの？」

「コーラとサイダー！」

「どつちかにしなさい。それ飲んだら、牛乳。それもなくなつたらお茶」

「えーっ。ほんじゃ、コーラで」

「セイはイチゴミルク、なかつたらコーヒー牛乳がいいのっ！」

「りよーかい」

3人分の夜までの飲み物と、お手伝いを本当に頑張るつもりらしい2人へのご褒美、ドーナツ2個を買つて車に戻る。

ドーナツにはしゃぐ声を聞きながら、スマホを出してこの辺りの地図を表示させた。

新宿や渋谷より、だいぶ見やすい。

これならなんとかなるかと、車を長時間停車させておけそうな駐車場を探す。

現在地は、古里駅前という交差点。
となると……

「ととさま、いたのっ」

「見つけるの早くないっ!？」

「というか早すぎ。」

「うっは、でっけえネズミ。食ったら脂がのってそうだな」

「しかも鼠型か。セイ、棗さんに連絡を。僕は車をどうするか考えとく。ちよつと目論見が甘かったかも」

「はあい」

索敵開始から1時間と経たず最初の妖異を発見。

もしここから先もこのペースで妖異を見つけられるようなら、この依頼は僕が思っていたよりずっと忙しく、ずっとずっと大変なものだという事になる。

正直、ナメてた。

「ええつと。写真を見るのは、こうだっけ? ……お、出た出た。古里駅、すつごいちっちゃいけど駐車スペースはある」

「ととさま。ネズミの妖異は流行り病の元だから、駆除しといてつて棗ママが言ってるのっ」

「わかった。場所は?」

「必要ねえつて、とーちゃん」

「なにがさ?」

「場所をとーちゃんが聞く必要なんてねーつて事。小物は、オレとセイが飛んでつて斬るんだよ」

「マジで?」

「そんな楽をしていいの、僕?」

「いーんだよ。だからドーナツもう1コずつ買つといて。んじゃ、行つてくらあ」

「また心を読んで、つて。充分に気をつけるんだよ?」

運転席の窓を少しだけ開ける。

するとその隙間から、妖精とは違う羽を生やして体を小さくしたフウカが飛び出していく。

「ととさま、セイはストロベリーの。フウカはチョコのドーナツがいのっ♪」

「買ってくるとは言っていないんだけど、まあここまでお手伝いを頑張られるとなあ」

「このお仕事は、ううん。これの次からも、ほんつきで頑張るのっ！」
「そっかそっか。じゃあ、ドーナツを買ってくるね。姿はちゃんと消しとくんだよ?」

「はあい♪」

やっぱりセイとフウカも、桃さんが心配なんだろうか。

そして自分になにかできる事があるなら、僕と同じで少しでも手伝いたいだろうか。

うちの子達はみんな優しいから、きつとそうだ。

気分がいいから夕方にでもちよつとだけあげようとドーナツ以外にもお徳用のチョコを持ってレジに出すと、「甘いもの、好きなんですね」と店員さんに微笑みながら言われてしまう。

ドーナツを2個も追加するだけじゃなく、でっかい袋に入ったチョコも買ってるんだもんなあ。

こんな昼間っから、ノーネクタイだけど黒いスーツを着た若い男が。

笑顔で僕の手を握るようにして釣銭を渡し、店を出る背中にありがとうごさいましたと言ってくれた店員さんはなかなかの美人。

パートさんというのか歳は40をいくつか過ぎているだろうけど、体形は崩れていなかった。

しかも最後のオナニーが昨日の夜で、最後にしたセックスはなんと5年前。

淫乱度は20と低いけれど、声をかけてみればナンパ成功となる確率は高いんじゃないだろうか。

そしたらちよつと強引にしながら、「いけないわ」とか言わせて。

でもココはそう言ってませんよ? って熟女らしい豊かな丘を撫で上げちやったりして。

くーっ、いいねえ。

「……ダメダメ。2人があんなに頑張ってお手伝いしてるんだから
そんな独り言を漏らしながら運転席に戻る。」

「ととさま」

「ん？」

「次が見つかったから、セイも行ってくるのっ♪」

「……また？」

「うんっ。今度は多摩川の向こうの山なのっ」

「多いなあ。じゃあ、車は駅前に移動させとくよ。フウカも聞いている
よねっ。」

（おうっ。こっちはもう片付くし、すぐに帰っから大丈夫だ）

「はい。じゃあ、セイも気をつけてね」

「はあい♪」

短時間でも1人になるなんてどれくらいぶりだろうと考えながら
車を動かし、5台も入ったらいっぱいになる駅の駐車スペースでスマ
ホを持ち上げた。

苦労して電話をしたのは、初めてかけるさんのスマホ。

「あ、もしもし。僕、ヒロキですけど」

ええ。珍しいわね。

「今って平気ですか？」

大丈夫よ。

奥多摩の妖異の多さに驚いたってところかしら？

「そうなんです。これ、瘴氣の元を絶たなきやダメなレベルですよ。
だから、それも僕がと思って」

わかってるわ。

でも、それはできないの。

「なぜです？」

そういう約束なのよ。

契約、と言った方がいいかしらね。

「意味がわかんないんですけど」

まあ、ヒロキくんが気づいたら話すつもりだったからいいわ。

でもこれはもし外に漏らしたら、本社が監察部に命じて刺客を送り

込むほどの機密事項よ。

それでも聞きたい？

「……え、ええ。じゃないとこっちも動きを決められませんし、今も単独行動させてるセイとフウカが心配ですから」

でしょうね。

けど、その心配はいらないわ。

「どうしてですか？」

奥多摩の少し手前に、とある鬼が住んでるの。

この春からね。

「はあっ!？」

そしてその鬼の名は、隠形鬼。

「ちよ、ちよつと待っててくださいよ。それって、まさか……」
ええ。

ヒロキくんが優秀な生徒で助かるわ。

千方の四鬼、その一鬼である隠形鬼よ。

「あんな昔に術者が死んでも、まだ。……と、討伐とかはっ!？」

飛車角にヒロキくんまで揃えば可能かもしれないけれど、できないのよ。

「なぜですか？」

前回、6つ同時に開いた門。

そのうちの1つを30年以上、たった4鬼で守り抜いたのが千方の四鬼なのよ。

「まさか、それを頼んだから本社は主のいない鬼を自由にさせてるんですか？」

そうなるわね。

「うっはー……」

だから向こうが約束を守っている限り、こちらからは手を出せない。

それどころかこうやって、あまりにも強大な四鬼から漏れ出す瘴気で妖異化した獣なんかを定期的に討伐しているの。

「なにしてくれてんの、大昔の人達……」

まああのレベルの鬼の瘴気になると本人達がそうしようと思わなければ人間には害がないし、それで日本、延いては世界が救われたんだから仕方ないのよ。

だからヒロキくんは安心して、セイとフウカを今のうちに鍛えておきなさい。

今の奥多摩じゃ、ヒロキくん本人が必要になるほどの妖異はいないでしょうし。

「はあ。わかりましたけど、すごい話ですねえ」

同感よ。

まあ、ヒロキくんならいつか出会えるんじゃないかしら。

伝説の四鬼にも。

「怖いから会いたくないです。……はー、驚いた。忙しいのにすみません。時間を取らせて」

いいのよ。

では、またね。

「はい。失礼します」

つい先日、というか昨日の夜に監察部の話を聞いている時、真つ先に名前が出てきた藤原千方。

その鬼使いを伝説たらしめた千方の四鬼が、こんな近くに、それも東京都内に引つ越してきたなんて。

「え、鬼も引つ越すするの?」

なんのために?

「てかなに、東京に住みたいって隠形鬼が言ったの? んで妖異が出るから間引きよろしくー、つて? そもそもなんで奥州とかじゃなく東京? ミーハーなの、隠形鬼つて?」

訳がわからない。

「……はあ。考えても仕方ないか、千方だけに」

「0点だ、とーちゃん」

「おかえり、フウカ」

「景気の悪い顔してんなあ」

「そうもなるよ。しばらく、タバコが手放せそうにない」

「ふうん」

(ととさまー)

(はいはい。大丈夫、セイ?)

(妖異はもう余裕で倒したのっ。でもなんかうじやうじやいるから、クルマを夜まで停めとける場所に移動してほしいのっ)

(それがいいな。そしたらオレとセイで狩りまくっからさ)

(りよーかい。じゃあ移動しとくけど、くれぐれもムチャはしない事。そしてヤバそうならすぐ僕を呼ぶ、いいね?)

(はいよー)

(はあい)

能磨学園22

今日は土曜日。

奥多摩の状況が状況だけに今日はそちらに向かうつもりだったんだけど、学園の校門を出たと同時に棗さんから電話がかかってきた。

今の奥多摩は賽の河原みたいなものだから、幸田と煉上の依頼を優先しなさい。

それと日曜日は夕方からあの2人の部屋に行つて泊まる事。

自分の家畜が淫気を溜めてるなんて、ご主人様失格よ？

そう言つて棗さんは笑つていた。

ホームラさんとアヤメさんとの関係なんて、僕から話した事ないのに。

「おひさしぶりです、六道様」

「あ、佐伯さん。今日もお世話になります」

「こちらこそ。お車はイチハがそのガレージに入れておきますので、お嬢様の訓練室へご案内します」

「あ、はい。イチハさんもおひさしぶりです。雑用なんかさせてごめんなさい」

「またお会いできて光栄です、六道様。雑用どころか、どんなご命令にでも嬉々として従いますので、どうかそのような事はおっしゃられないでください」

「……ありがとうございます。夜、楽しみにしていますね」

「え、ええ」

瞬時に顔を真っ赤にしたイチハさんに小さく頭を下げ、この間と同じ部屋に案内される。

まずはお昼ゴハン、それから休憩がてら今日の予定を決める話し合いだそうだ。

「ろ、六道さん。わざわざごめんなさい」

「いえいえ。それにしても2回目なのに、やっぱさん付けなんだねえ」

「は、はい。どうしてもこうじゃないと、その、怖くって。ごめんなさい」

「責めてないから。まずはゴハン食べよ。ほら見て、セイとフウカが待ち切れなくなってるヤバイ」

「あはっ。はい」

やっと笑ってくれたか。

今日の委員長ちゃんは、なんかモコモコした生地 of 白い上下。

爆乳もいいんだけど、膝より上から見えている足も肉付きがよくってたまらない。

胸に挟んで、ふとももに挟んで、大きなお尻に挟んでと、プレイの幅が広がりそう。

「ごちそうさまでした」

「佐伯、今日も美味しかった。ごちそうさまでした」

「お粗末さまです。隣のリビングに食後のお茶をご用意してありますので」

「クツキーなのっ♪」

「コーラもあるよなっ?」

「ええ。ございますよ」

「ゴハンいただいたばかりなんだから、飲み食べしすぎないですよ?」

「セイもフウカも」

「はあい」

「へーい」

今日も微妙な距離を保って委員長ちゃん of 隣の隣に座り、缶コーヒーとは香りも味もかなり違うコーヒーをいただく。

セイとフウカは対面のソファア。

佐伯さんは、僕達4人を等分に見れる位置に立ったまま話をするらしい。

「六道様、おタバコもご自由にどうぞ」

「いや、最近ちよつと吸いすぎで。今はいいかな」

「六道さん、タバコって」

「高校生だけ能力者だからね。保護者が許可すれば吸っていいの。」

20歳以上になつてゐる免許証とかもあるし」

「そ、そうなんですね」

「うん」

話が途切れる。

それどころか横目でチラツと見た委員長ちゃんは、そのかわいらしいお顔を思いきり伏せてしまつていた。

さて、どうしたものか……

「六道様」

おお。

さすが佐伯さん。

すかさず助け舟ですか。

「はいはい」

「今日のプランがないのでしたら、お嬢様にテーブルを使って角オナでも命じますか?」

「……………はい?」

「ですからお嬢様に角オナを。特にお考えもなさそうですので」

「あります! めっちゃありますっ!」

「そうですか。では、それをお教えください」

ヤバイ。

そんなのある訳ないじゃん。

考えろ、考えろ僕ー!

「……………ええっと、今日はですね」

「はい。今日はどうなさいます?」

「今日は、……………今日は委員長ちゃん、……………お、男のどういふところが怖いか聞いて、それをまずなるべく打ち消した状態なら、どうなるのかをたしかめようかと」

「なるほど。名案でございます、六道様」

「いやあ、ま、まあこんなもんですよ。ずっと考えてましたから。あ、あはは」

「とーちゃんって、ほんつとウソが下手だよなあ」

「まわりに名人しかいないから余計に目立つのっ♪」

「はいそこ黙って。それじゃ委員長ちゃん、男のどこが怖いか教えてくれる?」

「あ、はい。たくさんあるんですけどやっぱり、その……」
言いにくくて当然か。

つて委員長ちゃん。どうして恥ずかしそうにお胸を隠すのかな?

「なるほど。お嬢様は六道様のようにその神乳をねっとりじっくり、常に視姦している視線が苦手なのですね」

「言い方っ、あんまりですよそれっ!」

「ですが事実です」

「ううっ。そ、そんな事ないし。じゃ、じゃあ委員長ちゃん。他には?」

「あとはやっぱり声、というか言葉が怖いです」

「言葉が怖い、かあ。不思議な感じだけど、わかった。あとは?」

「一番怖いのは、その2つです。その、2つなのに一番でごめんなさい」

「いや謝らなくても」

「では、準備をしまいいります」

「はい?」

佐伯さんはいい笑顔を浮かべ、昼ゴハンを食べていた部屋とは逆のドアに消える。

準備ってなんだろう。

まあ佐伯さんは委員長ちゃんのお気持ちなんか最初からわかっているだろうから、こういう時の準備もしてあったんだろうな。

さすがだ。

「準備ができました。まずは六道様から」

「僕が?」

「ええ。六道様の準備がありますので、それを終えたらお嬢様となります」

「はあ」

よくわからないけど立ち上がり、佐伯さんが先導して隣の部屋に。その部屋の異様さに僕が思わず足を止めると、背中をドンツと押さ

れてつんのめり、ドアが閉じた音が聞こえた。

「六道様」

「あ、はい。いきなりどうしたんですか？ それに、この部屋。まるでグローリー・ホールのプレイルームみたいな……」

大きな、僕の部屋くらいある大きなベッド。

それが寄せられている横の壁は大きな鏡で、その上にはスポットライトまで。

他の壁にはどう見てもSMプレイ用の拘束具が鎖で繋がれて、部屋の隅には三角木馬や産婦人科の診療椅子まである。

そしてこれまた大きな棚には、笑えるくらいの種類のアダルトグッズ。

「乱暴なのは好きですか？」

「はい？ 意味が、ってちよっ!？」

いきなり距離を詰められて、思わず跳び退る。

「……甘い」

打撃。

3日くらい前にテレビで見た世界チャンピオンのジャブより速いそれは、迷わず僕のスーツの袖を掴んだ。

指先を曲げた程度の力の変化で、僕の態勢が微妙に変化。

これじゃ投げられる。合気、それも達人級かつ！

「くそっ、って。……はあ？」

「さあ、六道様。次はその純白のワイシャツを脱ぎましょうね」

「いや脱がすだけかい!？」

跳んで距離を取った僕。

その距離さえ刹那の間で詰めて放たれた、まるで龍王のような打撃、そして合気術の達人のような『崩し』、からの投げ。

なのにそれをした佐伯さんの目的が、僕のジャケットを脱がす事だったとは。

僕はまるで社交ダンスの女の人のようにくるんとその場で1回転させられ、ジャケットを脱がされただけで普通に立っている。

それにもし僕が一般人でも、痛みなんて毛ほども感じなかつただろ

う。

呆れてものも言えない。

やっぱり、この人もイカレてる。

「お嬢様のためですので」

「興奮度メーターをドックンドックン上げ下げしながら言われても。それとジャケットの、腋の下をクンクンされながら言われても」

「あら、レジストに失敗しましたか。セイ姫様だったら、たった1週間でここまで腕を上げられるとは。ご褒美を考えなくてはなりませんね」「さつきまでは表示されてませんでしたからねえ。それで、どこまで脱がされるんですか？ 僕は」

「下はそのままで結構です。お嬢様ですから」

なら、まあいいか。

ちよつと刺激が強いだろうけど、佐伯さんはそれを承知で脱がすんだろうし。

「自分で脱ぎます？ それとも佐伯さんが？」

「悩むところですが、時間を無駄にはできません。佐伯がお脱がしして、シャツもお預かりしましょう」

「二オイなら直に嗅げばいいのに、って。ボタン引き千切る普通っ!」

「お嬢様のためです。決して佐伯の趣味ではありません。それと、このかわいらしい腋に鼻を挿し込む想像をしながらシャツを嗅ぐからよいのです」

「SなんだかMなんだかわかりませんねえ」

「わからなくていいし、わかりたいとも思っていないので。さあ、脱げましたので次はこの椅子に」

まさか産婦人科の。

いや、この人なら三角木馬を椅子とか言いそう。

「あ、普通の、それもパソコンデスクの椅子。じゃあ、失礼しますね」「こちら失礼いたしました……」

佐伯さんの動きも意外だったけど、もっと意外だったのが途中で動きと一緒に言葉まで止めた事だ。

「ど、どうしました？」

「六道様。もしや、このお召し物は……」

「靴下ですか？ ……あ、そういや最近セイが頑張ってるんで、魔法で清潔にしてもらってなかったです」

「ちなみに何日履きで？」

「たぶん3日は」

「佐伯がお預かりしましょう」

ノータイムで言い切りますか。

気が合いそうな性癖だなあ。

「しかもそのうち2日は体育の授業が合計4コマあって、朝にランニングまでしちゃってたり」

「わかりました。家宝にいたしましょう」

僕でもそれはしない。

上級者にもほどがあるでしょ。

「つていうか、この体勢って」

「はい。肘掛けに手首と膝、そして肘掛けの下部に足首を固定します」

「わあい、開脚イス縛りだあ。つて、いくらなんでも刺激が強すぎでしょうっ!?!」

「お嬢様のためです。決して佐伯の趣味ではございません。ええ、ございませんとも」

「鼻血、また鼻血が出てますって佐伯さん！」

そう言っってはみたけれど、師匠達のようにイカれている佐伯さんが動きを止めるはずもない。

僕は見事な手際で、あっという間に椅子に縛り付けられてしまった。

そしてそれを見下ろしてほうつと色っぽい息を吐いた佐伯さんは、アダルトグッズの並ぶ棚の引き出しを開け、2つの道具を手に戻ってくる。

「さあ、六道様。これで完成ですよ」

「アイマスクはまだいいけど、その口に入れるのはちよつと……」

「明瞭な言葉を発せなくなるだけでなく、ヨダレが垂れ流しになってしまうギャグボール。白と黒を選びましたので、きつと六道様に似合

いますわ」

「いやさすがにそれは」

Mっぼいのかも好きだけど、本気で痛めつけたり、尊厳を奪おうとまでするようなプレイはちよつと。

「あら。よろしいのですか？」

「はい？」

「この後ですが。お嬢様の事ですからほとんどなにもできず時間が来て、きつと六道様は物足りなさを覚えるでしょう」

「まあ、当り前にそうなるでしょうね」

「ですから終わったら、佐伯が六道様をこのまま犯して差し上げようと考えていたのですが……」

マジで!?!

「……しよ、しようがないなあ。委員長ちゃんのためですもんねえ」

「ええ。では、失礼いたします」

能磨学園23

先週と、1回目の稽古の時と同じように、僕達を道場の外で出迎えた朱音ちゃん。

その朱音ちゃんが、思わずといった感じで後ずさる。

「朱音ちゃん」

「な、なんですの」

「ジャージ姿なのはまあ合格。準備運動は？」

「お、終わってますわ。それよりなんですの、その、まるで映画のチンピラのような恰好は。スーツからシャツから下品で、サングラスに、髪を撫でつけまでして」

「スーツは、犠牲に、じゃなくなつて家宝になった。この格好は全力で拒否してただけど、ダンスを踊ってるうちにここまでされちゃつてねえ」

「は、はあ」

「しかも、しかも……」

終わつたらご褒美。

大好きな逆レイプゴッコ。

そう思つて僕は3時間も委員長ちゃんと同じ部屋にいて、触れるどころかロクに話しかけさえもされなかつたのに、あの人は……

佐伯さんはオナホールでしか僕を犯してくれなかつたッ！

「ろ、六道ヒロキ？ 体調が悪いなら、わたくしの部屋で休んでいても」

「冗談じゃないっ！」

「ひいっ」

「セイ、木刀を2本」

「はいなのっ♪」

「フウカは朱音ちゃんと稽古、お昼までに体力を削り切れなかつたらお説教」

「任せろっ！」

「そして、佐伯さん」

「はい。六道様」

涼しい顔でメイド然として立っている佐伯さん、いや、佐伯さんという名前の悪魔に向かって木刀を一本だけ抛る。

「勝てないまでも一本、一本だけでも取って朱音ちゃんの前でめったくそに、お漏らしするまでぶち犯してあげますからねっ！」

「楽しみにしておりますわ、六道様」

「なら素直に一本っ、……チイツ」

全力。

庭の土が抉れる事なんて気にもしていない、本気の斬撃。

それが、いともたやすく躲された。

「な、なんて踏み込み。それに打ち込みですの……」

「スゲーのはそれを簡単に避けた佐伯ねーちゃんだけだな。ほら、オレ達も始めよーぜ」

「え、ええ。でも今、六道ヒロキがとんでもないセリフを言ったような」

「気にしたら負け。つてか後が怖いから、覚悟しといたほーがいいぞ」
「どういう意味ですの？」

「すぐにわかる。お嬢様ねーちゃん、覚悟！」

睨み合う。

今の僕達を見れば他人はそう表現するだろうけれど、それは間違いだ。

悔しきで勃起、じゃなくって身が震えそう。

「こうして見下されるのは、ひさしぶりです」

「興奮してしまいますか？　まるで昨日のアレのように」

「ええ、しますねえ。これから誰かさんを、あのオナホールみたいに使えるところと」と

「あらあら。オナホールになるのは電腦妖精の役目ですわ。ですから佐伯は、六道様の何になりましたでしょうか？」

「性処理メイドに決まってるでしょうがッ！」

小細工は通用しない。

だからこそ、庭土に爪先を沈めて思いつき蹴り上げた。

土塊が佐伯さんの顔に迫る。

それを追って駆け出し、全力の振り下ろし。

決まる。

土塊だけでなく、斬撃もフェイク。

本命は、この蹴りだ。

「嫌ですわ。メイドのスカートめくりなんて、悪い坊ちやまですわね」

「チツ。そのスカートすらめくれなかつたんですがねえ」

「吉喰流ならまだしも、坊ちやま流では。この程度が限界なのでしようね」

「煽るじゃないですか」

「いえいえ。心からそう思っておりますので。その通りでございますましよう、甘々お坊ちやま?」

「言ってくれる……」

「誰かのように『切紙の小僧』、と呼んではかわいそうですから」

「こっちはその切紙だから、ヒロキ流カツコワライしか使っちゃいけねえって言われてんですよっ!」

走る。

思いつきり姿勢を低くして。

小型の獣や妖異を斬って身に着けた、僕流の剣。

庭土を削るほど低い位置から跳ね上がった木刀は、メイド服のスカート裾を掠った。

いける。

見切りを誤らせる程度なら、僕でも可能なんだ。

「おらあッー!」

吉喰流では禁じられている声。

それを張り上げながら、斬り上げた勢いを乗せて跳ぶ。

「あら、かわいらしい」

ジャンプ。

そこから体を捻って、背面跳びのようにまで姿勢を崩す。

普通の剣術に、こんな動きはない。

反応できるならしてもらおうじゃないか。

体に巻き付く腕をムチのようにしならせ、頭蓋を半ばから両断するつもりで木刀を薙ぐ。

「もらったッ！」

「甘々ですわねえ」

着地しながら木刀を片手で突き出す残心。

その剣先で微笑む悪魔メイドは涼しい顔で、木刀を構えもせず立っている。

「マジかよ、クソが……」

「地が出てこられましたね。そのお召し物によくお似合いです」

「初めて木刀を握った時は、言葉遣いが悪いって骨を3本ほど折られましたからねえ。今じゃ敬語が普通のヒロキくんですよ」

そういうえば、ずいぶんひさしぶりにこんな言葉を吐いた。

相手が剣の師であるアヤカさん、僕を『切紙の小僧』と呼ぶ鬼なら、即座に木刀でぶっ叩かれているだろう。

「ですがその本質は、まるでケダモノのようなものでしょう。師の元を離れて修行に出されたのですから、この東京では素のままですよろしいのですよ」

「冗談じゃねえ。DMのくせに剣を持つと鬼ババになる師匠に、またぶっ叩かれるぜ」

「その時は、どうか佐伯も一緒に緒させてくださいませ」

「ああいいぞ。だから、黙って負けて俺のモンになれやあッ！」

しゃがんだ状態から、全力で加速して突っ込む。

木刀の柄に手のひらを置き、肉に食い込んでも刃筋が乱れぬようにした突き。

初めて熊型の妖異を仕留めた時、たしかこの突きで心臓を貫いたんだ。

これなら！

「この程度のお坊ちやまの性処理メイドになるほど、佐伯は優しくありませんので」

「クツソ。これも躲しやがるかよ……」

「ですがまあ、稽古の相手くらいはして差し上げましょうか。天下の吉喰流といえど、その切紙を受けただけのお子様が佐伯のスカートに傷をつけ、髪を3本も斬れたのですから」

メイド服の悪魔が、初めて木刀を持ち上げた。

「誰がお子様だ、クソメイドが!」

……空が青い。

たしかこの間ここで見上げた空は、鉛色だったのに。

「俺の心みたいにな、ってか。とーちゃん?」

青い空をバツクに、かわいいかわいいフウカが笑う。

「心が曇るような結果じゃないなあ。完敗。そうとしか言えないし」「だろーなあ。でもま、いーじゃんか。とーちゃんはまだまだ強くなるってこった」

「……もしかしてフウカ、僕を慰めてくれてる?」

「ち、ちげーしっ。笑ってるだけだしっ!」

顔が増えた。

セイだ。

うん、青空に金の絹みたいな髪が溶けてくや。セイもフウカに劣らずかわいい。

「お嬢様ちゃんをガソリン切れにさせてから、フウカは3分くらい、泣きながらととさま達を見てたのっ」

「お、おいこらセイ。ウソを言うんじゃないっ!」

「ホントなの〜♪」

「ははっ、それは是非とも見たかったねえ」

「あは。ととさまもウソつきなの〜♪」

たしかに。

僕はできるだけセイやフウカ、子供たちの泣き顔は見たくない。だから、強くなろう。

そう心に誓いながら身を起こす。
手も、足も動く。

それどころか骨折もしていない。

「佐伯の腕では木刀で六道様の骨を折るなど、とてもできませんので、僕がそつと足を踏みしめたり、拳をゆつくり握ったりしてたので、佐伯さんはそれを見て見当をつけたんだろう。」

そういうところも、なるべく見習って身に着けなきゃ。

「アヤカさんは軽く打っただけでポキッと折れるのにはですか。そんなに腕が違うのに、1本も取れないなんて」

「六道様なら、1本くらいすぐに取れるようになるでしょう。佐伯に勝つとなれば、1、2年はかかると思われますが」

「冗談でしょう。半年で勝つて見せますよ」

「いいですわね。その日をお待ちしています」

「はい。それで、今日もそこでぶっ倒れてる朱音ちゃんを運んでお風呂で洗えばいいんですか？」

「そうなりますね。しかし今日は、制限時間はなしにいたしました。食事もリビングではなく朱音お嬢様の私室にお運びしますので、夕刻までどうぞごゆっくり」

「ははっ。そりやどうも」

佐伯さんの言葉が耳に届き、その意味をしつかり理解しているらしい朱音ちゃん。

セイが木刀を取ってくれたのでお礼を言い、その朱音ちゃんの横に立って真っ赤なお顔を見下ろす。

「だそうですよ、僕のお嬢様っ…」

「う、うるさいですわ。いいからさっさと運びなさい、六道ヒロキ」

「はいはい」

お嬢様だっこ。

この間より朱音ちゃんは体の力を抜いている。

そして、僕の顔をあいかわらず見ようとしなない。

これは、お仕置が必要かな。

朱音ちゃんの部屋、僕からするとただの豪邸に向かいながら、思わ

ず頬が緩む。

さて、どうしてやろうか。

「そうだ、朱音ちゃん」

「なんですか?」

「こないだの淫気散らしを思い出して、オナニーのオカズにした?」

朱音ちゃんの体がビクンと跳ねる。

「なあっ、なあっ、なっ、なんってバカな事を! 恥を知りなさい、六道ヒロキ!」

「いやだって、もし僕でオナニーしてくれたなら、今日からはもつとサービスしなきゃなって」

「えっ……」

「恋人気分、とまではいかなくともさ。もつとこう、イチヤイチャしたり。この間は悪いと思っしてしなかった、キスとかもして」

「そ、そんなの……」

「していないならいいよ。さっさと行こうか。僕は今日、あのジャグラーつてのにゆっくり浸かって筋肉をほぐしたいんだ」

「ジャグジー、ですわ。バカ……」

「どっちでもいいじゃん」

2度目なので、間取りは頭に入っている。

今日はちゃんと朱音ちゃんの運動靴を玄関で脱がせて、バスルームへ向かう。

そして広い脱衣所の大きな籐椅子に朱音ちゃんを横たえると、さっさと服を脱がそうとした手を強く握られた。

うんうん。

素直でよろしい。

「ろ、六道ヒロキ」

「はいな」

「その、あれですわ」

「うん?」

顔を極限まで赤くして、朱音ちゃんが身をちぢこめる。

きつと、恥ずかしくって仕方がないだろう。

そしてそれ以上に前回より気持ちよくなりたがってるから、それでも口を開こうと努力をしているんだ。

「その、しましたわ……」

「なんの話？ 僕、わかんない」

「ま、またそうやって悪ふざけを！ ……その、あれですわよ」

「あれ？」

「……………自慰、ですわ」

消え入りそうな声。

でも、朱音ちゃんはたしかに口に出せた。

えらいえらい。

ご褒美をあげなくっちゃねえ。

それに自分のオシッコやザーメンまみれの女の子とキスはちよつとキツイから、今のうちに堪能しとかなないと。

「オナニー？」

「え、ええ」

「僕と、僕がした事をオカズにして？」

「そ、そう言ってるでしょう」

「ちゃんと言つて。僕を思つて、僕がしたどんな事を思い出しながらオナニーしたか。そうじゃないとご褒美はないよ？」

「……………いぢわる」

「お褒めの言葉をありがとう。それで？」

「わ、わたくしは、あなたを、六道ヒロキを思つて」

「うんうん」

「そのすべて、ここに横たえられてからのすべてを思い出して、したんですわ。…………その、オ、オナニーを。何度も、何度も」

よくできましたと言う代わりに、朱音ちゃんに覆い被さる。そしてゆっくりと顔を下げ、お互いの息がかかるほどの距離で止めた。

「キス、しちゃうよ？ いいの？」

「え、ええ。したいなら、させてあげてもいいですわ」

朱音ちゃんらしい言い返し。

なんともかわいらしいし、せっかくの瞬間だから訂正はしないでおく。

「初めてなら、ムリはしないでね？ もしそうなら朱音ちゃんはこの先、友達とファーストキスの話なんかの度に僕を思い出しちゃうだろうから」

「い、いいから早くなさい。でないと……」

ぐああ！

じゃないとなんだってイジメたいっ！

そうしてから顔をもっと寄せて、朱音ちゃんからキスするように仕向きたい！

でもファーストキスだから、ぐぎぎ……

「僕は朱音ちゃんの恋人にはなれないけど、それでも？」

自分の狡さを、醜さを噛み締めるように問う。

僕は能力だとか特性だとかのせいではなく、こんなにも酷い男だから、恋人は作れないし結婚もできないんだ。きつと。

「いいから。いいから早くなさいっ」

「わかったよ」

「んっ……」

ほんの少し顔を下げただけで唇が触れ合う。

「……ふうっ。ありがとうね。朱音ちゃんのファーストキス、貰っちゃった」

「うるさいですわ、バカ」

「それじゃあ続いて、今度は初めての大人のキスもいただきます」

「んっ、むっ、……ううんっ」

形も血色も飛び抜けていい唇を舌で割る。

朱音ちゃんはそうされてもどう応えていいかまでは知らないようなので、丁寧な愛情を込めて口腔内を舌に探らす。

「んっ、最高の味だね」

「バカ。でも、六道ヒロキ……」

「ん？」

「その、もう少し。もう少しだけ……」

「よろこんで」

再度のキス。

「ああっ……」

チュツと唇を鳴らして顔を離し、不意打ちで深く。

その途中で朱音ちゃんは感極まったような声を上げる。

慣れたのか、それともキスがどういふものかという知識を思い出したのか。

おずおずとはあるけれど、朱音ちゃんの舌が伸ばされ、僕のそれに触れた。

朱音ちゃんがビクツと体を震わせたけれど、その舌は逃げない。

それどころか、初々しい動きで僕の舌の表面をなぞり出す。

ペちやペちやと音を立てて舌を絡め合う。

その行為に没頭し始めた朱音ちゃんの唇の内側や歯茎、ツルンとした歯の表面や上顎下顎までを僕の舌でくすぐると、その度に顔にかかる息が荒くなつてゆく。

「あっ……」

いかにも残念そうな声。

「時間がないからね。さ、お風呂に入るよ」

「その、もう終わりですか？」

「そんな切なそうな顔をしないの。お風呂でだってキスはできるでしょ」

「あつ！ え、ええ。そ、それもそうですわね」

「うん。だから脱がすよ。……いや、違うな。朱音ちゃんが自分で脱ぐんだ」

「ええっ!？」

となればいくらいいニオイがしていても抱きついているより、少し離れて特等席で見守るのがいい。

籐椅子を下りて3歩の位置で朱音ちゃんを見下ろす。

「さ、早く」

朱音ちゃんは学校の体育の授業で使うジャージを着ている。

せっかくだからそれでストリップをしてもらって、体育の授業の時に思い出して楽しもう。

うん、それがいい。

「その、とてつもなく恥ずかしい、ですわ……」

「だからいいんだって。ご褒美もあげるから」

「ご褒美、ですか？」

「うん。さつきあれだけ、全力で動いたから、僕のチンポはきつと酷く臭う。朱音ちゃんはそのかわいい顔を、チンポ汁や恥垢で汚されるのが好きでしょ？　そうしてあげるから、早く脱いで」
しまった。

煽り方を、先週の淫気散らしでそれにドハマリしちゃった女の子の羞恥の読み方を、盛大に間違えた。

恥ずかしそうにしながら、それでも期待で頬を赤らめている処女の、ゆつくりと肌を僕の目に晒してゆくストリップが見たかったのに。

朱音ちゃん、どこの早脱ぎ名人だって感じで服を脱ぎ捨てちゃった。

ジャージ早脱ぎ世界記録が出たんじゃない？

「あはは。いいね。下着は上下とも白か」

「ぬ、脱ぎましたわよ」

「いやいや。まだ残ってるでしょうに」

「こっ、これもわたくしが……」

「とーぜん」

「ううっ……」

そうそう、これだよこれ。

うつむきながら背中に手を回して、ホックに指がかかったらうに、その動きのせいでバッチリ見られちゃったブラジャーのふくらみを慌てて隠す。

そしてチラツと、「本当に脱がなきゃいけませんの？」って感じで僕の顔を見上げる。

こういうのが見たかったんだ。

「これが欲しいなら、早く脱ぐんだ。朱音ちゃん」

言いながらベルトを外し、スラックスとボクサーパンツを一緒にずり下げる。

「六道ヒロキの、この間の、あれ……」

「おおっと。それ以上こっちに近づいたら、ご褒美はなし。さあ、まずはあの芸術品みたいなおっぱい、それから僕が見た中でいちばん可憐な恥毛と、その下の縦スジも見せるんだ」

「ううっ。あんまりですわ。こんな辱めを、なぜ……」

朱音ちゃんがそれで興奮するド変態ド淫乱だからでしょ。

「酷いですわ、六道ヒロキ。こんな、まるで見世物のように……」

最高のストリップショーだからねえ。

ブラジャーのホックは外れた。

でも、朱音ちゃんは動きを止めている。

そしてそのまま、背中に手を回して前屈みになった姿勢で僕を見上げる。

「その、あまり見てはいけませんわ。六道ヒロキ……」

はらり。

そんな擬音を思い起こさせる動きで肩ひもが白い腕を滑り、ブラジャーのふくらみの落下を手で押し止めた朱音ちゃんがギョツと目を閉じる。

クロスさせていた手がゆっくりと、ゆっくりと下ろされていって、ついに控えめな大きさの美乳と、その頂点にあるピンク色の小さな乳

首が僕の目に映った。

「今日もキレイだよ、朱音ちゃん」

「お願い、六道ヒロキ。本当にお願いだから、わたくしが脱ぐのは、ここまでで許して。なんでも、するから……」

「へえ。『なんでも』、ねえ。ならそうしてあげよう。ありがとうは？」

「……ありがとう、ですわ」

「うんうん。じゃあ、おいで。キスをしながら脱がすよ」

「え、ええ」

ふらつきながら立ち上がった朱音ちゃんが、僕の体に倒れ込むようにして抱きつく。

それを抱き止めると、目が合った。

「もう欲しくってたまらないって感じだね」

「う、うるさいですわ。それより……」

キス。

正面から抱き合って、お腹に勃起した天井を向いている肉棒を押し当てられながらのキスは、だいぶお気に召したらしい。

パンティーを脱がすまでたつぷりと、小振りだけど弾力と張りが素晴らしいお尻を揉んでいたけれど、朱音ちゃんはそれだけで発するのにまだまだ慣れていない喘ぎ声を上げる。

「すっぽんぽんだね」

「わ、わざわざ言わなくていいですわ。それより、六道ヒロキ」

「うん？」

「このまま、この間みたいに。それも、その、キスをしながら……」

恥垢やガマン汁で顔を汚される、つまり自分の性癖より、覚えてたのキスをしながら1秒でも早く性欲を発散する事を優先するのか。

理性より肉欲が優先される淫乱って感じで悪くない。

ここは淫乱女子高生育成ゲームでも遊んでいるつもりで、将来のためにもそうしてあげようかな。

「スマタかあ。この姿勢でキスもしながらだと、クリトリスにあんま当たらないかもよ？」

「平気ですわ。だから、早く」

「はいはい。じゃ、朱音ちゃんがチンポを下げて」

「またそんな意地悪を。酷いですわ、六道ヒロキ……」

とか言いつつも、朱音ちゃんの手は前に回された。

「今日も朱音ちゃんは手まですべすべだねえ」

「六道ヒロキのは、やっぱり熱くて、硬くて、大きい。それに、ゴツゴツしてますわ」

「それがいいいでしょ。ほら、挟んで」

「え、ええ。……んっ。ああっ、スゴイっ!」

先週の淫気散らして大好きになつたらしいスマタ。

その感触と快感に眉を極限まで寄せながら、朱音ちゃんは小さく腰を揺する。

「ああっ、どうしてこんなにも。ううっ、あつく、んうっ……」

しばらくナントカバスはおあずけかと思つたけど、この様子じゃすぐにお湯を溜めて、髪と体を洗い終えたらゆっくりと浸かれそう。

朱音ちゃんはキスをするのも忘れて、小刻みに腰を揺すっている。

最初の波はかなり近そうだ。

「ああっ、六道ヒロキっ!」

「うん」

「わたくし、わたくし、またっ!」

「いいんだよ。イクの、朱音ちゃん?」

「そうですわっ、あんっ。わたくし、またこうやって、んっ、やあっ。イク、またはしたなくっ。あんっ、……イク、イクイクイクうッ!」

「じゃあ、こうだ」

キス。

遠慮なく舌を刺し、自分の舌を甘噛みして溜めておいた唾液を流し込む。

「んむっ。ツ!? んくっ、んくっ、んっ。……んう——っ!」

大きく震えた体を抱き締めながら、舌を絡ませる。

イツてる最中の朱音ちゃんはそれに応える余裕なんて欠片もなかったようだけど、すぐに舌を絡めてきた。

まだ絶頂の余韻で、腰回りをピクピクさせているのに。

「これ、大好きですわ……」

「スマタが、キスが？」

「もうっ。わかってるはずですよ、六道ヒロキ。それを同時にするのが、ですわ」

「それはよかった。じゃ、髪と体を洗おつか。そのうちにお湯を溜めとくから」

「ええ」

今日は舌洗いなんかをせず、普通に髪と体を洗う。

そしてお待ちかねのお風呂の時間だ。

「でっかいお風呂、いいなあ。じゃあ、失礼しますっ」と

「わたくしも入るんですの？」

「そこでオナニーシヨーとか放尿シヨーとかしてくれるんなら、別に入らなくてもいいかな」

「入る以外の選択肢はありませんのね。……あら。かなり、ぬるめですわね」

「のぼせたらいけないからね。こういう事をしてさ」

「やっ、またですのっ!」

朱音ちゃんはを抱き寄せる。

このジャグジーとかいうお風呂はとんでもなく広いのでいろいろと愉しめそうだから、わざと設定温度を下げておいた。

お湯に浸かりながらイチヤイチャしないはずがない。

「まだ大きいままですのね、六道ヒロキ」

「とーぜんでしょ。こんなにかわいい子と一緒にお風呂なんて入ってるんだから」

「お世辞はいりませんわ。それより、重くありませんの？」

僕は朱音ちゃんを後ろから抱きかかえるようにしてお湯に浸かっている。

もちろん勃起したままの肉棒を、ふっくらした大陰唇に挟ませて。

なので朱音ちゃんのお尻とその重心が僕の下腹部にあるから、重くはないかと聞いたんだろう。

「ぜんぜん。浮力があるし、それがなくなっただって朱音ちゃんは軽い。

僕は頑丈だしね。それよりさ」

「な、なんですよ」

僕と一緒に、朱音ちゃんもまだ酷く濡れている。

やっぱり、お湯をぬるめにして正解だ。

あと1回だけ朱音ちゃんがイツたら、お風呂を上がって部屋でゴハ
ン。

それから淫気散らしの自主練かな。

僕は朱音ちゃんの処女まではいただかないつもりだし、朱音ちゃんが僕に施す淫気散らしは口を使わない簡単なものだけど、それでもこの後が楽しみだ。

「あれっ。なんで棗かーちゃんいんのっ？」

「わあい、棗ママなのっ♪」

「おはようございます、桃さん。それに棗さん」

青梅街道をジリジリと進みながら妖異を狩る依頼を一通り終え、ひさしぶりとなる事務所への出勤。

そしたらそこには桃さんだけじゃなく、棗さんまで。

なんでだろう？

「例の依頼、お疲れさま。しつかりゴールデンウィークに間に合わせ
てくれたわね、ヒロキくん」

「あ、はい。そういえば、明日っから連休でしたね」

「ええ。だから、ちようどいいかと思つて」

「はあ」

なんだなんだ。

ちよつと怖いんですけど。

「さあ桃。もう、覚悟を決めなさい」

「……ん。でも」

桃さんはいつもの無表情。

けれど迷っているとか、困っているとか、ハッキリは断言できないけれど、そういつた色が表情から窺える。

「でもじゃないでしょ」

「……ヒロキ」

「はい。なんででしょう」

これは、例のあれかな。

だとしたら答えは決まってる。

桃さんは僕の、保護者で後見人で雇い主で先生で家族。

その桃さんが困っているならいくらでも手を貸すし、セイとフウカはそのために昨日までほぼ毎日、あんなに頑張つて妖異を狩つてい

た。

どんな困り事だろうと、僕達が力になれるならなんだってする。

「……その、頼みがある」

「なんでも言ってください。絶対に断らないし、力を尽くしますから」
言いながら頷く。

「ん。じゃあ、孕ませて」

「……………は？」

なにそれ？

「それから、依頼を受けてほしい」

「えっと。依頼はもちろんいいんですけど、孕ませてってのは？」

「必須だと判断した。道具のように思っていると言われても仕方ない状況だけど、そうじゃない。子供はちゃんと愛せる。だからお願い」

真剣な眼差し。

桃さんのこんな表情は、初めて見た。

だから冗談を言ってるんじゃないのはわかるけど、どうして話が孕ませるとかになるのかわからない。

「いやそうじゃなくって。説明を」

「ん。じゃあ、説明する」

「お願いします」

「繋がりがあれば今より向こうが見える、はず。だから使役蟲を産みたいけど、それだけじゃない。以上」

「……すみません。まったく意味がわかりません」

「でしょうね。だから私が説明するわ。こつちに来てこのモニターを見なさい、ヒロキくん」

「はあ。じゃあ飲み物だけでも。桃さんはポカリでいいですよ。棗さんはどうします？」

「缶コーヒーでいいわ」

「オレはコーラ！」

「セイはオレンジジュースの気分なのっ♪」

「はいはい。いただきますして、ちゃんとソファで飲んでね」

出勤するとまず桃さんとセイとフウカに飲み物を出して、それから

掃除をするのが日課になっている。

今日は掃除をしてる場合じゃなさそうなのでセイとフウカにジューズを渡し、ポカリと缶コーヒー2本を持って桃さんのデスクの前に立った。

「どうぞ、桃さん。棗さんも」

「ん」

「ありがとう。それじゃ、この地図を見て」

「……四国、ですね」

「ええ。次は映像。桃、まずはリコちゃんを」
「ん」

モニターの画面が切り替わる。

大寫しになったのは、桃さんによく似た女の子。

僕と同じ年頃で、左目を黒い眼帯で覆い隠している。

「美人な子ですね」

「ん。自慢の妹」

「やっぱり桃さんの妹さんですか。似てますもんね」

「ん。次は2番目の兄」

「普通に美形だ。やっぱり、みなさん能力者なんですか？」

「ん。この兄と妹が、戦ってる」

「相手は妖異ですか？」

「違う。『人喰い』のクズと」

それは……

能力者はフウカがよく遊んでいるゲームのように1刻みとかでレベルアップはしないけれど、何年も何十年もかけてたくさんの妖異を狩ると、クラスチェンジのようなものをする。

僕達が日常的に使う言葉で言うと、『成駒』ってやつだ。

そしてその成駒は、妖異を狩らなくとも達成可能。

妖異の代わりに能力者を狩ればいい。

まっとうな能力者達はそんな手段で成駒しようとする者を、人喰いと呼んで忌み嫌う。

「完全に僕の出番ですね。任せてください」

『悪堕ち』、人喰いと似て非なる、すこぶる凶悪な犯罪に走った能力者を僕が初めて殺したのは12の冬だった。

あれからもほぼ1年ごとに人は斬っている。

相手が人喰いなら、僕が始末するのが一番いいだろう。

「けれど、話がちよつと複雑なのよ」

「どうして？」

棗さんが話し出すと、桃さんがギリイツという音が出たほど強く歯を食いしばる。

あの桃さんがここまで怒るなんてと思ったけれど、棗さんの話が終わる前にそれを納得できた。

いくらなんでも、あまりに酷い。

そうとしか言えない内容だったから。

「お恥ずかしい。でも、この通りだから手を貸してほしい。お願いします、ヒロキ」

桃さんが椅子を回転させ、僕に深々と頭を下げる。

「他人行儀な。もちろん行かせていただきます」

「ん。ありがとう」

「なら、私と桃の立てた計画を説明するわね」

「お願いします」

桃さんのお兄さんと妹さん。

その2人が戦っている相手は、同じく桃さんのお兄さんである長兄。

しかもその3人は3人だけで戦っているのではなく、四国八十八家の1つである一族が2つの勢力に分かれて戦っているようだ。

現当主であるお父さんは、事態を静観。

桃さんの読みによるとこの先も介入しては来ないらしい。

「それは、やっぱり……」

「ん。どちらが生き残っても、主要メンバーは成駒してる可能性が高いから。だからこの際、クソオヤジも始末して次兄が家を継ぐのがいい。妹、リコも家を継ぐ気はないから」

「桃の、これからあなたの子供を産む女の親と兄を斬れる？ ヒロキ

くん」

「たとえば桃さんに嫌われても、それが必要なら迷わず。でも、どうして桃さんが使役蟲を産む必要があるんですか？」

「だって、母親は子供の視界を共有できるじゃないの」

「……………はい？」

全力で首を動かしてソファの方を向く。

「にひ。やあつと気づいたか、とーちゃん」

「さすがに遅すぎなのっ♪」

「なんで僕にそれを教えないかなあ…………」

2人が生まれて約6年、その視界が見れるのは僕だけだと思い込んでたんですけど。

「それにセイとフウカ、うちのマモリもそうだけれど、使役蟲は母親の能力や特性を引き継ぐようにして生まれるでしょう？」

「ですね」

「だから桃の子供は、情報系の能力を持つてる可能性が高いわ。事が済んだら私の能力でウソを見抜いて人喰いを処断できるけれど、戦の最中にそれをするのはムリでしょう」

たしかに。

だから桃さんが産む子供の能力に期待して、上手くすれば戦いながら人喰いの被害を少しでも減らそうって感じか。

「人喰いと強姦魔は殺したい。男女を問わず。それは、妹がやる」

「するなら僕が斬りますって。あんなかわいい子が人殺しなんて、絶対にしない方がいいです」

「とは言っても、ヒロキくんは明日から始まるゴールデンウィークが終わったら東京に帰ってもらおうわ。だから急いで桃に子供を産ませ、その能力を確認しておかないと。それからヒロキくんは四国に飛んでもらって、まずは相手方の誰を殺していいのかを精査ね」

「なるほど」

小柄で若々しく、知らない人なら中学生と間違えそうな桃さん。

いつも分厚くて大きなメガネをかけていて、いつ見てもせっかくの絹糸みたいな黒髪はボサボサだし、着替えはするのと同じ色とデザイン

ンのジャージしか着ないから目立たないけど、桃さんの顔はめっちゃくちやかわいらしい。

こつちに来てから若い子も悪くないと思いだめた僕は、最近じゃこの事務所で時間を潰しながら、桃さんとセックスするならこうするのになあ、なんて妄想をよくしていた。

いくら能力者でも女子中学生に手を出すのは気が引けるけど、桃さんなら問題ないし。

「うふふ。すっかりその気になったみたいね」

「本音を言うと、桃さんとはずうつとしたかったんで」

「ですってよ、桃。教えた通りになさい」

これは。

桃さんは棗さんが調教したとか言ってたから、そういう感じでおねだりさせられるんだらうか。

わくわく。

「……5日」

「はい？」

「だから5日。このパンツ穿きっぱなし」

「うおおっ!?!」

そんな事があるの!?

「うふふ。ヒロキくんなら絶対に喜ぶと思ってそうさせたのよ」

「棗さんは女神様です!」

「でしょう。だからほら、まずはそのニオイを嗅ぎまくりなさい。その様子は最後まで、このパソコンと繋いだ桃の能力で録画するから」

「おおっ。一粒で何度も美味しい、ってやつですね」

「そうなるわね。ほら、立ちなさい。桃」

「はあ。せめて最初くらいは普通がよかった」

桃さんが立ち上がりながら言う。

けれどその頬は赤く、メガネの向こうの瞳は潤んでいて、興奮度は80と行為前にはかなりの数値。

それにフェロモンの濃さも半端じゃない。

「ウソおっしやい。桃の妄想通りの初体験じゃない」

「ウソおっしやい。桃の妄想通りの初体験じゃない」

「どういう意味です?」

「この子だったら9歳のヒロキくんを見て、15歳になるまで待つてから美味しくいただくって宣言したのよ。男子高校生になったヒロキくんとするのが一番興奮するから、楽しみは取っておくって。だから桃は先に東京に来てたの」

「そういえばあの頃、僕が修行を始めた頃は桃さんって棗さんと一緒に本社で働いてたんでしたね」

「ええ。それで、どうするの? 急がないと淫乱女が初セックス期待して垂れ流すマン汁で、せつかくの5日穿きショーツのニオイが台無しになるわよ?」

「すぐにお脱がせしますっ」

僕達のように前衛も張れる、風邪すら引かない能力者ならまずあり得ない、5日も穿きっぱなしのパンティー。

その汚れとニオイを淫液で上書きするなんて、神様が許しても僕が許さない。

「ムードなんて気にしなくっていいわよ。この子はヒロキくんに犯されたくって、今まで体を許してなかったんだから」

「マジでっ!」

「ええ。そうよね、桃?」

そっぽを向いている桃さんが小さく、でもたしかに首を縦に振る。

「じゃあそういう感じで!」

「うふふ。楽しみねえ」

「かーちゃん達も、飲みながら見てんだらうなあ」

「ティファニーねえさまのために、録画とライブを同時にするのっ!」

「それはいいわね。桃、和歌山に映像をライブで繋ぎなさい。このモニターにも、桃がヒロキくんに犯されるところをちゃんと表示するのよっ!」

「はあ。それはいいけど、きやあっ!」

能磨学園26

お話し中にごめんなさい。

でも、それどころじゃないんです。

小豆色のジャージ、そのズボンを乱暴に下ろす。

「っは。お子様パンツに、黄色いシミが付いてやがる。シヨンベンしたらマンコくらいちゃんと拭け、メスガキ！」

犯されるようなセックスが好きならこれがいいだろうと口調を変え、それだけではなく、けっこうな力で柔らかかそうなふとももの横に手のひらを振り下ろした。

「いたっ!？」

パンツといい音が鳴った瞬間、どうしようもないほど汚れた子供っぽいパンティーの向こうからフェロモンがモワツと香る。

やっぱり桃さんはこんなのが好みみたいだ。

なら、僕も愉しませてもらおう。

「へへっ。さあて、メスガキマンコとご対面だ」

「や、やめ……」

本気で嫌がっているような声を聞きながら、レースなんて使われていない、クロツチのだいぶ上の方まで黄色い染みが見える綿100%っぽいパンティーを一気に下ろす。

「ちよろつとしかマン毛が生えてねえな。いかにもガキを犯してるって感じがして、たまらねえぜ」

「ううっ」

「おら、ズボンとパンツを脱ぐんだよ。足を上げる。じゃねえとまたぶん殴るぞ?」

桃さんがいつも履いているサンダルごとジャージとパンティーを足首から抜くと、その小さな体をデスクに向かって押した。

いくつもの大きな画面に映っているのはそのモニターから見える景色のようなので、サラさん達も、こうされた桃さんも臨場感たつぷ

りなレイプシーンを楽しめるだろう。

小さな小さなお尻。

その割れ目の横や後ろには、毛の1本も見当たらない。

恥毛があるのは、本当に中学生くらいにしか見えないふつくらした恥丘だけのようだ。

乱暴にズボンとパンティーを脱がされ、その途中で平手打ちまでされたというのに濡れそぼっている割れ目は、綿のパンティーほど臭わない。

これは好都合だと、わざと音を立てながらベルトを外す。

もう少し臭かったら絶対に舐めたいけれど、このくらいなら舐めずに挿入して、5日も穿きっぱなしのパンティーを嗅ぎながら腰を振った方がいい。

「あらあら。大丈夫、桃？　あなた、このままバックで犯されるみたいよ？　男とは初体験なのに、最初がレイプだなんて」

「ううっ」
「ほうら。もうギンギンのオチンポが、桃のオマンコに狙いを定めてる」

それは間違いない。

太さはそれなりにあるけれど、いつもよりだいぶ短い肉棒。

天井に向かって屹立するそれを掴み、本当にこんなブツを飲み込むのかと心配になるほど小さな膣にあてがう。

けれどなにも言わずこれの大きさを調整してくれたセイを、男子高校生にレイプされるのが最も興奮するからと今まで僕と会うのを避けてきた桃さんの性癖を信じよう。

そう考えながら、思いつき腰を突き出す。

「ひぐうっ!?!」

「っは。簡単に啞え込みやがった。もしかして犯されて感じてんのか、メスガキ？」

返事はない。

けれど狭い膣がキュウツと締まって、同時に淡い桜色をしている肛門もヒクついた。

今日は時間がないらしいし、使役蟲を産むためのセックスだから仕方ないけれど、次はアナルの具合も試したい。

とうか次の時はアナルから犯そう。
そう決めて激しく腰を振り出す。

あれだけ一気に肉棒を最奥まで突き入れたのに、桃さんの苦痛度は0のまま。

だいぶ激しくしても問題はなさそうだ。

「やめ、いきなり激しっ……」

知った事かと腰を振りながら、小さなお尻に両手を伸ばす。

まだまだ子供っぽいお尻の肉に指が食い込む。

小さなお尻だから余計に大きく見える肉棒、それが出たり入ったりする光景が酷く淫靡だ。

肉棒は、すでに濁った白い淫液で濡れている。

腰を突き出すとパンツと音が上がって、同時に主張の少ない子宮口をカリで擦られながら最奥の膣肉を叩かれた桃さんが呻く。

腰を引けばお尻との対比で大蛇にも見える肉棒がズルリと姿を現しながら、ごく少量の淫液を空気中に散らせて。

そんな光景に興奮を煽られながら腰を振っていると、いつの間にか啞えタバコで桃さんを見下ろしていた棗さんが顎でデスクを示す。

なんだろうと視線をやると、大きなモニターには面白い光景が映っていた。

「ははっ。レイプされて感じてるだけじゃなく、もう限界で派手にイキますってか？ とんでもなく淫乱なメスガキだ」

返事はない。

喘ぎ声も上がっていない。

けれど桃さんは、デスクに突っ伏して顔を持ち上げる余裕もなく、大きなメガネがかなり元の位置からズレているのに蕩けた表情で、閉じられないらしい口を開けて荒く早い呼吸を繰り返すだけの桃さんは、僕に答えるように狭い膣を締める。

「レイプでイクなら、それが大好きって事だろ？ イクならもっどレイプしてって、いつでもレイプしてくださいって言ってからイクんだ

ぞ？ そしたら何度でもレイプして、絶対に孕ませてやるよ」

「はっ、あ。ひっ……」

「ほーら、言うんだよ。じゃねえともうここでやめるぞ？」
返事はない。

けれどモニターに映るヨダレまで垂らし始めた女子中学生のかわいらしい顔は、何度も横に振られた。

「なら言え。もっとレイプしてって。いつでもどこでもしてって言うんだよ」

腰を振るペースを上げる。

男がする射精への助走は、まだ処女の女の子でも本能でそれと察してザーメンを吐き出される期待に興奮が高まる、それを僕は朱音ちゃんに教わった。

さらに桃さんを煽るため、そして僕の欲望を満足させるために、足先に引っかけてパンティーを蹴り上げ、それを鼻に当てて息を吸い込む。

「やめ、つくうっ……」

モニターに映っているのは、デスクに組み伏せられて乱暴に背後から犯されている女子中学生と、激しい注挿を繰り返しながらパンティーを鼻に当ててニオイを嗅いでいる若い男。

もしこの映像を誰かが目にしたなら、地味な女子中学生を変態の若い男が欲望のままに犯しているようにしか見えないはず。

「も、もうやめ。あ、くっ。や、あぁっ……」

桃さんの限界は近い。

「ウンコも拭けねえメスガキなら、妊娠の心配もねえよな？ たつぶりナカに出してやるぞ」

「やあっ。そ、それだけは……」

いやいや。

なんのためにこうしてると思ってるんですか。

そうツツコミを入れたくなってしまっけど、もちろんそんな無粋な事はしない。

だけでなく、ノリノリでレイプゴッコに興じている桃さんがもつと

興奮できるように、とあるワードを口にする。

「ほら、早く言葉。そしたらオマエは今日から、俺の、俺専用のオナホールだ」

なんでもないようにこのワードを暴露してくれた佐伯さんに感謝。

「……ッ！」

「言うんだよ。いつでも、どこでも犯してくださいって。あなたのオナホールになります、ってな」

腰を振る速度を上げた。

いつ訪れてもおかしくない限界、どうせならそれに合わせて射精を
したい。

「あがあっ!?!」

「おら、言葉。言わねえなら、そんなオナホールは窓から捨てちまうぞ
?」

「っあ、んっく、ああっ、あゝ あっ! なるっ、なるからあっ!」

「はあ? 意味がわかんねえな」

「んっ、ああっ。い、いつでも、あんっ、どこもでも、好きだけ犯し
てっ! 桃はあなたの、あんっ、オ、オナホールだからっ! ああん。
ダメ、もうっ……」

「イクのか? 犯されて、オナホールにされてイクのかよ?」

「はあん。イク、イクのっ! 犯されて、あくっ、あゝ はあっ! イク、
イクイクっ!」

「ならご褒美に中出しキメてやるからな。パンツ嗅いで腰振ってるレ
イプ犯のチンポで派手にイツちまえ。な、ド変態ド淫乱のメスガキ
?」

そうとまで口にしてようやく、桃さんはモニターに目をやった。

小さなお尻が、震える。

「ああっ、あゝ っ!?!」

「たまんねえぞ、このガキパンツは。マンカスにマン汁、シヨンベンと
ウンコまでが発酵した、この世で一番って言えるくれえクセエんだ」
「っあ、あああああああッ! イク、イクうッ! ……あっあゝ、お
うっ、ひぎいつ! イク、イクイクイクイク! イク——ッ

!!

普段の桃さんからは考えられない、絶叫と呼べる大きな声。

それと小さなお尻には似合わない強烈な締めつけ、それから射精を促すように蠢いた膣の淫らな蠕動運動に合わせて、最奥の壁に押し付けながら射精した。

「ア、あッ!？」

桃さんがデスクに手をついて限界まで仰け反り、そのあまりの勢いでズレていたメガネが落ちる。

予想通りその体が崩れ落ちたところで手を伸ばして、桃さんの小さな体を抱え上げた。

「んああっ、はあっはあっ……」

桃さん愛用の大きな椅子に僕が座って、細い足を肘掛けに乗せる。挿入部分がバツチリ見える大股開き。

モニターの向こうから、サラさんとアヤカさんの歓声が聞こえるようだ。

「ほうら。中出しで派手にイッたガキマンコを撮影されながらも一度だ。お嬢ちゃんは、桃ちゃんは俺の何になったんだ？ ほら、言ってみろ」

「……オ、オナホール。オナホールに」

「だな。なら俺の物をどう使おうが、誰にも文句は言われねえってこった」

「んむうっ！ ……っちゅ。んっちゅ。ふうんっ」

背面座位で繋がったままキス。

桃さんは小柄なのでだいぶ窮屈な体勢だけど、ここは手を抜くところじゃないので念入りにやる。

小さな唇を割った先には小さな歯が並んでいて、その1本1本、そして根元や歯並びの隙間まで舌先で舐めた。

歯茎も、上顎と下顎も、舌の裏や頬の内側までも丁寧に。

そんなキスだから絶頂の余韻が過ぎ去っても終わるはずがなく、桃さんはすでに腰を揺すり始めている。

「くくっ。俺のオナホールは高性能だなあ、メスガキ？ 自動で腰を

振りやがる」

「はっ、あつく、ううっ。はあっ、あっ、んうっ……」

「どうせなら脱いで、好きなだけ腰を振れよ」

ジャージの上を脱がす。

「ああっ、ああっ。はんっ……」

いや、これはすんごい。

桃さんに腰を振れと言ったのも、ジャージを脱がせたのも僕だけ
ど、まさかこうなるとは。

正面と左右、その上に2つあるモニターには、とんでもない光景が
映っていた。

乱れ髪的美少女。

もしテレビに出ていたら〇〇年に1人の美少女、奇跡の女子中学
生、なんて紹介されてもおかしくない女の子が、僕に跨って腰を上下
させている。

本当にかすかなふくらみの頂点にある子供らしい小さな、ピンク色
の乳首は勃起し切って。

数本しかないような薄い恥毛を汗で恥ずかしい丘に貼りつけて。

その名の通り桃のような色彩の割れ目はどうしようもないほど淫
液で濡れ光り、大人の肉棒を啜え込みながら腰を動かすのをやめな
い。

「えっろ」

「はあ、んう、やあ……」

なんとなくだけど、喘ぎ声まで女子中学生っぽい。

いや女子中学生の喘ぎ声なんて聞いた事ないけどさ。

能磨学園27 (終)

「ま、またっ、……またイクうつ！」

何度目かもわからない絶頂。

それに身を震わせている桃さんの女子中学生にしか見えない顔は汗と涙と鼻水と、それに少し臭うヨダレで酷く汚れている。

それでもメガネを外した桃さんは美少女、もうそんな歳じゃないけれどそうなんだから、なんて言うか凄い。

僕の射精はまだ2回。

さつきセイが通話魔法で教えてくれたけど、今日の射精量だと次で桃さんの膣は限界なんだそうだ。

普通の女の人と比べると驚くほど狭く、奥行きもないので、それもまあ当然だろう。

「なら、ここらでやっとかないと。サラさんとアヤカさん、それにティファニーちゃんに怒られちゃう」

「ぐうつ……」

「はいはい。いいから身を起こす。そしたら指でピース。両手で、顔の横でね」

「あくっ、はあっ、んうつ……」

桃さんが僕の注文通りのポーズをとる。

モニターに映るのは全裸で足を肘掛けに引っかけ、大股開きの背面座位で犯されている美少女。そのアへ顔ダブルピースってやつだ。

絶対にやっとかないと、後で何を言われるか。

「そうそう。よくできました。レイプ犯のオナホールに自分からなっちゃった女の子のアへ顔ダブルピース。これをやっとかないと、1年後でも怒られそうだからね。ほら、このままオナホール宣言しなさい」

「はひい。も、桃はオナホールになりましたあ。んひっ……」

「よしよし。じゃあ最後の仕上げ、本気の孕ませ射精だ」

「んほう！」

ダブルピースしたままの小さな体を持ち上げて、思いつき腰を突き上げる。

「ひぎいつ、こ、壊れりゅっ！ あひんっ！」

桃さんは前衛じゃない能力者、もちろん手加減はしてるから大丈夫。

でもそれは口には出さない。

さつき桃さんは僕が『本気の孕ませ射精』と言った時、何度も何度もイキすぎて緩んだ膣を思いつき締めつけた。

そこまで期待されているなら、キツチリそれに応えなければ。

「バカにつ、オマンコバカになりゆううっ！」

「元からバカだったの。おら、出すぞ！ 今から孕ませてやるからなっ！」

「赤ちゃん、らめえっ！」

「知るか」

「あひい、らめ、らめなのにい♡ あんっ♡ レイプで受精、ひいん♡」

狭く奥行きがなくとも肉棒のサイズはそれに合わせてあるので、根元まで若さを感じる、イキまくりで感触がだいぶ柔らかくなった膣肉がねっつとりと絡みついてる。

それに僕より頭ひとつ分ちよつと桃さんが小さいおかげで、モニターの映像は見えっぱなし。

ダイヤルを下げるイメージをしなくても、射精なんて余裕だ。

「出すぞ。確実に孕むように、奥に。たっぷり射精して子宮を満タンにしてやる」

「らめえっ♡ らめなのにい♡ やあっ、イク♡ またイクう♡」

「出るぞっ。ほら、孕め。レイプで妊娠させられてイク変態メスガキっ！」

「らめ、らめっ♡ くくあゝアゝっ、熱いの、ビュルビュルって♡

奥ツ♡ んひひひひひひひひひひ♡」

「っは。シヨンベン漏らしながら孕まされるのか。さすがド変態ド淫乱なメスガキだ」

「キテる♡ 赤ちゃんの部屋まで、せーし♡ 妊娠しちゃ……」

最後まで言えず、桃さんが意識を失う。

「はー、気持ちよかった」

「お疲れさま、ヒロキくん」

「あ、はい」

「間違いなくレイプに目覚めたな、とーちゃん」

「ととさまなら、レイプ相手がすぐおねだりしちゃうのっ♪ だからレイプにならないから、学校でもやりまくるのっ♪」

「しないって。棗さん、桃さんはベッドでいいですか？」

「その椅子でいいわ。体が小さいから卵が床に落ちたりしないし、あの子達も新しい姪っ子を見たいそうだから」

「なるほど」

今度こそ弟だと言っているフウカの声聞きながら、まだ勃起したままの肉棒を狭い膣から抜く。

あれだけイキまくって意識まで失ったから膣は当り前のように緩んでいるんだけど、それでも狭く感じるのはそれだけ名器だということなんだろう。

肉棒を抜いても、あれだけ膣内に吐き出した僕のザーメンは1滴も流れ落ちない。

そして棗さんがレバーを操作して背もたれが緩やかになった椅子に桃さんを座らせると、そのお腹が見る間に大きくなってゆく。

「ううっ……」

やっぱり苦しそうだ。

申し訳ないな。

そう思った僕の手を、棗さんが優しく握る。

ありがたい。

最近手放せなくなったタバコを吸いたいと思ったけれど、こうしてくれていたら大丈夫そうだ。

「おっ。出た出た」

「早く生まれておいでなのっ♪」

セイとフウカも楽しみなのか、椅子のそばに来て卵が膣から出てく

るのを見守っている。

その卵が椅子のレザーを転がって床に落ちる前にそうつと受け止め、すっかり元通りになった桃さんのお腹に置いた。

もちろん僕が手を添えているし、その反対側には棗さんが移動させた桃さんの小さな手が添えられている。

セイが魔法で清潔にしてくれたらしい桃さんの顔の横に僕の顔を寄せて、割れ始めた卵、頑張つて生まれてこようとしてくれている我が子を見守る。

「おおつ、スゲーっ！」

「かわいいかわいい妹なのっ！」

「にしても、これは。半人半蟲、つて言っているのかな」

「半人半機械蟲、かしらね。桃に似てかわいらしいわ」

たしかにかわいい。

それは今までの子達もそうだけれど、この子は初めて見る不思議な下半身を持っていた。

いや、下半身だけじゃない。

背中と、そこに生えている羽もそうだ。

機械。

そうとしか表現できない、ところどころにゼンマイやネジやナットが見える金属の体。

お腹からは人間の肌。

かわいらしい顔、そして髪型やその色も桃さんによく似ている。

「会えてうれしいよ。もう飛べるかな？」

機械の体を持つ女の子は無表情なところまで桃さんに似たようで、コクリと頷いてから薄いガラスの羽を振動させて、僕と桃さんの顔の間に移動してくれた。

「ありがとね」

言いながら小さな人形のような頬にキス。

すると女の子は薄く笑みを浮かべて、桃さんの頬にキスをした。

「仕草までかわいらしいわね」

「ホントですね。あ、僕は桃さんをベッドに寝かせますね」

「それなんだけど、桃が時間もないしすぐに魔法で起こしてくれって言ってたのよ。セイ、桃を起こしても大丈夫かしら？」

「問題ないのっ♪」

「そう。なら起こしてあげてちょうだい。早くこの子に名付けをしてゴハンをあげないと」

「はい♪」

「待ってろよ。すぐにフウカねーちゃんが影の世界にある、とーちゃんザーマン池に連れてってやるからなっ」

「フウカ、言い方」

「あつ、やべっ。影の中、だった」

妹が生まれてくれて嬉しいのはわかるけど、さすがに迂闊すぎ。

「……ん。ふぁーっ」

「いきなり大あくび。心配して損したわ。桃、我が子を抱いてあげなさい」

「この子が」

「そうよ。あなたとヒロキくんの子供」

「ん。おいで」

桃さんが持ち上げた両の手のひらに、女の子が飛び込む。

そうして桃さんが女の子をそっと持ち上げて頬ずりをすると、よく似た母娘はとても幸せそうに微笑んだ。

「どっちもかわいいなあ」

「2回戦はもう少し後よ、ヒロキくん」

「わかってますって」

「死んじゃうから。あんなの、またしたら」

「セックスで死ぬ訳ないでしょう。それより、名付けをしてあげなさいな。あなたの影で暮らすんだから、桃が名前を付けるのよ」

セイが生まれてくれた時からの習慣。

桃さんはこのかわいらしい末娘に、どんな名前を付けるのだろう。

「ん。……カイ」

「女の子なのにな？」

「ん」

「セイと同じくらい安直ね。あなたはそれでいいの、可愛い子ちゃん？」

女の子が桃さんの手の上でコクコクと頷く。

「カイ、生まれてきてくれてありがとう。桃さんと、お母さんと一緒にこれからよろしくね」

カイがまた頷くと、セイとフウカと棗さんが祝福の言葉をかける。それがひと段落して、棗さんはカイに簡単にでいいからどんな能力があるのか見せてから、お姉ちゃんにゴハンをもらいなさいと言った。

その言葉に頷いたカイはガラスの羽をはばたかせ、すうつと空を飛ぶ。

「ちよ、危ないっ！」

思わず上げた僕の声、それと同じようにカイの体が、なんとモニターの画面に吸い込まれる。

「あらあら」

「マジでっ!?!」

カイ、モニターに入っちゃったよ。

「やるなあ、カイ。さすがオレの妹だぜっ！」

「カイは影の中だけじゃなくて、パソコンとかの機械の中にも入れるのっ♪ でも、それだけじゃないのっ♪」

セイの言葉を証明するように、まだ僕達を映しているモニターの画面が2分割された。

そしてその白い部分に、驚くほどの速さで文字が浮かび上がってゆく。

「す、凄すぎでしょ。カイ……」

「そうね。さすがは銀将級最上位とまで呼ばれる桃の娘だわ。説明は打ち終わったようだし、セイとフウカとお父さんの影の中にゴハンを食べに行つてらっしゃい」

モニターの画面からにゆうつと顔を出したカイは、小さく頷いて2人の姉の元へ飛んでいった。

そして3人が僕の影に飛び込むようにして姿を消す。

「凄い。カイは、かなりの多芸」

「ええっ。もうこの文章、ぜんぶ読んだんですかっ!？」
「ん」

「それだけで桃さんの方が凄いですって」

「うふふ。私達も読みましょう、ヒロキくん。ただし……」

「はいはい。わかってますって。桃さん、ちよつと失礼しますね」

「な、なにっ!？」

棗さんが言いたい事なんて考えなくってもわかる。

それに、こんな目をしてる棗さんに逆らったらどうなるかって事も。

なので桃さんを抱え上げ、その体をさつきとは逆向きにして椅子に腰を下ろす。

「リクライニングを調節する、ヒロキくん？」

「いえ。このままでも読めそうです」

「それはよかったわ。それじゃあ桃、ヒロキくんを勃起させながらチンポにマン汁をたっぷりまぶしなさい」

「い、嫌だ」

「あらそう。前戯なしでぶち込まれたいのね。なら、好きになさい」

「桃さん、ダメです。こんな目をした棗さんに逆らったら、僕にまで被害が。お願いですから言う通りに」

「……ううっ」

いかにも仕方がないって感じで動いた桃さん。

でもその手がまず僕のワイシャツのボタンを外して、すべて脱がせるのすらもどかしいと言うように乳首を舐められ、思わず笑いそうになってしまう。

「うふふ。ずっと受け身でしてたから、夢の乳首舐めができなかったのよね。素直でよろしい」

桃さんは返事をしない。

けれど夢中で僕の乳首を舐めながら、肉棒に手を伸ばして擦り出す。

「あー、乳首舐めされながらの手コキさいこー。ええつと、カイは機械

になら何にでも入って、それを制御したり操作したりできる。ほえー」

「それだけじゃないわよ。機械の状態や構造を解析して、桃のパソコンなんかはそのデータを送信可能ですって。世界最高のハッカーの娘は、世界最高のスパイって事ね」

「うはあ」

やっぱりとんでもないなあ。

直接戦闘が得意じゃない分、隠密には自信があるって書いてるし。

本気の隠密行動を見破れるのは飛車角くらいって、セイとフウカより隠密活動が得意って事でしょ。

「さすがとしか言いようがないわね」

「まったくです」

「そっちの方はどう、ヒロキくん？」

「バッチリですよ。勃起も、濡れ具合も」

「なら、あなたのオナホールに命じなさい」

「はーい。桃さん」

「な、なに」

「今度はキツイ方の穴、ケツマンコで僕のを啜え込んでください。またあのクツサイおパンツを嗅ぎながらザーメン浣腸してあげるんで」「くっ。やっぱり鬼畜……」

そう言いながらも、桃さんは僕の肉棒をお尻の穴に誘導する。

僕がこの事務所に出勤するたび、かなり持て余していたヒマな時間。

桃さんも仕事があるからそのすべてを使うのはムリだろうけど、毎日1回2時間くらいなら大丈夫なはず。

その時間を、このキツキツなアナルでも愉しめそうだ。

閑話・光なき夜空

ブレザーの制服を着た少年が高級外車の後部座席に乗り込む。するとそのドアを閉めた若い女は運転席に戻り、ハイヒールで器用にアクセルを踏んで、車を滑るように発進させた。

ブレザーの制服を着た少年と、ビジネススーツを着た20代の女。奇妙な組み合わせの2人。

その片方、鳴神浩二が後部座席で口を開く。

「今日の予定は？」

「はい。午前中は宮前家、午後は高畑家となってます」

「やっぱ2件もぶっこんだか。ゴールデンウィークだから」

「それと休みの間、夜は浩二様が望むなら箱根の別邸で温泉に浸かって疲れを癒すようにと」

「……褒美のつもりか。あの女狐らしい、いかにも底の浅いやり口だ」

浩二は本音を漏らす。

だが、今夜の事を考えると沈んだ気持ちが浮上するのちやんと理解していた。

箱根の別邸には通いの管理人しかおらず、2件の仕事を終えてそこへ向かえば管理人はすでに帰っている。

となれば裕子と、今ハンドルを握っている好きな女と朝まで過ごせるからだ。

「母上様、ご当主様もお辛いのでしょうか。察して差し上げなくては」

「5人も子供を産んで、全員が男。鳴神の家を継ぐ雷使いの女はついに生まれなかった。そうなれば当然、鳴神の家の発言力は弱まる。

……だけどよ。だからって、自分の息子に春を売らせて他家のご機嫌を取るか？ 普通」

「浩二様もお兄様のように、ご当主様のお選びになった女性と結婚をすれば。そうすればこういった事は」

「嫌だね。俺は好きな女としか結婚しねえ」

そのために毎日、好きでもない、しかもほとんど自分より年上の女を抱く。

裕子にはそんな浩二の生き方が酷く不器用に思えてならない。

当主である母親は浩二が結婚さえすれば、他に女を作ったって文句を言わないだろう。いや、それどころか愛人の子供が雷使いとして生まれてくる可能性を考え、むしろ推奨するはず。

そんなに私を妾にしたくないのですか？

裕子は何度目になるのかもわからない問いを発しかけたが、黙って車を走らせる。

答えは、いつも決まっているから。

「当り前だ。妾じゃなく妻にしたい。そのためになら俺は……」そう言つて浩二はまた唇を噛み締めるのだろう。

「まつすぐと言うべきか、融通が利かないと言うべきか。裕子は判断が付きません」

「俺はワガママなだけだよ」

「なるほど。的確な表現です」

「冗談だつての」

車は進む。

目的地に、容易く到着してしまう。

「着きました。こちらが今日の分になります」

「サンキュ」

小さなスキットル。

映画などでは酒好きのキャラクターがアルコール度数の高い酒をそれに満たして持ち歩いているシーンをよく見るが、裕子が渡したそれには避妊や性病予防、それに精力剤の役割を果たす、水使い謹製の『避妊水』が詰められている。

5つも年下の、それも身分違いの男に惚れた罰。

裕子はこうやって浩二の運転手をするように命じられた時から、自分にそう言い聞かせてきた。

好きな男を欲求不満の女の家まで送る。

自身の能力で作った水を渡す。

裕子が車の中で待つ間、好きな男はその水を何度か口に運んで、それと同じ数だけ女の体に射精する。

そして「お疲れさまでした」と言つて男をねぎらい、また違う女の家へと男を運ぶ。

こんな生活を続けるくらいならば、自分は愛人でも妾でもいいから、浩二には普通の生活を送つてほしい。

そう泣きながら訴えたのは2年前だった。

だが浩二は決して頷かず、ただ「待つてくれ」と言つていた。

「いつてらっしゃいませ」

「ああ。できるだけ早く戻る」

遠ざかつてゆく背中を見送り、裕子は運転席に戻つて深く長く息を吐く。

正解がわからない。

わからないまま、自分達は慣れてきている。

それがいい事なのか悪い事なのかすら、裕子にはわからなかった。

「いらつしゃい。高等部の制服も似合うわね」

「おひさしぶりです、宮前様」

休日だつてのに朝っぱらから制服なんか着せやがつて、変態女。

そんな本音を巧妙に隠しながら笑顔を浮かべ、浩二は豪華なソファアに腰を下ろす。

もちろん、女に密着するようにして。

そして内ポケットからスキットルを出し、琥珀色の酒が揺れるブランデーグラスに1滴の水を垂らした。

「他人行儀な。さやか呼んでよ」

「わかりました、さやかさん」

「うふふ」

ねつとりとした視線で至近距離にある高校生の顔を眺めまわし、さやかはブランデーを口に運ぶ。

直後にアルコールとは違う熱が口腔内を心地よく熱くして、それを飲み下す頃にはすっかり発情していた。

キス。

それに浩二は情熱的に応えるフリをする。
慣れた動きだ。

だが、人払いされているこの豪邸の母屋に歩く途中で口にした『避妊水』の力で肉棒を硬くさせられる感覚には慣れない。

雷使いの家系に生まれた情報系。

それも銀将級である浩二は、精通が来たと同時に淫気祓いの師を付けられて修行をさせられた。

師匠が裕子の母で、相手役はその娘である裕子。

雷使いの本家に生まれた情報系と、見鬼系の分家に生まれた水使い。

それが裕子に惚れた理由だなどと浩二は思っていない。

ただ、惚れたからには幸せにしなればと、それだけを考えて日々を生きている。

「くっ。いきなりですか」

「ええ。だって、おしゃぶりしたいんだもの。今日もイイ香りよ、浩二くんのオチンポ……」

ズボンのチャックを下ろして無造作に取り出された肉棒の、それもカリ首で鼻が鳴る。

この変態女はこのためだけに浩二がシャワーを浴びる事すら許さず、そしてこんな朝の早い時間から酒と淫臭に酔って悦に入っているのだ。

バカバカしい。

浩二はそうとしか感慨を抱かず、目を閉じて裕子の痴態を瞼の裏に描く。

「カウパーが垂れてきたわ」

「さやかさんが意地悪するから。こんな美人さんに嗅がれてるだけじゃ、息子だって泣きたくもなるでしょう」

「うふふ。じゃあ、おしゃぶりしちゃうわね」

「お願いします。さやかさんが呼んでくれたから、昨日はオナニーしてないんで」

「素敵。なら、最初はお口に吐き出して」

「ほら」

熟練の、とまでは言えないが20代の後半という年齢の女らしい、慣れた技巧の口淫。

それを目を閉じて受けながら、浩二は別宅の自室にあるクローゼットの中に思いを巡らす。

セーラー服。

ブルマ。

旧型のスクール水着。

ナース服。

警官風の衣装もいい。

今日は、裕子にどんな服を着せようか。

ぺちやつ、ちゆくつ。

しおらしい水音が徐々に激しくなつてゆく中、浩二の脳裏には様々な衣装を着た裕子の姿がスライドショーのように流れている。

そのスライドを止めて、浩二は裕子にスカートを上させた。

車で道を走っていればかなりの確率で見つける、チエーン店の制服。

とは言っても肌の露出などほとんどない、地味な制服だ。

裕子はその制服の帽子までしっかりと頭に乗せて、恥ずかしそうにスカートを上げてゆく。

じゅぷっじゅるっちゅぽっぢゅぽっじゅっぷじゅっぷ。

淫音は大きくなり、リズムもかなり上がっている。

夢中で肉棒をしゃぶっているさやかは、もう口腔内に男子高校生の濃い精液を吐き出される事しか考えていない。

この若々しい亀頭がふくらみ、浩二が限界を告げる時、どこでその精液を受けるべきか。

上顎を叩くあのくすぐったい感覚を受けてから青臭い精液を飲み下そうか、射精の勢いを最も感じやすい舌先を尿道に押し付けようか。

いや、頬の内側に深く強く押し付けて射精させ、精液が舌に届くまでの刹那の時間に身を焦がすのもいい。

「……出る」

宣言の前に『裕子』と口に出さぬよう細心の注意を払いながら、浩二が呟く。

その声音の余裕のなさに、さやかの子宮が疼く。

「らひへ、おくひにつー！」

ラストスパート。

さやかはついに訪れたその瞬間、舌の裏のスペースに亀頭を挿し込み、舌裏で尿道を包むようにしながら肉棒を手でしごき上げた。

舌裏で亀頭をふくらませた若々しい肉棒が跳ね、敏感な場所に熱い迸りがかかる。

それを追った青く生臭い香りが鼻腔にまで上がると同時に、口腔内を若い男の精液で満たされた満足感がさやかの全身を包む。

これだ。

このために自分は昨日まで、東北の山中を8日も駆け回っていたのだ。

体も洗えず、酒も飲めず、食事は現地調達した肉や野草を塩味で調理しただけ。

もちろん単独での狩りではなく、東北の名家と呼ばれる家の家中の者を伴っての狩り。なのでロクに自慰すらしていない。

だがこうやって女の本能を満たす時間があるからこそ、さやかは日々の激務にどうにか耐えられる。

「ふうっ。ありがとうございます」

「こつちのセリフね。それに、まだカチカチ。若いっていいわあ」

「次は俺がしましょうか」

「ダメよ。今すぐにもオマンコで啜え込まなきや、頭がおかしくなるわ。脱ぐわね」

「ええ」

さやかが手早く服を脱ぎ捨てる間に、浩二はスキットルを傾けて舌の上で惚れた女の水を転がす。

別に精力剤の効果を足した避妊水など口にせずとも、若い体は容易く連続で射精するだろう。

だが、それでも浩二は必ずスキットルを傾ける。

「見て、もうドロドロ」

言いながら腰を突き出し、濃い恥毛が汗で張り付く大陰唇を指で割って淫肉を浩二の目に晒す。

浩二は服を脱いでいない。

ブレザーの制服のままだ。

男子高校生に跨り、腰を振りまくって膣を青臭い精液で満たす。

それがさやか望みだと知っているから。

「すつかりほぐれてますもんね」

「あんっ、指い……」

媚びるような嬌声。

それを不思議なものだと思いつつ、浩二は2本の指を熟しかけの膣肉に埋めてゆく。

女は男より強い。

それが能力者の常識であり、それを示すように女能力者は男に金を払って抱きまでするのに。

なのにどうして女は男に媚びるのだろうか。

「キュウキュウ締めつけながら、俺の拳にまでマン汁が垂れてくる」

「だってえ、あんっ！　そこダメえ!？」

ゴールデンウィーク初日、浩二はすつかり陽の暮れた空を見上げながら2つめのハンバーガーにかぶりついた。

隣にはそのハンバーガーチェーン店の制服を着た裕子が座っていて、その手には同じハンバーガーを持っている。

「たまにはいいよな、外でこういうジャンクフードを食うのも」

「はい。このコスプレがなければ、ですが」

「そう言うなって。似合ってるよ」

「似合う似合わないの話ではないのですが」

言ってもムダかと諦め、裕子は浩二が見上げている夜空に視線を移す。

厚く雲が垂れ込めた、晩春の夜空。

星どころか月さえ見えないその夜空が自分達の行く末を暗示しているような気がして、裕子は苛立ちを隠しながら炭酸飲料を口に運ぶ。

「今は星が見えなくてもさ」

「えっ」

「きつといつか、空は晴れるから。だから俺、頑張るからな」

「……………はい。微力ではありますが、裕子はそれを支えたく思います」

ゴールデンウィーク1

「もう止めはしない。だが、充分に気をつけてな」

「ケガなんかしたら許さないわよ、ご主人様」

そう言いながら玄関で靴を履いた僕を心配そうに見ているのは、ホムラさんとアヤメさん。

昨日の夜、事務所で桃さんと棗さんと別れた僕は、自宅には帰らずこの部屋に来た。

まずお酒を飲みながら「ゴールデンウィークにちよつとした泊りがけの依頼をするので、しばらく顔を出せません」と言うと、2人はやっぱりかと呟いて顔を見合わせた。

どうして「やつぱり」なのかはすぐわかるそうなので、まあ気にしない事にしておく。

そしてその後は、当り前のようにセックス三昧。

2人はついさつきまで僕の下で喘いでいた。

「わかってますって。じゃあ、行ってきますね」

「ああ。セイ、フウカ。とんでもなく強いが、その分どつか抜けてる父親をよろしく頼むぞ。こんな時だから昨夜はやめておいたが、ヒロキが戻ったらあたし達も妹か弟を産むんだから」

「本当にお願ひね、帰ったらトンカツとフィッシュ・アンド・チップスをたくさん作るから」

「わあってるって。ほんじゃなっ」

「任せてなのっ♪」

影から顔だけ出したセイとフウカが言う。

「じゃ、いつてきます」

「気をつけてな」

「無事を祈ってるからね」

はいと返事をしてドアを開け、夜も明け切っていない朝の澄んだ空気を身に纏う。

春の払暁。

戦う心構えをするには悪くない肌寒さと、空の色だ。

(まずは事務所だね)

(ああ。腕が鳴るぜっ！)

(人喰いなんて、セイ達が皆殺しにしてやるのっ♪)

(まだ気が早いって)

夜明けくらいに桃さんの事務所へ着いて、そこで朝ごはんを食べつつ最後の打ち合わせ。

高知空港への最初の便になる飛行機に乗っても、向こうに着くのは午前9時くらいになるらしい。

初めて行く四国。時間が余ったら、観光でもしたいねえ」

車に入ってしまったえばセイとフウカは後部座席にいたので、エンジンをかけながら声に出す。

「あと土佐の女の味も見とかねえとな」

「はちきん娘をチンポ大好き娘にしてやるのっ♪」

「うん。あんま上手くないね」

「ぶーっ、なのっ！」

高知と言えばカツオのたたき、それからなにがあったっけ、なんて話しながら車を走らせる。

そしてたどり着いた事務所のドアを開けると、カイが飛んできて僕の頬にそっとキスをしてくれた。

「あ」

「どうしたの、ヒロキくん」

「いや、事務所の外に出る桃さんを初めて見るなあって」

「なるほどね。それより桃、ちゃんと歩きなさい。転ぶわよ?」

「そうですよ、桃さん。桃さんは僕のオナホールなんですから、勝手に壊れたりしたら怒りますよ?」

「うるさい。変態コンビ」

失礼な。

四国の、それも八十八家とまで呼ばれる家のお家騒動をつぶさに見ておきたいという、棗さんの依頼。

それに応じたので棗さんの家に泊まりこむという桃さんが珍しくワンピースなんか着てたから、ラッキーなんて言いながらその場で犯して、ゴハンを食べたりコーヒーを飲んだりしながら、前と後ろに2回ずつ射精したくらいで。

「オマンコはまだしも、アナルの精液を少しでも漏らしたらお仕置きよ？ それは飛行機に慣れないヒロキくんをリラックスさせるため、マモリに見られながらうちのトイレで出すんだから」

「楽しみです。けど、飛行機かあ」

エレベーターみたいな感じで飛ぶのなら、地獄の1時間と約半分。そう覚悟して乗った飛行機は、エレベーターほどの気持ち悪さを僕に感じさせず高知空港に下り立ってくれた。

行き羽田とかいう空港では棗さんと桃さんがいてくれたので拍子抜けするくらい簡単だったのに、僕一人で空港を出るのにはかなりの苦勞をさせられたけど。

「待ち合わせ場所、ここだよねえ。ただ待つてればいいって言われたけど」

「失礼。貴殿はもしや、桃子様の」

僕が足を止めると同時に声をかけてきたのは、大仰な言葉遣いのお爺さん。

「あ、はい。六道です。わざわざすみません」

「いえいえ。さ、こちらに。車を待たせておりますので」

「お世話になります」

僕でも名前を知っている高級車、ベンツの後部座席にお爺さんは座らない。

それどころか助手席に座って運転手の若い男の人に「出せ」と言っただけり声を上げないので、なんだか居心地が悪い。

(とーちゃん、俺達は影から出ちゃダメなのかよ?)

(んー。とりあえず待つて。桃さんのお兄さんと妹さんが仮住まいしてるって家に着いたら、出てもいいから)

(ふうん。な、なんだそのスーパープレイ！ どうやったんだよ、カイ!?)

(カイはゲームの天才なのっ♪ 好きなだけで別に巧くはないフウカじゃ、説明したってできっこないのっ♪)

(んだとセイ!? オレだってその気になればなあっ!)

退屈してるのかと思ったら、そうじゃないみたいだ。

携帯ゲーム機で遊ぶ3人の声を聞きながら車に揺られる。

意外と都会なんだねえ、四国。

あれっ、かなり緑が多くなってきたぞ。

ええっ。こんな細い道を進むの？

道が林道にしか見えないんですけどっ!?

そんな風に変化していった僕の心の中の独り言は、不意に変化した景色に驚きの声を上げた。

ありふれた田舎の集落。

そうとしか言えない舗装された道をベントツが進んでいるから。

あんな道を通って、まさかこんな普通の集落に辿り着くとは。

桃さんのお兄さんって、大昔の軍師みたいな人なのかな。

いや、道路や集落がそんなに最近になって作られたはずがない。

だからこういう場所に集落があるのは昔からで、こんなのは四国八十八家の能力者が暮らす隠れ里みたいなものなんだろう。

「お待ちせいたしました。すぐに、雄二様とリコ様がお待ちになっておられる部屋にご案内します」

「ありがとうございます。大きな家ですねえ」

平屋の木造建築だけど、家屋面積がハンパじゃなさそう。

「守りやすさを考慮してここを使っておりますが、それで六道様にもご不便をおかけするかと。平にご容赦を」

「いえいえ」

「こちらです」

隅々まで磨き上げられた板張りの廊下を進み、何度か折れて通された広い部屋。

そこではスーツ姿のイケメンさんと、見た事のある制服を着た眼帯美少女ちゃんが正座をして僕を待っていた。

「遠路はるばる、わざわざご足労を。まずはそれをお詫びします、六道

様」

「いえいえ。ヒロキでいいですよ。それと、こんな若造が上座はちよつと……」

上座、下座。

そういつた知識や慣習は棗さんではなく、剣の師であるアヤカさんに仕込まれている。

「いいえ。桃子の話を聞く限り、本来ならば一族が総出で頭を垂れてお出迎えするのが当然のお方なのです。どうかお気になさらずその座布団をお使いください」

「こういうの、好きじゃないですよねえ。でもま、話が進まないから失礼しますね」

「座布団が3つ。ならオレは、とーちゃんの左っ！」

「じゃあセイは右なのっ！」

「はいはい。カイは僕の手の中でいいよね。まず、自己紹介と行こう」
簡単な自己紹介を終え、その最中に出された香りのいい緑茶をありがたくいただく。

まずは湯飲みを傾けてカイに飲ませて、それから僕も緑茶を啜る。

「おいしーのっ♪」

「だねえ」

「オレはお茶より、……なんでもねえよ。そう睨むなって、とーちゃん」

「まったく。それじゃあ雄二さん、まずはこの辺りの地図を」

「はい」

「兄上、私が」

「ありがとう、リコ」

眼帯美少女、リコちゃんが立ち上がって、3畳くらいありそうな大きな紙を僕達の間置く。

所作も、歩き方も、立ち姿も美しい。

相当に体術を鍛えていなければ、なかなかこうはいかないものだ。

でも所作がキレイすぎて、パンチラチャンスがないのは残念。

「かなり書き込んでありますね。印や数が」

「はい。この子、リコは斥候向きの能力者ですのぞ」

「僕と同じ使役系。しかも珍しいムカデ使いでしたっけ。ところでリコちゃん。その制服って、もしかして？」

「はい。本当ならば六道様と机を並べていた、しかも同じクラスの高校。能磨学園高等部の制服です」

「やっぱりかあ」

入学式からずっと欠席していた生徒。

その家名が藤村で保護者の連絡先があゝの電腦妖精の事務所、本当の理由は知らなくとも欠席がこれだけ続いているれば、担任と副担任であるホームラさんとアヤマさんが、桃さんの妹さん絡みで僕が四国に行くと思当をつけるのは当たり前か。

「えっ……」

「どしたの、リコちゃん？」

「浪姫、あ、いいえ。私の使役するムカデが六道様に挨拶したいと。そんな事、初めて言ったものですから。少し驚いて」

「なるほど。なら、僕も会いたいな。食べれるようなら、お母さんのとは味の違う使役力もあげるし」

「ですが、その。私とこの子は、なんと申うか。その、……2人とも不気味なもので」

泣き出す直前の子供のような表情でリコちゃんが言う。

「怒るよ？ そんな言い方をする使役系なんて、存在していいはずがない。絶対にそんな言い方はしないで」

「わ、わかりました。その、ごめんなさい……」

「わかってくれればそれでいいから」

「リコ。おまえが気にしすぎなんだと、いつも言っているだろう。ほら、六道様に浪姫を紹介しなさい」

「は、はい。おめ、……なんでもありません」

お目汚しとか言ったら怒る。

そんな感情を視線に乗せただけでそれを察して、リコちゃんが手を持ち上げる。

頭のいい子みたいだ。

黒い涙。

そう思ったけれど、違った。

リコちゃんが眼帯の下の方をちよつと持ち上げるようにすると出てきたのは、涙ではなくムカデ。

その子は頬から顎、首筋、リコちゃんが伸ばした腕と指先を通って畳に下り立つ。

「かわいいなあ。おいで」

ひよこつと上げた頭部を左右に揺らしながら、まるで照れたように僕とリコちゃんを見た浪姫ちゃんは、母親のような存在であるリコちゃんが頷くと、地図を横切つて僕の前まで来てくれた。

ゴールデンウィーク2

「とーちゃん、ついでに外にも。あと、カイがノーパソ出せって言うから取ってくる」

「お願いね」

「カイの腕見せなのっ♪」

腕見せ。

能力者、特にフリーで仕事をする人はよくそんな言い方をする。

自分を雇う人間にその腕を見せ、それに合った依頼料を貰うために。

「ほらよっ、とーちゃん。ノートパソコン」

「ありがと。雄二さんとリコちゃんにも見えるように、よいしょっと」

立ち上がり、フウカが出してくれたノートパソコンを全員で見れる位置に置く。

するとカイが微笑みながら僕の手の中から飛び立ち、まだ開けてもいないノートパソコンの中に消えた。

「こ、これはっ」

「姉上が産んだ子が、ノートパソコンの中に」

「それだけじゃねーぞ。カイ、準備開始だ」

ノートパソコンのフタのようなモニターが、触れてもいないのに上がってゆく。

そしてその真っ黒な画面に微笑んだカイが一瞬だけ映ると、見慣れた起動画面が映ってノートパソコンが立ち上がる。

このノートパソコンはモニターを自動で上げる機能なんて付いてないから、そうするための機構も動力もないはずなんだけど。

「さすがだねえ、カイ」

「まだまだこんなもんじゃねえって。だからとーちゃん、早く降らせろっての」

「はいはい」

「降らせる、ですか？」

「ああ。僕はこの子達だけじゃなく、自然界にいる虫達も使役できるから」

「普通の使役系はどちらかだけ、ですよね」

「うん。じゃ使役力を、ほいっとな」

縁側の向こうの見事な日本庭園。

そこに、音もなく雪に似た使役力が降り出す。

「こんな量を……」

「浪姫ちゃんもどうぞ、はい」

目の前にすうつと現れた雪玉のような使役力を見て、浪姫ちゃんがリコちゃんに視線を向ける。

「食べたいなら貰っていいよ、浪姫」

「わあっ。頷いた。やっぱかわいいなあ」

「……初めて言われました」

「そうなの？ 母娘してこんなにかわいいのに。おお、美味しい？
ならもつとお食べ」

「かつ、かわっ、かわっ……」

真っ赤な顔して焦ってる。
かわいいなあ。

「そういうトコもかわいい。セイ、まずはこのくらいの数でいいかな？」

「おっけーなのっ♪」

「じゃ、始めよう」

「偵察、それにカイと桃ママの解析も開始なのっ♪」

「あ、忘れてたや」

スーツの胸ポケットからスマホを取り出す。

するとそれは僕が電話帳を開こうとしているうちに震え出して、画面に『桃さんスマホ』という文字が浮かんだ。

「ははっ。桃かーちゃん、さすがだぜ。とーちゃん待ってたら、夜になっちまうからな」

「さすがにそこまではかかんないってば。もしもーし。あ、はい。パ

ソコンで通話？ そんなの」

できるんですか？

とまで言い切らないうちに、ノートパソコンの右上に小さく桃さんが映し出された。

そこに映る桃さんはあいかわらずの無表情だけど、どこかいつもと違う感情の色が滲んでいるようにも見える。

「雄二兄、リコ。おひさ」

「桃子」

「姉上つ。すみません、わがママを言っつて」

「ん。戦いたいなら戦っていい。ただ、早く終わらせて帰っつてきて。じゃないと身が保たない。ヒロキは鬼畜」

「失礼な。それよりどうです、接続とか？」

「バツチリ。セイからカイに、カイからこつちのパソコンに、すべての蟲の視界が来てる」

「……ホントにできてるのか。凄いなあ」

「桃ママ、どんどん指示してほしいのっ♪」
「ん」

桃さんの指示を受け、セイがそれを蟲達に伝える。

偵察と言うよりは侵入になるんだろうけど、敵の様子が見えるのはまだまだ先。

なので浪姫ちゃんに手を差し出し、手の上で使役力を追加して食べさせた。

「かわいいなあ。うちの子達にはこういうのできないから、なんか新鮮」

「そうなのですか？」

「うん。このセイとフウカと、パソコンの中にいるカイなんかにこうして使役力をあげると、ブーストされたみたいに力が強くなるんだよね。だからこの子達ももっと成長するまで、それは控えてるんだ」
「なるほど」

「ホントはオレ達も食いてえんだけどな。とーちゃん、直接ザーメン飲ましてくんねえし」

「ザっ!？」

「こら、フウカ」

処女のリコちゃんの前でザーメンなんて言うんじゃないやありません。かわいそうに。

こんなに顔を赤らめて。

……恥ずかしがる処女って、やっぱりいいね。うん。

「へへっ。ねーちゃんも、とーちゃんのザーメン飲めよ。聞いたぜ？
金将級ならオレ達みてーな人間型、いてえっ！ なにすんだよ、
とーちゃん！」

「叱られて当然。初対面の男の子供を産めとかもそうだけど、金将とか軽々しく言わない。それでリコちゃんがどれだけ苦しい思いをしてると思ってるの。ほら、リコちゃんに謝る」

「い、いえ。そんな」

「まー、オレが悪かった。ねーちゃん、ごめんな」
よろしい。

間違えて人を不快にさせたら謝る。

それが当たり前なんだ。

「……大丈夫。ありがとう、フウカさん」

「フウカでいいって。それより、とーちゃんとーちゃん」
「ん？」

「オレ、このねーちゃん好き。浪姫もっ」

「そっかそっか。よかったねえ」

「おう。浪姫、ねーちゃんとゲームしようぜっ！」

「いや、ムリでしょ」

常識的に考えて。

「浪姫はゲーム好きだから、遊んであげて。フウカ」

「やあつた。浪姫、こっち来い！」

ウソでしょ？

そう思いながら目をやると、フウカがジーンズのポケットから出した携帯ゲーム機に浪姫ちゃんが巻きつき、見事にその電源を入れた。
「僕が言うのも変だけど、凄いな。リコちゃんと浪姫ちゃんも」

「いいえ。とんでもないです」

蟲達はまだ目的地に到着していないので、携帯ゲーム機に巻きついたムカデがアクションゲームをするという他では見られない光景を見守りながら、18歳になったら金将と認定されるリコちゃんの苦悩を考えてみる。

長兄は銀将で、もう1人の兄と姉である桃さんも銀将級。

ところが春から高等部へ進学するからと、わざわざ解析系能力者に高いお金を払って現時点での能力者等級を見てもらったら、自分はないと金将級は確実に言われてしまった。

親は喜ぶだろうけど、兄、それも家を継ぐ事になっている長兄は面白くない。

かつては優しく穏やかだった兄は一族の不良のような連中を集めて、成駒を果たすため『人喰い』にまで堕ちた。

どれだけ自分に落ち度がなくとも、リコちゃんの心中は……

「ねえ、桃さん」

「ん」

「僕、やっぱり来てよかったです」

「ん。ありがとう」

この子の代わりになら、何人だって斬ってやる。

そう心に誓いながらお茶を飲んでみると、ノートパソコンのモニターに映る地図に赤い点が浮かぶ。

「最初だから近いね。えーっと、視界は、……ちよつと出てくる。セイ、フウカ。ここの守りは任せたよ?」

「オレは留守番かよ」

「ととさま、靴と鬼斬りを出すのっ♪」

「ありがとう。こんなクソ女達の血で、アヤカさんから貰った鬼斬りを汚しちやダメだって」

能力者、それも戦う力が強い者には女が多い。

でもだからと言って高校生くらいの男の子を裸にして犯していいはずがないし、ついでのように拉致したその妹に「今ここで兄とセックスしないと2人の骨を順番に折ってやる」なんて言っていないはずが

ないだろう。

それも、全裸で下品に笑いながら。

いいから口元と陰毛にへばりついているザーメンくらい拭けと言いたい。

「ととさま、鬼斬りと靴なのっ♪ それとナビは任せてなのっ♪」

「お願いね。桃さん、ちょっと行ってきます」

「ん」

縁側で靴を履き、鬼斬りを持って駆け出す。

「姉上、これはいつたい……」

「鬼畜がそれにも劣るクズを斬りに行った。ヒロキくらいになると壁なんてジャンプで越えられるし、車より道なき道を走った方が早い。それだけ」

「誰が鬼畜ですか、ホント帰ったら憶えといってくださいね。桃さんっ！」

叫びながらジャンプ。

桃さんの言葉通り、高い塀を跳び越えてまた駆け出す。

（ととさま。しばらく真つすぐ、目的地は山3つ突っ切った先の炭焼き小屋なのっ）

（了解。間に合ってくれよ）

走る。

それだけじゃ間に合わない。

逃げ急げと自分を急かし、集落から深い山に分け入る。

「ひさしぶりだなあ、こんなのも」

言いながら、また跳ぶ。

地面は春に芽吹いた草木が生え放題。

だから、この方が早い。

ジャンプ。

大木を蹴る。

蹴った勢いで次の木に跳ぶ。

それを、繰り返す。

吉喰流の初歩的な移動方法。

(見えたのっ！)

敵、クズ女3人は不良娘だからか、人里から離れた炭焼き小屋に兄妹を連れ込んだ。

だから間に合った。

けれどこの感じじや、間に合わず今も泣いている男女がたくさんいるんだろう。

「全員、叩き斬ってやるからな……」

炭焼き小屋。

かなり長い間使われていないのか荒れ放題の室内で、5人の男女が固まっている。

甘い。

他者が現れて動きを止めるなんて、3流以下だ。

「な、なんだテメエっ！」

踏み込む。

逆袈裟の一撃。

それだけで全裸の女は血を噴き出しながら、真つ二つになった。

「なんっ!？」

「ひっ、火よっ!」

甘い。

炎使いの家系なら、小さな子供だって無詠唱で【炎弾】くらい出せるだろうに。

「ぎっ……」

「おい、どうしたっ!？」

「ああ。死んでるから、それ」

僕の言葉が合図になったように、女の上半身が床に落ちる。

噎せ返るほどの血と、生臭い臓物、それとそこの中にあつた糞尿のせいで、狭い室内に酷い悪臭が満ちた。

「ううっ……」

「お、おえっ」

「吐いてもいい。ただ、目は閉じておくんだ。いいね？」

兄に跨って処女を散らす寸前だった女の子が、ボロボロと涙を零し

ながら何度も頷く。

「君も」

「はっ、はい」

兄妹が揃って瞳を閉じる。

「さあ、死ぬ。クズ女」

「な、なんなんだよアンタ。自分がなにしたかわかってんのかっ?! 八十八家の次期当主、その部下を殺したんだぞっ?! どうなるかわかってやってんのかよっ!?!」

「その次期当主様もこの手で殺すさ。じゃあな、痴女ネエチャン」

肋骨を避けた突き。

それが心臓に突き立って、あっけなく最後のクソ女も死んだ。

どうつと音を立てて汚れた床に倒れた女から、かわいそうな兄妹に視線を移す。

「立てる?」

「は、はいっ」

「君達は藤村家の?」

「い、一族ですっ。その、能力はないんですけど」

「そっかそっか。僕は桃さんの部下で、お兄さんと妹さんを手助けに来てるんだ。家まで送ろうか?」

「い、いえっ。自分達で帰れます。助けていただいて、ありがとうございます
いました」

「うん。さすが、肝が太いね。でも、妹さんはそうじゃない。心のケア
もしっかりお願いね」

「……わかりました。俺も能力者だったら、妹をこんな目には」

「それを悔いても仕方ないよ。さ、お帰り」

「はい」

何度もお礼を言って兄が妹に肩を貸し、炭焼き小屋を出てゆく。

その姿が見えなくなつてからタバコを啜えて火を点け、入り口から奥に向かって伸びる影に視線をやった。

「セイ、これいる?」

「当り前なのっ♪」

影から出てきたセイが魔法で死体どころか、血や尿の1滴も残さず室内を片付ける。

なんでもいつか死肉を好む妹か弟ができれば、物が腐らない影の中に溜め込んでおいた死体を外の世界に山と積み上げて、好きなだけ食べさせてあげるんだそうなの。

「……優しいんだか酷いんだか」

「優しいに決まってるのっ。それよりとさま、こんなのまだまだ序の口なのっ」

「みたいだねえ。人喰いが、好き勝手やりやがって」

「まずは戻って潰す順番をつて。それとちよつとした仕掛けをしたいつて、桃ママのお兄さんが言ってるのっ」

「この戦の大将は桃さんのお兄さん、だから好きにしてつて伝えて。それとセイはフウカの影から先に戻つてていいよ。これ吸つたら、僕もまた走つて帰るから」

「はあい」

ゴールデンウィーク3

桃さんのお兄さんと妹さんが仮住まいしている家に帰る。

「同じ家、同じ部屋。」

「そのはずなんだけれど、あれ？」

「えっと」

「おかえりなさいませ、主様」

「……はい？」

「この子は、なにを言ってるんだ。」

そしてそのリコちゃんはどうして薄い夜着を着て、大きな布団の前で三つ指を付いて僕を出迎えてるんだ。

「こんなの、まるで。」

「ん。初夜のお仕事、まだ昼だけど」

「パソコンから桃さんの声。」

「……いやいやいやいやいやいや。待って待って」

「待たない。サラとアヤカ、棗も早く破瓜の瞬間を見せろって」

「話が急すぎますって！」

「リコはそうじゃないから別にいい」

「どういう意味です？」

「前々からリコには言ってた。そんなに長兄を自分で殺したいならヒロキに孕ませてもらって、その子の力を借りるしかないって」

「マジですか」

「そんな美味しい話があるのと言いたいけれど、実の妹が兄を殺すなんて。」

「ん。だから問題なし」

「いやいや。こんな子に人殺し、それも実兄をなんて」

「お願いいたします、主様。あの男はそれだけの事をしました。そうではなくては私は、自死でもする他に詫びる方法がありません」

「詫び？」

いきなり歯を食いしぼる音が響く。

まるで昨日の桃さんだ。

こんなところに、姉妹らしきを出さなくっていいのに。

「能磨学園に留学するまで、実の姉妹のように育った幼馴染み。それが」

「わかった。もう言わなくていい」

「そこまで聞けば簡単に想像がつく。」

「ありがとうございます、主様。どこまでも身勝手な事を言っているのは承知しています。ですがどうか、どうかお情けを。本懐を遂げたなら私は身も心も全て捧げ、主様のために生き、そして死にます。ですから、どうか……」

土下座。

「そうまでされたら、断るのもどうかとは思いますが。」

「人を殺す。それも、実の兄を。たぶんリコちゃんが思ってるよりキツイよ?」

「覚悟の上です。それでも、私はアイツを許せない。いつか雄二兄上のお嫁になるんだと恥ずかしそうに微笑んだ、あの子の、笑顔に、私は……」

「畳にボタボタと涙が落ちる。」

「その子が生きているのか、死んでいるのかもわからない。」

「けれどその友人の敵討ちがしたいと思うのは、能力者であれば当然なんじゃないだろうか。」

「わかった。なら、お膳立ては僕がしよう。ないなら鬼斬りも貸す。だから」

「じゃありこ、この集落に集まってる男全員に犯されてくるといい」

「わかりました、姉上」

「待って待って、なにそれっ!?!」

「リコは最初からそうするつもりだった。だからそういう償い方じゃなく、ヒロキに孕まされて、その恩返しに飽きられるまで、何年も何十年もヒロキだけに犯されるって説得した。ヒロキが断ったら、すぐにリコはそれを実行する」

酷い。

この逃げ道の塞ぎ方は、絶対に棗さんの仕業だ。

どうしてくれよう。

「ええっと、他に方法は？」

「ない。リコは泣きながら男達に犯されて、兄を斬った夜に懐剣で喉を突く。そうしたいならどうぞ、断って」

「ぐああ。棗さんに伝言をお願いします。次に会ったらその場でぶち犯しますよ！　って」

「ん。……犯されるフリしてたつぷり愉しむからお好きにどうぞ、って笑ってる」

「ったく。でも本当にいいの、リコちゃん？」

「はい。その、主様がいいです。主様だから、お願いしたいんです」

いやそんな顔を赤らめて、告白でもするみたいに言われても。

なんか勘違いしちやいそう。

「じゃあ、ここ閉めるね」

「私が出ますので、主様は夜具に」

「あ、うん」

「その。申し訳ないのですが、主様を脱がせながら愉しませる方法などは、これから学びますので。今日は主様をご自分で脱いでいただけると」

「いやそんなの学ばなくていいから。にしても、いいのかなあ……」

すぐに薄暗くなった部屋でスーツを脱いでゆく。

とまどい半分、期待も半分。

そんな感じだ。

「おおっ！」

スーツを脱いで最後にボクサーパンツを下ろしかけていた僕のそんな声で、薄い浴衣のような夜着を肩から落としかけていたリコちゃんの動きが止まる。

着痩せするタイプのように、思っていたよりボリュームのあるお胸とお尻。

それを見て、思わず声が出してしまった。

桃さんの妹さんで、顔もよく似てるのになあ。

Dカップはありそうなほどよい美乳じゃん。

……桃さん、ドンマイです！

「ヒロキ、殺す」

「こ、怖いからマジっぽく言わないでください」

というか、当たり前前みたいに心を読まないで。

心臓が悪い。

「まずは目で愉しめますか、主様。自慰でも放尿でも脱糞でも、お命じ下さればすぐに」

「い、いやいや。初めての女の子にそんなの」

「そうですか……」

長いポニーテールが揺れる。

リコちゃんが哀しそうにうつむいたから。

(ととさま、これ見てなのっ♪)

セイの声。

これってなにと口に出す前に、変化に気づく。

帯を落とした夜着の前をすべて広げ、15歳にしてはポリウームのある肢体を僕に見せているリコちゃんの横に、興奮度なんかとは違う表示が出ているからだ。

その文字は『性癖、主である六道ヒロキの好むすべて』と書いてあった。

(性癖読み、できるようになったの？ 精度は?)

(まだカイのサポートを受けてるから、精度は100パーなのっ♪)
なるほど。

僕とその使役対象はそのすべてが視界なんかを共有できるけど、情報系のカイが普通じゃわからない漏れ出す淫気を解析し、それをセイに伝えて性癖を読めるようになったと。

いや、まずはセイが情報を渡して、それをカイが解析なのかな。

ま、どうでもいいか。

(カイは特技が多いねえ。でも僕の好むすべてって。ホントかなあ)
「主様」

「あ、はいはい」

「その、できれば私が主様に、なんと言うか。愉しんでもらうような、そんな感じでよろしいでしょうか？」

「せっかくの初めてなんだから、普通がいいんじゃない？」

「あ、いえ。どちらかと言うと私が、その……」

攻めがいいって事ね。

バッチコーイ！

「わかった。布団に横になればいい？」

「お願いします」

受け身セックスも大好物。

いくら処女でも、途中でクンニくらいはさせてくれるだろうし。

大きな掛布団をめくって、敷布団の真ん中に横になる。

するとリコちゃんは恥ずかしそうにしながら夜着を畳に落として、裸になって布団に入ってきた。

「えっ」

「ど、どうしましたか、主様」

「あーっと、うん。なんでもない」

「そうですか。では、失礼します。なにぶん初めてですので、拙さはご容赦ください。……んっ。主様の肌、甘いですね」

どうしよう。

媚薬効果をセイの魔法で薄らせるべきなんだろうか。

でも、普通にすると処女は痛いってエッチな本に書いてあったような。

(ととさま、そのままでもいいのっ)

(そなの?)

(そりやあそーだろ。孕ませるなら何回も中出しキメんだし)

(なるほど。ところでそっちは大丈夫？ カイが中において桃さんが話してるパソコン、こっちあるけど)

さっき僕が驚いたのは、布団に入ったりリコちゃんが掛布団をかけてDはありそうなおっぱいどころか、眼帯が似合うかわいらしい顔まで隠してしまったから。

それに今のところリコちゃんは僕の鎖骨あたりにキスを落として
いるだけなので、少しくらい話してても大丈夫だろう。

(桃かーちゃん、こっちで兄貴とスマホで話してっから平気だつて)
(それに優男のおにーさんはこういう、戦況を見て攻める順番を決め
たりするのが得意なのっ♪)

(ふうん。で、どこから攻めるべきか検討中って事か。じゃあさ、僕を
遠慮なく使ってって言っという)

(もう言ってるのっ♪)

(そっかそっか。おおっ！)

(へへっ。処女の乳首舐めなんて、30分後にはもうムリだもんな。
堪能しとけよ、とーちゃん)

(んだねえ。それとセイとフウカは、この家で護衛と救護役ね。それ
も桃さんのお兄さんに言っという)

2人が叫びまでしてそれに異を唱える。

能力者同士の戦争となれば医療系の腕の良い能力者がいないと負
けは確定だし、ここは本陣で大将の桃さんのお兄さんがいるんだか
ら、フウカくらい強い護衛がいないとダメ。

僕がそう言うと、2人はどうにか納得してくれた。

……納得してくれてるといいなあ。

でも今は、それどころじゃない。

「えっと、リコちゃん」

「は、はいっ」

その声は、僕のお腹の辺りから聞こえた。

リコちゃんは掛布団に潜り込んで、僕の腹筋にキスを落としていた
から。

「さすがに息苦しいでしょ？ 掛布団、取っていい？」

「その、まだ恥ずかしさが先に立ってしまって。苦しくなったら顔を
出すので、どうかこのまま」

「そっか。ムリだけはしないでね？」

「はいっ」

(処女のフェラ顔、見たいんだけどなあ)

(ザーメンの味見させる時にでも、布団を剥いたらいいだけだろって)

(そんな時間はかけてらんないでしょ。こんな時だし)

(それでもないのっ♪)

(なんでさ?)

セイとフウカがなぜか得意気に話し出す。

なんでも桃さんのお兄さん、雄二さんはさつき僕が斬った3人の件を、今回どちらの陣営にも加わっていない、日和見を決め込んでいる人達に話したんだそうさ。

その人達はどっちつかずの態度を許されるくらいだからそれなりの戦力で、それがこちらに加われれば、戦況がかなり有利になるらしい。(やるなあ、桃さんのお兄さん。さつきセイが言ってた仕掛けってのはそれかあ)

(だろ? 向こうにも斥候やらがいるからすぐにそれを散らして、あの3人がホントに消えたか調べるだろうってさ。んでその確認が取れたら、夜にでも話し合いをすつから、その結果が出てこつちに加わるなら明日になるだろって。だから、処女との初セックスをのんびり愉しんでていいぜ)

(なるほどねえ)

(処女のご奉仕フェラ、開始なのっ♪)

(だねえ。布団を突き抜けて表示されてる興奮度、すつごい高いや)

それに、肉棒に当たる鼻息も凄い。

裏スジ。

そこから熱さが上がってゆく。

焦らすという発想もないようで、そのまま、亀頭全体が熱さに包まれた。

お胸が僕の玉袋に当たるほど、顔が沈み込む。

「ムリはしないんだよ、リコちゃん?」

言いながら掛布団を少し持ち上げて、空気が通るようにする。

最初からこうすればよかった。

「は、はい」

「抵抗があるんならしくなくてもいいんだからね」

「まったくくないんです。主様が少しでも喜んでくれたと実感したら、羞恥なんて吹き飛んでしまつて」

「ホントに?」

「はい。そう言い切れます」

「なら、こうだね」

「きやつ」

掛布団を思いつきりめくる。

おかげで僕の開いた足の間で蹲っているリコちゃんの顔も、その下にある巨乳もバツチリ見えた。

眼帯美少女が顔を赤くしながら両手で勃起チンポを握り、自分の尖り切ったピンクの乳首を隠すため身を小さくする。

どうせ愉しむなら、こういうエツチなマンガみたいな光景も目で愉しまないと。

まさかサラさんの書庫にたくさんあったやけに薄いマンガ本のように、眼帯をした女の子とセックスをする日が来るとは。

やけにたくさんあった同じ女の子がいろいろされるエツチなマンガ、その子もおっぱいとお尻が大きかったんだよね。

ゴールデンウイーク4

リコちゃんはチラリとノートパソコンに目をやったけれど、僕も釣られて見たその画面は真っ黒で、桃さんの顔は見えない。

どうやら気を使って画面を黒くしたらしいけど、断言してもいい。覗きは続行中だ。

下手をしたら、動画まで能力で保存しているはず。

「さ、続けて」

「……はい」

小さな舌が龟头を舐め上げる。

そしてまた肉棒が咥えられたので、僕は身を起こした。

「さて。リコちゃんのお口でチンポを気持ちよくしてもらってるから、僕もこの素敵なおっぱいを気持ちよくするね」

「んんっ」

「他人に触られるの、初めて?」

そう問うと、リコちゃんは頷いた。

咥えたままなのでその動きが、いいアクセントになっている。

「そっか。嬉しいなあ。ん、張りのある、いいおっぱいだ」

若い巨乳を揉みながら、眼帯美少女のフェラ顔を見下ろす。

悪くない。

足りないテクニクなんて、問題ないくらいの景色。

「んっく、んん……」

「気持ちいいの?」

リコちゃんの動きが止まる。

けれど3秒ほど経ってから、そのかわいらしい顔は縦に振られた。ホント桃さんそっくり。

女子高生じゃなくて、女子中学生にフェラをさせているみたい。

このかわいい顔にぶっかけていきたいけど、初体験でそれはなあ。

「んっ。……主様」

「はいはい」

「その、準備ができたようなので」

「フル勃起して、唾液でめっちゃ濡れてるもんねえ。じゃ、次はリコちゃんの準備だ」

「いえ、そうではなく」

「はい？」

リコちゃんが僕の肉棒に隠れるようにする。

ムダな努力だとは考えなくてもわかるだろうから、無意識にしているのか。

「その、私の準備もできたようなので」

「マジか」

処女が初フェラでぐしよ濡れ？

さすがは能力者、それも金将級の逸材。

淫乱度が20しかなくても、そこまでとは。

「ですからその、よろしいでしょうか」

「あ、うん。じゃあ横になって」

「はい」

リコちゃんが身を横たえる。

そうしても形が崩れないおっぱいを左手で、チラツと見ただけでも柔らかそうな茂みを右手で隠して。

「キスも初めて？」

「え、ええ。もちろんです」

「そっか。嬉しいなあ」

リコちゃんが目を閉じる。

あまりに強くそうしているので、怖がらないでと祈るような気持ちで頬を撫で、それから淡い唇にキスを落とす。

「んっ……」

「キス、嫌じゃない？」

「嫌なはずがありません。その、私は小さな頃から主様をお慕いして……」

「はい？」

本人に聞いている場合じゃないかと、今度は深いキスをしながら可能性を考える。

僕とリコちゃんは同級生。

でも僕はリコちゃんに会った記憶がない。

能力者は時に、その能力を生かすため、通常とは違う姿形でこの世に生まれ落ちるらしい。

弓系の能力者が片方の手だけ長かったり、リコちゃんのように眼球程度の大きさの使役対象がいて左目で暮らすためにこうなっていたり。

そういう人は僕のようにある日突然能力を自覚したわけじゃないから、生まれた瞬間からリコちゃんは左目がなかったんだろう。

そんな子と出会っていれば、記憶に残って当然。

となると、可能性はひとつ。

「んうっ……」

「大丈夫。僕に任せて。リコちゃんはリラックス。いいね？」

「は、はい。……ああっ」

（セイ、桃さんにいつから仕組んでたのか聞いて）

（はあい♪）

すべすべの頬、かわいらしい桃さんに少しだけキリツとした雰囲気を感じた印象の元になっていると思われる顎、そこにはキスをしただけ。

でも、ここからはそれだけじゃガマンできない。

いい香りのする、まだ春なのに布団になんか潜るからかなり汗ばんでいる、細い首筋に舌を這わせる。

「あ、主様……」

「うん。ここにいろよ。怖いなら手を握って」

言いながら左手で鍛えられているのに柔らかい腕を撫で下げると、すぐにその手が掴まれた。

しっかりと手を繋ぎながら首筋の汗を舐め取ってゆく。

鎖骨。

そして最初のごちそう、腋の下。

「主様、そんなっ。汚いですから、つく。ダ、ダメですっ」

「僕が舐めたいんだよ。それでもダメ？」

「ほ、本当なんですか？」

「うん。蟲使いの特性でそういうのが好きなの。さつきオシッコしてもいいって言ってたから、聞いてるんでしょ？」

「はい。それだけではなく、その、実際にそれで主様が喜んでいる動画とかも。小学校の頃から、姉上が」

（セイ！ 桃さんに和歌山時代の動画なんかどうやって撮ってたのか聞いてっ！）

小学校の頃からって。

クツソ。

かんっぜんに最初っから、下手をすると僕がサラさんとアヤカさんに弟子入りした当時から、リコちゃんをこうする計画だったのか。

しかもリコちゃんを僕と同じ能磨学園に入れてたなら、今回の件がなかったってこうなっていたはず。

もう怒った。

ほんっとな怒ったよ、僕は！

（ととさま♪）

（うん。桃さんはなんて？）

（帰ったら毎日姉妹丼を出すから、そう怒んなってさ。にしし）

（……しよ、しようがないなあ。まったく）

2人並べて後ろから。

ベッドじゃ僕が真ん中になって挟まれる形で。

2人は小柄だから、同時スマタとかもできそう。

姉妹を同時に、そう考えるだけでワクワクするのはどうしてなんだろう。

「あんっ！」

どうやら僕は考え事をしているうちに腋の下を舐め終え、特に何も考えず巨乳の頂点にあるピンク色の乳首を口に含んでいたらしい。

せっかくだからと口の中でそれを舐め上げ、もう片方のおっぱいを揉みながらねぶる。

「ああつ、そんなつ。……はっあ、んう」
いい感度。

それじゃこっちも、いただきますつ。

「んくうつ。やっ、あつ、ああつ。あ、主様っ！」

「うん。大丈夫、大丈夫だよ」

「そうでなくて、あんつ、そ、その」

「ん？」

顔を上げた僕と目が合うと、リコちゃんは酷く恥ずかしそうに顔を横にする。

なんだろ。

「その、もう主様が欲しくて、その、切ないと言うか……」

「僕をあげればいいの？」

「そうではなくて、その……」

くーつ、やっぱ恥ずかしがるお顔がいいねえ。

少し強引に繋いだ手を離し、肘で体を支えて巨乳を両手で揉み上げた。

ムニユムニユと僕の手でいやらしく形を変えるおっぱいを目でも愉しみながら、右を左をと、気分のままに勃起乳首を舐め上げる。

そうしてしばらく口と目と手で巨乳を弄んでいると、ようやくリコちゃんが口を開く。

おねだりタイムだ。

さあ来い！

「……お、お願いです。主様のアレを、どうかリコに」

余裕がなくなつて一人称が『リコ』になつてるし、言葉に挟まれている吐息もかなり色っぽくなっている。

興奮度もうなぎのぼりだ。

「アレ、って言われてもなあ。わかんないよ」

「そんな、んくうっ！」

「おいひ。リコちゃんのコリコリ乳首、両方いっぺんに舐めるともつと美味しいよ」

「そんなにしては、あんつ。あ、主様あ……」

「欲しいならちゃんと言わないと。僕のナニが欲しいの?」

「……その、主様の剛直です」

「15点」

「ええっ。あんっ! そっ、そんなに吸ってはっ! んーっ!」

乳首を強く吸われて仰け反ったりリコちゃんがかわいらしいので、ヒントをあげる事にしよう。

「おねだりはなるべく、いやらしい言葉を選ぶといいよ」

「その、……おちんちん、とかですか?」

「いいね。そう言われて興奮する日もある。でも今日の僕は、もつといやらしい言葉がいいな。エッチなマンガとかみたいにな。さあ、ヒントは出したよ?」

言ってから、口に近い方の乳首を甘く、軽く咬む。

「んひいっ!」

もう片方も指で抓んで、苦痛度を3まで上げた。

2と3を行き来させながらの乳首責め。

どうやらリコちゃんはそれが気に入ったようで、大きく身を振らせたり仰け反らせたりしながら、快感度を86まで上げる。

「主様あ。主様あ……」

「なに?」

「ください。主様の、オチンポ。後生ですからあ……」

「まあ、合格かな」

「ありがとうございます、えっ?」

「でも、処女のマン汁と膜の味見が先だけどね」

「そんなところ汚いから、……はんっ!」

手加減せずに割れ目全体を舐め上げた。

このくらいで処女膜が破れない事は学習済み。

「いいね。汗まみれだからか塩気が強い。リコちゃんのマン汁、美味しーよ」

「そんなあ。汚いですからあ……」

「それがいいんだって。うん、オシッコの味もちゃんとする。偉いねえ」

「ああ、主様の舌が、リコの汚い場所を。ああ……」

お姉さん、桃さんと違って皮かぶりのクリトリスにわざと鼻息をかけ、尿道に舌先を当てる。

「んくう。ゾクゾクが、あんっ。主様あ」

小陰唇が発達していないのは、単純に歳が若いのと、性器が使い込まれていないからであるらしい。

処女の女の子のアソコなんて2つしか見てないけど、どちらもそうだから間違いないはずだ。

「おお……」

「主様。そんなに、そんなに広げては。恥ずかし、はああんっ!」

思わず感嘆の声を漏らしてしまった理由は、目の前の光景にある。

朱音ちゃんのはだいぶ違う処女膜を舌先で舐めると、その膜の小さな穴から透明な淫液が滲んで、雫になってから膣口に垂れてきたからだ。

「いいね。リコちゃんは処女膜までいやらしい」

「お願いです、主様。どうか呼び捨てに」

「いいの?」

「お願いです。それに、敬語もやめてください。お願いです」

「んー、わかったよ。リコ」

「うれしい……」

そんなにとろけた声で呟かれると、本当に勘違いしそう。

思いながら今度は、狭い膣口から今にも垂れかけている淫液を音を立てて啜る。

「やあつ。音がっ、うんっ。ああっ、主様あ……」

どれだけ切なそうな声で急かされても、破った処女膜は元には戻らない。

今しか味わえない、処女膜から滲む淫液を何度も何度も舌先で舐め取ってゆく。

感じ方もそうだし、小さな穴がいくつか開いているだけで非常に強固そうな処女膜を見るに、リコはオナニーの時クリトリスでイッてるんだらう。

だから膣口と処女膜をこれだけ舐められてもイク事はできず、切なげに腰をくねらせている。

「さすがに、そろそろかわいそうになってきたかな」

そう言っ僕がようやく顔を上げると、桃さんのアへ顔の1歩手前って感じのリコが淫靡な表情のまま輝く。

「オチンポ、オチンポください。主様あ……」

「焦らしすぎたか。魔法の痛み止めはいらない？」

「主様のオチンポ以外、リコには必要ないんです。だから、だからあ……」

処女が大股開きで、割れ目を自分の手で広げて。

本当にやりすぎた。

「すぐに入れるよ。ゆっくり？ それとも一気に？」

「1秒でも早く。オチンポください、主様あ」

「わかった。いくよ？」

「はい。うれし、……いいッ!？」

快感ではなく、痛みでリコが背を弓なりに仰け反らせる。

そうなってしまうのも無理はない。

苦痛度48はけっこうな激痛。

それに僕の肉棒がリコの膣を貫いた時、処女膜が破れる感触だけでなく、『ブチイッ』と鳴る音までが聞こえた気がした。

「痛そう。それに、血も出てるっぽい。待って。すぐに抜いてセイに治療魔法を」

「待ってくださいー!」

「いやだって」

「平気です。【自己再生】ですぐに傷が塞がるので、少しじっとしていれば」

「使役系なのにそんな能力も。さすがだなあ」

「なので、その。このまま」

「うん。キスでもしながら、傷が塞がるのを待とう」

「ありがとうござ、んっ。主様の唾液、甘い……」

【自己再生】は、それがあるだけで一流の前衛能力者になれるとまで

言われる、かなりレアで有用な能力。

キスのぎこちなさがなくなるより、リコの苦痛度が下がる方が早かった。

ゴールデンウィーク5

「主様、もう。その、大丈夫です」

「苦痛度は10付近を行ったり来たり、でも興奮度と快感度は70オーバー。これなら動いてもいいけど、このまま射精もできるよ?」

「もつと主様を感じたいんです。だから……」

「わかった。動くよ、リコ」

「ああっ。主様のがっ、オチンポがリコの肉を掻き分けて、んふっ、んんっ。声が、あんっ」

「もつと聞かせて。こんなリコの声なら、一日中だつて聞いてたい」

いくら大丈夫そうでも、これはリコの初体験。

快楽を得るためでなく思い出作りでもするような控えめな腰使いで、ゆっくりと処女肉をほぐす。

「主様の形、オチンポのカタチがわかります。あんっ、リコのアソコが、ああっ、主様のオチンポを覚え込まされ、ううんっ、あっ、んっ、気持ちいいッ!」

「リコのおマンコも最高だよ。ずっとこうしてたい」

「ありが、はんっ、そんなのっ! ああっ、ひいんっ!?!」

正常位で軽くでも腰を振られながら、おっぱいを揉まれる。

リコはそれも気に入ってくれたようなので、遠慮なく喘がせよう。

グローリー・ホールでスロー・セックスというのが好きだと言っていたお姉さんはそれをしながら、『初体験なんて痛いだけだった。その後の30回くらいも挿入じゃなく、前戯とか目当てでこの店に通ってた』って言ってたけど、感じ方にも個人差があるんだなあ。

「主様あ。もしかしたらリコ、初めてなのにい、っあ。ううっ、来てしま、ううっ……」

「イクなら一緒に。そうしょっか」

「うれしい。夢みたいで、あんっ!」

そういう事ならばと、少しだけペースアップ。

「ああっ、いいっ。主様のオチンポいいのっ！ あんっ、やあっ、初めてなのに、あはあっ！」

快感度はメーター、100を振り切って150付近を上下している。

これなら本当に中イキは近そうだと、徐々に僕の快感ダイヤルを絞ってゆく。

せつかくなら初体験で初イキ初中出しと3点セットでキメてあげたい。

「いいよ、リコ。リコのおまんこに搾り取られる。ザーメンを吐き出しちゃうからね」

「あんっ、くださいっ！ 主様のオチンポからザーメンを、リコのおまんこにつ！ あんっ、も、もうダメですっ！」

「いいよ。イッて。僕もイクから」

「あ、んっ！ イク、イクますっ！ 主様のオチンポでっ、あんっ！ い、……………イクうっ！」

ダイヤルを0に。

自分で腰を振るのではなく、陸に上げられた魚のように暴れるリコの腰の動きで、僕は射精した。

「——ッ！ 熱いっ、主様のザーメン！ ああっ、イクの、止まないッ。ああ、っ！」

3点セットが4点セットになっちゃった。

せつかくだからよく見ようと上体を起こし、腹筋でリコのおシッコを受け止める。

「あはあっ！」

おっといけない。

アンモニア臭をたっぷり含んだおシッコのニオイで興奮して、肉棒が膣の中でビクンつてなつたや。

「ご、ごめんな、さい。主様、ごめんなさい……………」

「いいんだよ。僕がおシッコで興奮するの、知ってるんでしょ？」

「は、い。主様は9歳の頃から、百里さんのをあんなにうれしそうに、んうっ！」

余計な事を言うお口にはこうだ！

そんな気分で唇を奪い、舌を絡ませる。

少しはキスに慣れたようで、リコの方からも舌を絡めてくれた。

「ふうっ。もつとしとく？ 僕は今から、リコのお漏らしオシッコを指で掬って舐めるから、今のうちに」

「主様、リコのも舐めてくれるんですね……」

「とーぜんでしょ。それから、また腰を振って射精。たぶんあと2回かな」

「うれしいです。なら、次はリコが上に」

「大丈夫？」

「そうしたいんです。お願いします」

攻め好きだもんなあ。

オカズなしでのオナニーの妄想なんかも、自分が上になる感じだったのかも。

ならばと繋がったまま腰を下ろし、手を貸してリコの上体を起す。

「これがいい？ それとも僕は横になる？」

「できればお願いします」

「りよーかい。じゃあ、まずは足を伸ばすね」

「あの、リコはどうすれば」

「腰を浮かせて。でも、僕のチンポは抜かないようにして」

「わかりました」

ギクシヤクした動きで体位の変更。

こんなのも処女って感じでいいなあと思っていると、リコが僕のお腹を凝視してるのに気がつく。

「二オイとかが気になるんなら、セイに魔法で消してもらおう？」

「いいえ。そうではなくて、はい」

「どつたの？」

「こ、これがですね」

「うん。これが？」

「その、主様のだったらいいになあ、と……」

わあを、ハイスペック！

「今はムリだけど、次があったらいくらでも。舐めるなり飲むなり、体のどこかにぶっかけるなり、リコの好きなようにするよ」

「うれしい……」

眩きながら、リコが腰を揺する。

その動きは僕がリコのオシッコを舐めると加速してゆき、2回目の中イキに合わせて膣内射精。

3回目は背面騎乗位で、僕にアナルを見られながら。

「意識を失ったか。ちよつと物足りないけど抜いて、末娘とご対面だね。まさか2日連続で、それも実の姉妹に子供を産んでもらうなんて」

大きなお尻に、大粒の汗。

キレイな桜色のアナルの下、その中心に突き立つ肉棒。

そんな景色はいつまでだって見てたいけど、今は戦の最中。

あの感じじや次もあるさと自分に言い聞かせ、リコを抱き上げてから肉棒を抜いた。

着床と言ってもいいのかわからないけれど、ここまでザーメンを注ぎ込むと、それはもう漏れ出さない。

「とーちゃん、お疲れっ」

「オシッコや汗はもらうのっ♪」

「お疲れ、ヒロキ」

ノートパソコンに明かりが灯り、真顔の桃さんが言う。

「桃さん。帰ったら憶えといてくださいよっ」

「知らない。それより、もうお腹が大きくなってる」

「ですね。セイ、お片付けありがと」

「オレにもお礼だな。ほらよ、冷えたビール」

「ありがと、フウカ。カイもありがとね。ずっと中継とかしてたんでしょ」

ノートパソコンのモニター。

そこで桃さんと並んで映っているカイが、気にするなと言うように微笑みながら首を横に振る。

とりあえずビールは子供が生まれてから祝い酒にしようと畳に置いたけれど、なにかが変だ。

「なんだ、この違和感」

「ん？ そういや、リコねーちゃん苦しそうじゃねえな。腹が小さくなってるのに」

「あ、それだ。でもなんで？」

「これはっ。スゴイ、スゴイのくっ♪」

大はしやぎのセイは、その理由に見当がついてるらしい。

なんだなんだ？

「なるほど」

「桃さんもわかったんですか？」

「ん。卵は出てこない」

「へ？ なら、失敗って事ですか？ 今まで失敗なんて一度も」

「違う。リコの眼帯を見るといい」

「はあ」

言われた通り、リコの左目を見る。

するとその眼帯に覆われた左目に、僕の使役力が集まっているのを感じた。

いや、僕のだけじゃない。

リコの使役力も、そこに集まっている。

「まさかっ!？」

「たぶん、そのまさか」

使役対象がいる使役系。

そんな女の人に使役蟲を産まそうとすると、こうなるのか……

「あれっ、浪姫じゃんか」

ムカデの浪姫ちゃんがリコの左目から顔を出す。

そしてその体を伸ばし、シユルつと前に出ながら、その浪姫ちゃんの頭部は巨大化して襖を突き破った。

「でっか！ そして、ながっ!」

襖を突き破っても浪姫ちゃんの体の後部はまだリコの眼窩にあるらしく、巨大化した頭部とそれに続く体が日本庭園の土の上で蜷局を

巻き出して、ようやく全体が姿を現す。

「うっはー。まるでドラゴンじゃねえか、やるな浪姫！ さすがオレの妹だっ！」

「頼もしい子が妹になってくれたのっ♪」

「軽トラックくらいなら巻きついて潰せそうだもんねえ。金将級って凄いや」

「それだけじゃないのっ♪ 浪姫、人型になってととさまにチューするのっ♪」

「マジか。って危ないっ！」
走る。

そして、小さな体を抱き上げた。

「軽くて小さい。2、3歳くらい？」

「慣れてないから転びかけたのっ。ととさまにありがとうって言うのっ♪」

「あう〜。つちゅ♪」

「わ。ありがと、浪姫ちゃん。ママにもチューしに行こっか」

「あう〜♪」

かわいらしい女の赤ちゃん。

浪姫ちゃんをだっこして和室に戻る。

するともうセイが気つけ魔法を使ったようで、僕と浪姫ちゃんを見るリコと目が合った。

「ごめんね、リコ。襖を壊しちゃった」

「そ、それより、その子は……」

「浪姫ちゃん。かわいーよねえ。ほっぺなんか、ぷっぴんに」

「本当に、浪姫なの……」

「あう〜」

「お、上手に歩けるかなー」

浪姫ちゃんがリコに手を伸ばしたので、そっと畳に下ろす。

「あうっ」

危ない。

ふらついたけどなんとかバランスを取って、よちよち歩き。

我が子は、浪姫ちゃんは見事ママであるリコの腕に飛び込む。

「浪姫、なんてかわいいの」

「あうっ」

「ママもかわいいって言ってるのっ♪」

「それだけじゃねーぞ。巨大化の能力も手に入れて、ドラゴンみてーにでっかくなってる」

「それに元からあった麻痺毒だけじゃなくなってる、象もイチコロの猛毒、それに睡眠時間を調整できる睡眠毒も使えるようになったのっ♪」

……もうそれ、浪姫ちゃんだけで戦に勝てるんじゃない？

「よし、祝杯だ。それとリコ、早く服を着てお兄さんに浪姫ちゃんを紹介して。そしたらセイとフウカがゴハンを、って。浪姫ちゃんも影の中に入れるの？」

「リコママの時は目に、ととさまの時は影に入れるのっ♪」

「そっかそっか。ならよし。さあ、早く服を着て。じゃないとまた襲っちゃおうよ？」

「あ、はい。すぐに」

金将級の使役術師にふさわしい相棒。

それがあんな反則級のかわいらしきで、しかも僕とリコの娘なんだからお祝いするしかない。

そう思っつてフウカがくれた缶ビールのタブを引くとその音が4つ重なって、遅れてもう1つ上がる。

セイとフウカ、それにノートパソコンのモニターに映る桃さん。

フウカにビールを手渡されたリコ。

「では、我が末娘のかわいさと強さを祝って。乾杯」

「カンパニー、ヒヤッハー！」

「カンパイなのっ♪」

「えっと、乾杯。です」

「乾杯。ありがとう、ヒロキ」

「こちらこそですって。……ぶはーっ、美味しい！」

ゴールデンウィーク6

素っ裸のまま布団の上で缶ビールを飲んでいると、戻ったりリコにやけに高級そうな和服を手ずから着せられた。

なんでもフウカに缶ビールをせがまれた雄二さんが、飲むなら準備をさせておくと配下に命じ、別室にお酒やツマミを用意してくれたらしい。

その部屋で僕は浪姫ちゃんを胡坐の真ん中に乗せて飲み始めたけれど、あまりに落ち着かなくてどうしていいかわからない状況になっている。

「アマゴの塩焼きですね、主様。はい、あーん」

「えっと、……うん。ありがとう」

「なるほど。お膳がこうですから日本酒にしますか。お待ちくださいね」

「リコちゃん、さつきから心を読み過ぎじゃない!？」

「またちゃん付けに戻ってますよ、主様」

そうじゃなくって。

なんでこの子は的確に僕の心を読んで、ここまでしてくれるんだろう。

お兄さんの雄二さんが苦笑いしてるし。

「申し訳ございません、六道様。この子は小さな頃から桃子に、六道様のお世話係になれと言われ続けていたようで。本当にそうなれて、有頂天なんでしょう」

「はあ。ほんつとなにしてくれてんの、桃さん」

なんで僕にお世話係が必要なんだか。

「あつ。桃ママのお兄さん、向こうに動きがあったのっ♪」

「さすが婆様、私の予測よりだいぶ早い。それでセイ様、動きとはどのようなものですか？」

「ととさまが3人を斬った炭焼き小屋に人をやって【嘔風】で報告され

たら、すぐに主だった者を集めよっておばあちゃんが言ったのっ♪」
「場所の特定までですか。いい腕をしますね、日和見集団は」
「切り札は1枚のはずでした。そこに、六道様という最強の札までが
加わる。もう日和見などさせませんよ」

ニヤリと笑いながら言ってるし。

さすが桃さんのお兄さん、こういう時は黒いなあ。

「切り札というのは？」

「四国八十八家、そのすべてから我が家だけを抜いた連名の勧告書で
す」

「勧告？」

「ええ。うちの父親に隠居せよという勧告です。もちろん、人喰い
を処断した上で。その責任を取っての当主交代、そして隠居です」

「……なるほど。たしかに切り札だ」

人喰いを処断。

そしてその責任を取って現当主が隠居。

となれば当主はこの雄二さんがなるから、日和見集団も重い腰を上
げるしかない。

最初から人喰いに勝ち目はなかった、と。

「ですが六道様達がこうして足を運んでくれねば、一族の半数を問答
無用で処断するしかありませんでした。浪姫だけでは、非道を働く者
をすべて見張れはしませんし」

「でもたぶん、事が済めば向こうの全員が棗さんの前で宣言させられ
ますよ。あの人はウソを見抜くから」

「なるほど」

「僕の役割は被害を最小限に抑えつつ、リコのサポートって感じなん
でしょうね。なーんか癪だなあ。手のひらの上で遊ばされてるみた
いで」

雄二さんが笑う。

この人も八十八家のすべてに勧告書へ署名をさせてるし、ハンパ
じゃないなあ。

政治力って言うんだらうか、そういうのが凄すぎ。

上には上がいる。

その言葉が、今なら身に染みて理解できる。

僕は自分の唯一の特技だと思っていたセックスでは夜宮さんに勝てないし、サラさんとアヤカさん以外には簡単に負けまいだろうと思っていた戦闘でも佐伯さんにボッコボコにされている。

それにハナっから勝てるとは思っていないけど諜報なんかで棗さんと桃さんに歯が立たないし、交渉なんかしたってこの雄二さんの足元にも及ばない。

「おやおや。六道様ほどのお方が、浮かぬ表情ですか」

「世界は広いなって。僕はただのガキなんだなって思い知らされてるんで」

「それでいいではありませんか。完璧な人間など、この世には存在しません。それがいるとしたら、それはもう人ではなく神でしょう。六道様がそうであればこうして酒を酌み交わす事もできませんので、私はありがたく思いますよ」

「……慰め方まで大人だあ。敵わないな」

雄二さんは苦笑い。

けれどそんな表情のまま膝を進めて、ちようどりコが運んできた日本酒を注いでくれた。

お猪口は人数分あるみたいなので、僕も雄二さんにそれを渡し日本酒で満たす。

「ありがとうございます」

「僕のセリフですって。いただきます」

日本酒を口に放り込む。

「あゝ」

「浪姫ちゃん、また焼き鳥かな？」

「ううゝ」

「きつと漬物ですよ、六道様。昔からこの子は、酸味が出るまで漬けた野菜が好物なので」

「シブいなあ。はい、あーん」

「あゝ♪」

そんな風にお酒を飲んでみると、まだ陽の高いうちに日和見集団のトップが訪ねて来て雄二さんに面会を申し込み、この部屋に通された。

そのお婆さんはよほど肝が据わっているのか一人で部屋に入ってきて、僕の前に座る。

「はじめまして。六道です」

「重村と申すババアですじゃ。お見知りおきを」

「まずは一献」

「ありがたくいただきますかの」

お酒を酌み交わす。

「いい飲みっぷり。土佐の地酒、美味しいですよね」

「50」

「はい？」

「そう考えておりましたが、300全員をこの集落に移しますじゃ」

「ええつと？」

「貴方様の庇護下に、我が一族のすべてを。どうかお願いしますじゃ」

「そういうのは雄二さんに」

寝る場所があるのかとか、食料の備蓄とか、僕は聞いてないし。

「問題ありません。手狭ではありますが戦時の避難生活ですから誰もが辛抱してくれますし、食料や日用品の備蓄は充分にあります」

「はあ」

「ならば雄二様、すぐに始めますじゃ」

「ええ。ですが婆様は、ここで飲まれていけばよろしいのに」

お婆さんが笑う。

「このままだと飲みすぎてしまいそうだからと。」

「ありがとうございます。六道様」

「僕はなにもしてませんつて。すぐに動きます？」

「お許しいただけるのなら、それは明日の早朝からに」

「許すもなにも総大将は雄二さんですから、僕の使い方はお任せしますね」

「はい。明日は単騎でよろしいので？」

「もちろん」

「では私は準備がありますので、これで失礼いたします。リコ、六道様のお世話は任せましたぞ？」

「お任せください、兄上」

雄二さんが時代劇のような所作で部屋を出て、板張りの廊下に正座をして深く頭を垂れてから襖を閉める。

こんなのはどうにも苦手だなあと溜め息を吐くと、フウカが隣の部屋に続く襖をえらい勢いで開けた。

スッパーンツ！

そんな音がする開け方をするんじゃないやありません。人様のお家で。

「フウカ！」

「わりいわりい。さあ、ゲームすつぞ！ カイ対オレ達連合軍の最終決戦だ。我が軍の最終兵器、浪姫の実力を見せてやるぜっ！」

「あう〜♪」

フウカ、自分でカイに勝つのは諦めたのか。

まあセイも僕よりちよつと上手いくらいだし、そうなって当然かな。

子供達が隣の部屋に、最新型かはわからないけれど大きなテレビとゲーム機がある部屋に移動してゆく。

最後尾のセイはその襖を閉めながら、「たっぷり愉しんでなのっ♪」と言って笑った。

やっぱり、気を使ったのかな。

「主様」

リコが、僕に『あーん』をしたり、ビールや日本酒を口に運ぶ僕を見ながらでさえ発情フェロモンを垂れ流していた、ついさっきまで処女だった女の子が、情欲に潤んだ瞳で僕を見る。

「なにかな？」

「申し訳ありません。本当なら兄上がいても、あの子達の前でもこうしなくてはならないのに」

リコが手を伸ばす。

その手の行き先はもちろん、僕の和服の裾だ。

「桃さんの実家で、豪華なお膳やお酒をいただきながら、実の妹に手コキさせるとか。ホントにいいのかなあ」

「いいに決まっています。……柔らかい。これが、あんなに硬く」

「でもまあ、どうせならこうだね。よいしょつと」

「そんな。こんな姿で……」

リコが着ているのも、僕と同じ和服。

なのでその襟元を思いきりくつろげて、アヤメさんや委員長ちゃんには負けるけど、ホムラさんくらいはあるおっぱいだけが露出するようになった。

和風のボンテージ。

そんな感じで興奮する。

「よしよし。これが一番のツマミだね」

その言葉を証明するようにピンク色の乳首と肌色の稜線を眺めながら日本酒をグビリとやり、リコの反対側、右の膝だけを立ててそこにお猪口を持った手を置く。

「ずつしり、重い……」

「玉袋かあ。さつきはしてくれなかったけど、次はそこも舐めて、口に含んで玉を優しく転がしたりもするんだよ?」

「はい。それと、ここも……」

玉袋をやわやわ揉みながら、中指が伸ばされる。

肛門。

そこをリコはどう愛撫していいかわからないみたいだけど、まあそれでも悪くない。

「指、クサクなっちゃうよ?」

「主様のニオイに、クサイなんて言葉が合うはずありません」

「ふうん。じゃあ後でその指を嗅がせて、それから肛門をペチャペチャ舐めてもらおうかな」

「今すぐにも」

「それはいいんだけど、そしたら僕もリコもガマンできなくなるだろうからなあ」

「問題ありません。出血は行為の最中に止まっていますし」

「なら、この目で確認しておこうか」

「えっ?」

「僕にお尻を向けて、本当に血が止まってるか見せるんだ。できるよね?」

喜んでと言ったりリコが僕にお尻を向けて蹲り、和服の裾を上げてゆく。

薄い、桃さんより少し多いだけの恥毛。

淡い色彩の、若々しい割れ目。

そして桜のつぼみのようなアナルと、ムチムチしたお尻が露わになる。

「どうですか、主様。しつかり血は止まっていますよね」

「うん。けど、違うのが出てるなあ」

「それは。こうして主様に見られていると、どうしても……」

「だからっってお尻を見せただけで。リコはいやらしい子だね。ついさつきまで処女だったのに」

「ううっ……」

呻くような声をあげながら、リコが白いお尻を震わせた。

さすが僕と同じハイブリッドな変態。

たったこれだけの言葉で淫液をトロリと膣口から垂らして、糸を引かせながら畳に落とすか。

「へえ。もしかして、このオマンコの入り口にあるのって」

「や、やっぱり変ですか? 私のって」

「やっぱりってなにさ。いや、処女膜があつた位置にその残骸みたいなのがあつてさ。こういうオマンコの人ってたまににいるから、それは処女膜の名残だったんだなって」

「よかったです。私、やっぱりそんな場所まで醜いのかと」

「こらっ」

ベチッ!

そんな音がするくらいにお尻を叩くと、それが跳ね、その拍子にまた淫液が垂れて畳に落ちる。

「んくう……」

「ずっと気になってたけど、リコは卑下しすぎ。自己評価が低すぎる」
「真実ですから、……あひいっ！」

二度目の尻叩き。

「もつとぶたれたくなかったら、そういうのはもう言わないの。リコはかわいい、それは事実。そしてリコを大

好きって思ってる桃さんや雄二さん、浪姫ちゃんや僕に失礼だからね。わかった？」

「は、はい」

2度目もかなり強く手を振り下ろしたので、白くて大きなお尻には僕の手形がついていた。

でも、それがゆつくりと赤みを失くしてゆく。

リコの能力、「自己再生」の効果だろう。

本当に羨ましい。

……でも、待てよ？

もしこんな能力が僕にあつたら、棗さんがどうやって愉しんじやう事か。

絶対にムチとかじゃ済まない。

お腹を斬って手を突っ込み、膀胱を直接刺激してお漏らしさせるくらいはしそう。ってゆーか、絶対にする。

それどころか、僕が想像もできないようなプレイも。

「こわあっ！」

ゴールドデンウィーク7

さすがは金将級。

誰にそう言っても、きつと頷かれるだけだろう。

そのくらい、リコはタフだ。

「いいツマミだと言われながら、とびきりねちっこくされたクンニリングス。」

熱心なフェラチオ。

初めての玉舐め、アナル舐め、パイズリ。

そして対面座位で僕に跨って「主様は動く必要なんてありません」と言ってから、リコはまるでエンジンのピストンのように腰を使い出した。

それから、約2時間。

僕は2回も射精したし、リコなんて少なくとも30回くらいはイッてるのに、その動きが止まらない。

途中で裸にした若い肢体は汗まみれ、足は生まれたての小鹿のようにガクガクしているし、気を抜くと失禁して謝ってまた漏らすのを繰り返しているのに。

「僕、リコとなら結婚できるかも」

「主様の特性ではご無理、あんっ、それにリコはもうっ、ああっく！げ、限界ですし、ううっ……」

「ならちよつと待って」

僕が使っていたのと、セイとフウカが座っていた座布団。

それを縦に並べ、その上にリコを横たえてのしかかる。

「ひっあ、ふ、深いっ！」

「ごめんごめん。こうやって、リコを思いつきり感じながらイキたくってさ」

「うれし、ああっ！ 主様にすべて包まれて、こんなのっ！ リコはもう、また、またイツ、あはあっ!」

リコは桃さんと同じくとても小柄で、僕は15歳にしては体格がいい。

だからこうして正常位でのしかかると、小さな体は開かれた足以外、すっぽりと隠れてしまう。

「出すよ。またリコの奥に」

「ください、主様のをつっ！ ああっ、イクっ！ またイクうっ！」

「どこになにが欲しいのっ!？」

「オ、オマンコっ！ オマンコに主様のザーメン欲しいですっ！」

「じゃあ出すよ。このオマンコは、今日から僕専用だからね」

「はいっ、そうですっ！ リコは主様のザーメンだけじゃなく、すべてをつっ、オシッコやウンチだつてっ！ ああっ！ イク、イクますっ！

主様専用の便器にしてもらえると考えただけでっ！ あアッ っ!？」

オナホール姉と肉便器妹。

どんな姉妹だと普通なら呆れるだろうけど、僕はそんなのが嫌いじゃない。

それどころか本当に2人をそう呼んで、いつでもどこでも好きなように使つてやろうとまで思う。

「出すよ。肉便器のザーメンタンクに」

「あゝはア♡ 肉便器はうれしくて、ヒギいっ♡ イク、イクイクイク

イグウ♡ ……ツア?! イックくくくツア♡」

今までで最も激しく、まるで痙攣のように小さな体が震える。

その動きが収まるのを、射精の余韻が過ぎ去るのまでを待つて、それからようやく僕は2時間ちよつとぶりに肉棒を外気に晒した。

「えっろ」

涙と汗と唾液でかわいい顔をグショグショにした眼帯美人の女の子。

その子が全裸で大きく広げている股間から、まるで射精しているかのようにザーメンを噴き出させている。

それに肉棒を抜いた瞬間、一般人の射精くらいの高距離を出して、さんざんイキまくった膣から大量のザーメンが飛び散った。

「ととさま。ぜんぶキレーにしとくのっ♡」

「ありがとね。みんなは、まだゲーム？」

「ほつといたら、全員が寝落ちするまでやってるのっ♪」

「と言いなながらセイもゲームしに戻るのか」

せつかくの休日なのに、子供達はゲームばかりしてお父さんに話しかけもしない。

そんな世のお父さん方の後ろ姿が自分と重なって、思わず苦笑い。でもまあうちは大丈夫だと自分に言い聞かせながら、残っているビールを飲んだ。

リコは当然のように意識を失っていて、ピクリとも動かない。

その開かれた股に、その中心にある淡い色彩の割れ目に目をやりながらビールを飲み干す。

「これが3日で、また修復されるのかあ」

処女膜。

リコの【自己再生】能力は甲種認定されるほど強いらしく、「この感じだと、3日もあれば元に戻りそうです」なんて言っていた。

だから最低でも3日、いや、再生の早さを考えると2日に1度はセックスをしないと、次の時にまた痛い思いをさせてしまうだろう。

「リコは僕と一緒に東京に帰って桃さんと暮らすって言ってたし、まあその心配はいらないか」

ノートパソコンを立ち上げ、まだいくつかの料理が残っているフウカとセイのお膳を引き寄せてお酒を飲む。

30分ほどそうやって手酌で飲んでいるとリコが身じろぎをして、勢いよくガバツと身を起こした。

「やつぱ回復も早いねえ。おはよ、リコ」

「もしかして私は、普通の性行為で気絶を……」

「ごめんね。最後は興奮して手加減しなかったから」

「とんでもない。さすが主様です」

「自慢できた事じゃないんだろうけどね。はい、オレンジジュース。浪姫ちゃんの飲み残しだけど」

「ありがとございます。……ふうっ。続きをしますか、主様」

「いいって。でもリコが時間あるなら、肩か腰でも抱きながら飲んで

たいかな」

「それはもう喜んで」

ピツタリと密着し、細い腰を抱きながら2人でノートパソコンを見る。

モニターに映し出されているのは、この周辺の地図だ。

かなり先のこの辺りで最も高い山の山頂付近にある、一般には知られていない大きなお寺。

それが桃さんとリコの実家で、今は人喰いの首魁である長兄の居場所。

この隠れ里はそっくりそのまま矢印のように配置されていて、リコの実家はその矢印の最後方、つまり矢尻の部分。

その矢印が高知城を向いているのは、過去の歴史が大きく関係しているのだろう。

今いるこの集落が矢印の切っ先。

矢尻に向かうと突き当たる次の2つの集落は片方が雄二さんに従っていて、もう片方は日和見をしたいけれどそれが許されるほどの力はないという集団の集落。

日和見を許されなかった方は武力で脅されて人喰い達に通行を許し、村の入り口にある火の見櫓を貸したりもしているらしい。

そして明日その火の見櫓にいる人喰いをまず僕が始末して、矢印の鏃部分の最後、3つの集落へ雄二さんは隊を3つに分けて同時に攻め込む。

「順番に拠点を落ととして、敵の本陣へ。そういう戦になるのかな」

「おそらく。明日からの戦いは八十八家のすべての家が注視しているので、奇策は使えません。それに、兄上は詰将棋の名手です」

「僕が単騎で1方面。他はどうするんだろ」

「元からいたこちらの能力者、それも手練れのみを選ぶとなると1部隊。婆様の手勢からも同じく1。明日それで3つの集落を人喰い達から奪い、そこからは手勢を率いて実家に向かって進軍。おそらくそうなるかと」

明日は能力者をすべて繰り出すんじゃない、実戦に向いた人を選ん

で少数精鋭で勝負か。

まあ八十八家として下手な戦はできないから、当然なのかな。

「リコは本陣？」

「いいえ。1部隊を率いて私も出ます。主様と一緒に足枷になるでしょうし」

「リコには戦場に出てほしくないんだけどなあ」

「それでも私は」

「うん。他の人になるべく人殺しをさせたくないでしょ。鬼斬りは？」

「姉上にいただいた物があります」

「なら大丈夫か」

桃さんの目利きなら間違いはないだろう。

それなりの業物を、それもリコに合った物を渡しているはずだ。

「主様はまた走るのですか？」

「明日からはバイクでも借りるかな。八十八家の目もあるし」

「それがよろしいですね。姉上は、主様の力をもっと見せつけるべきだと言うでしょうが」

「桃さんか。帰ったらお仕置きしなきゃね」

「喜ぶと思います」

「ダメじゃん」

どうして僕のまわりには、レベルの高い変態さんしかいないんだろう。

お仕置きすると喜ばれるって。

「では試してみましよう。ノートパソコンを、こうやって」

「ほむ」

僕にはなんなのかわからない絵柄をクリック。

すると画面に『呼び出し中』という文字が表示されて、3秒ほどで桃さんの顔が映った。

「カイはあっちでゲームしてるのに」

「ん。接続を切っていないから。用件は？」

「姉上」

「ん」

「実家に戻ったら、中学2年生の姉上がくれた手紙を主様にお見せしようかと」

「にやんっ!?!」

どんな声ですか。

「あは、ティファニーちゃんみたいな声。で、それってどんな手紙なの?」

「それはですね……」

「ストップ! リコ、条件は一緒!」

「ううっ。それを言いますか、卑怯な……」

なんだろう。

話の内容はおふざけみたいなのに、2人の表情が真剣すぎる。

「まあ今は動くに動けないし、こういうのもいいかな。よっこいしょっつと」

「あ、主様っ!?!」

ノートパソコンの角度を調整してから、リコの背後に回って手を伸ばす。

両手の行き先はもちろん、リコの大きなお胸。

「柔らかさと張り、そして大きさ。やっぱリコのおっぱいは最高だねえ」

「や、ダメです! 姉上が見てますからっ!」

「だねえ。ちよっと揉まれただけで勃起した乳首が、リコの淫乱おっぱいが実のお姉さんに見られちゃう」

「触り方が、ああつ。ダメです、こんな。いやらしく、あんっ……」

「じゃあ聞こうか。桃さんの手紙ってのは?」

「んっ。そ、それは……」

「リコ!」

桃さんにしてはかなり大きな制止の声。

けれど僕にとびきりいやらしくおっぱいを揉み上げられているリコは、実の姉達が妹の初体験を覗き見していたなんて想像もしない純真な女の子は、あまりの羞恥でそれどころではない。

僕の勝ちだ。

「言わないなら、この勃起乳首を弄ってあげようね。指で潰して、コリコリ抓んで、シコシコまでしちゃうよ？ いいの？ 実のお姉さんにそれで喘ぐ、ついさっきまで処女だったリコの恥ずかしい姿を見られちゃうよ？」

「言います、言いますからっ！」

「いい子だ。それで？」

「京都の一貫校に越境入学した姉上は親友の百里さんの家に泊まりに行って」

「棗さんの実家に？ はあ。それで？」

「リコっ！」

おお。

桃さんが焦ってる。

レアだなあ。

「言わないなら……」

「お風呂で百里さんのおっぱいがお湯に浮いてるのを見てショックを受けて、それから毎日ニガテな牛乳を頑張って飲むって！ だからリコも応援してくれてっ！」

「……………ヤバイ。思ってた以上にくだらなかった」

なんだそれ。

「リコ、帰ったら一週間シイタケ地獄の刑」

「だって仕方ないじゃないですかっ！」

「うんうん。そうだよねえ」

「……………あくうっ!？」

左手で乳首をつねる。

あまりにもくだらなすぎだ。

そして右手は下ろして、苦痛度が反応するくらい恥毛を引っ張った。

「桃さん。桃さんも暴露しちゃいましょうよ。『条件は一緒』って言ってましたよね？」

「……………姉としてそれはできない」

「めっちゃ悩んだじゃないですか。なら、リコに聞くからいいですね、リコ?」

右手をさらに下げる。

「あ、主様。姉上が、姉上が見てますっ!」

「なら言うんだ」

「それは……」

強情な。

なら、こうだ。

「あつく、あはあ。ダメ、ダメですっ! んふう。あんっ、い、いやあつ!」

肉付きがいいのでふっくらしている大陰唇と、経験不足で発達していない小陰唇。

その厚い肉と薄い肉の間を、2本の指で掻き分ける。

上から下まで。そして、また上に。

「姉上、見ないでっ! つあ、くううんっ!」

「なら言うんだ。でないとココを弄っちゃおうよ?」

指の腹でクリトリスをノック。

「あはあっ! 電気が、電気がビリッって!」

「それだけ感じやすい場所って事。だからさつきは触りもしなかった。でも、リコが素直に言わないなら……」

「でも、でも。それだけは、お願いですから」

「ふうん。じゃあまずは実のお姉さんに、処女膜の残骸でも見てもらおうね。それからココをイクまで弄ってあげる」

リコの体がビクリと震える。

そしてその喉は生唾を飲み下し、音を立てて息を吸い込む。

どうやら、覚悟を決めたみたいだ。

桃さんの手紙の内容があれだっただけに、どうせたいした秘密じゃないんだらうけど。

「私は、その。私……」

「うんうん」

「私の、………本当の、名前は」

「へ？」

名前？

どゆ事？

「リコ、なんです」

「いや知ってるから」

「そうではなくて、その。く、……………りこ。なんです」

く、りこ。

くりこ。

ああ、桃さんが桃子だから栗子ちゃんか！

「ヒロキ」

「あ、はいはい」

「リコを泣かせた。帰ったら棗の調教12時間の刑」

「へっ？　なんで泣くんですか、ってホントに泣いてるうっ!？」

「主様に知られた。死にたい…………」

「ヒロキ」

「わ、わかってます。桃さん、接続を切って！」

「ん。しっかり慰める。そして謝る」

「もちろんです」

とりあえずキス。

そして謝りながら、とびきり優しくセックスをしよう。

なんなら僕のオナニーとか放尿とか見せるし、それを舐めろって言われたらそうする。

だから、お願いだから泣かないでー！

罪悪感がハンパじゃないからっ！

ゴールデンウィーク8

「絶対に許さない。必ず、この手で殺す……」

そんな小さな声は、僕が滞在中に寝室として使う離れの縁側から聞こえた。

夜明けにはまだ早い。

月の光を生まれたままの姿で受けているリコは北を、実家のある方を睨んでいる。

その小柄ではあるけれど見事な裸身と決意の表情を映す、この離れを囲むように配置した蟲の視界を瞼から消して寝返りを打つ。

初体験で中出しされて中イキお漏らしイキまでしても、浪姫ちゃんの成長を心から喜んで、お姉さんとバカ話をして、お詫びの変態性癖フルコースセックスをしていても、心のどこかには実の兄をこの手で殺すと決めたほどの怒りがリコの心の奥底で脈動していたんだろう。

(浪姫ちゃんもいるし、好きにさせたげるか)

(ならオレかセイがお守りをするぜ、とーちゃん)

(雄二さんとリコ。2人にどっちかが常に付いて歩くのか。お願いしてもいいかな)

(任せてなのっ♪)

(だな)

(ありがと)

そんな通話魔法でのやり取りが済んでしばらくして、リコは和室に戻ってきた。

見事な足音の消し方、それに重心のかけ方であまり布団を揺らさず、僕の隣にまた横になる。

その小さな裸身を優しく抱き締めた。

「主様、起きていたんですか」

「夜明けまで1時間。あと30分くらい、こうしてようか」

「……ありがとうございます」

「僕のセリフだね」

それから1時間後、僕は明け始めた空の下で借り物の400ccのオフロード・バイクに跨った。

ヘルメットには桃さんが改造して送ってきたという無線機が仕込まれていて、常時この本陣とも呼べる家にいる雄二さんと話せるらしい。

「六道、出ます」

「どうかお気をつけて、六道様」

「もちろんですよ。じゃあ、あとは予定通りに」

「はい」

エンジンをかけ、ギアをローに。

慣れない、しかも借り物のバイクなので、慎重にクラッチを繋いで走り出す。

オフロードバイクは初めて乗ったけど、この感じなら大丈夫。

集落を出て、林道を北に向かう。

まず叩くのは数人の人喰いがいつも交代で道を見張っているという、次の集落の入り口にある火の見櫓。

田舎の方だとよく消防団の車庫なんかの敷地に立っている、鉄製の見張り台のような、塔のようなあれだ。

なのでその1キロ手前まで進み、バイクを停めた。

視界に表示されているウィンドウでは1人の女が櫓の上に、2人が下の軽トラの荷台に寄りかかっている姿が見えている。

もちろん、僕の使役力を分け与えられた蟲の視界だ。

その様子を見ながら道のすぐ脇だというのに山深い森に分け入り、木々を蹴って火の見櫓を目指す。

「うわっ」

「どうしました、六道様？」

「あ、いえ。フウカの視界が表示されたウィンドウに、ちよつと凄い光景が映ってたんで」

「とおっしゃいますと？」

「浪姫ちゃんが敵の能力者に巻きついて動きを封じて、その頭を丸齧り。それを見て、よく噛んで食うんだぞって言ってフウカが笑ってます。雄二さんに付いてる集落を出てすぐの道を張ってた人喰いですね」

「……私のような小心者なら卒倒する光景です」

「またまた。それにしても、リコはいい腕をしますねえ。金剛杵の仕込み短剣で1人の首を斬り飛ばしましたよ」

「六道様の世話係をするためにと、武芸にも身を入れていたようですから」

刃渡りの短い、それも反りのないアジア風の両刃の剣でそれをするんだから、剣術も結構な腕前だ。

これなら間違いなく学年1位の朱音ちゃんより強い。

リコと浪姫ちゃんとフウカ。

それぞれが1人ずつ殺って、見張り役の掃除は完了。

リコは素早く敵の見張りが乗って来ていた乗用車の運転席に乗り込むと見事なハンドル捌きで車を道の端に寄せ、自らが率いる部隊が乗っている大型ワゴン車に戻る。

「こんな腕をしているのに、なんで世話係なんかになりたいんだか。お、こちらも目標視認。掃除を開始します」

「武運を」

フウカの視界を見ながら、雄二さんと話しながらも足は動かしている。

そのおかげで見えた地上の2人に向かって加速。

瞬時に距離が詰まって女達のやけに濃いメイクまで見えているけれど、2人は僕に気づく様子はない。

これ幸いと、音もなく足元の影から飛び出した鬼斬りの太刀の柄を握って鯉口を切り、茂みから飛び出した勢いで2つの首を、一太刀で飛ばす。

するとそのせいで噴き上がった鮮血は地に落ちて小雨のような音を立てる事もなく、空中で消えた。それだけでなく、2つの首と死体も。

(いただきなのっ♪)

セイの声。

本陣である豪農の家の一室で雄二さんと一緒にいるセイが、1秒とかならず影の中に移動して鬼斬りを僕に渡し、影の中から魔法で死体や血を収納。

こんな離れ業が可能だから僕達は八十八家の目を気にしたり、本社の監察部が東京に来ていとなると僕達絡みかと疑ってしまう。

(ありがとね、セイ。八十八家の目が気になるけど、偶然こんなのを見かけた子供なんかのトラウマになつても困るからさ)

(わかってるのっ♪ さつきフウカの影から出て、あっちのエサも取ってあるのっ♪)

(エサつて……)

僕、セイとフウカ、その母親であるサラさんとアヤカさん。

セイとフウカは、その5人の影が入り口になっている世界にいつでも移動できる。

だから自分の影さえあれば、いつでも父親と母親と姉妹の影に移動が可能だ。

けれどその反則級の移動能力は、金将級は確実だというリコの子供、浪姫ちゃんでも持つていないらしい。

ただ元から住んでたりコの左目と、僕の影の世界に入れるだけ。

(それだけでもスゴイのっ♪)

(だねえ)

火の見櫓のハシゴを上がり切つて、啞えタバコで左右の道を見張っている女の人の後ろに立つ。

その僕好みの大きなお尻に目をやらないようにして、背後から心臓をめがけて鬼斬りを突き立てた。

「ううっ……」

鬼斬りを抜くと同時にそんな小さな声が上がつて、女は即死。すぐにまた死体が消える。

「こちら六道。直近の見張りを排除。この集落はどうします?」
ヘルメットの無線で雄二さんに聞く。

火の見櫓の上にライダーズジャケットと黒いヘルメット姿の男が立っていると目立って仕方ないだろうけど、死体を収納してくれたセイが、ついでのように僕の姿を魔法で消したから平気だ。

「お疲れ様です。その集落は非道な行いをしておりませんので、すぐに電話をして状況を伝えます。その上でどちらに付くかを問えば、答えはわかり切っておりますよう」

「さすが」

「いえいえ。ですが、次の集落は……」

昨日の昼前から見張っていた集落。

そこは雄二さんとリコを担ぐ勢力との戦いのための前線基地のような場所で、そこには10人ほどの人喰いが滞在していた。

だからこそ、状況は悲惨。

人喰いに脅されて、その非道を止められない人間はまだいい。

でも止めるどころか積極的に手を貸したり、おこぼれを美味しくいただいているような連中は、後で棗さんがウソを見抜いて僕が斬る事に決まっている。

「任せてくれていいですよ。人喰いだけじゃなく、僕達が見張り出してから人喰いと一緒になって異性を犯してたような連中も僕が始末します。見る限りなにもしてない連中は、カイが入ったスマホかパソコンで棗さんに映像を送って、『人喰いと一緒に非道な事はしてません』とでも宣言させればいかと。虚偽反応が出たヤツは、僕が斬りますから」

「……ありがたい話ですが、リコが自分で斬ると言い張る未来が見えるようで」
なるほど。

リコに首切り役人のような真似をさせるのは嫌だけど、本人がそうしたいと言ったらその方がいいかもしれない。

さっきの見事な手際を見るに今日までの小競り合いで何人か斬っているようだし、たとえ相手がザコでも、成駒の足しにはなるだろう。

「雄二さんとリコが後悔しないなら、その方がいいかもですね」

「やはり、そう思われますか」

「ええ。成駒は早いうちから狙うべきだし、そのためにはそういうのも必要でしょう」

人を殺す覚悟を決めているのなら、とまでは言わず火の見櫓から跳び下りる。

まずはバイクを取りに戻らないと。

「……では、本人が望めばそのように」

「了解です。じゃあ僕はバイクまで走って、次の集落を目指します」「はい。お手数をおかけしますが、徐々に味方を増やしながら戦線を進めたいところですので。それを終えたら、今日はお戻りください。リコの隊も婆様の隊も、それぞれの集落に攻めかかろうとしています」

きつと雄二さんは現当主である実の父親に隠居を迫るその時、ほぼすべての一族が自分に付いているという状況に持って行きたいんだろう。

たしかにその方が当主も隠居を決意しやすいだろうし。

「了解。じゃあ、次が終わったら連絡しますね」

「くれぐれもお気をつけて」

ええと返して走る速度を上げ、バイクに取り付いてエンジンをかける。

素直に動き出してくれたバイクを1時間ほど走らせると、目的地である集落の、そこに繋がる道でバイクを止められた。

ヘルメットを取って、バイクのハンドルに引っかけておく。

「おいおい、なんで道を塞いで突っ立ってんだよ？ あんたら、警察には見えねえけど？」

道を塞ぐように立っている男女は6人。

それぞれの体から心気が漏れ出しているので、全員オーソドックスな能力者のはず。

いかにもバイク好きな若者を演じて僕がそう声をかけると、その6人はニヤニヤ笑って目配せを始めた。

「あー、妙なセンスの兄ちゃん。ここは私有地だね。公道じゃないんだ」

「そうそう。ついでに言うと、兄さんの立ってるそこも。うちの私道なんだよねえ」

「へえ。だから？」

「ちよーつと通行料でも払ってもらおうか」

山賊か！

「まったく、メットなんか取るから。ま、このメンツならブスもババアもないから、普通に愉しんでっくれよ。美少年さん」

「どういう意味だよ、イケメンの兄さん？」

苦笑を隠さない6人の中で唯一の男。

その男が次の言葉を口にするより先に女達が我先にとパンティーを脱ぐ。

スカートではなくジーンズの女2人は、そのズボンまで脱いで早朝の太陽に尻を晒している。

「おいおい。時代錯誤の山賊ごっここの次は、集団痴女ごっこかよ？」

「ごっこじゃないんだよねえ。俺は手伝わないから、頑張っつて満足させるといい」

「へえ。それはそれは。だがよ」

「ん？」

抱きに来たんじゃねえ、斬りに来たんだ。

そう口に出す前に、影から鬼斬りが飛び出す。

ご親切にも鯉口を切つてある状態で。

柄を掴んで抜きながら前へ。

正面の女の体が両断されたのを見て5人が動きを止めてくれたので、2人、3人と斬つて棄てる。

そこまでしてようやく、僕の顔面に向かって【炎弾】が放たれた。鬼斬りを上げる。

惚れ惚れするような光を纏う剣身に炎の塊が着弾。

それだけで【炎弾】は掻き消され、少しだけ焦げ臭いニオイが僕の鼻に届く。

「甘い術だねえ、イケメンの兄さん？」

「バ、バカな。俺の【炎弾】を斬った、だと……」

「何者だ、テメエツ!？」

「正義の味方、だねえ」

女の子がチンピラ言葉を吐きながら、泡立ったツバまで飛ばしますか。

いくら美人でも、こんな人とセックスをしたいとは思わない。

まあここで能力者がどうか八十八家がどうか言わないだけ、あの炭焼き小屋で斬った連中よりマシなのかな。

ゴールデンウィーク9

「それじゃ、……死ね」

まずチンピラ女を袈裟斬りにして、それからもう1人の女も斬り棄てる。

最後に残ったのは、性格が悪くはなさそうな若い男が1人。

顔がよくて頭も回りそうで、だからこそ不良達とツルむようになったんだろう。もしかしたら、それが自分の身を守る唯一の方法だと考えての選択だったのかもしれない。

能力者は男より女の方が強い。

いくら不良でも一般人をどうこうすれば八十八家の、『執行部』だから黙ってはいないだろうから、まず狙われるのは特性の「頑強」なんかを持っている男の能力者。

能力者というのはその血筋のおかげで数を増やす事が多いから、体格が低かったりすると上の人間に逆らえず、自分だけでなく家を守るために異性に体を差し出したりする人もいるんだろう。

でも、だからといって人喰いにまで堕ちた人間を許していいはずがない。

弱い立場。

そのせいで選択肢がなかったにせよ、立場ではなく能力が自分より弱い人間を殺すなら、間違いなくこの男もクズだ。

むしろ、弱い人間の苦しみを知っているのにそうしたんだから、余計にタチが悪く思える。

「お、俺は、俺は違うんだ……」

「でも人を喰ったらアウト。キミは2週間くらい前、タコ殴りにされて弱り切った能力者に【炎弾】でトドメを刺したよね？ それを雄二さんの部下さんが遠くから、悔しさで涙を流しながら見てたらしい。その時のじゃないけどキミの写真を見せてもらってるから、とぼけてもムダ」

「や、やっぱり本家の……」

「僕は雄二さんとリコの友人、そして桃さんの部下。だから、わかっているよね？」

人喰いへの報復。

それは、とんでもなく苛烈なものだ。

証拠があれば自由に殺害してもいい。

その屍を家族や縁者が弔う事は許されない。

それどころか凄惨なリンチをしようが、どんな風に犯そうがすべて自由。

唯一のルールは『飼わずにその場で殺せ』、それだけ。

「なんでだよ。オマエだって男だからわかるだろうが！俺達には選択肢なんかねえんだ！女共の言う通りチンコ立てて、舐めろって言われたらどんだけくっせえマンコでも舐めまくって！男つてのはそうして生きてくしかねえだろうがよ!？」

「選択肢はあったさ。人喰いにだけはなっちゃいけない。その選択をしないでこうなったのは、完全にキミのせい。さ、おしやべりは終わりだよ」

斬る。

その決意を視線に込め、踏み出す。

「や、やめ……」

「断る」

振り上げた鬼斬りを、それから僕の顔を見て、男は【炎弾】を放つのではなく、強く瞳を閉じた。

その選択が正しいのかはわからないけれど、おかげで男は苦しまずに死ねたと言えるのかもしれない。

「うっ……」

小さな声を上げただけで、ほぼ即死。

その死体が【影移動】で現れたセイに魔法で影の中に収納される。

セイは僕が指示をしなくとも、他の死体も黙ってすべて回収してくれた。

「ととさま。優先順位の高い順にウィンドウを並べとくのっ」

「ありがとう」

僕の視界に表示されているウィンドウは2つ。

まずは左端の、公民館のような場所に向かって駆け出す。

影に戻らず僕についてくるセイも一緒に。

作戦は昨日のうちに雄二さんから伝えられていて、見張りだけでなく下調べも蟲達に頼んで念入りにしてある。

なので初めて訪れる集落でも迷う事はない。

ありふれた田舎の公民館の玄関に入るとそれだけで、ムワツと嫌な、けれど嗅ぎ慣れている臭気が僕を包む。

それだけでなく複数の、肉を肉に叩きつける音と啜り泣きの声も耳に届いた。

「好き勝手しやがって。人喰いが」

呟きながら足音を消さずズカズカと歩き、引き戸を開ける。

スパアンツと大きな音を立てて開け放たれた引き戸の向こう、だっ広い板張りの広間にいる全員はこれ以上ないほどに驚き、一斉に視線を僕に移す。

「なっ、なんだあつ!？」

「誰だテメエっ!」

「日本刀を持つてるって事は、この子達……」

そう言った3人の女は全裸。

僕がその3人を斬るより早く、セイが動く。

セイが向かったのはステージのようになっていた壇に背を凭れさせた男の子の前。

かわいそうに。

素直に命令に従わなかった男の子は見せしめを兼ね、両手両足の骨をすべて折られて、その手足を床に投げ出すようにして力なく座っている。

特に酷い右手は、完全に関節とは逆方向に腕が曲がって。

そしてその顔は元の顔立ちが想像もできないほど、それこそバスケットボールのようになるまで殴られて腫れ上がっている。

一般人なら、死んでいてもおかしくはない。

「よく頑張ったの」

そう言ったセイの手から魔力が放たれ、男の子を優しく包む。
治療魔法だ。

「い、痛みが消え……」

「あとは目を閉じてればいいの。そっちの、さつきまでクソ女達に乗っかられてた子達も」

「あ、あなた達はいつたい……」

「いいから目を閉じるのっ！ 全員っ！」

僕でも滅多に聞かない、幼稚園児にしか見えないセイの怒声。
それを身に浴びて4人の男の子達が強く瞼を閉じる。

ありがたいけど、僕の立場がないなあ。

「人様の餌場で勝手な事を。死ね、クソガキ！」

女の1人が放った【石弾】。

それを魔法で止めたセイは、2人のちようど真ん中に【石弾】の石をふわふわと浮かせたまま、子供らしい満面の笑みを浮かべる。

その魔法が魔法系でも使い手なんてほとんどいない【重力魔法】の一種だなんて、誰もが思い浮かべる事すらできないらしい。

しかも笑顔のまま僕を見たセイが視線で「ここはセイに任せてほしいのっ♪」と言っているから、もし領きを返したなら結果は見えていく。

でも僕は、黙って領いた。

セイは僕が使役力を分け与えた蟲達を指揮する副官のような存在。

だからこの男の子達が朝っぱらからどんな酷い目に遭っていたかを知っているし、泣きたいのを堪えながらその様子をずっと見ていたんだ。

ここは譲ってあげないと。

「ん〜。どうせなら、仲良しクソ女を3人同時に殺してあげるのっ♪」

【石弾】が3つに増える。

それを見ながら僕は胸の内ポケットからタバコを出して啜え、サラさんから饞別に貰ったオイルライターで火を点けた。

頭ではわかっているけれど、やっぱりセイに人殺しなんかさせたく

はないというのが僕の本音だ。

「な、なんだこのガキ。【石弾】の多重展開？ 風使いじゃねえのかよ……」

「まさかダブルか!？」

「いや違うわ。あの生意気なガキの治療を見たでしょう。……この子、魔法系よ。この日本じゃレア中のレアな能力。気を抜くんじやないわよ?。」

「正解なのっ♪ じゃあとつとくたばれなのっ、クソ女ちゃんっ♪」

【石弾】が重力魔法で、元の術の倍近くの速度で放たれる。

2人はそれを眼窩に受けて、石が後頭部の頭蓋を突き破りまでして即死。

特性の【頑強】でも持っているらしい最後の1人は石を手で受け止め、それでもその手を自らの顔面に強く打ち付けたせいで脳震盪を起こし、ふらつきながらセイを睨む。

「なんなの。なんなのよ、アンタら……」

「ふーっ。雄二さんとリコの友人。そして、桃さんの部下。そこまで言えばわかるよね?。」

「……故郷を捨てた裏切り者が。余計なマネを」

「余計なのはそっちなのっ。妹の才能に嫉妬するだけでも恥なのに、その差を人喰いをして埋めようとか。恥を知れってレベルじゃないのっ」

「はっ。本家のボンボンなんかどうでもいいのよ。アタシ達はこうやって好きに男を抱けるから、ボンボンに従ってるだけ。成駒もできるしね」

クズだねえ。

「ふうん。なら、ゴミはゴミらしく焼却処分にしちゃうのっ♪」

「セイ。臭いも音も遮断できるにしたって、この子達が目でも開けたらトラウマになる。殺るなら普通に、さっさと。次もあるんだから」

「はあい♪」

次もある。

その言葉で優しいセイは、そこで今も苦しんでいる人を1秒でも早

く助けてあげたいと思っただろう。

なんの合図もなく【重力魔法】が放たれ、女の眼窩を貫く。

自分の拳が衝突した衝撃で切れた額から血を流し、それでもセイを睨みつけていた女は、断末魔も上げずに絶命。

「おつかれ、セイ」

「譲ってくれてありがとうなの、ととさまっ♪」

「いいき。他の子達のケガは？」

「擦られすぎてチンポがヒリヒリしてるくらいなのっ。ホントは舐めて治したいけど、魔法で治しとくのっ」

「当り前です。セイにはまだ早い」

「ぶーっ。でも、ととさま」

「ん？」

セイが微笑む。

母親であるサラさんそっくりの、イタズラっぽい微笑み。

「最後のクソ女、かなり人を喰ってたらしいの」

「ふうん。成駒してたか、してなかったけどそれも近かったって事か」

「なのっ。だからその成駒経験値をそのままいただいちゃったセイは……」

まさか。

成駒経験値。

それはコンピューター・ゲームに慣れ親しんだ世代がそう呼んでい
るだけで、それを計るような能力も存在しない。

けれど成駒は神話の時代から能力者達が繰り返してきた事象で、半
人半蟲以上の僕の娘達は人と同じようにそれが可能。

「いつかそんな日が来るとは思ってたけど、まさか？」

「そのまさかなのっ♪ んん、……脱皮っ♪」

いや、脱皮って。

そう言いかけた僕は、くらりと意識が揺れたのを自覚しながら、長
テーブルに置いてある吸殻が詰まった灰皿でタバコを消した。

それが終わると、セイが駆け出して僕の胸に飛び込む。

「重くなったねえ、セイ」

「デリカシーがないのっ！ もっと他に言うべき事があるはずなのっ！」

「うん。大きくなった。そして、かわいらしさも増してるね。おめでとう、セイ」

「えへへ〜♪」

セイが、幼稚園児ではなく小学校低学年の女の子にしか見えない愛娘が僕に頬ずりする。

「じゃ、次に行こうか。今日はそれで終わりだから、我が子の成長を祝ってお酒でも飲みたいね」

「ととさま〜♪」

「なあに？」

おツマミに、小学生マンコから出るエッチなジューズもどうぞなのっ♪

そんな声は僕の耳元で囁かれたので、まだ目を強く閉じている男の子達には聞かれずに済んだらしい。

でもいつまでもそのままじゃかわいそうだから、セイが僕に抱きついたまま死体や血を消すのを待って、男の子達に目を開けて服を着るように言った。

「あの、本当にありがとうございました。本家の人達なんですよね？」

「そうなるね。ケガや骨折は治ってるけど凄惨なリンチをされて、その相手がこの場で死んだってのに、普通にお礼を言えるのか。偉い、そして強いねえ」

「そ、そんな。俺なんか。……俺がもっと強かったら、コイツらを守ってやれたって思うと」

両手両足の骨を折られ、顔がバスケットボールのようになるまで殴られながら、この子はそんな事を考えていたのか。

「キミは強いよ。いつか僕の娘と付き合いたって言っても、まあ許そうかなって思えるくらいに。名前は？」

「大泉正です」

「タダシ、ね。覚えた。いつか東京に来る事があったら、桃さんの事務所を訪ねてみるといい」

「そんな。俺なんかが本家のお嬢さんを訪ねるなんて。そつ、それよりお願いがっ！」

「なにかな？」

「ととさま。次の目的地、そのあの部屋にいる男の子、タダシっちにソツクリなのっ」

それは……

「姉と双子の弟です、それ。お願いしますっ！ 姉ちゃんと清を、あの2人もどうか助けてやってくださいっ！ この通りですっ！」

土下座。

そこまでしなくてもいいんだと言いながらタダシを立たせ、まっすぐはその目を見る。

性根は曲がってない。

根性は最上。

まだまだ幼い体から漏れ出している心気は小気味よく澄んでいて、その量も多い。

どう見てもまだ12、3歳くらいだろうけれど、将来が楽しみな子だ。

「最初からそのつもり。じゃあ、この子達は任せていいかな？」
「はいっ！」

ゴールデンウィーク10

次の現場は、今は落ち着いている。

けれど少しでも早くタダシの姉と弟を助け出すため、鬼斬りを持たままその家まで走った。

次の場所では治療魔法が必要ないのを知っているからか、セイは何も言わずに雄二さんのいる部屋に影移動で戻った。

セイがいきなり小学校低学年の女の子にしか見えない姿になっているから、雄二さんやその部下の人達が驚くだろうなあ。

「ジヤマするよ」

そうとだけ言って引き戸を開け、古くからの豪農らしい大きな家にかかる。

するとすぐに家の人、50すぎに見える奥さんがパタパタと走ってきて、鬼斬りを持つ僕を見て息を呑んだ。

「あ、あなたは……」

「本家のモンです。ご婦人でも逆らうなら斬りますよ、奥さん？」

「いつ、いいえ。私達は脅されて……」

「なら通してもらいます。それと僕が目的を果たしてここを出たら、すぐに雄二さんの手勢がやってきてこの集落を守るので。もう心配はありません」

「雄二様が……」

頷き、清潔な板張りの廊下を進む。

案内もなく辿り着いた目的地のドアをノックもせず、躊躇わずに開けた。

勢いよく。

この身に満ちる怒りを音で伝えるように。

広い洋室。

応接間、というやつなのかもしれない。

そのソファァーでふんぞり返っていた50くらいと思われる全裸の

男は、僕と鬼斬りを見てすかさず【風刃】を放つ。

鬼斬りを抜くまでもない。

そう判断した僕は鬼斬りをそのまま顔の前まで持ち上げる。

すると男の放った【風刃】は、鬼斬りの鞘に当たって粉々に砕けてしまった。

「僕をただだけで殺すと決めた判断力は悪くない。けど、術の威力と精度が最悪。鬼斬りの鞘で弾かれる【風刃】ってどうなんだよ、おっさん？ ま、いい歳してこんな事ばっかしてる変態オヤジなら仕方ねえのか」

そう言っただけで向けた視線の先には2人の男女がいる。

さっきの将来有望そうな男の子、タダシの姉と双子の弟だ。

どちらも全裸。

それにどちらも、その肉棒と割れ目を大量のザーメンで汚している。

「いただきっ！」

突然の叫び声。

僕はその声の主にすぐ気づいたけれど、変態オヤジ、フウカに首を飛ばされた男の人は、自分が死んだ事にも気づかなかっただろう。

「いきなりだねえ、フウカ。リコの方はもう終わったの？」

「ああ。だからオレが斬りに来たんだ。セイのやつ、自分だけ成長しやがったから」

「悔しいのはわかるけどねえ」

「おら、キヨシ。兄ちゃんが帰ってくつから玄関で出迎えろ。んで、兄弟で酒でもかっくらって寝るんだ。それを繰り返してりや、悪夢だっていつか遠くなるって」

乱暴な。

でもこの子も心気は多そうだし、12歳くらいでお酒を覚えても成長に問題はないか。

この子は泣きながら変態オヤジにお尻の穴を犯され、次に肉棒をしゃぶられると勃起すらしなかった。

怒った変態オヤジは単純に暴力を振るったりせず、今度は姉を呼び

出してその膾と肛門を犯す。姉がこんな事をされるのはオマエのせいだと言いなから。

そしてその後、姉弟でセックスをしろと命令。

この家は集落を預かる立場だそうなので、姉弟は「言う通りにしないとこの集落の人間を、それも子供から殺す」とまで言われては逆らえない。

近親相姦で童貞を失った次は変態オヤジも加わった3Pだったから、心の傷は深いはず。

お酒を飲んだって誰が責めるものか。

それどころか、雄二さんのいる家の離れに連れ帰って、僕がお酌をして飲ませてあげたいくらいだ。

「まあ、お酒を飲むならお母さんに見てもらいながらいいね。立てる？ キヨシくん」

「は、はい」

広い室内とはいえ、至近距離で人間が首を飛ばされたんだから体中が血まみれ。

そんな弟に手をかざし、実の姉である女の人が術を行使した。

体中の血が、それと涙や汗や、股間のザーメンや愛液までが一瞬で消える。

「魔法系、じゃないな。もしかして【液体操作】まで持つてる水使いですか」

「はい。甲種水使い、大泉操と申します。この度はお助けいただき」

「そういうのいーから。ほら、キヨシは行った行った。タダシが心配してんぞ」

「あ、はい。あの、ありがとうございます」

「お礼なら雄二さんとリコに言えばいいよ。ショツキングなシーンを見せちゃってゴメンね」

男の子、キヨシくんが首を横に振る。

双子の兄に似ているけれど、どこか線が細く感じる端正な顔。

それを伏せがちにしながら、部屋に残るお姉さんをだいぶ心配しながら、それでも何も言わずキヨシくんは部屋を出ていった。

「んじや、とーちゃん」

「なに？」

「操ねーちゃんを見ろ」

「いやいや。まだ裸でしよって」

「だからだよ。見ろ、この物足りなそうな顔を。ジジイは中折ればつかのインポ手前だったし、弟はショタチンポでしかも早漏。ねーちゃんだってこのまんまじゃかわいそうだろうがよ。バシツと大きくイかせてやれっての」

「いやいや、さすがにそんなのは」

「いーんだよ。な、操ねーちゃん？ あんなセックスはさっさと忘れるに限るから、ここで上書きセックスしときてえよな？」

「それはそうですけど。私がよくてもこの方が……」

いいのか。

操さんは20歳くらい。

おっぱいとお尻のボリュームはないけど、長い黒髪が似合う美人さん。

銀行とかで働いてそうな清楚美人。

その人がしていいって言うなら。

「脱ぐのはえーよ、とーちゃん。しかも、もう勃起してっし」

「いやあ。操さんみたいな美人さんがしてもいいって言うから。さ、お尻をこっちに」

「ま、待ってください。その、体液なんかを術で蒸発させないと」

「いいからいいから」

「あんっ！」

何度も中出しをされた後だから、手を伸ばした割れ目はザーメンでベトベト。

「これなら。……よいしよつと」

「あああぁっ！」

無造作に挿入。

そして、腰を振り出す。

この清楚な美人さんはまだ20そこそこ。

レイプされた自分を『汚れた』なんて思ってほしくないの、他人のザーメンなんて気にせずピストンを繰り返す。

近親相姦の方の傷はもし次があればとびつきり変態的なセックスをして、そのショックで少しでも気にしないようにしてもらうしかないなあ。

その傷が完治することはないだろうけど、少しでも痛みを遠く感じてくれるようになるんなら、変態的なセックスなんて何度してもいい。

操さんのアソコは膣肉とそのヒダヒダの配置も、それが蠢いたり締まったりする具合も悪くない。

いや、悪くないどころか抜群だ。

童貞を捨てたばかりの男の子なら、すぐに出ちやっても当然。

「操さんのオマンコ、最高ですねえ」

「ダメです、汚いから。ああっ、こっ、こんな気持ちいいの初めてえっ！ どうしてえ、あんっ！ やんっ！ あっあっあっ……」

「汚くなんてないですって。生きてれば誰だつてセックスをする。したら終わりの前にザーメンを出すのが普通でしょ。水使いなら避妊も性病予防も簡単なんだから、気にしなくていいんですって」

「でもっ、あんっ！」

入り口から奥まで。

ゆっくりと出し入れしながら探していたポイントを見つけたようなので、腰を少しだけ横にズラしてそこをカリで決る。

「ココですか。なら、たくさん擦りましょうね」

「ああっ！ なにこれえっ！ イク、イツちやうっ！」

「イツていいんですよ。僕もたっぷり出しますから」

「はんっ、ああんっ！ イク、イクイクイクイクっ！ ……あ、はあっ！」

立ちバックで1回。

ソファアーで対面座位で1回。

そのままソファアーに押し倒して少し窮屈な変形正常位で1回。

2回目からはセイが大きさを調節して2本に増やした肉棒で、膣と

アナルを同時に。

そうやって時間がないのではぼ10分ずつのセックスを終えた僕は、上機嫌で雄二さんのいるお屋敷に戻った。

雄二さんに報告を済ませて離れへ。

するとそこには朝ゴハンのお膳とは別に山菜なんかのツマミが乗ったお膳と、土佐の地酒らしい日本酒や焼酎のビン、それにビールが置かれている。

「主様、おかえりなさいませ」

「あ、うん。もしかしてセイのお祝いのために、これを？」

「はい。後ほどケーキも届きます」

ケーキ屋さん、あるのか。

「あんま甘やかさないでほしいんだけどなあ」

「いいんだよ。っていきなりだつこすんじやねえ、セイ！」

「セイはお姉ちゃんだからいいのっ。フウカはちっちゃくってかわいいの〜♪」

「クツソ。とーちゃん、明日つから敵は全部オレに斬らせろっ！ なんだつたら今から暗殺して回っから！」

「できる訳ないでしょって」

明日から進むのは、敵の本拠地までの1本道。

それを能力者を引き連れた雄二さんが堂々と、自身の統率力と手勢の戦闘力を見せつけながら進む。

僕どころか、事が済めば東京に戻るリコの出番だつてあるか怪しい。

下手をすれば、手勢だけで実家までの道にあるいくつもの集落を陥落させられると雄二さんが判断すれば、僕達の出番は最後の最後までなしって事もあるだろう。

「主様、おビールでよろしいですか？」

「うん。ありがと」

準備運動にもならないような戦闘だったけど、一仕事を終えて飲む冷えたビールは格別。

「ではこちらも」

「い、いいって。リコも食べて飲もう。桃さんの妹だから、かなり飲めるんですよ」

「どうせ飲むなら、こちらを。……ああ、今日もトロトロと蜜を垂らして。素敵です、主様のここ」

脱がされただけで勃起した肉棒を、その裏筋に伝ったガマン汁をリコが舐め上げる。

セイとフウカ、それにカイ。人型になつて浪姫ちゃんもいるのに。

でもまあ、リコがしたいならいいか。

「おいしそうに舐めるねえ、ガマン汁を」

「はい。んくっ、ああっ。美味しいです、本当に。ちゅ……」

「どんな味なの？」

「甘くて、でも生き物のニオイと味がして。ほんの少しだけ、しょっぱくって」

「さっきトイレ行つたからなあ」

「なんてもつたいないっ！」

リコが舌を止め、チュウチュウと音を立てて尿道を吸う。

「そんな事しても出てこないから。僕のチンポはオシッコを吸うストローじゃないんだよ？」

「ふあい。れも、ほひふっへ……」

「オシッコじゃない方のなら、すぐにでも飲めるよ？」

そういえば昨日あんなにしたのに、リコの口には出してない。

それを思い出してなんとなく言ってみただけど効果は抜群だった。

肉棒を咥えたりコが、初心者なりの本気でフェラを開始する。

もちろん、昨日まで処女だった女の子のフェラなんてかわいらしいとしか言えない程度のももの。

けれどリコがかなり熱心に、そして嬉しそうに顔を上下させているので、何も言わず快感のダイヤルを下げてゆく。

初めての口内射精。

それをされたリコはどんな表情で、僕のザーメンをどう処理するん

だろう。
今から楽しみだ。

ゴールデンウィーク11

「あるひはまあ、つじゆ、んんっ。ふあっ、つちゆ」

「リコ、気持ちいいよ。もう少しで出そう」

「うれひいれふ。んっ、んっんんっ……」

「出してもすぐ飲んじやダメだよ？ リコのお口がザーメンを吐き出された便器になっているところを、所有者の僕によく見せてから飲むんだ」

返事はない。

けれど、顔が上下するスピードが上がった。

1秒でも早く！

そんな熱意を感じるほどなので、快感ダイヤルを一気に下げ切る。

「んうううっ!？」

口の中で肉棒が跳ねると、リコは思いっきり固まった。

もしかして嫌だったのかなとその目を見ると、幸せを噛み締めるように尻尻はふにやりと下がって、瞳は2回戦以降のセックスの時にように情欲に潤んでいる。

「ふう。出した出した。ゆっくりでいいから、溢さないように抜くんだよ?。」

リコが頷く。

そして、ゆっくりと肉棒が外気に晒された。

「あるひはまあ……」

見てください。

そんな風にリコの口が大きく開けられ、その口腔内に満ちているモノを見せつける。

小さなグラス半杯くらいの量のザーメン。

それを口で受け止めたかわいいリコは、うっとりとした表情。

「うん、いいね。ちゃんと便器ができてる。じゃあ、次はそれを舌で掻き混ぜて」

「ふあい」

粘性の強い液体を、口腔内で掻き混ぜている音。

その音も途轍もなくエッチだけれど、それよりも勃起を誘うのはそうしているリコの表情や姿だ。

和服をはだけてツンと上を向くおっぱいを晒す眼帯美少女。

その子は本当にうれしそうに舌でザーメンを掻き混ぜている。

無意識に股間をモジモジさせながら。

こんなものを見てたら、勃起して当たり前。

射精したばかりだからまだビンビンだけど。

「鼻から息を吸うと、ザーメンのニオイが凄いでしょ？」

「ふあい。すほひへふ……」

「味とニオイをしつかり堪能したら、飲んでいいよ」

僕のその言葉でリコはすぐに動く。

ザーメンを、迷わずゴクリと飲み込んだ。

「……んっ。ああ、生きていてよかった。主様。美味しいザーメンを飲ませていただいて、本当にありがとうございます」

「あはは。どういたしまして。やっぱり興奮するの？ ごっくん、精飲って」

「はい。あれをまた味わうためなら、リコはなんだってできます」

「大袈裟だなあ」

「それにあれを、主様のザーメンを味わうとこんなに……」

そう言っただけでリコは立ち上がり、腰を前へ突き出すようにしながら着物の裾をはだけた。

ノーパン。

そして僕の目の前に来た割れ目は、酷く淫液で濡れている。

「グシヨグシヨだねえ」

「はい」

「包茎クリトリスが勃起し切って、顔を出しちやっってるじゃん」

「は、はい。だから、その……」

「うん」

「主様のオチンポで、このどうしようもなく淫乱な便器マンコを騷け

てやってください。お願いですから」

「仕方ないなあ」

「ちよい待ち、とーちゃん。ヤルんなら横向いてバックか背面座位だ」
「なんでさ？」

フウカがニヤリと笑う。

「ザーメン大好き変態女に腰を振らせながら、口内射精とぶっかけを繰り返すために決まってるんだろ」

「ダイヤルを思いっきり下げて、ドブドブビュルビュル出しまくってあげるのっ♪」

「まったく。まーた変な思い付きを。どうする、リコ？」

「その魔法の事はフウカから聞いてますけど、その、2人が生やすアレとそこから出る精液は」

「どっちもとーちゃんのに決まってるじゃん」

「なら喜んでっ！」

「おう。でも少しでも感謝の気持ちがあんなら、オマンコも舐めてくれよ？ リコねーちゃんの初めてのレズプレイの相手はオレだって決めてっから」

勝手に決めないの。

そう言おうとしたけれど、リコが笑顔で頷いたので口は開かないでおく。

リコがどこで暮らすのかは知らないけれど、かなり桃さんの事務所で時間を過ごすなら、仕事が早く終わった日なんかは棗さんがそこでお酒を飲む日もあるはず。

そしたら確実にリコも手を出されるだろうから、結果に変わりはない。

「じゃありコ、僕のを自分で啜え込んで」

「はい。……くうっ。主様の、大きい。あふっ、んうっ。は、入っ、んああっ！」

横を向いて胡坐を掻いた僕の腰を跨ぎ、リコが肉棒をすべて酷く狭い膣に収める。

そしてせっかく半脱ぎなんだからと和服の裾を思いっきり上げて、

大きなお尻が見えるようにしておいた。

「んじやヤルかあ。頼むぜ、セイ」

「任せてなのっ♪」

セイとフウカが立ち上がる。

そして同時に身に纏わせた魔力と心力を変化させた服、箱根でイノシシの妖異が身に着けていた鎧と同じようなものを消して全裸になると、セイが魔力を放った。

「へへっ。まずはオマンコでチンポ啜えながら両手で2本のチンポを手コキだ。うれしいだろ、リコねーちゃん？」

そういえばフウカは僕の子を産んだ女の人を○○かーちゃんって呼ぶのに、リコはねーちゃんのままなのか。

そんなどうでもいい事を考えながら、セイとフウカがリコの前に座るのをぼんやりと見る。

2人の股間、クリトリスのすぐ上には当り前のように勃起した僕の肉棒が生えていて、リコはそれにおずおずと両手を伸ばす。

抵抗があるんならしくなくていいよと言いかけたけれど、それは杞憂だったみたいだ。

「フウカいいな〜♪」

「おっふ。いきなりオマンコ舐めながらの手コキかよ。たまんねー」

右手でフウカに生えた肉棒を、左手でセイに生えた肉棒をシコシコとしながら、リコはフウカの割れ目に舌を伸ばしたらしい。

すぐにペちやペちやという水音と、稽古の時のように荒いフウカの息が聞こえ出す。

「興奮度が凄いな。うちの便器はほんつとド淫乱だ。オマンコもキュウキュウ締まってるし」

「は、初めてにしちやクンニも巧いな。仕込み甲斐があるぜ」

「リコっち、どうせならガマン汁をまぶしながらシコシコするといいのっ♪」

「んっ」

リコがその助言に素直に従い、2本の肉棒の亀頭を手のひらで包む。

そしてトロトロと垂れるガマン汁を龟头と肉棒の根元まで塗りつけてしごく。

くちゆくちゆと淫靡な音が部屋に満ち、セイとフウカが息を荒くする。

表情も、なんとも気持ちよさそうだ。

向こうが盛り上がっているからヒマだし、人型状態の浪姫ちゃんは平気かなと視線をやると、カイが箸に刺した古漬けを嬉しそうに頬張っていた。

仲良し姉妹のそんな光景に癒されていると、セイが「セイのはもういいからシコシコしながらフウカのチンポ啜えて、左手の中指を幼児マンコにぶっ刺すといいのっ♪」と言う声が聞こえる。

「お、おいセイ。まさか……」

セイがニコつと笑う。

「DMのフウカはこんなんじや物足りないから、ととさまチンポで口を犯してあげるのっ♪」

「誰がMだ、……んぶうっ!？」

始まつちやった。

ふたなり小学生が、ふたなり幼稚園児の小さな口を犯す。

それだけでなく、ほんとうにぺったんこなお胸にもちやんと存在する、まるで米粒のような乳首をコリコリと刺激までしているようだ。

セイにそんな事をされたら、色事系の能力なんてないフウカが耐えられるはずもない。

「あは。喉奥がキュウって締まったのっ♪」

「ん、ッ、ん——っ!」

「にやは。即イキ大量射精。早漏なフウカ、かわいいのっ♪」

大量に降り注いだザーメン。

自分の顔に付いたそれをペロリと舐め、セイが笑う。

……フウカ、大丈夫かなあ。

「主様のザーメン。やっぱり美味しい……」

「リコっち、手は止めちゃダメなのっ。シコシコズボズボ、どっちもしとくのっ」

「えっ。で、でもフウカが」

「平気なのっ。このドMな淫乱ペド女は口にととさまザーメンを注ぎ込まれたくって、今も無意識に舌を使い続けてるのっ♪」

「んっう、んんっ！」

フウカは首を横に振っている。

母親であるアヤカさんそっくりな行動だ。

あの人は、絶対に自分がMだとは認めない。

けれど僕にお尻をぶたれるとそれだけで淫液を床に垂らして、今のフウカのように乱暴に口を犯されていると、『もっともっ』と言うように舌で肉棒に快感を与え続ける。

「変なトコ似ちゃったよねえ」

「セイはお姉ちゃんだから、妹の期待には応えてあげるのっ♪」

「いや、母親に似なくていいトコが似ちゃったのはセイもだから」

「知らないのっ。フウカ、優しいお姉ちゃんがザーメンをビュルビュル出してあげるのっ。だからありがたく飲むのっ♪」

優しいお姉ちゃん幼稚園児にしか見えない小さな上半身を持ち上げ、頭が下がった事を利用して喉奥まで肉棒を進めない。

「んぐうっ！」

「妹ペド喉マンコ最高なのっ♪」

「生まれて初めて聞いたよ、そんな言葉。うわ、3本分だから僕の快感度が300超えてる。僕も一緒に出そうかなあ」

「出る、出るのっ！ ととさまチンポから特濃ザーメン。つく、ああっ。で、出るのっ！」

小学校低学年の女の子にしか見えないセイが、恍惚の表情で身を震わせる。

同時に、僕の肉棒でも射精の快感が駆け上がった。

リコはフウカを気遣ってほとんど腰を振っていないから、もちろん本当の射精ではない。セイが射精した分の快感だ。

「いつか僕が成駒したら、娘達の悪ノリを抑える能力とか増えないかなあ。あーあ。フウカ、また射精しちやってるし」

「ついでに激イキして、気も失っちゃってるのっ♪」

「やりすぎだつて」

「いいのっ。さっ、リコっち」

「え？」

「フウカは移動させて寝かせとくから、セイのを手コキしながらクンニ。それとフェラしながら指マン。それを繰り返してセックスの練習をしとくのっ♪」

それが目的だったのか。

たったそれだけのために妹を気絶させるとか。

育て方、盛大に間違っちゃったなあ。

「ダメ。そんな理由でフウカを気絶させた罰。セイはビールでも飲んでなさい。射精でイッたのと同じくらい満足したでしょ」

「……わかったの」

やけに素直な。

そう思っていると、ふたなり肉棒を消してセイが笑う。

この笑顔は、ヤバイ。

母親にソツクリだ。

「ちよ、セイ？」

セイが立ち上がる。

小学校低学年の女の子にしか見えない金髪の、ハーフのとてつもなくかわいらしい女の子は自らの股間に手を伸ばし、軽く水音を立ててその手を舐めた。

そんなセイが、僕に歩み寄る。

「ととさまあ♡」

「な、なにかな？」

「セイ、こんなに大人になったの♡」

「いやいや、まだ小学校低学年にしか見えないから」

「でも、テストの時の夜ちゃんと同じなの。だからあ♡」

「だからじゃない。それにあの時の夜宮さんは今のセイより年上！

絶対に！ 1歳くらい年上だったからね！」

「さつき夜ちゃんに写メしたら、おんなじだつて言われたのっ♪」

「ぐはあっ」

セイとフウカが生まれて来てくれて約6年。

僕は2人にスキンシップ以上の事をなにもしていない。

いつか2人に好きな人ができた時のため。

使役対象であるからと、術者のオモチャになるような生き方をして

ほしくなかったというのもある。

それに、僕はロリコンじゃないし。

「ほら。セイのココ、こんなにグチヨグチヨなの♡ 今ならフウカも

見てないからあ♡ ねっ？」